

(782)

故にかなひし也、今彌陀の本願も其如く、此末代の惡凡夫を三塗へ落すまいと願ひ玉ふても、一向ならぬことなるに、また其上を報身報土の極樂へ往生させ地上高位の菩薩となさんとは、一向に無理なることにて彼虚空の邊際を知らふと云に同じき不可得の願なれども、大悲至て深重に在す故に、遂に其願を成就し給へり、此義を註に、さても法藏比丘の志願深廣なりし故、不可得の願なれどもすでに満足し玉へり、これいくばく修行の力ぞやいくばく大悲の力ぞやとするされたり、能々思ひ知るべきと也、凡大願と云になると可得の願でさへなみ大ていのことでは成せぬ、まして不可得の願に於てをや、爾るを不可得の中にてても、最得難き凡夫往生の願を思し召立られしは、能々大慈大悲の深重に在せば也、譬へば至て貧乏にて錢三百の工面もできぬ人に、是は至て安いもの也値ひは金一步なり求められぬかと云は、夫は思ひがけもなき事と一向相手になるまじき也、爾るに我一人の子癩瘡に、あたひ一步の藥を飲まされば命

なしと云は、何とぞ一步の金を工面してと願ひを發すべし、總じて我大事に行つまりし所よりは思ひがけなき願も發るものなり、貧乏人の金一步も一人子の不便と云ふ愛念の行つまりし處より發る、阿彌陀如來の本願も亦其ごとく、法性同體の御證りひらけては、十方衆生我々如きの惡凡夫迄を一子の如く思し召す大慈大悲より、何卒助け度是非共にと云御慈悲の行つまりし所より、不可得願を發し玉ひし也、諸佛の未だ發し玉はざる大願を思召立られしは能々大悲の深ければこそ、故に註にいくばく大悲の力ぞやとするされたり、又彼貧乏人錢三百の工面も出來ぬ者が、子の藥代の金一步こしらゆるはなみ大抵のことに非ず、ほんに顔より火の出る様なる處を辛抱して、人に無心云ふ歎、或は先祖より持傳へて身にも替ぬぬと云ふ様なる道具でも賣拂ふか、骨をも碎くやうな働きする歎、何であらふと血の涙こぼすほどの衝なさがなくは、金一步の工面は出來ぬ也、(若夫程になふて工面が出來れば、平生から貧乏はせぬ也、

(785)

貧乏の中からの才覺はなみ大ていのことではなきなり)是に准へて彌陀如來不可得の願を成就して、雪中なる筭より百倍増つて生れ難き我々を、やすやすと極樂へ迎へ玉ふやうに仕立玉ふ迄の、難作能作の御修行を思ひやり奉るべし、ほしひと望む人さへあれば眼をくぢり、手足を切り、骨を碎き、髓をもしほり、生々世々に捨玉ふ御身は百千の須彌より高く、血の涙を流し玉ふことは四大海水に増ておびたいしきことなれば、註に、いくばく修行のちからぞやとある也、さまでにもなき御苦勞にて成就する願なれば、不可得の願とは云はれぬ也、彼孟宗が得し筭がつひしたことで得られようならば、誰々も掘て來て望まぬ親にも進めるであらふなれども、能々不可得のことなればこそ、昔から得た者は晋の代孟宗一人、一毫未斷の惡凡夫がつひした願で助けられようならば、何しに慈悲を心とする諸佛が餘所に見捨玉ふものぞ、能々不可得願なればこそ凡夫を報土に迎へ玉ふは、十方諸佛の其中に阿彌陀如來唯一佛にて在すなり、彼

孟宗が孝行の志にて雪中に筭の生出る程に願ふた苦勞は孟宗にこそあれ、其願ひに引立られて生ひ出し筭には何の苦勞もなきが如し、凡夫を報土に往生なるやう仕立玉ひし御苦勞は阿彌陀如來にこそあれ、其本願に引立られて往生する我等には何の苦勞もあることなし、孟宗は筭をと願ひ、彌陀如來は念佛唱ふる者をと云ふ御本願なれば、つひ唯申てさへ居れば往生すること、此法譬合釋の御勧めに依りてひしと決心すべき也。

●されば佛の御ねがひのかなひぬること、返々我等のよろこびにては侍れ。

佛の御願ひ叶へばこそ、往生すまじき愚惡の我等往生を遂ぐ、通塗佛法の定法は三賢を超たる十地の菩薩の當り前なるに、他方深重の悲願に引立られて順次に往生遂ることなれば、假り初の喜びに非す返すく、此上もなき喜びぞと也。

是より已下上來の通り本願に乗する道理を示し置玉ひて、彌々其上を法譬比況して丈夫に決擇させしめ玉ふ也。

●かの孟宗がねがひによりしたかんな、猶よく片時に深雪をうがちておひき。
 孟宗が藪の中にて、何卒筭を得て母にすゝめたいと泣た、其間は何程長くても一つ時か半時にも及ぶまじ、されども孝養の切なる志に天地も感動し、片時の間に雪つんざきて生ひ出にき、既に凡夫の孟宗が少時の願さへも此の如し。
 ●彌陀の本願たる念佛の、いかでか一念に重垢をはらひて生れざらん。

彼孟宗が願ひさへも叶ふたるに比較して、況や彌陀如來の大慈大悲より立玉ひたる、本願念佛を一聲も稱る者の、煩惱罪障の重垢を消滅して、極樂往生遂げまじき道理なし、一念彌陀佛、即滅無量罪、生るゝ筭のことぢやと也、實に凡夫の智慧程至て短きものはなき也、彼孟宗が孝行の志深きに依て雪中に筭を生じたと云ふをば信じながら、本願の念佛唱ふれば悪人でも往生すると云ふことは信じかねて、疑慮をせめよせて云ふならば、孟宗が筭のことをば疑ふとも念佛すれば往生と云ふこ

とをば一念も疑ふまじき也、其所以は先時節の長短で比況しやうならば、孟宗が藪の中にて筭ほしひと願しは僅の間也、阿彌陀如來の何卒衆生を助け度と思召、御工夫の間さへも五つ巖をなで盡す五劫の内、夫より本願を立玉ひて御修行あられし年月は、一劫ならず二劫ならず積り積つて兆載永劫、其上孟宗は善人とは云へ高が凡夫、彌陀の因位本願を立玉ひし時は、十信十住十行十回向の四十位を超えて、初地證眞の大菩薩、其上十方衆生誰にもあれ念佛唱へなば極樂に迎へん、若一人にても往生せぬと云ふ人あらば正覺はとらじと誓ひ乍ら、十劫已前にはや阿彌陀佛と云ふ佛となつて在す、爾れば彼は凡夫是は聖者、彼れは暫の内の願ひ、是は五劫の御思惟兆載永劫の御修行、彼は往生せずば家に歸るまいと云ふ誓はなく、是は衆生往生せずば我も佛とならじと誓ひて現に成佛し玉ふ、爾れば孟宗と阿彌陀如來の御本願は、實に少分の似よりたる處こそあれ、全體の強弱には天地雲泥の違ひあり、此道理より廻して云へば、た

とひ孟宗が事實をば疑ふとも、念佛往生と云ふ義は一向疑へぬに非や、爾るを彼孟宗が事實を疑はぬは實錄に記しある故也、念佛往生の説き人は誰ぞ、生々世々に妄語せず竟に成佛の極果に至り玉ふ、大聖世尊釋迦牟尼如來の金口の説に非や、凡夫の傳への記傳さへ信すべきをば信するものを、何に況や三世無礙の經説を疑ふべき理あらんや、爾れば人々此所を聞く所詮は、凡夫の孟宗が暫の間願ふたる筭さへも雪つんざきて生ひ出しものを、況や彌陀如來の五劫の御思惟、兆載永劫の御修行御成就あらん申せ助んと待受玉ふに、多くも少くも日々念佛唱る者が何として本願に乗せず往生せまい道理はない、皆生るゝは知れたこと夫はある筭のことゝ、丈夫に道理を決心して身を本願を打任せ稱名相續せらるべし、斯く心得て唱へてさへ居れば、打た大也ははづれても往生するに疑はなひ故に、本文に彌陀の本願たる念佛のいかでか一念に重垢をはらひて生れざらんとある也、是より下が落居と云て落付あんばい。

●我等が往生すべき支度をば、彌陀本願にかまへてたてられたり。
 我等如き悪人にも疑なく唯申てさへ居れば、極樂へ往生すべき支度こしらへをば、皆彌陀如來の本願にかまへて立置て下されたれば、此方にては一切の之乎者也を離れて唯稱へてさへ居れば、佛の方よりも何もよきやうにして引取玉はんと云ふ意で。次に、
 ●南無阿彌陀佛と申さば、ほとけなにともはからひ給はんすらん。
 唯申て居れば能きやうにはからひ玉ふことぢやと、さつぱりと任せ切るが、念佛者の安心の底、他力往生の極意也、此一段の意を能々得心すると、往生を佛に任せ奉ることが易くなる也、先彌陀如來の因位、一切衆生を一人子の如く思召御慈悲より、普く衆生の根機を考へ玉ひ、四十八の願を立て兆載永劫の御修行あられしは、何の爲なれば即ち我等が往生の支度拵の爲計也、如是五劫を工夫し兆載永劫の間かゝつて、令諸衆生功德成

(786)

就と、出来上りし支度こしらへに何れのものも、こ
とかあらん、又佛の十號の中には正徧知と云ふ徳
號在して、則一切のこと知り玉はずと云ふ事なき
が正徧知の徳也、已に成佛し正徧知の徳を具へ在
す阿彌陀如來の拵に立玉ひし、我等が往生の支度
に何の漏るゝことあらん、若し一事でもゝるゝこ
とあらば正徧知の徳を缺く、缺ては佛とはなられ
ぬ、爾るに已に佛となつて十劫を經玉ふからは、
我等が往生の支度何一つ缺目なく具つてあること
明白也、故に註に、法藏菩薩一子地に於て、平等
に機をかゝみて發し給ふ本願なり、眞如を證して
つとめ給ふ修行なれば、我等が往生の支度何事か
これにもれんや、と記されたり、如是我等が往生
の支度は、已に彌陀の本願に立て拵へて下されし
ことなれば、唯此方には諸の心さばかりを離れて
往生の爲に南無阿彌陀佛と申して居れば、萬事は
佛よき様にはからひ玉はんずらんと、身を本願に
打任せて唱ふべき也、斯く決心するが淨土門の正
機、二尊の本意に契ふ決定往生の行者心得也、兩

尊の御本意に叶ふが故に、善導大師の御本意に叶
ふ、云何か叶ふ、莫論彌陀攝不攝、意在專心回
不回、兩尊導師の御本意に叶へば、元祖大師の御
本意に叶ふ、云何か叶ふ、念佛は我所作、往生は佛
の御所作と心得て一向に念佛せよ、この御勸め平
生より聞るゝ通り、されば熊谷の蓮生など、此御
傳へを信受せられし故「約束の念佛は申さふらう
ぞ、やらふやらじは彌陀のはからひ」斯分別を打
捨て、佛任せと、任せ切て唯申より外なきこと屹
度決擇すべき也云々。
偕此支度と云則用意の義にて、ひらたく云へば拵
へと云ふこと也、彼孟宗が願に依て生れ出し筈、
其生出し處にふさもひげも皮も節も皆あるべし、
是寒中のことなれば此支度なきことは知られた
り、生れ出づべき時節夏の頃に出る筈ならば、此
こしらへは皆筈の方にてせねばならぬ也、寒中の
筈は是れ唯孟宗が願に依て生れ出しことなれば、彼
願の中にふさもひげも皮も節も皆構へてある也、
唯筈は孟宗が願に引立られて生れ出しのみのことに

(787)

て、何の支度拵へもなき也、今念佛の行者も其如
く、此末法濁亂の世、煩惱惡業盛んなる惡凡夫な
れば、後世助かる善根の支度は一向なく、殊に報
土往生する功德の拵へなどは思ひもよらぬことに
て、一向其支度拵のなきこと彼寒中の筈の如し、
又彼筈生出べき時節に生するならば、ふさひげ等
の拵へは皆筈が自らせねばならぬ如く、我等も報
土へ自力で往生することならば、初め凡夫の内か
ら戒定惠の三學により六度萬行を修め、少し功の
付く處で十信の菩薩と云ふになり、夫れより一萬
劫の間修行し功德をあつめて三賢位の中初住の菩
薩となり、夫れより又修行して十行の菩薩とな
り、又修行して十回向の菩薩となり、又云々、初地
聖位の菩薩となつて、報身報土へ往生する也、爾
るに今時末代の衆生、一時煩惱百千間の我等なれ
ば、自力の支度拵へは一向に出来ぬこと也、唯彌
陀の本願に依て往生することなれば、彼本願の中
に煩惱惡業を減するふさひげの支度も、功德の善
根を集むる皮節の拵へも、皆悉く本願念佛の中に

具つてあつて、庵ら凡夫から忽ちに十信十住十行
十回向の四十位を飛超れて、直に報土へ往生する
やうに構へ置て下されたれば、彼孟宗が願に引立
られし筈の如く、彌陀の本願に引立られて往生す
ることにて何の支度拵へもいらぬ、唯南無阿彌陀
佛と申して居れば佛何とも計ひ玉はんずらんと、
萬事を佛に打任する是が至極徹底の所にて、念佛
の修行に埒の明いた人と云ふもの也、何の修行で
も埒の明いた人は、安樂地に位するとして至極安樂
になるもの也、(埒が明かねば氣いぢり心遣ひ、そ
うで斯うでと種々にこゝろくるしきなり)人々未
だ埒の明ぬ人は佛任せと落着て、埒の明いた念佛
の行者となるべし、是が肝要のならひことなれば
今の文に、我等の往生すべき支度をば乃至佛何と
も、はからひたまはんずらんと示し玉へり、斯く
心得るが埒を明ると云もの也、是より其埒の明
いた上は安樂になるすがたを述べ玉ふ、文に、
●我ちからにてすまじき往生なれば、何の心苦し
きところかある。

所詮我方でする往生ではなし佛の本願でする往生なれば、何の心ぐるしき所かある、何のかの自力根性を出し、そうしたらば斯うしたらばと、心を苦しめぐすつかすと、あなた任せと蟬の脱のやうになつて唱て居れば、「あみだ佛と心は西にうつ蟬の、もぬけはてたる聲ぞすしき」、至極安樂にして一點の心苦しきこともなし、埒さへ明けば此通り心安き也、よつて註に、人みな我信心のうすきをうれひ、念佛のすくなき事をなげきて、往生を疑ふなり、それは猶我心を頼む心ある故也、彼の雪の中の笋に何の心かありし、唯孟宗がねがひの強き故生ひ出たる計なり、かまへて身を本願の舟に打のせて念佛すべし、帆をあげ楫をとる事はみな佛の御はからひ也、たゞ思ひ立て打乗る計りが行者のはげみなり、なや助け給へと思ひて、南無阿彌陀佛と申べきなりとあるなり、爾れば信心の厚薄、念佛の多少、罪科の重輕の差別なく、唯唱へてさへ居れば萬事の支度拵へは、如來の方に御成就故、此方は唯打任せて唱へて居てよい、心

さばくりさつぱりいらぬこと、故に本文に、我方にてすまじき往生なれば何の心苦しき處かあると示し玉へる也、此所を能々決心せらるべし、先是で文段の講説は畢る。諸是より支度と云に付て、任すと任さぬとの得失を辨せば、極樂へ往生する支度をば、如來の方に構へ在す故我計らひはいらぬ、いらぬ支度を我するこの様に心得違ふ、故に心苦しうして本願に乗じかぬる也、此體たとへば三百借屋の娘が、大名の奥方にもらはるやうな物也、衣類別して髪のかざり婚禮一まきの拵へは皆大名の方にある也、娘の方に自身自力の拵へは一向いらぬ、又出來ぬはもとより知れたことなり、此娘が我支度で往く位の所ならば、酢賣か菜賣か所詮ろくな所にはあらず、あちからの拵へでなければ大きなことは出來ぬ大名へはゆけぬなり、大名の所へ往くには自身所持の物とは手拭ひ一と筋もたす何も彼も皆置いてゆく也、今往生も其如く、凡夫の拵へ支度の用に立位なことなれば、往く先きも高の知れたる

生死界、今は悉皆彌陀の本願あつちの拵へで行く故、報身報土へ行かれたもの、さあ往生と云ふに
なると念佛唱へた口迄行て行也、大名の方より三百借屋へ娘くれいと云ふに、支度拵への出來ぬを知るまいか、知り乍ら呉れい云ふからは、あちらに支度のあるは知れたこと也、彌陀如來の本願に申せ助んどの玉ふに、凡夫の方に煩惱惡業の強きこと、善根功德の支度拵への出來ぬことを御存あるまじきや、出來ぬことは能々御存知の上にて申せ助んとあることなれば、往生一まき入用の功德善根は皆あなたからさづけて下さるゝことは知れたこと也、斯うなふては往生は出來ぬ也、大名に任せて悪しきことあるべきや、佛任せと任せさへすればよきこと准へ知るべし、故に本文に、佛なにもはからひ給はんすらんとある也、此三百借家にて大名へゆく婚禮の支度拵へすると云ふならば、なみ大抵の心づかひ心苦しき事であらうか、又所詮出來ぬ也、又大名の方へ任せたときは甚だ樂にて少しの心苦しきこともなき也、今も又其如

く、自力根性を出し善根功德を作り集めて往生しやうと思ては、辛勞の仕づくし、仕た上に所詮の所が出來ぬ也、爾るを佛任せになると身心安樂になりて少しの苦勞もなき故に、本文に、何の心ぐるしき處かあるとあるなり、如是心得れば往生ほど遂げ易きことはなき也。此所に於て用心の爲に示すべき一義あり、此往生支度拵へ讓與功德の法門を、一向邪徒の云ひまざらかすことあり、謂く一念歸命の當頭に、令諸衆生功德成就の本願なれば、往生は相濟等と云々、是至の邪勸なり、今此讓與功德の義趣を、上の譬に合して示さば、大名の三百借家の娘を賣ふは何故ぞ、彼娘の器量が大名の心に契ふた故仕立取りにあづかるなり、若此娘が不器量ならば云何んぞ大名の奥方となることを得ん、今も亦其如く、愚惡の凡夫が往生遂るは、申せ助けんとある本願に身を打任せて申す故、御本願に契ふ故に、報土往生を遂るなり、若申助んとあるを申すは自力、欲生我國と思へとあるを往生は相濟だなど、邪解邪立

の横卒法、いかで往生の埒に入ることを得ん、不器量なる娘が大名へ押嫁入せんとするも叶ふまじきが如云々、爾れば三百借家の娘の仕立取り嫁人は、器量が大名の心に契ふた故、愚悪凡夫の往生は唯念佛一行を分々に相續するが、超世大悲の本願に契當する故、順次往生の大益を得ること、能々決心すべし云々、上代上智の智者高僧さへ、泥み玉ふ出離生死の法を、末代愚悪の我々が斯く心易く心得て、十即十生の往益を得ることを歡喜すべし云々、宿瘤がごと。

●たゞしたかなをねがひし所にあらぬ草木はたひす。

上來は安心の正意を示し、已下は起行のことを示し玉ふ也、本願の隨自意は唯念佛の一行にて、諸餘の行は本願の行でなければ修行しても生れ難い、依て專修一行になれとの御勸め、彼孟宗が母の爲に雪降り積みし藪の中にて泣々ほしいく云しは、何が欲いなければ筍がほしい也、故に筍が生ぬ出し也、是孟宗が願ひものなれば也、此藪の

中にも種々の草木もあるべし(うど、わらび、ふきの類)然れども生出です、うどの類は時節を云へば筍より早く出るものなれば、生ぬ出さうなものなれども生出でぬは、孟宗が願ものに非れば也故に文に、たゞし筍を願ひし處にあらぬ草木は生ひず、とあるなり、今念佛もまづその如く。

●念佛をと誓ふ佛なれば、稱名にあらすはうまれがたし。
彌陀如來は四十八願に、設我得佛不取正覺くんと誓ひ玉ひ、其御本願御成就ありし十劫の昔より、唯助け度々々と待受玉ふは、何が助け度念佛の行者が助け度と、待受玉ふ本願の稱名なれば、此念佛唱ふる者は皆悉く往生を遂る也、是則如來の本願専ら念佛にある故也、此表あれば此裏に本願でなき外の行を修する者は、あらぬ草木の生ひ出ぬ如く往生かなはぬ、依て文に、念佛をと誓ふ佛なれば稱名にあらすはうまれがたしとある也、先是で一應文面はすめども、宗の安心一大事の下なれば細談に及ぶ云々、諸孟宗餘物とは、うど、わらび何

も願ふ心はなき也、若あつては寒中の筍を得ることとはならぬ也、此ときは願心筍のみにある也、たとひ傍に人あつて或は此寒中に筍が得らるゝもの歟と云ふても、或はうどもわらびも一所に願へど、勸ても一向耳に入れず、寒蟬抱枯木、呼不回頭と蟬が木にとまり鳴入て居る時は、後ろから雀がつゝきにかゝるもしらず鳴如く、孟宗も筍ほしいくくと泣入つたる時は、餘人の言の聞ぬのみか我身の事も母の事も忘れて、唯筍をと思ふ計り天地一枚の心也、若脇より云詞が耳にも入、筍もよしうどもわらびも、夫れこれと脇に心がうつる位のことでは筍は生ひぬ也、唯筍をと云ふ一枚になつた念に引立られて生ずる筍なれば、餘の物のはねぬも理り也、依てあらぬ草木はかひすとある也、今彌陀の本願も唯念佛の一行で往生をと願ひ玉ふ、若餘行をもませこせにして願ひ玉ふた分では、此超世不可得の願を成就し玉ふことは出来ぬ也、誰が何と云ふてもかまはず、唯一と筋に念佛の行者を助け度、是非とも迎へ取り度と云ふ、御心一

枚になり切て立玉ふ本願故、終に御成就在せし也、故に今成佛して安坐在す蓮臺上よりも、唯念佛する者やあると、慈眼を以て見そなはし玉ふことなれば、一聲にても往生の爲に申しさへすれば、直に攝取護念し玉ふ也、此利益にあづかる者は、念佛の行者のみで餘行の人にはなき也、其證據は觀經にて、韋提希夫人十三定善の觀法をなすに、初め日想觀より次第に觀じ、第九眞身觀に至り親く阿彌陀如來の相好光明を觀見し玉ふに、一々の光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨と、色光と云ふて一切萬物を照し玉ふ光明には、餘行の人も照されるれども、心光とて如來の御心をそへて攝取護念し玉ふ光明には、唯念佛の行者のみが照さるゝ也、夫を直に觀しあらはす程の韋提希なれども、此光明を以て攝取し玉はず、極惡最下の愚夫愚婦なれども、念佛さへ唱ふれば心光を以て攝取し玉ふ、は何故なれば本願に報ひて此利益を與へ玉ふ、(直に佛身を觀するをさへ照し玉はず、況疎き餘行の人をや云々)故に善導の御釋に、彌陀身色

如金山、相好光明照十方、唯有念佛蒙光攝、當知本誓最爲強(龜談)又唯覓念佛往生人とも釋し玉ひ又元祖大師も、成佛之光明還照本地之誓願と釋し玉ひて、彌陀の目ざし玉ふは念佛の行者のみ也、此念佛は本地とて法藏比丘の古へ唯念佛の行者をと、一と筋に願ひ玉ひし本願の行なれば、其本願を成就して成佛し玉ふ上にそなへ玉へる光明なれば、唯念佛の行者のみ照し玉ふ也。(選擇曼陀羅可知)爾れば四種正行の人さへも心光攝取にはあづからず、唯念佛の行者のみ此光益に與かりて往生す、是れ則孟宗が餘の願ひなく一と筋に筭をと願ひし故に、餘の草木は生ひず筭ばかり生ひ出しが如し、されば了譽上人の御言に本願ほど片おちなる物はなしとの玉ひて、阿彌陀如来は偏局に唯念佛の行者のみを助んと目ざして待受玉ふ也、佛の願已に如是なれば、行者の方も亦一向專修唯往生の爲とのみふり向けねばならぬ道理可知、是以て知る本願に乗じて往生するは念佛計、餘行ではそふはゆかぬ、故に文に、念佛をと誓ふ佛なれば

稱名にあらずば生れがたしと述玉ひし也、不簡擇大悲可嘆云々。諸是より下は、伏難通とて上の通りに云捨にして置ては難がある故、夫を先きへ通して置玉ふ也、其所以は先鎮西流には念佛の外の行にても往生すると許す也、勿論往生の本願は念佛に局れども、若餘行も修するに堪たる人なれば、攝機の願に依て往生すと許す也、西山流の餘行不生の義とは違ふ也、念佛門に於ても此所に立方が種々ある也、取捨立破の論は且く闕きて、今鎮西流の意にては念佛の外の行も往生すると許すに、上文に孟宗の譬に合せて、念佛をと誓ふ佛なれば稱名にあらずは生れがたしと、稱名念佛でなき餘の行は生るゝこと成り難いとあれば、餘行では一向に往生ならぬかと云ふ難が伏れてある故に、夫れを通じて、●かのづから生るゝ事をうれども、もゝにひとつといへり。餘行を修する人も一向に往生せぬと云ふことではない、たまゝ其機があつて餘行を如説に修して、

夫れを往生の爲に回向すれば、攝機の願に乗じて往生すれども、百人の中に漸く一人か二人は叶ひ、生因本願の念佛を行する者の百人は百人ながら往生するとは違ふ也と、難を通じたるもの也、此本據は善導大師の往生禮讚の文なり、則文に云、若能如上念々相續、畢命爲期者、十即十生百即百生、何以故、無外雜緣得正念故、與佛本願得相應故、不違教故、隨順佛語故、若欲捨專修雜業者、百時希得一二、千時希得三五、何以故、乃由雜緣亂動失正念故、與佛本願不相應故、與教相違故、不順佛語故等云云、(解釋廣略、應隨時宜、就中本願に應不の下専らに辨せよ、今の要なり云云)如是念佛すれば百即百生、若雜行を修すれば至心なれば百に一二、不至心なれば千中無一也、具に云へば十三の得失あれども、要を取て云時には、佛の本願に相應する故に百即百生也、餘行は本願でない行故漸く百に一二也、是さへまた與へて云ふことにて、奪ふて云へば千中無一也、末代下根

に餘行は應せず千中無一が當り前なり。

釋中官舍(托、譬喻卷二)

されば元祖大師選擇集第二章段に、此導師の御釋を引て曰、見此文彌須捨雜修專、豈捨百即百生專修正行、堅執千中無一雜修雜行乎、行者能思量之曰、文の意は雜行は千に三五、百に一二、奪つて云へば千中無一、念佛すれば十即十生百即百生とある、此文を見て早々に雜行を捨て、一向專修の念佛を修すべし、此對待得失の道理を聞乍ら、六ツかしようて千中無一と云ふ危い行を好みつとめて、修し易ふして百即百生と慥かに往生すると云ふ念佛を嫌ふてつとめまい、道理は決してない、君子は危に近かづかすと世間のことでさへ丈夫なる方をとるに、況や一大事の往生のことにむつかしうて一向あてにならぬ雜行をつとめ、又易くて丈夫な念佛を行じまいやうはないことなれば、諸の行者能々思案工夫して、屹度念佛一行になれと云ふ意の御勸め也、斯く導師と云ひ、元祖大師と云ひ懇に勸め在すは、何故なれば捨置かる

(794)

れば我人は三惡道のすもりとなつて、浮む期もなき苦みに沈むを憐み玉ふ、大慈大悲より發ることなれば、忽諸の思ひをなすと勿れ、其上にもまだ彌陀の大慈あくことなく、老僧と化現して兩祖の釋義を和らげて、上來聞る、本文に、念佛を誓ふ佛なれば、稱名にあらすは生れがたし、木のづから生る、事を得れども、もゝにひとつといへりと、念佛に得あり餘行に失あることを示し玉ふ、斯く云ふ道理を聞乍ら、夫よ是よとろつくことはないことなれば、專修一行に決心すべし云云、雜修をわらび、專修勸進、貞女兩夫不見并に莊面純色(托、譬喻卷二)一行の得を結せば、太公望(托、事實卷二)。

●これにつけても、いよく一すぢに念佛して、佛の御ねがひものなるべきなり。
百即百生の念佛と、百に一二の雜行の得失あきらかなるにつけても也、いよくとはますくと云ふに同じ、若し雜行も往生、念佛も往生と肩を並べて勝劣なくとも、雜行はつとめ難く念佛はつ

とめ易ければ、念佛になるべき道理、況餘行は非本願なればつとめ難くて往生し難く、念佛は本願の行にて勤め易く百即百生、其得失は天地雲泥なれば、いよく念佛すべしと也、一すぢとは一向と云ふこと也、是起行の御指南にて本願念佛の申かた也、一枚起請文に、唯往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申外に別の仔細候はず、又唯一向に念佛すべしとある、今の一すぢと云ふと同じこと也、此通りに餘行を交へず唯一筋に念佛計唱て居るが、則佛の御願ものになりし也、是則佛の一筋に念佛の行者をを目ざし玉ふ所に合する也、佛の御願に合する故百即百生往生甚心易き也、故に本文に、これにつけてもいよく一すぢに念佛して佛の御願ものなるべきなりと勸め玉ひたる也、此處が至て大切なる所、本願念佛往生の極意也、爾れば人々佛の御願ひものになつて、孟宗に念せられて生せし筈の如く、如來の願力に引立られて順次往生の素懷を遂ぐべき也云云、偕此御願ひものとは念佛なり、餘行は御願ひものに非ず、御願ひ

ものなれば往生を遂げ、御願ひ物に非れば往生のなり難きこと、一つの譬喩を以て示さば、飯焼女の譬(托、譬喩卷二)。

此趣を能合點して佛の御願ひ物の、專修の行者となつて往生の大果を得べし云云、偕是より又此飯焼女の譬へに付て、本願名號具徳の少分を讚嘆すべし、是一行不足の邪念を撥却して、專念不退の深志を堅むるが爲なれば、其意を得て聞べし、此名號を唱へずして雜行を修する人は、多くは人の目にたつとを思ふ名聞の人にて、眞實に出離を求むる志の立たざる故也云々、又行計を一筋にすればよいとて唱へた念佛を餘事に回願しては、若少一心即不得生、三心の中第三回向發願心が缺る故往生することを得ず、爾れば心行共に一筋でなければならぬ、其一筋とは唯往生極樂の爲と志して、祈念祈禱息災延命等と脇道へ回向せぬ、是が心行一筋と云ふものにて、佛の本願に相應する百即百生の行者にて、佛の御願ひ者になりたる人と云ふもの也云々。

●しかれば佛すでに往生せんと思ひて、南無阿彌陀佛と、なへんものをとねがひ給ふ、我又往生せんと思ひて南無阿彌陀佛と、なふ、わが思ひ佛のねがひにいさゝかもたがはねば。
しかればとは則上の佛の御願もの、念佛の行者はと受ることば也、すではかつて過しことを云詞にて、佛已に五劫に思惟し兆載末劫に修行して、念佛する者を助けんと云ふ願を成就し成等正覺なり玉ひ、一切衆生今は唱へにかゝるかと待て居玉ふにと云ふ意なり、爾れば佛は今頼むか今唱へにかゝるか、慈眼を見回らし待て居玉ふ所へ、我亦往生せんと思ひて乃至佛の願ひとはいさゝかも違はねば、我等も亦此度往生したいと思ひて、南無阿彌陀佛と申して居れば、佛の申せ助んと云ふ御願と、助け玉へと申す行者の心と、必至と合して違はねば、往生すること微塵も疑ひなき也、爾れば一向專修の人なれば、佛の御願打付て此人の身に當つて居る也、依て次に
●則佛の御ねがひ、もはら我身の上にあたれり。

(795)

斯く示し玉へり、專修の人は佛の御願、我身の上
に當りて居る也、此御示しを聞く上は、我身の不
調を顧みて、御本願にもれやうがなと云ふ疑を起
すべからず、依て註に、今の我身を本願のよそな
るものに思ふべからず、と心を付玉へり、惡業煩
惱は凡夫の習ひ息めやめんとするにやまらずと
も、此度往生をと云ふホソく乍らも願心あつ
て、わづかであらふと一行に南無阿彌陀佛と稱へ
さへすれば、皆佛の御願ひものとなる人なれば悉
く往生する也云々。
倍此我思ひ佛のねがひにいさゝかもたがはねはと
ある、此佛の願ひと衆生の願と違はぬと云ふが至
て肝要のこと也、一向專修の人なれば違はぬこと
上に述るが如し、違ふとは何ぞ、非本願の雜行が
違ひ、又行は一行につとめても祈念祈禱、御禮報
謝、名聞利養等と云ふになると本願に違ふ也云々、
違へば往生は叶はぬ也、唯往生の爲唱れば佛の御
願と我等が願ひと一つになる所以は、佛は何とぞ
往生させ度と、母親の旅に出た子を待やうに慈眼

を以て見そなはし今やと待玉へば、我等が方
より是非此度は往生したいと、をさな子の母を慕
ふ如く、助け玉へと本願にすがれば、佛と我等と
互の願心いさゝかも違はねば往生何の疑あらん、
其故は上來譬として示し玉ひし、孟宗が願の筍は
孟宗が願のみにて、筍の方には少分の生れたき願
はなき也、されども生じたり、況や此念佛申て往
生するは佛の方よりも衆生の方よりも互に願ふと
なれば、決定して往生すべき道理思て知るべし、
されども佛の願と衆生の願と其強弱は天地雲泥な
り、佛の衆生を往生させ度と願ひ玉ふは甚強く、
我等が往生したいと願ふ心は窮めて弱き也、佛は
因位のとぎどうぞ衆生を助け度と、其御工夫さへ
も五劫が間、夫れより四十八願を建て、假令身止
諸苦毒中、我行精進忍終不悔と、手強く誓ひ、猶
其本願を成就し玉はん爲に、兆載永劫が間の苦修
難行、此御修行が通塗つゝ衆生が助け度と思召位
に手弱きことであらふか、人々考へて可見、至
て強き金剛心大悲精進堅固の御心に非れば、

つとめ課せ玉ふとならぬ道理得心ならん、其佛の
願心と一向比べ物にならぬが我等が往生を願ふ
心、凡心羸劣と云て至て弱く淺き也、惡事にかけ
てはいか程も強き心も發せども、善事と云になる
と一向に腰ひざ立たず、往生を願ふ心も漸く人に
勧められて、是非に一度は死すると云が争へぬ
故、しやう事なしに願ひにかゝり、念佛の行者と
なりはなつても、往生のことを思ひ出すはまれで、
唯娑婆のこのみ心にはさみ、思案工夫心氣をつか
らし、朝夕のつとめも居眠り半分位の弱々しさな
れども、弱々しい乍らも往生の爲に分々つとめさ
へ居れば、申せ助けやうと云ふ御願に違はぬこと
なれば、我等が弱い願心を佛の強い願心の中に引
包んで往生を遂させ給ふ、是を濟凡の秘術とも云
ひ、超世の本願とも申也、強い願心で強う修行す
る人なれば諸佛の御手にもれはせぬ、弱い願心淺
い行、諸佛の慈悲に漏るゝ末代惡世の我人を御助
けなさるゝとなれば、斯く云ふ手段がなうてはな
らぬ也、此こと譬へば、註に出づ、水晶珠にて火

●もしうまれずばと侍れば、かならずうまれん事
なにの相違かあらん。
若も專修の行者が、千萬人の中に一人でも往生せ
ぬと云ふならば、我も正覺を取らじと誓ひ乍ら、
已に十劫已前に成佛して、今已成佛現在西方と、
極樂に待受けて在すからは、我人念佛の衆生の往
生することは、何の相違か微塵も違ふことなく定
りきつたことぞと也、依て註に、もし生せずば正
覺をとらじと誓ひ給へるに、十劫已前に正覺をと
り給へりとするされたり、彌陀の正覺佛となり玉
ひしことは、大經に、阿難尊者佛に問ひ奉て云く
法藏菩薩斯の如き本願を建て、今は佛となつて在
すか未だ佛となり玉はざる歎と問に、釋尊彌陀は
早や十劫已前に佛となつて、今現に極樂世界に在
すと答玉ひし也、如し此佛となつて在すからは、
念佛の行者往生に違ひはなき也、されば元祖大師

は、此大經の已に佛となつて在すと云ふ文に向ひ玉ふ度毎に、道心色に顯はれ隨喜の涙にむせび玉ひしと也、是に付ても我人の如き惡凡夫の往生するになりしは、偏に阿彌陀如來の本願を御成就あつて、佛となり玉ひしより起る、若御成就なく佛となり玉はずば、我等が助かる筋道は絶果たることなるに、能くも成佛し玉ひて出離無縁の我々を助け玉はることを喜び、又其修行中の御苦勞は偏に我等が、け奉りしことぞと云ふことをも思ひやり 且悲しみ且喜びす、み進んで唱ふべし、爾れば我等が往生は元祖大師の涙にむせんで喜び玉ひし通り、偏に佛の正覺なり玉ひし故なれば、文にもし生れずはと侍ればかならず生れん事何の相違かあらんと唱へさへすれば往生相違なしと云ふこと極りきつてある也、依て次の文に

●ふかく決定の思ひをなすべし、ゆめく疑ふ心あるべからず
 大科五つの中、第五結勸也、專修の行者なれば、上の如く理をせめて見れば往生には塵計も疑はな

きことなれば、深く決定の思ひをなしてゆめゆめ疑をなすとなり、偕此決定とは有也無也の疑心をさつぱり離れたるを云ふ、たとへば知つた道を行く如し云々、其の如く此念佛を申て居れば極樂へ往生すること、落ち着く、如是分別なしに決定した人は、宗の安心の底に至つて埒の明た人と云ふ者也、斯く埒の明た人はたとひ三心の名目も知らねども往生する也、依て元祖大師の御詞に、此念佛は決定往生の行なりと信をとりぬれば、自然に三心具足して往生すとの玉へり、若し誤て是迄疑のぬけぬ人もあらば、押て唱ふれば往生と思ひて唱ふべし、是則宗の故實也、されば記主人の云く、三心を具せざる者もわして決定往生と思へば、この故實によりてはじめて三心を具するなりとの玉へり、業障の強い者は疑ふまじきことをも疑をなすもの故に、たとひ疑が發りたがることも夫に取り合はず、申さへすれば往生ぢやと、無理押に押付て決定心をわし立く唱れば、やがて佛光に照されて疑の氣もなふなり、三心を我知らず

に具する、具すれば必往生するなれば、押て決定心を立るが、宗の故實ならひとごとと也、此記主の御示しと、元祖大師の疑乍らも申せば往生すと示し玉へるなど、彼極を以極を抜と云へる如く、具し難き三心を安く具するの故實、一變法の活手段也云々、此決定と云ふに就て、一應云へば疑をばなれ、是でと思ひ定めて落着所を云へば、聖道淨土同じことなれども、再應分別すれば聖難淨易大に差別する也、先聖道門の決定心の立難きは、平等佛性自身即佛と、高々たる所へ決定心を立ることなれば至て立難し、譬へば鴨居の上を渡るが如し、渡らるゝとは落着はしても、なれぬことは足が震ふ、どちらへでも足がすべると落る、大工はしらす常の人では出來難きが如く、自身即佛の決定は上代上根上智の智者高僧は立つべけれども、身心不調の中下の二機の立がたきこと可知云々、又淨土門の決定心の立易きは、自身は出離無縁の惡人なれども、彌陀別願の大慈悲力に引立られて往生すると立るとなれば是れ至て立ち易し、譬へ

ば敷居の上を渡るが如く、敷居は兩方に疊があれば誰であらうと渡らるゝ也、敷居の上からは落度ても落られぬ如く、念佛者は假令ひ三途へ落度ても、若不生者不取正覺の御誓願がある故落らるゝことではなき也、故に申せば往生と云ふ決定心至て立易き也、敷居鴨居同じく四寸なれども上にあると下にあるとで難易遙に違へり、譬に合せて聖淨二門の決定心を立る難易の差別能々心得分べき也、然るを世の人本願を頼み乍ら煩惱罪業の厚薄を以て往生の得否を窺ふは、自他二力のわかれを知らぬ故也、かまへて我のよしあしを不顧、本願と念佛とを頼みに深く決定の思ひをなすべし云々、此決定心を立る分齊を、心易き示しあれば擧て示さん、禪勝上人、或人に往生は如何程にか思ひ定められて侍ると問はれければ、左の拳を右の拳にてうたんに、打はづすまじきほどにねば候と申けるを、き給ひてアチあふなやと申されければ、さてはそれには何とたもひさだめられ侍らんと申ければ、生あるものゝ死に歸せんする程に

(800)

一定と思ふなり、我こぶしにて我こぶしをうたんは、たのづからはづるゝ事もあらんずるぞかしと申されける、(御傳四十五の卷)此禪勝上人の御答、決定心を立る分齊を知るのみならず、無常を勸むるよき御示しなり、一切萬事は遁るれば遁れらるゝこともあれども、「何事も皆偽りのよの中に、死ぬる斗はまことなりけり」是斗は決定して遁れられぬ、其死ぬることゝ此度の往生を同じやうに思ひ定めよと、自身の決定の分齊を出して人に示し玉へる也、爾れば人々も此通りに決定すべし、專修の行者であらうなれば、佛の御願ひ専ら我身の上にあたれば、順次往生何の疑ひかあらん、必うろつく心を發すなとて、本文に、ふかく決定のたもひをなすべしゆめく疑ふ心あるべからすと示し玉へる也

歸命本願鈔講說卷六 終

歸命本願鈔講說卷七

●こまかにこのことわりをあんすれば、喜びの涙かへりて悲しむ。

當段は、上の孟宗の譬を結んで、下の吞釣の魚の譬を設け出し玉ふ、下たごしらへにて是を結前生後の段と云ふ也。

こまかに此ことわりを案すればとは、上來の如く孟宗が念力で生れたる筍のやうに、我等彌陀如來に念せられ奉りて、往生する道理を委細に考へて見れば、實に往生と云ふことは手に取りたる如く、慥かなるに依て、こまかに等云々。

よるこびの涙かへりて悲しむとは、我等が如き、出離無縁の大罪人の往生すると云ふになりしは、是偏に本願に逢ひ奉りし故と思へば、喜ばしさの餘りに涙にむせび、又我等が往生すべき支度をば、十劫已前よりかまへて待ちまつて下されしものを、夫れに今迄六道に流轉せしことかと思へ

(801)

ば、還て又悲しくなり、喜の涙と悲しみの涙とが相交りてこぼるゝと云ふ意なり、已下其喜びと悲みの所以を示し玉ふに、先悲みの涙のこぼるゝ譯けを擧て。

●いたづらに無量無數劫の生死を経て、今迄常没常流轉の凡夫たるだにもくやしきに。

云ふ意也、苦みと雖ども佛となり衆生濟度の爲なれば、其苦みには利益あれども、我等が六道を經回りし苦みは、苦み損のむだごとと云ふ意なり、依て其むだぐといたづらに無量無數劫の生死を経て、今迄常没常流轉の凡夫たるだにもくやしきにとの玉へり其むだに苦み迷ふたる間の長さことは、譬を以ても譬られず、數も量りも知られぬ長久しき間なり、實に我等忽然念起名爲無明と迷ひ初めしは、無始と云ふて始のしられぬ昔より、六道を回りしは車輪の回る如く、何程と云ふことも知られぬ身を受かへて苦みしなり、誠に人々深く悲しむべきことに非ずや、されば安樂集に云、

如^レ是遠劫已來、徒受^二生死^一至^三於今日^一猶作^二凡夫之身^一何曾思量傷歎不已^レとあり、(今と全同)されば無始よりむだくと、是迄凡夫の身にてありしことさへ悲しむべきことなるに、夫れのみならずして。

●猶また有海の波浪にたゞよひて、こりすまに無窮の楚毒をのまん事は、あぢきなかるべき事なるを。

猶は俗に云ふまだの意、または是迄迷ひし上には是より後もまたと、前後にかゝる復の字也、有海は三界のことで三有とも云ふ、(有とは因果不亡の義、海とは苦果の深廣の義)其三界の苦みの深廣の義を、海に譬へて有海と云ふ也、波浪とは別して三界六道各々の苦を受けることを、波に譬へて云たもの、三界を海に譬へ、苦みを波にたとへ、ただよふと云ふも波の縁語にて、是も定りなく迷ふありさまを譬へしもの也、其六道の苦み波浪に漂ふとは、或焦熱大焦熱の炎にむせび、或は紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられ、或は餓鬼となりては飢餓

苦の愁に沈み、畜生となりては殘害殺戮の悲みにあひ、人間の八苦、天上の五衰、一趣として苦みならずと云ふことなく、其六道の苦みを回りく廻りて受ることを、波浪にたゞよふとはの玉へる也、人々は今人間と生れたれば餘趣の苦みは、想像の分齊で現には知られぬが、現在に今漂ふて居るは生老病死の四苦に、愛別離苦、求不得苦、怨憎會苦、五盛陰苦の八苦の波浪に漂ふて居る也、是も顛倒の見に住して居る人は、苦みを苦みとも知らざれども、若正見になれば「世の中を渡りくらべて今ぞしる、阿波の鳴戸は波風もなし」ても、恐ろしい娑婆世界、鳴戸の浪も何の物かは、受苦の白波天をもひたす、渡り苦しい世の中じやと知る也、三惡道の極苦に對すれば、一應は善道と名けらるゝ人界苦みさへも此通りなれば、其三惡有海の波浪に漂ふ苦みはいか計りあらふ「うかぶてふ人のさかひのうきにつけて、みつ瀬に沈む苦を思ひやれ」と思ひやつて見るべし。

偕此波浪と云ふものは、ひとりでにたつ物ではな

く、波は必風に依てたつ物也、六道の苦みと云ふものも、ひとりでに自然に出来る物に非ず、煩惱の威風が吹立に依て苦みの波浪がたつ也、其苦のみ波の吹起す風はと云ふに、佛地論に八風と云ふて、八種の煩惱の風が擧てある、其八とは一に利、二に衰、三に毀、四に譽、五に稱、六に譏、七に苦、八に樂也、此八種の風が常に吹て人々に惡業を造らせて、六道四生の苦みを受けさする也、利とは可意の事とて己が心になふこと、士などでは官位を進め奉祿の加増、町人百姓なれば回り合せ能く身代が能なるに付て、種々の惡業を作る也、衰とは其うらで、士なれば官位を削られ奉祿を沒收せられ、町人なれば取り込にあひ手代が不將で不意の損亡、農家は水損旱損等と身代の衰ふるに付ては、種々の惡業を造る、毀とはかげでそしられること、若夫をかへり聞けば瞋恚を發し罪を造る、譽とは其裏らかげでほめらるゝこと、夫を聞て喜び橋慢をなすより罪を造る、稱とは直に目前でほめらるゝこと、いやはや痛み入などゝ

詞には云へども、心に高ぶるより罪を造るもあり、或はほめらるゝに付てのりがきて、無いこと迄語り添へ、鼻ををごつかせて高擧りをなし、罪造るもあり、譏とは眼前でそしりはづかしめらるること、向が十分理を持てば、仕方がなさに詫り入たと詞には云ひ乍ら、底には瞋恚の炎をたき立て罪造るもあり、或は理を持乍ら淵とやら、向の人の威勢に押され無念々々にむし立られて罪造るもあり、或は互に云ひ募り果てはしのぎを削るに至ると云ふやうに罪造るもあるなり、苦とは身心悩亂するより罪造り、樂とは其裏身心適悦と云ふて身も心も浮々として心に叶ひ、悦ばしいより罪造る、此八つの風より憂苦の波浪を發す、是が凡夫のありさま也、故に本文に、有海の波浪にたゞよひてとある也、こりすまとは、まは助字にてこりすに也、言釋に一度こりたることを猶なごり失ひ兼たる心と云へり、古歌に「こりすまにまた此度もこゆるきの、いそがで法の船にたくるな」楚毒とは、罪人を打つ杖を楚と云ふ木にて拵へしと

也、毒は痛の義也、必竟今の意はいたみ苦むと云ふこと也、あぢきなきは、無味氣也、あさましき又頼もし氣なきの意、又無道無情とも和訓せり、文の意は、彼煩惱の八風に依て受苦の波浪を發し、生々世々に苦しみにこりもせず、又是より後も地獄に落て、獄卒の鐵杖に打れて、窮りなき苦み痛みを受る、種ねばかりをなして一生を送るは、さりとは情なきありさまに非ずや、斯づくと思ひ回せば、悲みの涙も止め難きことなるぞ、あぢきなかるべき事なるを云ふ意也、先是迄に悲の涙のこぼるゝ趣を述玉ふなり。

人々餘所事に聞べからず、現に今我人此八風に吹立られ惡業の波浪を起して居れば、未來は決定三途に墮して窮なき苦みを受る事は、にがくしいことながら因果報應致し方のなきこと也、其三惡の苦みがいやなれば、八風に吹れても煩惱惡業の涙を立ぬより外に仕方はなきが、人々喜ばしいこと、悲しいことが同じやうにあつて、譽めらるゝ

も誇らるゝも、苦樂もかはること無いと云ふ身分にならるゝか、一毫未斷の凡夫では夫うならぬが定り、ならぬときは後世三途に落入て苦むも定まり、止めやうとしても止りはせず、さればとて後世の苦みも我身にこそ受ることなれば、夫れよいはと捨ては置れず、仕やうもやうにつまつても、あぢきない身の上ぢやと、悔む上には悲みの涙にむせばねばならぬ道理也、斯く一つ道理を立て、悔む意になると、本願に逢奉りしが喜ばしくなる也、依て是より下が喜びの涙のこぼるゝの意を述玉ふ也。

●いま此本願にあひぬるのみこそ、まめやかに多生のれもひ出にて侍れ。
今此阿彌陀如來の大慈大悲の本願に逢奉りしことのみ、誠に多生の思ひ出、喜の中の喜、危い所で能逢奉りしことぞと云ふ意也、永觀律師の云、若不生淨土不遇十念願、今者已得值、知往生時至已上、家隆卿、御老年にて念佛門に歸入し玉ひての詠に、「かく計契りまします彌陀佛を、しらであ

またの手を經にけり」云々。

まめやかにとは、眞實まこと、云ふこと也、生れ代り死に代り生々世々を經る内には、喜ばしいこともありつらんれども、其喜びは迷ひの上の喜びなれば、眞實の喜びと云ふものには非ず、眞實の喜びと云ふは此の度此本願に逢奉りし喜び也、外の喜びは苦みの新しいのを喜びと云也、其證據は此世のありさまを考へて見るべし、盛者必衰會者定離とあつて、婚禮を目出度と云ふは夫婦別れて悲しむ、初め安産で目出度と云ふも親子別れて悲しむ、始めつやゝかなりし色目は溢紙のやうになり、黒かりし髪は芋かせのやうになり、總じて盛なりし六根皆悉衰へ果て苦しむ、されば此世の喜びに樂と云ふに、悲みの下こしらへて無いこと、一つとしてあることなし、既に三界皆苦と、佛が錠をわろし置玉ふ世界なれば、眞實の喜びのあらふ筈はない、故に喜び樂と云ふは皆苦みの芽出しの所を云ふなり、眞實の喜びと云ふは、此度本願に逢奉りし喜びに限る、其所以は初めて本願に

逢ふて念佛の行者となれば、後世に惡趣に墮ると云ふ氣遣ひなければ、心もはれぐとなつて頼もしい、總じて世人の恐れを抱く最頂は、死ぬると云ふ事に極るなれば、祈念の祈禱の思ひ詞の終りに、爪切る事さへ勝手に得せず、其心遣ひ氣苦勞諸事に就て思ひやるべし、念佛の行者となれば其人の恐るゝ最上の死ぬことをさへ、「極樂は日にく近くなりにけり、あはれ嬉しき年の暮哉」と旅に居る人の我内へ歸る様なる心持になり、生なば念佛死なば往生、さつぱり時が明いてあれば、其餘のことは勿論、心にかゝる山の端もなし、既に御來迎を拜しては無始已來なき喜びを生じ、極樂に生じてよりは但受諸樂故名極樂、種々莊嚴の結構なるを見るも喜び、寶地の柔輦踏むも喜び、七重寶樹の風の聲、八功德池の波の音、白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽の轉るも悉く微妙の法音なれば聞も喜び、食は自然の百味の飲食、身はいつくしき三十二相、阿彌陀如來の御說法を聽受し聞に付ては悟りを進み、百法明門六通自在身を

(806)

十方の世界に現し、縁あるを救ひ無縁をも誘引す、是等の次第の喜びを我身の上を得ることにて、終には成等正覺に到る、是眞實の樂み眞實の喜びに非や、此喜びは何より受る、今此本願念佛の法門に逢奉りしより發る也、爾れば今此の本願に逢奉るは眞實の喜びにて、此娑婆の苦のもと、なる喜びとは大に違ふて、誠に多生曠劫の喜びではないかと云ふ意にて、いま此本願にあひぬるのみこそ、まめやかに多生の思出にて侍れ、との玉へり、是より下か吞釣の魚の譬を出し玉ふ下也、上の孟宗の譬は、本願にさへ乗すれば皆悉く往生するの義趣をたとへ、下の吞釣の魚の譬は、至て本願に乘じ易き義趣を示し玉ふ、二喩のたとふる所如此、則文に。

●吞釣の魚は水にあることひさしからずといふ事あり、深く是をよろこぶべし。

吞釣の魚の譬は、大悲經三(布施福德品)曰、佛告阿難、如捕魚師爲得魚故、在大池水安置釣餌、令魚吞食魚吞食已、雖在池中不久當出已

上、智論曰、如吞釣魚、雖復遊戲池中、當知出在外不久已上、斯く經論に出たる譬なる故、いふ事ありと據あることを示し玉ふ、法譬合釋委は下の本文にあり、大意は、生死は海の如く、衆生は魚の如く、佛は漁父、本願は釣竿、名號は餌の如し、餌を吞たる魚は、水中にあること僅の間にて引上らる、だけの命なり、今も其如く、稱名の行者は本願念佛の釣を吞んで居る故に、此娑婆の水中にあることもわづかの間に、受得たる壽命の糸だけ也、どのやうに長くても五十年か三十年、夫れも大形たぐり寄せたれば、遠からぬ内に命終、命の終り次第往生することなれば、たとひ苦しみづめにした處が暫くのこと、追付其苦みと云ふ名も開ぬ極樂へ、往生して無爲の快樂を受ることなれば、ふかくこれをよろこぶべしとの玉へり、なる程何ほど喜んで喜びあきはなきことなり、たとへば便るべき方もなく、尾羽打からせし浪人などが、思ひがけなきあり付でも仕たらば、窮めて喜ぶであらうなれども、たとへ追出さ

(807)

れず死する迄つとめた處が、三十年か五十年、其上主人になると云ではなし高がつかはれ人なれば、さほどのことでもなければ、頼むかけなく落魄て露命もつなぎ兼ると云處で、かへられたもの故上へなきことに喜ぶ也、是から推して見れば、皆や此方の如き諸佛に見放されし浪人者が、報身報土の極樂へ往生と有り付たれば、盡未來際快樂を受ることなれば、深くこれを喜ぶべし、と喜ばねばならぬことに非や、因て元祖大師も、天に仰ぎ地にふして喜ぶべし、此度彌陀の本願にあふことをとの玉へり、(小消息)なせ夫程に喜べと仰られたるなれば、從來も云通り、決定三塗に墮して無量無數劫苦みを受くべきに定た身が、此本願に逢奉りし計で、地獄の上の一足とび、順次に極樂に往生し快樂を受ることになれば、手の舞ひ足の踏所をもわすれ、歡喜踊躍して喜んで喜びあきはなきこと也、夫も遠い先きのことかと云ふに、釣を吞みし魚の如く、わづかの命の糸筋をたぐりよせらるゝ間のことなれば、今こそかゝる淺

間敷凡夫なれ、追付六通自在の身、觀音勢至と肩脊を並べる、地上高位の菩薩となることよと思はば、天にも仰ぎ地にも俯し、喜び涙にむせびもすべきこと也。

源賴義(發心集三、托、往生卷五)

是より正しく吞釣の譬を以て、出離の久しからざることを擧て念佛を勸進し玉ふ、上の孟宗の譬は順喩、孝行の善事を以て本願の大善をたとへ玉ふ、此吞釣の譬は逆喩、魚釣殺生の惡業を喩として、本願念佛の大善事を顯し玉ふ也、彼戒手定細惠劍の如云々。

●たとへばうゑたる魚の糸をもとむる、つりをねつればすなはちのみぬ。

海のあれたる跡などにて、魚の食物もなく餌にうゑつかれたれば、何ぞ喰度ものじやと、そこよこよと求めありくとき釣を見付れば、其まゝ吞故にすなはちのみぬとある、此則吞むと云が肝要、法説の下で至て入用のこと也、今則とあるは直に

其儘と云意で、魚が飢ゑて求めありくとき見付たる釣なれば、こは嬉しやと分別なしに其儘吞込也、分別にわたると吞まぬ也、今此様にうまさうな物が、ちうぶらりと下つてあらう筈はないなどと、分別に及べばむざとは吞まぬ也、其内に釣糸でも見付ると彌々吞まぬ也、又外に何ぞ食物があつてうゑても居ねば、猶うつかりと吞にはかゝらぬ也、然るに此魚が見付ると其儘のみしは、能々うゑて居る故也、此分別なしに其儘吞しと云ふことを忘るべからず依てうゑたる魚のゑをもとむる、釣を得れば則のみぬとの玉へり。

●おのが命はあるにもあらず、今は定めてひさからじ。

釣を呑んでからは、其魚の命はあるとまでは云はれぬは、已に釣人の手に入てあることなれば、誠に久しからの命にて。

●わづかに水にあるほど、はかなくよろこぶけしきあれども、今にくやしがるべきが如く。

其通りにはや釣人の手に入てあることなれば、引

上らるゝと命はなく、わづか糸の水にある間の命なればはかなきこと也、爾れども其魚は今に引上られて命の終ると云ふことは知らず、よろこぶけしきあれどもと喜んで居れども、いまに追付引上られて尾ひれを張つて飛回り、命終るはくやしがるべきが如く悔しいことならんが、今我等念佛行者も其如くと、下の法に合せん爲に設け出し玉へる也、是迄にて譬の文は終る、已下は法に引合玉ふ也。

●我等ひさしく流轉の浪につかれて、出離の餌にうゑたりし身の、たま／＼名號の釣を得て吞みぬ、苦海にあらん事今いくばくぞや。

彼魚の海中に久く住して居る如く、我等久く無始より已來三界六道の内にさまよひ、此に死しては彼こに生れ、生れかはり死にかはり、車輪の回る如く流轉して、今たま／＼人界に生れても上にて辨せし如く、利衰毀譽稱譏苦樂の八風に吹立ち、流轉の浪に漂ひ勞れ善をなすには起居皆煩はしく明ても暮ても惡業のみを造りて、出離の餌に

うゑたりし身の、彼魚の餌にうゑたる如く、生死出離の餌にうゑて助かるべき縁もたよりなき身の上也、(此出離無縁と思ひ知るが浄土門の至て肝要) 其出離の餌と云は則戒定慧の三學を云也、然るに我等戒は持てず、心は靜まらず、無漏の眞智は少分も生せず、唯明暮に八風に吹立られ、煩惱惑業の大浪小浪にゆり立られ、出離生死の餌にうゑつかれたる我等が身の上なりしに、たま／＼名號の釣を吞まぬと、無始より已來終に遂に聞かず、遠劫より已來逢奉らざりし、超世大悲の本願に逢奉ることを得、稱名念佛の釣を見付て、吞こみ唱ふる身となり得しぞと云意也、(文化十一戌年十二月十八日、法船庵に至り老師の安否を窺ひしとき 師の芳語に、予若年の時相州塔峰阿彌陀寺に依住せしとき。寺主在聞和尚の云く、寺につたはる澄禪上人の發願文あり、書寫して與ふべしとて、細字にて三紙に滿るを賜へり、後に向譽尊師に隨侍し口稱一行に決心し、生涯は隱遁に畢る覺悟なれば、所持の者は皆人に譲れり、其時彼發願

文も他に與へたり、文は憶持せざれども、奥に一首の道詠ありしをばわすれず、「餌にうゑてくるしき海にしづむ魚の、今彌陀佛の釣をのむ哉」とありし、文中發願の一篇皆此意にて、身を至て罪惡と下し果玉ふこと、別して勇猛強盛につとめ玉ひし御方なれば、取りわけ殊勝なることなりしと) 此所が先にもことわり置し如く、吞みこむと云が至て肝要のこと也、魚が至てうゑつかれて居るときに、たま／＼釣を見付けた故直に吞む、今本願念佛の釣を吞込む其如く、出離無縁の大罪人、助かるべき縁もたよりも絶果たる身の上と、自身の程を思ひ知りたるもの故、本願名號の釣を見付るや否、直に吞み込み唱へにかゝる也、(此其儘信じ唱ふると云ふが一大事なり) 若生賢しき分別を出すすと本願に違ふことは、彼魚が此通り宙にふらりと餌のあるは、合點ゆかぬと分別にわたると吞まぬ如く、此本願念佛を唱ふれば往生すると聞かば其儘信じて唱へにかゝるべき處を、いらぬ凡夫の邪智を出して分別にわたたり、つい唯念佛唱へた位

(801)

で往生とは合點がゆかぬと、一行に不足の思をなして疑ふたり、或は無常を忘れて後を期したり、彼是れして唱へぬ内に火の車の迎にあひ、八寒八熱の獄苦に沈む也、又彼魚外に食物ありてさほどにうゑて居ねば、うづかりとは吞まぬ也、然を直に吞んだはよくくうゑて居たりし故也、今も又其如く、何ぞ外に助かることかあると思ふと、直に吞こみ唱へにかゝらぬ也、是出離無縁と信ずること知らぬ故也、此機を信ずることは諸師の手の届かぬ所で、善導一師の妙釋、淨土易往の故實也、我等は出離の餌にうゑて、外に助かるべき縁の絶果たる身の上ぞと見かざるが機信、爾るを如是者をも助け玉ふは彌陀の本願念佛の一法と、聞よりこは難有やと分別にわたらず、直に信じて名號の釣を吞込み、唯一筋に南無阿彌陀佛と唱ふる、是を法を信するの信と云ふ、是が導師の機法二信の御釋の意にて、淨土門の肝要なれば、本文の始終此意に合するなり、右の通り機を信じ法を信じて、名號の釣を吞込唱ふる人は、苦海にあらん事

今いづくぞや、人々は皆此釣を吞みし人ならん、爾れば此苦界の娑婆にあることはしばらくのことにて、命終り次第直に極樂に往生する也、されば三祖の云、(決疑鈔)仰看願文涙浮雙眼、萬劫希聞今始奉値、詣彼寶刹今幾曉夕、と喜び玉ひしが實に喜ぶべきの窮り也、迷の上の喜とは違ふこと當知(此世の喜びは皆苦の芽也眞實の喜びあることなし云々)此本願に逢ひ奉りし喜びは、再び苦に變ずると云ふとなき眞實不壞の喜、最早娑婆苦界の縁はきれて、極樂淨土の聖衆の數に入つて居る也、靈芝の釋(智旭の小經要解)に、信願持名娑婆界内の人に非すと云へる如く、凡夫かと思へばはや菩薩也、一年の内に春は來にけり一とせを、去年とやいはん今年とやいはん」と、在原の元方の年内に立春の意を詠じたる如く、冬かと思へば已に春なり、今も亦凡夫かと思へばはや菩薩也、(蓮華標名云々)春かと思へば未だ師走の下旬也、菩薩かと思へばまだ娑婆に居る物故凡夫也、年内の立春なれば去年とや云はん今年とや云はん、凡夫の

(811)

念佛者なれば菩薩とや云はん凡夫とや云はん、云へばどうなど云るれど、屹度春じやと定つて誤ても冬とは云はぬ大晦日の夜がさかい、念佛の行者もきつと菩薩と定てあやまても凡夫と云はぬは、出る息の内へ入らぬがさかい目也、後の世といへば遠きに似たれども、出入息きの絶間まつ程「年内に春が來れば年の明るに程はなき也、凡夫の内にはや菩薩の仲間入して居れば苦海にあると久しからず、長いと云ても糸だけの命、光陰は矢の如くほんに夢の間、追付極樂に引上られて神通自在の身となる也、因て本文に、我等久しく流轉の浪につかれて乃至苦海にあらん事今いくばくぞやとある也、已に人々菩薩の仲間入したる身分なれば、たとひ喜ばしいとあらうとも、迷の上の喜びに執着しやう筈もなし、又悲しいとあらうとも夫れに心を奪はれず、三惡道の苦に比へば此苦みは物の數かは、猶此上にうきことの彌が上に重るとも、わづか此世に居る内のこと、強て歎かう筈はないと諦らめ、彌々其を縁として念佛増進云々。

●わづかに命のつきざらんほど、わすれずとなへんとするはくるしきに似たれども、前念に命終らば後念にすなはち往生せん、永劫の快樂こゝろよきにあらずや、物うきことをわすれて、ねんごるに念佛すべし。
此文は、善導大師の禮讚の序文を取て述玉ひし也、則文、上在一形似如少苦、前念命終後念即生彼國、長時永劫常受無爲法樂、乃至成佛不經生死豈非快哉已上、意は上一形とは今日念佛唱へにかゝり、今日命終しても乃至三十年五十年過て命終しても、唱へにかゝりてより死する迄をさして一形と云ふ也、其如く一生涯怠らす念佛唱るは少しの苦みには似れども、今にも命終れば前念々佛後念即生と、直に極樂に生るゝことを得てよりは、長時永劫盡ると云ふことなく常住不斷に無爲の樂を受けて、竟に成佛に至る迄生死を経ることなき身となるは、なんと快いことではないかと云ふこと也、今の本文全く此釋の意也、導師は彌陀の化身として大唐に顯れて上の如く釋成し玉ひ、眞如堂の本尊彌陀如來は老僧と化現して和語にや

(812)

はらげて今の如く勸め玉ふ、大唐日本勸めを一つにし、本地垂迹其趣き全く同じ、正法の正法たる險は岐を分たす、本願隨日意の密意符節を合せたる如く、豈貴きにあらすや、(是に就ても、邪義邪勸の後さき揃はず、人を惑はすことを恐れて、唯正法の勸誡を聽べし云々) 偕此禮讚の文を記主の御釋に、上在一形似如少苦とは、三途に墮して受る長久しき苦みに對して、念佛唱へはしめてより命終る迄怠らすつとむるを、少苦との玉ひたる也、似如とは念佛唱へにかゝつても初心の間はなれぬこと故、少しは苦みのやうなり、されども夫れを退轉せずつとめて居る内には、何の苦勞もなくつとまるやうになる、彼無能上人の「はじめにはくるしかりしが今は又、念佛せざればわびしかりけり」と詠じ玉ひしが如く、後此やうに苦勞なしにつつまる所から見れば、初心の内に少し苦勞のやうに思ひしは、なれぬ故のことで眞の苦と云ふものに非ず、故に少苦に似たり、似如と置玉ひしは此意ぞとなり、記主の御釋細やかなることに非ずや、

念佛申は誠の苦に非すと云ふこと得心ならん云々、其次に記主、念佛の行者末代の我人に御勸めの言に、遠劫已來徒に生死の大苦を受け、至_三於今日_一猶作_三流轉_{凡夫}、一生空暮再會何日、速_三劫_三萬事_二以救_三頭_然とあつて、我等過去遠劫の昔より已來、三界六道の中に回_りて生死の大苦を受け、今日迄猶流轉の凡夫たること誠に悔むべきことなり、夫にもこりす如是本願念佛の法門を聽き乍ら唱ふる心なくして明し暮さば、未來も又惡趣に沈む身となれば、再び此本願念佛に逢ひ奉ることは甚だ難し、總べて佛法に逢ふことさへ難いに、難中之難無過此難本願念佛なれば、何れの時にか逢奉ることを得ん、故に萬事を抛て一向專修に唱ふることを、頭につきたる火を拂ひすつる如くせよと、勸め玉ひしが誠に爾り、人々考へて見るべし、二人か三人暮す身帯に有付ふと、思ふても自身の力でありたつことは大ていのことではできぬなり、況や十人二十人乃至百人二百人扶持すると云ふ身になり易からんや、如是凡夫の僅かのあり付さへも

(813)

さう、況や我等が此度の有付は凡夫から直に報土の大菩薩となつて、十方世界の衆生を扶持し助る有付なれば、たとひ命を捨てると云ふても惜しからぬことなり、夫をわづかに命の終る迄日々五萬六萬唱へたとて何程のことかあらん、若しもものうき心が出るならば、先きの大きな有付の所に眼をつけて、分々に勵んでつとむべきなり、されば元祖大師の御法語にも、たとひ一生念佛すども輪回生死の憂にたぐらふれば夢の間の營みなり、無爲常住の樂しみを得んが爲に電光朝露の身をくるしめさらんや、又無始よりならはぬ事なれば何となくものうきばかりなり、常に思ひつゞれば申さぬをこそかへりてはあきれたるやうにおぼゆれ、どの玉へり、是も人々考へて見るべし、唱へぬ已前は格別、本願信じて唱へにかゝつてからは自身の怠るときは勿論、又申さぬ人を見れば、どうしてなりとも申しさへすればよい念佛を無理に申さず、好んで地獄の苦痛を受ると云ふは、痛ましいことに思はるゝものなり、依て人々從來の教に隨

て、一生を空く暮らさぬ様分々に進んで唱ふべきとなり、依て本文に、わづかに命の盡さらん程乃至永劫の快樂ころよきにあらすや物うき事を忘れてねごるに念佛すべしとある也。

● 豐後の傳右衛門(托、往生卷二)
● わほよそ本願はさぞのごとし、名號はつりに似たり、衆生の南無阿彌陀佛と唱ふるは、魚の餌を呑ぬるにことならず。

當段は正しく法譬合釋の段にて、法と譬とを配釋し、次で此の名號を唱ふる人は決定して往生すると云ふ道理と、人らびなき本願の平等なる道理を示し玉ふ下なれば、誠に淨土門の肝要末代出離の故實なれば、能々聽受すべし云々。

● 大凡とは一概に總べ説くの意とて、下の譬と法を合するをすべく、つて説き出す詞也、本願はさぞのごとし、先此本願を竿に喩玉ふは喩の叶ふ斗でなく、表示とてわけのあることなり、釣竿は竹なり、竹には不改の徳と云ふて、春夏秋冬の四時に色を變せず姿のはらざるものなり、餘の草木は

春は芽し夏は茂り秋は色變へ冬は落ると、時に隨て轉變するとは違ふて、古人も詠せし如く「谷口春殘黃鳥稀、辛夷花盡杏苑飛、始憐幽竹山窓下、不改清陰待我歸」とも云ふて竹は四時に色を改めぬなり、依て是を本願念佛の三時貫通の利益に喩ふるなり、餘の法は正像末の三時に興廢あれば、餘の草木の時に隨て變するが如し、爾るに此本願名號の一法のみ餘教に卓出して正像末の三時に利益を變せず、上は佛在世より末法今時に至り、猶人壽十歳の時餘教悉滅の後も、獨留此經止住百歳と説かれて、此念佛の法門のみ利益の縁り色深き故、四時に色を改めざる竹のみさをに喩へて、本願はさをのごとしとあるなり、名號はつりに似たり、是も至て譯あることなり、總じて釣をするには鯛を釣には何を餌につける、松魚には何と夫々の魚の好む餌をつけて、其魚の喰付易きを第一と考へてつるものなり、今彌陀如來も其如く、何とぞ衆生を助け度と思召御慈悲深く在る故、五劫が間の御工夫に何とぞ衆生の喰付易くつ

とめ易き行をと、種々御思惟の上にて本願に立玉ひし名號なれば、甚喰付易く至てつとめ易きなり、唯口で南無阿彌陀佛と云ふ斗なれば、いかなるものも唱へられ、不論行住坐臥とあれば、行儀作法のわらびもなければ、つとまらぬと云ふ人はなきなり、其證據は至て唱へにくかるべき小兒や病人なれども、唱へ易すければこそ、三歳四歳の小兒も唱へて往生せしこと傳記と云ひ口實と云ひ、枚擧に違あらず、又病氣の中にも中風などは殊にるれつの回らぬもの故、唱へられぬ筈なれども念佛をば唱へる、は何故なれば三重の阿吽と云ふを考へて本願に立玉ひし故なり、其三重のあうんとは云々、さらば小兒や中風病みに經文や眞言をと云たらば、一向唱へは得せぬなり、如是名號は唱へ易きによつて、名號は釣に似たりとは譬へ玉へり、是は所修の法を擧げ、已下は能修の人を擧げ玉ひて。

衆生の南無阿彌陀佛となふるは魚の餌を吞ぬることならず、末法時機相應の本願の竿に、喰付

易き名號の釣が垂れてあることは、唯衆生の魚の方にては申せば往くと聞て、あら難有やと直に其名號を吞こみ唱へさへすればよき也、是が自力聖道と他力淨土の法門と異なる所なり、魚の餌を吞むには身構へはいらぬ、唯餌を見付ると其儘分別なしに吞みさへすればよき也、今稱名念佛も其如く、別の仔細なく申せば行と分別なしに唱へさへすればよき也、聖道自力はこれとは違ふて猫の鼠を取る如し、猫の鼠を取るには身拵へが第一也、先爪をとき眼をすゑてねらいすまし、體をかためて飛かゝつてとる也、聖道門も其如く、三學の身こしらへが第一、先智慧の爪をとき禪定の眼をすゑ、戒行の體を堅めて夫れより修行にかゝり、若三學の内一つも欠けば修行は成せぬ也、目をすゑ體をかためて飛かゝつて爪がなければとれぬ如く、心を静め戒を持ても智慧がなければ證はできぬ、又爪もあり、目をすゑても、體を堅めて飛付ことができねばとれぬ如く、禪定を修し智慧はあつても、地盤の戒がなければ證はできぬ、又爪も

あり體をも堅めて飛かゝつても、目をすゑて向を見定めず無算者に飛かゝつた分ではとれぬ如く、戒をも持ち智慧もあつても、禪定から發つた智慧でなければ眞智でない故證はできぬ、若三つ共に欠けば死だ猫なれば鼠の取れぬこと論をまたぬ、人々はいかん、三學無分の死猫同前、出離生死の鼠のとれぬこと思ふて可し知、然るを本願念佛の法門の貴とさは、魚の餌を吞が如く、一向身こしらへはいらぬ也、其上に身拵へすると却て邪魔になる也、我戒を持ち智慧ありなど、物立るは大禁物也、唯愚痴々々と申せば往くと計り合點して唱さへすればよき也、故に元祖大師の御言に、聖道門は智慧をきはめて生死をはなれ、淨土門は愚痴に還りて往生するとも玉ひ、又た一枚起請文には、たとひ一代の法を乃至念佛すべし、とも玉ひて、兎角之乎者也分別をすて、愚痴々々と念佛計り唱るが、淨土門の肝要にて聖道門とはうらはらなり、故に愚鈍念佛第一の機也と相傳する也、されば今も淨土の機を魚の餌を吞むに喩へて、衆生の

南無阿彌陀佛と唱ふるは魚の餌を呑ぬるにことな
 らずとの玉へる也、上來の所詮は本願に乗じ易き
 義を示し、已下は念佛唱ふる人は往生に疑ひなき
 こと、不簡擇平等大悲の本願を示し玉へるなれ
 ば、別して宗門の肝要なれば能々聽受すべし云々、
 先初に念佛の行者は決定順次往生の義を示し玉ひ
 て。

●さればすでに大悲の漁人、本願のさをよりたれ
 たる、名號の釣をふくみて、生死の深淵をばいで
 ん事、さらく疑ひあるべからず。

名號の釣を吞たる衆生を、大慈大悲の阿彌陀如來
 引上げ、助けずして置玉ふべき道理はなき也、彼
 漁人魚の釣に喰付しを見乍ら、引上ずして置く道
 理あらんや、前方より竿よ餌よと支度をし釣を下
 し眼をくばる等は、何の爲なれば喰付たる魚を引
 上ん爲也、夫に魚が喰付ても面倒など捨置く漁人
 あるべきや、喰付さへしたらば引上ると云ふ道理
 得心なるべし、今彌陀如來も其如く、何卒衆生を助
 け度と思召大慈大悲に因り、國を棄て位を捐て斷

難き親愛を斷て出家し玉ひ、五劫の思惟に本願の
 釣竿を拵へ、兆載永劫難作能作の御修行に、釣糸
 釣針餌をも調へ玉ひしは、是何の爲なれば念佛申
 す者を極樂淨土へ引上ん爲計り也、爾るを衆生の
 念佛唱ふるを見乍ら、打捨て助け玉はぬ道理ある
 べきや、既に十方衆生今は頼むか今は唱ふるか
 と、待受見回らし玉ふことなれば、念佛の多少に
 よらず唱ふる程の者なれば、皆悉く引上げ助け玉
 ふ道理明なること也、若助け玉はねば五劫の御思
 惟も、兆載永劫の御修行も皆徒らごと云ふもの
 也、決定して助けらるゝ道理、釣を吞魚の引上ら
 るゝに比況して決信すべし、又退墮の失をも可
 知、若彼魚一度吞んでも又吐出す分では、釣人の
 引上ることならぬ如く、一往決定心立たる人も、
 或は異學に動轉せられ或は娑婆に執著し、往生し
 たい念もなくなり念佛退轉するときは、阿彌陀如
 來のいか程助け度思召ても極樂に引上げ玉ふこと
 はならぬ也云々、釣を吐出しさへせねば悉く釣らる
 る、念佛退轉せねば決定往生微塵も疑なきこと

也、故に本文に、さればすでに大悲のつり人、乃至
 さらく疑ひあるべからずとの玉へり。
 是より下は不簡擇平等大悲の御利益を明し玉ふ下
 にて、善惡男女信の厚薄行の多少のわらびなく、
 唱ふる程の人は皆悉く往生の利益を得る趣きを述
 玉ふ也。
 ●さをにかけたるつりは、呑ほどの魚を得ずとい
 ふ事なし、本願にたれたる名號なれば、となへん
 程の者のうまれぬはあるべからず。
 漁人のわろしたる釣は、呑ほどの魚は鯛でも、鱧
 でも、鰻でも、鯉でも、鮒でも、鰻でも、わり嫌な
 く引上らるゝ也、たとひ又蚶や蟹、泥龜の類でもわ
 らび嫌ひはならぬ也、何であらうと引上ねばなら
 ぬ也、今も又其如く、阿彌陀如來平等一子の御慈悲
 にて廣く十方衆生と誓ひ玉ふ、本願の竿より垂れ
 玉ふ名號の釣なれば、唱ふる程の者は善人惡人出
 家在家男子女人の撰びなく皆極樂へ引上らるゝ
 也、設ひへびの如き根性の惡ひ婆々でも、蟹の横
 這ひ横理窟を云ふ親父でも、喰付たら身代限り取

らねば置ぬと云ふ傾城遊女の泥龜でも、唱ればわ
 らびなく皆悉く往生淨土と引上玉はぬはなき也、
 是則十方衆生と不簡擇の本願なれば也、如是釣人
 の方に簡らび嫌はなければ、魚の方にかれこれ
 と疑て釣に喰付ねば助け様のなき如く、不簡擇の
 本願なれば佛の方には簡びなく助けんとし玉へど
 も、衆生の方より彼れ是れと疑ふたり或は一向死
 ぬと云ふことを忘れたりして唱へにかゝらねば、
 何程助け度思召ても往生遂させ玉ふことはならぬ
 也、依て未唱はとなへ已唱は進み云々、此下の註に
 よしいかに機つたなく、心行ゆるくとも、本願に
 すがりて念佛申程の人は、我も人も押なべて決定
 往生の人数なり、此うれしさを何にかたごへん、
 と喜びを逃られしが、人々實に喜ぶべきことに非
 ずや、我等が如き晝夜煩惱惡業に染る下根下劣の
 拙なき身の、僅かに助け玉へと本願にすがり、四
 威儀をわらますつい申した念佛が、本願に叶ふて
 決定して命終り次第、往生する人数の中に入得し
 ことは、喜びの中の喜び此喜びに喩ふる喜びはな

き也、往時源三位賴政が「人しれぬ大内山の山守は、木がくれてのみ月を見る哉」と詠せし後、昇殿を許されたるさへも羨まぬ人はなかりしと也、今生一世の榮に地下を離れて天上の交りを許されたるでさへ如是、まして一毫未斷のあら凡夫より順次に報土へ往生し、諸上善人俱會一處とて、地上高位の諸菩薩と肩脊を並べ膝を組む身となること、地下から天上の交りなどは比べものにはならぬ、斯く貴き身となるは、偏に此本願の釣を呑み念佛唱ふる計りで蒙むる御利益なれば、是等の道理を聞に付ては彌々進んで唱ふべき也、依て本女に、さをにかけたる釣は乃至唱へん者の生れぬはあるべからずと、本願のわりきらひなき、不簡擇の道理を示し玉ひし也、先是で文段は畢る云々、總じて此不簡擇の大悲と云ふは、釋尊一代説教の中、唯阿彌陀如來の別願一法に局りて、外にあることなき超絶法門なり、此事法照禪師五會法事讀に委しき御釋あれば可示云々、

將富貴、不簡下智與高才、不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深、但使同心多念佛、能令瓦礫變成金、此文意、彼阿彌陀佛因位に於て本願を立玉ひ、我名を聞て名號を唱ふる者なれば、十方衆生誰にても悉く來迎せん、貧乏にして朝夕の煙も絶わぬなど云ふ人でも、又富貴自在の人であらうとも、又樂特の如き我名をさへも覺ぬと云ふ愚かな人でも、舍利弗の如き智慧の勝れた人でも、阿難の如き多聞の人でも、優婆離の如き戒行清淨な人でも、又末世今時の我等が如き破戒無慚の出家でも、人々の如き十惡の凡夫より下五逆の罪人迄、平等に簡びなくなにせよ、本願を頼み念佛さへ申すぞならば皆極樂へ往生せん、能令瓦礫變成金と釋し玉ひし也、此能令……金とは、唐土と天竺との間に崑崙山と云ふ山あり、其山へなげこんだるものは、石でも瓦でも皆變じて金となる徳のある山也、今此本願念佛も崑崙山の如くにて、念佛唱ふる程の者は皆悉く往生すると云ふ徳ある也、たとひ上根上智の銅鐵の類でも、又下根

下劣の皆や此方の様な益にたぬ、瓦のかげや石ころの様な者でも、何にもせよ十方衆生なげこみ唱ふる程の者は、皆往生して悉皆金色端嚴微妙の大菩薩となる也、豈頼母しき局りに非や。

黄 金(托、譬喻卷二)

●餌をもとめて、釣を吞までは、わづかに魚のわざなれども。

●釣竿糸針餌等の拵へは釣人のかまへなればさならと云ひ、皆釣人の力にありて一つとし魚の所作はなし、其拵へは悉く漁人の方にあるぞと云ふことを、釣をかまへ云々の玉へり。

是より衆生の所作と佛の御所作とはつきりと分けて、往生することは我等が力にあらず、全く佛の御所作ぞと云ふことを示し玉ふ也、(此事常に談ずることなれども、はつきりと心得分て落著く人希なり云々)魚を釣に魚の方には何もはたらき拵へはなき也、うゑて居ることなれば何ぞ喰度ものじやと尋る内に、釣を見付たれば夫を直に吞分のことにて、何も外にはたらきはなき也、故に、餌をもとめて釣を吞まではわづかに魚のわざなれどもとの玉へり。

●つりをかまへて魚を得る事は、さながら人のちからにあり。

●往生をねがひて名號を唱ふるは、いさゝか衆生のわざなれども。

●先喻の方を能々合點して、合釋を聞べし云々

●本願をかまへて衆生をみちびくは、ことごとく佛の御ちからにあり。

●本願名號の釣を拵へ、何とぞ衆生を平等に助んと

の御構へなれば、何も彼も悉く佛の御所作にて、他力にあることぞと云ふ意也、彼魚を釣は悉く漁人の仕かけ、衆生を往生させ玉ふことは皆阿彌陀如來の御仕かけ也、其所由は阿彌陀如來の因位、初歡喜地に登り玉ひ分眞如の悟りを開き、同體の大悲に催され、何卒衆生を助け度と、五劫の思惟にて肝膽を碎き、彼漁人の魚の喰付易い様と心を用ゆる如く、如何したらば衆生がつとめ易からうと、思惟に思惟を重ね玉ひ、選擇攝取し玉ひし名號なれば、斯くつとめ易き也、大慈大悲こまやかに斯唱へ易き様になし下されし物を、木石はしらす心ある者の何しに唱へずしてあられふと、大悲の程を感心し分々に進んで唱ふべし云々、彌陀の大悲はあくことなく、念佛一行易修易行の上に、此本願名號を普く衆生に知らせん爲に、諸佛稱揚の願をたて、唱ふる者を攝取護念せん爲に、光明無量の願をたて、攝取にあへば其利益は、觸光柔軟の願を立て、三毒消滅して彌稱名相續させ、報命盡て命終に臨めば、彼漁人の糸ひくを相圖に引上

る如く、來迎引接の願を立、阿彌陀如來觀音勢至無量の聖衆と諸共に、來迎現前し玉ひて、蓮臺に抱き乗せ、如彈指頭とつまはじく間に極樂淨土に連歸り玉ふより、快樂を受け證りを進み、遂に成佛に至るまで一つとして衆生の方の仕度働きはなく、皆悉く佛の方より拵へあてがうて玉はる道理、魚釣一まきの支度は漁人の方にのみありて、魚の方にはあづからぬ喩に合せて得心すべし、依て本文に、本願をかまへて衆生をみちびくは悉く佛のちからにありとあるなり、中にも此ことくくとあるが字眼也、衆生は唯唱ふる斗、其餘のことは何も角も皆佛の力よりなし下さる、ことぞと云ふ義を、屹度得心させる爲の字なれば肝要のこととなり、爾るに世の人念佛の多少を以て往生の得否をあてがひ、或は善人悪人智者愚者僧俗男女云々種々疑を發すは、此何も角も佛の方より仕向けて下され、他力でする往生ぢやと云ふ道理がわからぬ故也、魚は唯吞込斗、釣る一まきは漁人の仕かけ、衆生は唯念佛申す斗り、往生一まきはさつば

りと皆佛の御構へぢやと云ふことを得心すべし、依て、悉く佛の力にありとある也、先是で文段はすむ、此下の註に湛澄上人、老婆心を以て衆生の僻見に落ちず、邪勸に引入せられぬ様に示されたり、そもく佛の御心は徹底の御慈悲なれば、念佛せぬものをもたすけばやと憐み玉へども、それは佛法の道理にそむき無因外道の所計なれば、いかにわぼしめしてもなりがたし、此意は往生は悉く佛の御力と云は、序でに念佛も唱へず助かればよいと思ふたり、又一統の邪義ありて念佛申すは自力にて、他力の安心を知らぬ故ぢやとの邪勸をなす、是等は以ての外の邪義也、いかにも佛は大慈大悲深く在せば、一向申さぬ者をも又安心僻越する者をも、助け度は思し召せども、是れ等は因果の道理に背き佛法の定法に違ふこと故、いかに思召ても御助なさるゝことはならぬなり、譬へば世間のことでも種子があれば生ね、なければ生ねす云々、公儀の法度に背けばとがめらるゝ、町内の法度に背けば追出るゝ、主の掟に背けば暇が出

る、是其掟に背くと云ふ因に依て、咎めらるゝ追出さるゝと云ふ果を得るなり、世間でも因果の道理は明かなもの、まして因果の道理を説く本家の佛法に於てをや、然に依て、阿彌陀佛五劫が間の御思惟に因果の道理に背かぬやう、又つとめ惡くないやうにと、工夫に工夫をこらし玉ひて、誰でもつとまる六字名號を因として、其僅かなるつとめを佛の他力にて廣大無邊の功德として、報土往生なさしめ玉ふ善巧方便、皆大願業力の御蔭也、さなくば中々我等が報土往生など、云ふことは思ひ絶えたることなり、依て申すも自力と云ふ邪勸に引れず、又念佛も退屈など云ふ僻心が起らば、是等の道理を思ひ出して進んで唱ふべし、故に湛澄上人が、他力にほこり脇道へはすべるまいかと、用心の註をなし置れたり。

一念義の邪勸をわらは、臨河喚舟の譬（托、譬喻卷一）申さぬものをも助けたく思召せども、夫れでは因果の道理に背くと云ふ義示さんとならば、母親の子を誠むる譬（托、譬喻卷三）猶此の

上に阿彌陀佛は名號の釣を苦海にたれて、今や今やと念佛唱へにかゝるを待ち玉ふなり、其意を註に、さればつねに佛は定に入て、衆生の心を觀じて、いさゝかも我をたのむ心やある、我名をとなふる者やあると、夜晝是を鑑み給て、本願の釣竿を生死の海にたれまします、故にわづかに此名號の釣をふくめば、その上の往生は、ひとへに佛の御ちからにて疑もなき事也、とあつて、佛は常に定に入玉ひ、我等衆生の心の内を觀見し玉ひ、少しにても我を頼むか我名號を唱るか、若し聊かも頼みわづかにも唱へば、夫を因として廣大の果報を得させんものと待わび玉ふ處へ、往生の爲に南無阿彌陀佛と唱ることなれば、直に如來は光明を以て攝取し玉ひ、命終れば往生させしめ玉ふこと疑はなきことぞと云ふが、註の意也、畢竟して此所を合點するには、元祖大師の、念佛は我所作、往生は佛の御所作とぞ決著して唯申して居ればよいと、仰られたる御詞を仰ぎ信じて、唯申てさへ居れば決定して往生する也。

住山者の往生を決定せる事(御傳十九^{四十})
 此下の註に、謀事在人成事在天、と云ふ語を引れたり、是は唐土吳魏蜀三國と分れし時、蜀の軍師諸葛孔明と云ふが、司馬仲達をせめて謀の成せざる時、云たる名言にて、昔よりもてはやす言は也、註に此言を引れたるは、唯一往事の成就するとせぬは、我力にて出來ぬと云ふこと計をしらせし爲也、今の往生を佛任せと云ふと、此言に天道任せと云ふが同じことぢやと云ふことにてはなきなり、其事曲さには次に云べし、先孔明の此言は、謀事在人成事在天と云ふは、世間の奧義此通りなり、何にもせよ是を斯ふしてと、初め事を謀るは人の計ひなれども、終に事の成不成は天運に任せねばならぬ也、其證據は是を斯ふしてと思ふてもあての違ふは常のこと也、又斯ふはするもの出來はせまいと思ふことの、以の外に易々と成就することもあり、是終りの處は天道任せでなければならぬ、故に謀事在人成事在天、イヤと云はれぬ言は也、智慧ある人は同じ了簡な物で、日本

でも皆聞き知つて居る楠正成は、非理法權天の五ツを立てられたが、孔明の言はと同日の談也、非は是非の非で、無理非道なことを理をもて正すときは、非は立たぬ者也、又其理も法には勝れぬ、(殺してよいと云ふ理をもても、兩成敗の法にはかたれぬ) 其又法も權には勝れぬ、(町人から、大名への借し金滞るとて、願出もならず) 右の如く權には法を以てもかてぬなれども、餘り官祿にほこりて奢りをきはめ政道に邪まあれば、天道是を許さず官位を削られ家をも没す、昔より其例至て多し云、如は何事でも終の處は、天命に任すと云ふが世間の至極なり、(是も佛法の三世因果の道理を以てさばくから見れば淺ましいこと、天命と計り云ては底すみはせねども、世教では是が至極行きつめの言はなり) 依て唐土日本と國を隔て時代も遙に異なれども、孔明の謀事在人成事在天の名言と、正成の非理法權天の格言と、誠に符節を合せたるが如く、世教を極めたる詞也、今又元祖大師は、念佛は我所作、往生は佛の御所作と打任

せて申せと、の御法語、又本文の、往生をねがひて名號をとなふるはわづかに衆生のわざなれども本願をかまへて衆生をみちびくはことごとく佛のちからにあり。等の御示しは、淨土門の至極念佛往生の底をきはめたる御詞にて實に我力らにてせぬ往生なれば、佛任せと打任すより外は決してなきことなり、此の打任せると云ふが、世間では成不の終りは天命に任せ、出世の我等が往生は佛に任せると云ふ所が似よつて居るゆゑ、註に孔明の言はを一寸と引合せて置かれたる分のことなり、しかるにこれを聞て孔明が仲達を決して亡すやうに謀をば設けられたれども、其の謀は成就せなんだ如く、我等も往生の爲めに申しは申しても往生出來まいかなど、不定の所をよせ合せて疑を發すまいものでもなければ、細辨に及ぶ、凡そ業には順現業、順次業、順後業とて、今世に造りし善惡の業にて今世に善惡の果を受くるを順現業と云ふ、前生に造りし業で今世に果を受け、今世に造りたる業を此次の生に果を受くるを順次業と云ひ

或は二生三生前きの生で造りし業にて今世に果を受け、今世に造りし業にて此次二生三生乃至其の後生に果を受くるを願後業と云ふなり、此の事悉くは盡されぬゆゑ、順次業の一を辨すべし、(餘は他日を待つべし)今世に於て事を謀つて成せぬは、過去に成せぬ因がまいてあり、此ことは出来まいと思ふことの不意に出来るは、過去に成就すべき因がまいてある故也、(佛法をさばれば此通に滯ることはなき也、世教では三世因果の道理を立てず、一世でさばくこと故天命と云てわく也云々)依て此世で計りても成不成は定らぬなり、今念佛者の往生は佛任せと任せて居る往生は、往生仕度と志して多くも少くも申せ助けんとある本願念佛の因を、此世でうへて居る故、順次に往生の果報を得るに疑はなき也、往生させずば正覺を取るまいと云ふ誓を立乍ら、佛となつて在せば迎へ取玉ふことは決定して居る、同じく任せるとは云ふもの、此世のことを天道任せと云ふと、往生を佛任せと云ふは、此世のことは成不定、往生のこと

は決定、此處は天地黑白の違なれば、僻さまに心得てあやふむ心を發すべきことには非る也、序に此謀事在人等と云ふ詞の發りを談じて、夫を引合せて結勸とすべし。

孔明胡盧谷に仲達を焼くこと

如此孔明が謀を設けて焼殺すべき支度、十に九分爲果せられたれども、仲達は宿世の善因によりて後に宣皇帝と諡して、晋の代を開くべき果報の熟しかつて居ること故、急に大雨が降り下つて虎口の難を遁れられたり、故に孔明が謀事在人成事在天と云ひて嘆息したり、此等の道理を聞て人此世のことはどの様に思慮分別しても、宿世に蒔た種子次第、するやうにはならないで、なる様にならぬと云ふことを、能々心得て心易く世を渡り、願へば必本願を構へて導き玉ふ、阿彌陀如来に打任せ、分々を進んで唱ふべし、唱へてだに居れば往生遂させ玉ふは佛の御所作、何慮ふべきことあらん、既に今焼殺さるゝに極つた仲達は、十死一生の所を遁れたり、わづか凡夫の力でなせし

有漏の善さへ其通り、況無漏の大善根超世本願の名號を唱へて居る者が、極樂ならでいづちへかゆかん、助くることは佛の御所作、釣を呑みし魚を引上げぬ漁人があらふか、申せ助んと云計に五劫の御思惟永劫の御修行、十劫已前から極樂に今や今やと待受て在すに、申して往生せぬと云ふ道理があらふか、佛の御所作の往生には微塵もゆるぎなければ、人々は我所作の日課相續已上。

●極惡の機の、たすけ給へとわもひて南無阿彌陀佛と申は、機もつたなく、心もわろかに行もいやしけれども。

是より下、機心行の三ツを擧げて、愚惡の凡夫も決定して本願にて助ると云ふことを相傳し玉ふ、至て淨土門の肝要なれば、其意を得て聽くべし、極惡の機とは至極の惡人と云ふことなり、是は第十八願の文に、十方衆生と廣く誓ひ玉ひし深意を顯はして、末代の我等に疑を起させず、ひしと本願を信せしめん爲に巧に示し給へるなり、(善人惡人共にこもれども本意凡夫兼爲聖人、惡人を擧玉ふ所

相傳の旨趣なり)其故は十方衆生と云ふ中には、如何なる惡人女人も漏るゝ者はなき也、然るを世の人我罪深き故にと往生を危ぶみ本願に乗じ兼る者多し、爾に今極惡の機との玉ひしは、至極の惡人と云ふことなれば五逆の機に當る也、今時の人一逆を作る人さへも甚希れに、況五逆を殘らず作りし人は一向になき也、具造十惡とて十惡こそ慎み得ねども、是は五逆よりは大に輕きなり、爾るに其甚しき父母を殺し佛身より血を出すと云ふ五逆の人をさへも、極惡の機のと攝し玉ふからは、我等が如き罪惡の者をも助け玉ふに疑ひなしと、我身の上に引受けて難有思ひになる也、此深理を顯はして、極惡の機のと擧玉ひし也、(人々此所能能心得分けて、必々本願のよそなる者になるべからず云々)たすけ給へとわもひて南無阿彌陀佛と申は、是安心と起行とを擧げ玉ふ也、助け玉へと思ふは安心、南無阿彌陀佛と申は起行也、如是を願行具足の人と云ふ也、機もつたなく極惡の機なれば甚つたない也、末代濁世の我人は根鈍障重とて

戒行も得たもたず智慧はなし、罪業をば飽造る實に取所もなき身の上なれば、機もつたなくとある也、心もたろかには、人々や我等は死ねば必悪趣と定つたる者なるに、大悲他力の本願にて往生遂る道理を聞かば、手の舞足の踏所も忘れ喜ぶべき筈なるに、強て喜ぶ心も發らず、申さねば後世の悪趣と云ふに争ひなければ仕方なきに唱ふるとなれば、娑婆を厭ふ心も極樂を欣ふ心も至て疎かなることなれば、心もたろかはこの玉へり、行もいやしければ、機が劣る故志も弱々しく、依て念佛つとむるもそくくのことにて、彼六萬十萬をも行する勇猛の人に比ぶれば物の數にもあらず、僅かの勤め、士は奉公にいとまなく、農は耕し町人は商にいそがはしき中から、わづかに唱ふることなれば、いかにもいやしく物の用にも立そむなく見ゆるを、行もいやしと云ふ也、けれどもとは是奪の言、其如く機も拙なくおろかに行もいやし、されども往生遂らるゝと道理を立てゝ、往生を決信せん爲に與奪の言を置玉ふ也、(是則機法二信の軌轍

なり云々)凡世間の邪師邪教を聞受て、惡造るまいと思ふは自力根往、惡人御目あての御本願なればと、邪見に落入たは論の外、正見に住してなるだけは惡をつゝしみ、つとまるだけは多く申さうと思ふになつた上で、其思ひの通りにゆかぬ故、得ては我機を疑ふて氣いじり、心扱計にあせりて決定の信立かぬるもの故、夫は大にあやまり機は拙く志も弱く多念數遍は得つとめずとも、わづかにも助け玉へと思ひほそく乍らも、南無阿彌陀佛と唱へさへすれば往生するぞと、屹度決著させん爲の御示し也、本願大悲の世に超ることは、智者高僧の妄念異念を拂ひ捨てゝ唱ふるも、在家のせはしい妄念異念の中から唱ふるも、共に無上功德にして少しも高下の隔てはなき也、譬へば天下通用の金銀の如く持人に依て勝劣はなし、高位の人が持たればとて一兩が十兩にもならず、下賤の人が持たればとて一兩が一步にしか通用せぬと云ふことはなき如し、今の念佛も全く其通りにて、誰が唱へても無上大利往生するに少の違ひもあるこ

となし、依て人々妄念異念は競ひ起り、念佛の數は少くなからふと、是ではよもと卑下の心を發さず、決定往生落つて唱ふべき也、其決信を立させん爲に、極惡の機の乃至行もいやしけれども、と示し玉へる也、次に其機心行の三つともによはよはしき者も、往生すると云ふ譯を。
●これをわづかに餌をもとめ、釣をふくむ程のなかだちとして。
これをとは上を受る詞、則機も拙く心もたろかに行もいやしい、念佛者をと言をさして、これをと云ふなり、此様なよはしい念佛の行者なれども、彼釣針を呑みたる魚の引上げらるゝ如く、彌陀の本願に引上られて往生遂ると決着するが、他力往生の習ひことじやとなり、魚の海中より陸へ上ると云ふ大變は、餌を求めて釣を呑と云ふが媒となる也、是唯わづかの餌を呑と云ふ計のことで陸に上ると云ふ大變になる也、今も其如く凡夫より直に報土へ往生する媒は、機も拙く心もたろかに行もいやしいことなれば、物の用にも立そむな

く見ゆれども、其わづかに唱ふる念佛が媒となつて、決定して報土往生遂ると云ふ大變になる也、凡大變と云ふ中に、惡凡夫の地獄落の札付が、地前三賢の菩薩を飛越えて、直に報土に往生すると云ふ様なる大變はなき也、(草履取から天下を取た位な變は、一向たとへにもならぬこと也) 偕此媒との玉ひしは俗に云ふ仲人(なかうどのこと)、(嫁入贅入の媒、金銀貸借の媒)故に弘決に、媒者和合の至也とあつて、双方を和合と中よくするが媒の主る所也、今媒と云ふに譬へて云は、親が子息に商賣を精出せよと云ふて聞入れず、惡遊ひ斗りに心を奪はれ商ひのことは一向に見向もせぬと云ふになると、是では見すゝ家を滅す者を跡目にしては、先祖へ對して申譯がないと云ふ處から、親子のとなればいかにも不便には思へども、詮方なさに勘當する、其所で其子も夢がさめ我落魄れて辛勞する上に、親の心を苦むる不孝の程を思ひ知り、先非を悔ひて已後は屹度相愼み商賣を大事に致しましやうと詔言すれば、其わび言が直に

媒となつて勘當ゆるす如く、人々や我等も無始已來我身の助かる念佛の商賣を捨て、唯惡業煩惱の五欲にのみ耽りて居るもの故、慈悲の父母なる彌陀如來もいかに不便に思し召しても、助け玉ふべき方便なければ我から勘當受て居る様なもの也、爾るに因縁ありて大悲本願の法門を聞きこは誤りし、助け玉へ南無阿彌陀佛と唱へたてば、彼子息が商賣精出しましやうと云ふ詞が、媒となり直に親が勘當ゆるせし如く、我本願の念佛を唱ふるが、善男子善女人とほめたて、直に攝取し、順次に淨土に迎へ玉ふ此果報を得る媒となるは、わづかに唱ふる念佛に依てのことなれば、媒としてこの玉へる也云々。

●若不生者不取正覺と誓ひ給ふ本願にすがりなば、さだめて往生せん事を、魚の命を釣にまかせたるになすらへてみむ。

是則他力の安心決著の所也、機も拙く心も疎に行もいやしいつとめ様乍ら、決定往生と決着してつとめる人は、如來の若不生者不取正覺と誓ひ玉ふ

本願にすがり付たと云ふ者也、されば元祖大師の御言にも、念佛は佛の本願なるが故に願力に頼りて往生する事はやすしと、仰られたるに思ひ合すべし、既に漁人は此魚釣上げすば釣人と成まいと云ふ誓は立ねども釣るが所作故、喰付た魚は悉く釣上る誓のなきさへ、夫を所作にして居れば落度はせぬ、況や阿彌陀如來は上に一形より下臨終の十聲一聲の者迄を、助けずば佛となるまいと誓ひ乍ら、十劫已前にはや正覺をなり玉へば、わづかにも唱へさへすれば往生するに微塵も違ひなきこと也、此決信を立させん爲に、若不生者不取正覺と誓ひ給ふ本願に乃至魚の命を釣にまかせたるになすらへてみんとこのたまへり、餌を呑んだる魚は釣人の手の内の魚也、身も命も釣人に渡したと云ふもの也、今も其如く、念佛唱ふる人なれば、もはや彌陀如來の攝取光明の御手の内に入たる人と云ふもの也、此意を、後の世もこの世もともに南無阿彌陀佛、ほとけまかせの身こそやすけれ」又「兎に角にわれはいろはぬ心哉、身は慈悲ある

彌陀にまかせて」是を佛に歸命するとも云ひ、是を本願に乗する乗じ様の姿とも云ふ也、斯落着するが安心の髓を得て埒の明いた人と云ふ也、(要中の要、きつと此所に決定心を立べきなり云々)是で本願に乗じやうを示し玉ふこと、重々微細にすむ故、上を結んで。

●かゝるを他力に乗じて往生すとはならふ也。

如上得心して唱るを、他力本願に乗じて往生する姿とならふ也、魚は餌に喰付たが他力に乗じた也人々は念佛唱ふるが他力に乗じたと云ふ者なれば夢々念佛唱へ乍ら身を顧み心を顧りみ、此では夫ではと氣いじり心さはりせず、助かるに相違なしと決着して、身を本願に打任せ大らかに相續するが、淨土宗門の安心徹底の肝要也、偕此ならふとは一通りのことに非ず、元師大師淨土一宗を開き玉へる根基にして、鎮西上人より代々習ひ傳ふる一宗相傳の習ひ事ぞと也、此御つたへをならひ知らねば安心落著せず、安心落著せぬ故疑ひ慮をなし往生損する也、故に此抄の上巻にも、しかる

をよのつねの人のたもはくは、かひなくたゝたのが心ざし、たのが行の功にてうまれんするやうに心得て、ひたすら佛の御ちからとのみたもはぬこそ、たほけなき事にて侍れ、さるほどにすゝるに心行も不足にたほはて往生も疑はしげなり、これしかしながら他力のいはれをたもひわかぬゆゑなり、是則申すが他力に乗するのじやといふ、淨土門の故實習ひごとを知らぬ故此通の疑を發す也、他宗他門の人の本願に乗することを得ず、自力たてをし心さばかりするは、偏に此相傳を知らぬ故也、萬事に付て祕事はまつげと云如く、其道々の相傳を得ぬと、すつぱりとはゆかぬ也、(わづかの細工物でさへ、器用な素人より不器用でも其道の人の仕たがすぐれる云々)大井の水車のこと(徒然草)。

わづかのことにさへ其通り、況智解あればとて凡夫の分齊、彌陀深廣の智願海、十地等覺の菩薩でさへ測りて知られぬことわりを、相傳なしに探り得べき理りあらんや、其如く智者でさへ至られぬ

場所へ、愚痴文盲の皆や此方がやすくと至ると云ふは、宿因熟して此御つたへ習ひ事を聞たる故のことなれば、喜び進んで唱ふべき也。

智了上人 (托、往生卷一) 玖須地頭娘 (托、

往生卷三)

●されば此名號のつりをのみぬるこそ返すべくたのもしくおほゆれ。

已下は、此名號を唱ふる者は決定して往生せねばならぬ道理を示して、唯申と云ふに落居しやすき趣を示し玉ふ、さればとは然ればと云ふことにて上を受るの詞也、上の如く淨土の習ひごと釣を吞にし魚の引上らるゝ如く、わづかにも唱ふるとなれば決定して助け玉ふと云ふことを得心して、名號唱ふる身となりしことは、返すくも頼もしきことに思はるゝ、何故にさう頼もしきぞ。

●極樂ならでいづくへかまかり侍らん。

念佛唱ふる人なれば極樂より外に行き處はなき也、(易修易行の念佛にて、外に行處はないと定たるは、喜ばねばならぬこと云々)是をも釣の譬に引

合せて心得ば、釣を見て居る人が欲しいと思ふても、其人の手にも入らず、又鳶やみさごの類が引かけ度思ふても、釣人にをそれて寄付ことできず、唯釣人の手に入る也、手に入れば又再び水中へかへることもなき也、今も其如く、我れ人は彌陀大悲の釣人の御手より垂れ玉ふ所の、超世本願の竿につきたる名號の針を吞んで、南無阿彌陀佛と唱ふることなれば、諸佛菩薩の御手にも入らず又どうぞ引かけ度と鵜の目鷹の目みさごの魔王魔民の手にも入らず、唯阿彌陀如來の光明攝取の御手に入て往生するに定まる也、又釣られし魚の再び水中へかへることのならぬ如く、一とたび彌陀の御手に入り往生を遂たるは、不更惡趣の御願あれば再び六道四生の苦海に溺るゝ恐れはなき也、かゝる上なき法門に逢ひ得んことを喜び、分分に進で相續すべし、依て本文に、されば此名號の釣を吞ぬること乃至極樂ならで何所へかまかり侍らん、と示し玉へり極樂より外に往所はなき也、是至極決定の段也、已上文段を畢る。

此下の註に、抑これらの趣は(他力に乗じてやすやすと往生する趣也)光明大師已證の妙釋、黒谷上人自解の發明よりあらはる、於戲兩祖の出世なかりせば、法藏菩薩の大悲願海たれか其底をかたふくる事を得んや、われらが此生の往生はしかしながらかの御恩徳也、身をくだきても何ぞむくふにたらんと、實に御尤なることなり、若諸師の御心によらば我等が分で往生は思ひ絶たることなるに、夫れを易々と往生するやうに教へ導き玉ひしからは、身を切り骨を碎きても大海の一滴九牛が一毛も報ずることは出来ぬ也、斯る大悲をよそにして兩祖大師の誠め玉ふ難行さばくり、祈念祈禱現當兩益御禮報謝など云にたづさはらは、還入三惡道の札付なれば、若誤て是迄不心得で居た人は直に懺悔し、先非を悔ひて御勸めの一向專修、極樂ならでいづくへかまかり侍らんと云ふ、大果報の人となるべし、是より下も、御老僧の決定往生する身の上となり得しことを稱嘆し玉ふ、御詞。●何もげに期といふ事がありけるぞかし、此度が

生死のかぎりにて侍りけるよと、いひあへず言葉も涙にとほほるけしき。何事も始ある者は必終りあるが定りにて、春あれば冬あり朝あれば夕あり、生るゝと云へば死あり、衣類器類の諸道具何にても出来ること云ふ始あれば、必ず朽る破ると云終あるが如く、無始とは云へど迷ひ始があれば終には生死の限りある也、抑我等過去遠々より六道四生を回りて苦みを受しは、勘定も出来ぬ長久しいことにして、今猶人界へ生れ來れども下智下根の惡凡夫なれば、未來永劫亦生死の苦みを受ることは定りで、いつを限りともなき淺間敷身なりしに、此度念佛往生と云ふ本願微妙の法門に逢奉りしことなれば、最早生死の苦みを受ることは此度が限りにてあるぞと云ふことを、すつばりときはやかに得云はず涙にむせび乍らの玉ひしぞと云ことを、なにもげに期といふ事がありけるぞかし乃至詞も涙にとほほるけしきとある也、已下は鈔主加嘆の詞。●ことわりにいらたゝぬ身なれどもたのもしくた

ふとくたほゆ。
 從來の如く生れまじき衆生の極樂へ生るゝは、偏に阿彌陀如來の本願にて遂させ玉ふと云ふ、大悲の深き姿を孟宗の譬に合せて示し、其本願に乗する無雜作なる趣を吞釣の魚の譬を以て顯はし、畢竟は念佛さへ唱ふれば、極樂より外に往き所はないと落著の體を示し、爾れば我等は此度が生死の限り順次に決定して往生するとの喜ばしき道理を、老僧の涙に滯り修行者に對して示し玉ふ有様を、向阿上人が側にて聞て説法の趣の貴とさと云ひ、説き玉ふ御老僧のやうすの殊勝さと、かたかたにて佛法の道理を初心不案内なる此方も、貴く頼もしき限にたほねたぞと云ふが、ことわりに入りたぬ身なれどもたのもしくたふとくたほゆとの玉へる意也、先是で孟宗吞釣の譬に合せて、所乗の本願の世に超たるたつとさと、能乗の凡夫の本願に乘じ易き趣きを示し玉ふ段を畢る、凡本願大悲の法門は因縁熟せざれば、三賢の菩薩でさへ聴き玉ふこと難きと云ふに、信外輕毛具縛の我

人、斯く飽までに説聽の因縁熟すること、實に順次往生の時節到來の大果報なれば、向後いかなる異縁に逢ふとも、從來聞得し二尊の御勅、念佛は往生の決定業、機に善惡の簡びはない、誰であらうと南無阿彌陀佛と唱へさへすれば、往生遂ねばならぬと云ふを屹度守りて、身を本願に打任せ南無阿彌陀佛と分々に進んで唱へらるべし、このたびをかぎりになんとれもふかな、身も受がたく法も得がたし。
 ●修行者又いはく、
 已下は本書註に依て辨すべし、於中併せ辨すべき義趣、三五を記し置。
 ●それまではいかでも。
 いかでもの胴付に争の字を付られたれども、是はいかんと争ふ意と見ゆれば穩かならず、如何、云河の字にて、いかやうでもの義なるべし、從來の教をきけば、智者との玉へる人達のこと迄は聞ても聞かでも、どちらでもよきことなれどもと云ふ義と見たり。

●七日百萬遍の念佛を。

御傳十七丁には融通念佛をすゝめられたりあり、是れは傳聞の誤れるなるべし、大師の御追善に、開宗勸進の本願念佛を聞き、融通念佛を勧めらるべきや、既に法印勝尾寺一切經開題供養の説法にも、諸師所勸の念佛を擧ぐる中に、良忍上人の融通念佛は、神祇冥道をすゝむれども、凡夫ののぞみはうとし等とわらびて、大師所勸の本願念佛を偏勸偏讚せられたり、其上予が追善には、餘善をつとめず念佛一行なるべしとの御遺誡もあり然るを今大師の御追善に、其轍を改めらるべき理り決してなきこと也云々。

因みに祈禱百萬遍の義を辨示せば、無智の俗僧善阿上人の百萬遍をもて、祈禱の本據として邪勸をなす、善阿上人疫災をしづむべしと勅定に依てつとめ玉ふ百萬遍は、其實は回向にして祈禱には非ず、祈禱は身を護りて災を受ざる爲なれば、亡靈の怨心なだまらず、回向は亡靈怨火に焼れて苦しければこそ崇りをなせど、悲心を生じて離苦得樂

の回願をなせば、亡靈功德に潤ふ故に怨心を翻す、若爾らすと云は、諸寺諸山の祈禱には怨心なだまらず、善阿上人の百萬遍に何れぞ此現益あらんや、世人此理に聞き故、唯疫災の靜まりしによりて祈禱とのみ思へり云々、猶通軌によれば祈禱ありても宗義に違せず、若是を據として別軌の安心を濫り、我身の福業長壽を祈らば、既に是娑婆執著なり、總別二種の安心たす、往生の大利を失ふこと悲むに餘りあるものをや、若又極樂往生を欣求せざる人ならば、祈禱の現益も彌陀法超勝せり、毘舍離國五種の惡病も彌陀三尊の來現によりて頓に除き、傳教大師七難消滅の法にも念佛を用ひ玉へり、彌陀法攘災招福の餘法に勝る、所以、云何となれば諸善は所含彌陀法は能含なれば、觀音の三毒七難消滅の本誓も、藥師如來衆病悉除の本願も、皆悉く彌陀一佛に歸す、十方の調御は正く極樂界より出生し玉ふことは、楞伽經說に了々たればなり云々、問斯く彌陀現益現利を施し玉ふに、淨家に於て此祈求を制する義趣云何、答

愛著は厭離心を障、妄樂は欣求の心を妨ぐる故に、往生の大利を失す、故に正依の經論はもとより、因明諸文の中に於ても現益の方軌を説示することなし、彼毘舍離國月蓋長者等の諸人は、極樂往生を願求する輩に非ず、又傳教大師も七難消滅は通軌にして、是を以て往生を欲求する別軌の修行とし玉ふには非ず、思ふて可知、問爾らば現益を求めざるの行者は、災害魔撓は甘んじて受くべきや、上機には論なし中下二根は却て退轉の基となるべからざるや、答厭欣心を具して念佛する人は、心光護念の攝受にあづかり、諸佛諸菩薩諸天善神の加護を蒙ることなれば、其恐れあることなし、故に觀念法門に云、護念經意者、亦不令諸惡鬼神得便、亦無橫病橫死有厄難、一切災障自然消散除不至心、除不至心とは、唯往生極樂の爲に專修念佛せざるを云ふ也、不求自得、求時不得の間、能々可心得分也。

田の虫を拂ひ流行病を送るとて、祈禱百萬遍をなすことあり、據なく其席に列ることあらば、虫類の脫苦無怙の孤魂の爲に回向すべし云々。

●筑紫の。
貝原篤信云、(和爾雅卷之一) 二十丁 西海道九ヶ國、下の夾註) 所以稱筑紫者、諸説紛々、恐者皆妄謬未足信也、嘗聞、上世異國賊兵、屢來侵於我國西邊、以此筑前北海濱、築石壘以防之、故名其地曰築石、後世稱筑紫則築石轉語耳、割其國爲前後、號曰筑前筑後、且以筑州有官府、而統於九州、故凡稱九州曰筑紫已上。

●みちゆかぬあらましのみにて、やみにき。
言釋に云く、たゞ遠き所のことを、行きはやらで吾行てあらば、左せん右せんなどの心がまへのみして、止しといふと見ゆ、ことわざもて書たるなり、(註は外へ走りて聞ゆ、解も行過てまごはし) 止にきは止去けり也。

●三心要集。
註に、安心をしめせる抄物なるべしとあれば、湛

澄上人の在世には流布なかりしにや、次下に愚僧はいまだ見侍らすとあり、片かな本は元祿年間(七年申戌) 小金東漸寺の學頭淨覺和尚、貫主證譽雲臥大和尚より一本を賜はりて印刻せられ、平がな本は寶曆二年に向譽關通老師の印刻し玉へるなり、淨業者は必一本を護持して安心の鏡とすべし、修行門是は今時に傳はらず可惜哉。

●いまさらなりしが。
言釋に云、其書を見て悦び、又遂に會ずして止にし恨も、それを見るにつけて、今更くちをしく有しが也、かは潤る方よし云々。

●かたはらいたく。
言釋に云、今昔物語の舊本を見しかば、此言に傍痛と書てあり、本は人の上を他よりいひ思ふ事なるを、みづから他の心をわしはかりても、かける所物語に多し、こゝも其こゝろなり、はらのはをわの如く唱ふべし、(略抄)。

●たのづから。
やはり自然の義也、註は鑿せり。

●いるかせ。
言釋に云、ゆるかせ也、いゆは通音老を於由、由久をいくの類云々。

●あやなく。
言釋に云、あやなくは、本と絹の文目のそこなひなどして、分れずなりしを始にて、それを轉じてかひもなきにも、益なきにもいへり。



淨土要略抄講説卷上

此書は、洛陽清淨華院第五世向阿上人の御師匠、禮阿上人の法語の中より、尤も西方の行者の急用なるを簡び玉ふなり、法語は禮阿上人なれども、文章は向阿上人と見たり、禮阿上人と云ふは記主上人の御弟子で、又は西谷上人とも云ふ、西谷は御室の西にありしとなり、(但し常に西谷上人と云ふは、西山流義の淨音上人のことを云ふ、是とは別人なり、淨音西谷に住まれしとぞ)。

淨土とは、十方にあれども今は總屬別名と云ふて、西方極樂淨土を指して淨土と云ふなり、なせ又淨土と云ふは、極樂淨土を指すことになるぞと云ふに、得たるものは別稱せずと云ふて、華と云へば櫻、祭と云へば加茂、子曰と云へば孔子のこと、なるが如し、淨土とだに云へば、極樂淨土なることは三歳の童子も知るなり、故に今只淨土と云ふて別名を明さるるなり、要略抄とは、要とは肝要の義、略はすぶることにて、抄とはぬき出すと云ふこは

なり、禮阿上人の法語中より、西方の行者の肝要なる語をすべゑらてぬき出すと云ふことなり。略して拜題を解釋せん。

●厭穢欣淨第一、無始輪廻の里を厭離して淨土に生るゝなり、聖道門は娑婆即寂光土にして、伽耶城を離れて外に淨土なしと談す、穢即淨にして、隨其心淨即佛土淨、是れ聖道の地盤なり、淨土門は娑婆を厭ひ去て西方淨土に往生することを勧め、淨穢各別と談す、是を惣安心と云ふなり。

●念佛三心第二、前の惣安心に次で別安心を出すなり、所謂至誠心、深心、回向發願心の三心なり。
●自力他力第三、自力とは聖道門を云ふ、自ら戒定惠の三學を研て此土入聖得果を期す、他力とは淨土門を云ふ、三學不堪の鈍根無智の者も、佛の本願力に乗じて報土に往生し、彼土に至て速に無生法忍の證を開き、六通自在の大菩薩となるを云ふ、故に自力他力とは聖淨對談して難易勝劣を明すなり。

●止惡用心第四、他力本願に乗すれば一生造罪の

凡夫、下十聲一聲する者迄も悉く往生し、即悟無生の果を得ると聞て本願に誇り、爾らば一生恣に惡を造り、臨終に念佛して往生せんと云ふ僻見を起すものあらんかと、之を抑ふる用心門なり、若し止惡の心なければ、三心も發らず他力にも乗じ難ければなり。

●來迎引接第五、穢土を離れて淨土に往生する容易ならず、煩惱障、魔障、業障等競ひ起りて正念に住し難し、此故に阿彌陀如來は行者の臨終の時には、必ず來迎せんと云ふ本願ありて、此増上緣に依るが故に、行者正念に住して往生すること甚だ易しと云ふことを明すなり。

今此五義は總じて標名を釋す、委しくは下に至りて辨すべし。

●厭離穢土欣求淨土第一。

是は總安心なり、總安心とは別安心に對する言なり、厭離穢土とは三界（欲界、色界、無色界なり、委く云へば二十五有）のけがらはしき所を厭ひあき離れ去るを云なり、觀經に、韋提希夫人の不樂

闍浮提澗要世也と娑婆を厭ひ、我今樂生極樂世界と西方往生を欣ひ玉ひし意也、是を總安心と云也、此上に性習不同執法各異と云て、有緣の行を修して往生を求むるに付て至誠心等の三心あり、欣ふ上に起るを別安心と云ふ、（是は次下の文に至て知るべし）、先づ此厭欣に就て譬へて云は、若し淨土を欣ふと雖、娑婆を厭ふ心なければ繋げる舟を漕ぐが如し、又厭ふと雖、欣はされば岸を定めず舟を出すが如し、須らく身を本願の舟によせて、厭離穢土のともづなを解き、欣求淨土の岸を定め、名號の櫓櫂を以て生死の海を渡るべし。

●夫れ厭ひても猶厭ふべきは三界の炎の宅、欣ひて又ねがふべきは九品の花の臺なり。

本文に入て是は總標なり、本より娑婆は苦海なれば、一として執すべきことはなけれども、煩惱具足の凡夫なれば樂なり好き處なりと思へり、故に今其迷ひを知らしめんとて、法華經の三界無不安猶如火宅の文を引て厭ふべきことを教へ玉ふ、三界と云は欲界、色界、無色界なり、具さに云へ

ば二十五有なり、此三界の内はいづくに生れても苦みのなき處はなし、諸の苦に責らるゝを、譬へば火の付きたる宅の内であれば奥も暑きが如し、六道の内は何くも苦なり、此三界を厭ひて淨土を欣はしめんとこの教へなれば、先總じて三界の苦みのことを云なり、此三界を厭ふ計にて欣淨の心無ければ益なき故に、次に欣ひても又欣ふべきは九品の花の臺なりと、欣ふ處をさして教へ玉ふ、淨土は十方にあれども、今唯餘の九方を闊きて西方極樂を欣ふべきことを指して、九品の花の臺との玉ふなり。

●先厭穢といふは、是に餘の事あるべけれども、今三を出さば、一には苦、二には空、三には無常なり。

所詮此娑婆は苦海なれば厭ふべき數々あれども、今其中にて、苦、空、無常の三を擧て、穢土のあさましき事知らしむとなり。

●一には苦と云は、總て人天有爲の界には、實の樂といふことはなきなり、到處には餘の樂なし唯愁

歎の聲のみを聞くといへる是なり。

總て三界の中には實の樂なしと云は、此三界の中も、人天は四惡趣に對すれば善處なれども實の樂なし、實の樂と云は假に對する言にして、迷の凡夫の假の五欲の樂を拂はん爲なり、其五欲の樂は假の迷の樂ゆゑに、樂なりと思ふ中に直に壞れて苦となる、譬へば酒香で樂なりと思へども、其儘壞になりて頭痛となり、或は嘔吐に苦み、是は其身計りの苦のみに非ず家内迄看病に苦み、又五欲の最上は姪樂にして是を又なき樂と思へども、愛せし美男はいつしか白髮の翁となり、愛する美女も程なく齒ぬけ婆々となり、男はあのやうなる女と、どういふ心で天にあらば比翼の鳥と契りしやらんと思へば、女は又あの白髮ぢと、どう云ふことで地にあらば連理の枝と語らひしならんと悔る、是皆目前の有様なり、夫れのみならず宮殿樓閣は建れば燒失の苦あり、好味を食して病を生じ、嫁取聲入の三々九度、さて御目出度末繁昌さつさつの聲ぞ樂しきと云ふや云はぬに、最白木の乗物、

鼠色の上下、小袖、頭へ被ふる編笠から、足にはくちり草履、悔みの帳面左りとちと、直ちに悲みの涙を流す、斯云ことぢやに依て、實の樂と云ふことはなきなりとの玉へり。

●到處等とは、善導大師の御釋定善義の文なり、文に曰、歸去來魔境不可停、曠劫已來流轉、六道盡皆經、到處無餘樂、唯聞愁歎聲、畢此生平後、入彼涅槃城、此文中の二句を引玉へる也、到處無餘樂とは三界皆苦、粗ほ上に云が如し、唯聞愁歎聲とは、天上には五衰の苦の聲、人間には八苦の苦聲、修羅は戰の苦聲、畜生は殘害の苦聲、餓鬼は飢渴の苦聲、地獄は刺苦の聲、如是六道の中は皆愁歎の苦のみなり、其人間の八苦の中にも耳近ふ云ふなれば、幼少にて兩親に離れ、伯父叔母の内にかゝりし人、又子を生んでならぬ世帯の中からも、名付の祝ひ、産神參り、髮置、袴着の物入も、末にかゝるを樂ひ中にも、或は癩瘡はしかのはやりやみ、或は病で片輪者となり、成長しても或は不孝、或は博奕、廓通ひ、一つとして苦にあら

すと云ふとなし、故に大師の釋を引て、到處には餘樂なし唯愁歎の聲のみを聞と云へる是れなりと。

●縦ひ惑の心の中に苦を樂と思へる、此樂すら猶久しからず、電光の如く須臾に捨て、三途に入、長時にくるしみを受、いかゞ是を貪りて厭ふ心なかるべきや。
●縦と云ふは、ゆるし與へて云ふ詞なり、實の樂みにはあらねども先ゆるして樂ともせよ、其樂又久しからじとなり、久しからぬとは上に云ふが如く、酒吞で樂と思へばやがて頭痛、子を生んで喜べばやがて死ぬる等、其中に一生も電光の如く過ぎ、未來にいたるも須臾の間なり、たとひ非想の八萬劫も夢なれば、五十年や七十年はまたく中のことなり、此しはらくの中に佛道修行に趣かすして恣に五欲にふければ、忽ち三途に入て長時に苦みを受ることなりと、長時に苦を受るとは、先地獄を云へば、一百三十六ある中、最初の等活地獄は地獄の中にも壽命短かき地獄也、其壽命を人間界の年月に積れば、彼處の一日一夜は、人間の九百

萬年を経ると同じ、其一日を五百歳の壽命至て短かき等活地獄如是なり、其餘の地獄は段々倍増して其長きと此に言ひ盡し難し、修羅餓鬼亦至て長く、畜生を云へば彼祇園寺の蟻は九十一劫未だ蟻の身をかへず、瞻婆城の鴿は八萬劫鴿の姿をあらためず等とは、靈感傳、智論等に出たり、處胎經云、吾從無數劫往來生死道、純作白狗身、積骨億須彌、何況雜色狗其數不可量已上、如是其壽命きのみならず、或は猫となり、鼠となり、蚊となり、蛇となり、三十四億類を経回る劫數算數も知り難し、是等の道理を知て厭離すべきことをさとして、いかゞ是を厭ふ心なかるべしと勸め玉へり。
●二には空といふは、此諸の事は皆夢の如しと思ひしりて、何事も強にしみ深き心有べからず。
●第二に此世のことは、皆實體なければ空にして夢の如しと云ふことを教へ玉ふ、夢の如しとは夢は實體なきこと誰れも知れど、夢の中には覺めたる時に一分もかはらず、官祿に進み金銀を得る等の時は大に悦び、又諸の苦に遇ふ時は涙を流し汗を

出す、爾れども覺めて見れば一向跡形もなきことなり、凡夫の迷情にて覺ては夢の空なる事を知れども、覺めぬ時をば夢と異なるやうに思へり是れ迷の故也、若し覺に實體あらば、悦は盡未來際改らず、悲も又改らぬ筈なれども、親に離れ子を先立て夫妻眷屬別れくになり、宮殿も朽果て、金銀も離散し、黒髪も白髪となり、しなやかなる腰も弓の如くにかゝまる、露も夢と異なることなし、故に古歌にも「さめやらで見ればこそあれ世の中は、よきもあしきも夢のたはむれ」と詠せり、如是の道理を聞ば、一切空の悟り迄こそ難からぬ、此世の事にさのみ執著はなき也、故にしみ深き心あるべからずと云ふて、次に古徳の語を引り。
●古人の語に、夢なりといへども、其事に臨むときは宛も覺の如し、覺なりといへども過さりぬれば又夢の如し、誰か心あらん人か、夢と覺とにわいて、強に異なりとあらそはんや、といへり。
是は禪林寺の永觀律師の作、往生十因の語也、此語の源は莊子に出たるを、弘法大師の轉用し玉ふ

を、永観又轉用し玉へる也、其語云、昨覺今夢無差別故、覺境已過猶以如夢如覺、妄想即空佛説長夜、誰有知者諍夢覺異、如莊周成胡蝶、胡蝶成莊周、之是也云々、莊周成胡蝶、等とは、唐土の莊子と云ふ人、夢に胡蝶となるを見て覺て後、莊子が胡蝶となりしが夢か、胡蝶が莊子となりたる夢を見るのか、知り難と云へる故事なり、又彼盧生と云ふ人は、智識を求めに行とて、邯鄲の里に至り、飯を炊しぐ中にまどろみし夢に、段々と立身し終に天子となり、食には八珍を連ね、後宮の美人三千人を並べ従へ、園に出で、は花に遊び、樓に登りては月に嘯き、榮華を窮めしこと五十年なり、そこで旅籠屋の下女が、御客様御膳上りませと云ふ聲に驚き目覺て見れば、五十年が間天子となりて榮華を極めしは、只粟飯の炊ぐ中のことなれば、盧生は是にて心地を開き、智識求ることをも止めて、引籠て佛道修行したと云ふ事は、近くは邯鄲といふ話にも歌ふことぢや、經論と云、現證と云、是程慥かなことはなし、依て十因の語を

引て夢と覺と異ならず、同じことぢやと云ふ事を教へ玉ふ、已下鈔主の詞に、
 ●げにぬる夜の夢の中ははかなく化なれども、其の事に臨み其人に向ふときはうれしくもかなしさも、露もさむるうつゝにかはらざるをや。
 ●ぬる夜の夢のはかなく化など云ふは、わけもなく正體もなければ、其事に臨むと云ふは、東山の遊山で面白さも、西の土手へ引出され土壇へすゑられた悲さも、夢と覺と同じこと、其人に向ふ時は嬉さも悲さもとは、飽ぬ別れに年を経し夫や妻に巡り遇ひ、或は迷子になつたを尋ね出た嬉さも、恨を結び逢はねばよいがと思ひし敵に行合た悲さも、夢と覺と變りなきと云ふことを、露もさむる覺にかはらざるをや、と云ふなり。
 ●又目を塞で古を思へば、たゞうつゝと云ふ名ばかりこそは有けれ、すべて夢にかはる處なし。目を塞ぎ胸に手を置き、つくぐと思ひ回らせば、竹馬に乗て西よ東よと驅廻りしも、羽根や手毬でひいよ、ふうよと敷へたも、思へば夢に變ること

なし、先立つ人の面影も思ひ浮べて見る計り、時去り星移れば家も替り人も代り草木も代り、呼れて馳走に遇ふたも、程経れば其時は何やらの祝であつたかと思ひ、又立腹せしことも時過れば、其時はどうやらしたことであつたと思ふ、斯るものぢやに依て、覺と云ふ名計りありて、すべて夢にかはることなしと。
 ●されば悦も恨も、一ねむりの夢なりけりと思ひ知りて、此世の事に心をこむまじきなり、未得眞覺常處夢中と佛は教へ給へり。
 眞覺常處夢中と佛は教へ給へり。
 官位俸祿に進んだも、金銀の利倍を得たるも、讒言せられて浪人したのも、増す花ありて思ひかへられたも、悦と云ひ恨と云ひ、時過て見れば夢も覺も皆空なり、斯く實體の無きものを誤て我と云ひ、我物と思ひ、しみ深き心を起すなと云ふ事を、悦も恨も一眠の夢なり、等との玉へり、次に唯識論の文を引、未得眞覺常處夢中と、此文の意は無明を斷じ盡して、涅槃の四徳波羅密を得ざる中は皆夢なり、二十五有は夢にて、往生して眞覺の一分を得たる時目覺るなり、爾れば夢も覺も共

に夢中なり、一夜は短き夢、一生は永き夢なり、其二つの夢に、仕かけに依て變りめがあり、一夜の夢の仕掛と云ふは、風氣のある時は飛上る夢を見、熱のある時は火事の夢を見る、一生の夢の仕掛を云へば、惜い欲いの貪欲に依て餓鬼の夢を見、理非の分ちなき愚痴に依て畜生の夢を見、五戒を捨て人間の夢を見、十善を行じて天上の夢を見る等なり、此三界の夢を醒すに二種の覺しやうある也、一には聖道門の三學を備て覺し、二には淨土門の本願の名號を稱へて往生して覺すなり、二種の覺しやうはあれども、三學均當なることは上代猶難し、何に況んや今時末世に其機に當る人有んや、本願口稱の一行は今時は云ふに及ばず、劫末人壽十歳の時にも益あり、其得失は下の自力他力等の下にて委く辨すべし。
 ●三には無常のすみやかなる事を思ひ知るべし。第三に無常を明す是又總標也、無常に二つあり、一には相續法壞の無常、二には念々生滅の無常也、二種に通ずれども今は多く相續法壞に就て示し玉

ふ、無常の速なるとは、生者必滅とて生れたもの必す死する也、夫も甚だ速にて、一彈指と爪彈きする内に六十五刹那をふると云ふて、爪彈きの間に六十五度づゝ無常あり、譬へば大阪へ下る舟に乗りてとも綱をとくや否な、咄する内も大阪へ近くなり、牛房汁食ふ内も、酒飲む内も、餅食ふ内も、次第に大阪へ近づく如く、生れてぎやつと初聲上るや否や念々死に近く、名付、髪置、袴着と段々成人するを悦ぶも、死ぬ事を悦ぶなり。

●夫れ一切の事はまぬがるゝ事ありといへども、無常の一事はすべてまぬがるゝものなしとこそあめれ。

是は無常の免れざることを示し玉ふ、涅槃經には、一切諸世間生ある者は皆歸死と説き玉ひ、智度論には、老少無免者」と論判し玉ひて、此一事に限りては一人として免るゝことなき也、一切の事は免るゝ事ありとは、體の健康な人は病を免がれ、富貴の人は貧を免れ、雨降れば屋根をこしらへて免がれ、六ヶ敷ことは言分して免がれ、殺さんと

するをば足早に逃て免るゝ等の事あれども、無常の一事は免れず、公用等は名代のことわりもあれども、無常はことわりをも聞かぬなり、四仙の死を避んとせしも免がるゝを得ず。

●唯よろづにうたてある心の發る事は、無常の速なる事をげに、思ひいれぬが故なり。

是は此世の事を物かましく思ひ、執著深き心の起るは、無常の理を眞實に思ひいれぬ故なり、うたてある心とは、ふと惡心を起して後には悔しく思ふ心を含めり、實に、思ひいれぬとは、あらゝと辨へ知れども、我身に受て思はざる人もあり、又一向辨へ知らぬ人もあり、此二人ある内にも、一向無常を辨へ知らぬ人なれば説法の席へも詣らねども、皆は參詣して法を聞く人なれば無常の理を知る故なり、知ることは知れども、大方皆あらゝと知た分齊で、實に、思ひいれぬ人は難有もの也、先皆は免もあれ、此方に眞實に知たかと云ふに、扱知らぬなり、其證據は説法せんとしては勤學する、其勤學して説く迄の命は誰の人か受

合しぞ、夫は先佛法弘通の一分なれば許す邊もあるべけれど、夏の中に夜着の洗濯、冷氣になれば帷を櫃に入る、一年越で先に入用な物迄もたたくはへて置を、無常を實に、思ひいれぬ人は、誰れに占はせても云ふ人はない、是に限らず取立て云ねばこそあれ、古人の詠せし如く「木もうちこと鏡にうつるものならば、さぞや姿のみにくかららん」、一言のいらへも出来ぬ、扱各々もあらゝと知た分齊であるう、仕掛た用事を閣て、先づ寺へ參詣して歸て仕ようと云ふ、歸るまでの命を受合人はない、況や五年十年先きの事を、今から思案して置位の人を、げに、思ひいれぬ人は、誰れに占はせても云ひ他と云ひ、甚だ眞實に知りにくい者なれども、せめてはしみ深き心の起る時は心の師となりて、今にも知れぬ命を以て、あらぬ心を起せしと思ひかへすが肝要なり、求證人經云、昔釋尊舍衛國に在せし時一人の比丘あり、山田の細道かきわけて塚の間に到る、朝に行き夕に通ふ事日數積りければ、山田の主怒りをなし制して云く、

如何なる比丘ぞ、道業を修せずして常に我田に遊ぶと、比丘曰く、我人と争ふことあり、證人を求めんが爲めに來れりと、田主曰く證人誰人ぞ、田主をつれて屍の散り亂れて鳥獸のつかみはめるを見せて、此鳥獸是我證人なりと、田主其由を問ふ、比丘曰く、我案するに萬の煩惱は心より起る、心は身の怨なり、されば常に心の師となりて心と争へども心我に隨ひ難し、彼がひがみにあらそひかねて、爰に來りて證人を求むると云ひければ、田主聞て信を起し涙に咽びぬとあり、是等も無常忘れがちなる心を諫むる爲に、屍を鳥獸の諍ひ食ふを見て我身も是れに露塵違ふことはなきに、なせに又無常をひしと思ひ知らぬぞと、證人を立て心の師となし玉ひしなり、斯の如くしてなりとも無常の理を思ひ知るべきなり、是は十二頭陀の中の塚間座なり、其やうにして無常を思ひ知れば、どういう事が有かと云ふに、父子相迎に、少しも無常を知りなんは計りなき世の慰み哉、よしやいつ迄の身ぞと思はまじかは、なじかは、さのみの

人わろさもあらん、又ゆゑしき歎き思のやるかたぞかし、この玉へり、此意は、世に棲めば願ふ事あり、恨めしき事あり、願ひごとあり、歎きごとあり、心に物の叶はぬ故、胸もわづらはしきなり、爾るに無常を知れば、今をも知れぬ命なりと知れば、人を願ひ恨むる意も起らず、たとひ其念起れども直に思ひかへさるゝなり、此世の事執著さへ無ければ、諸の願ひ望みも絶ゆる故、胸煩はしきこともなく大なる安慰なり、新續古今式子内親王の歌に「これもまたありてなきよと思ふをぞ、うきをりふしのなぐさみにする」と詠じ玉ひし如く、憂き事に遇ふ時は胸苦しき事もあれども、今にも死すべき身を以て、此世の事を物かましく思ふことの愚かなる心やと思へば、胸に焚く火も消え果て、心涼しくなり、厭離穢土の念もたち、欣求淨土の心も起り、自ら稱名も進む是れ最大の徳なり、故に向阿上人の、上には無常を知りなんは計りなき慰みかなと、下にはゆゑしき歎き憂へのやるかたぞなし、この玉へり、最一重云へば、或はいと

しき子を先き立て、夫や妻に離れながら、無常の思を知らぬ人は只ひたすらに歎き悲み、或は命乞の願の叶はぬを怒り、神も佛も有るものかはと、邪見に墮する業を重ぬるのみならず、先立つ者の苦患をも増すなり、自損々他の極り憐れなることにあらずや、無常を思ひ知る人は、假令「夢の世にあだにはかなき身を知れど、教へてかへる子は知識なり」、子を先立て夫や妻に離れても、老少不定の娑婆、生者必滅の理り遁れ難ければ、如何程歎き悲むとて、亡者の爲めにはならず却て苦を受るとあれば、今よりは猶心を用ひて念佛を増進し、自らも往生し亡者をも回向せんと、亡人の爲に念佛すれば往生した人は品位を進み、若し惡趣に落て苦むをも、阿彌陀如來光明を放ちて照し玉へば、沈みて念佛を怠る事、あらぬ事と一きは進で念佛する、如是なれば自身も往生し亡者も助かるべし、自利利他もなき智者にて無上の得と云ふべし、故に無常を知れと勧め玉ふなり。

●たとひかならず百年のよはひを送るとも、猶ありてはまたの歎きのいかなからむ。
 ●たとひとは、與へる言、此南閻浮提は老少不定なれば、長生するは甚だ稀にして、或は壯年にして身まかり、童子の時に死し、むつき上にて息止り、胎内にして命を失ふもあり、正法念經云、有於胎藏二死^上有生時命終、有^二纒行亡^一有^二能走忽卒^一と説き玉へば、百年の壽命を持つ人は、千萬人の中に一人有るか無きか也、至て稀なれば、そう云人はなけれども、先それ迄生きるにもせよと許す也、たとひ百年生た所が、生者必滅の理なれば終には死なねばならぬと云事を、又の歎きいかならん

て残る所は二十年ばかりなり、其二十年の中に、我病に苦み、人の禍に罹り、悦に日を費し、惡事に夜をあかし、一月の中に口を開て笑ふ日は四五日に過ぎすと云へり、古人の詩に、人壽百年七十稀、一分衰老一分癡、中間二十餘年事、幾多歡樂幾多悲、と明惠上人此意を「いとけなし老てよわりの盛りに、まぎらはしくてつひに暮しつゝ斯く勘定せらるゝと百年生ても僅かな内、已下は百年迄老はつまじきと云ふことを。
 ●況や無常目にみち耳にみたり、親きも疎きもなき數のみ多くなりゆくを、さのみやは人の上につきすくして、つれなくも老はつべきかゝる急務は驚き思はずばあるべからず。
 ●無常目にみちとは、親族朋友我里人の無常をば、現に目に見て知る其數幾許ぞや、耳にみたりとは、他の里及び他國の人の死せるを聞くこと亦多し、親きも疎きも引きもきらす無常を見聞する也、寒山詩云、昨用^二徐五死^一今送^二劉三葬^一日々不得^二閑^一、爲^二之^一心愴々、樂天は請看原下村、村人死不^二歇^一、

一村四十家、哭葬無_三虛日、と云へるも、無常の速かなるを詠じ、解脱上人は南隣哭北里哭、送_レ人之泪未_レ盡、と云るも餘事ならんや、父子相迎に、よなよな思をいたましむるの烟り、ならびてはたてどもたふる時なし、たもとをうるほす露、葉末にてはきゆるれども、もとのしづくとならぬやはある、と云へるは、夜毎にたつ無常の煙りの五人十人と並べては見ゆれども、ひとりや二人は煙の絶る間はなしと也 兼好法師の徒然に、都の中に多き人死なざる日はあるべからず 一日に一人二人のみならんや、鳥邊野船岡さらぬ野山にも送る數多くある日はあれど、送らぬ日はなしと云へるも此心也、墓所が多くは遠い所にある故知りにくいならば町の内でも知りやうがある、表店をはりて、くわん桶や乗物を拵て、大勢の家内を過す細工人が數多ある、若し死ぬる人がなくば渡世にはなるまいが多いに依て立派に暮す、是でも争ふ處はない、其上、目に見耳にみてる無常をさのみやは人の上に聞すぐして、つれなくも老はつべきとは、今日

も人の身の上明日も人の身の上と聞捨にしては居られまい、同じ人間に生を受たなれば、我も今やと思ひ知て、老はつべきやうに愚痴な心を起すなと也、總じて無常を驚くに種々あり、阿含經に四馬の譬を説き玉へり、上の馬は策の影を見て驚き、是れは他郷の無常を聞て心を起すに譬へ、中の馬は鞭の毛先にふるゝに驚き、是は我里の無常を見て心を起すに譬へ、下の馬は肉に通る程打たれて驚く、是は我親類の死するを見て思ひ知るに譬へ、下々の馬は骨は痛む程打たざれば驚かぬ、是は我身に病を受けて、初て死すべき事を思ふ人に譬へ玉へり、此四人の無常に驚く中にも、せめて前三人の中に入らねばならぬ、なせと云ふに、第四の人は病を受けて死すべきことを知るとあれば甚だ覺束なきこと也、人の命終にも種々ありて、或は病をも受けず頓死する人もあり、寢ながらすぐ死する人、或は思ひもよらず闇打に遇ふて死する人、がけより落て死し、火に焼け水に溺れて死する等、數へ盡し難し、習先よりあらざれば、懷念何ぞ辨

せんやと云へる如く、常に無常なることを思ひ知らねば、火にやけ水に溺れ、人に切られて死ぬ苦みの中にて、俄に無常の道理が思ひしられる者ではない故に、常から用心せねばならぬ故也、元祖は凡そ衆生の宿業無量にして、死の縁も又一にあらず、たとへ劍にやぶられ矢にあたり、火にやけ水にたほられ、或は重病を受けて、兼て思ひもうけたるにたがひ、大小便にまぶれ死ぬとも、唯一向に念佛だに申せば、決定往生するぞと思ひ取るべきなりと教へ玉ふ、此御教を深く守りて、たとひ死縁はどう云ふ縁にも遇へ、念佛だに申せば決定往生と必至と思ひ定るを、能く無常を知り念佛の安心の手に入れた人々と云へり、無常ばかりを知て念佛せぬ人は、無常を知る人にては無きなり、口に云ふ計りは信じられぬ、自他共に念佛申と申さぬにて知るべき也、扱此第四の人は、常から念佛申人の用心には不足なれども、通途の人にて論すれば、先づ十人に八九人も病を受けて死ぬる事なれば、病氣になりて無常の道理を思ひ知て、夫

れから有縁の佛道修行して後世の資糧を貯ふる、是又目出度人なり、世間を見れば、此人より最一層劣りたる死馬同様のうろたへもの多し、其人を云はゞ、他人の無常は馬の耳に風なれば思はず、却て無常を厭ひ惡む愚癡心から、道を行にも葬禮來れば脇道へよけ、懷中よりのしを出して戴き、自身の家の前を葬禮が通ると、立て汐の七遍も清めて神棚へ燈をあげ被の一卷も讀む、偕自身に病を受ると、平生の吝嗇も死にともないが心一杯なれば、彌宜山伏へ祈禱を頼み、その稻荷に病氣平癒なさしめ玉へ、御禮には鳥居を立て御千度を致しませう、爰の産神へは何とぞ命をのべ玉へ、御禮には繪馬を上げ三年日參致しませう、平生は佛菩薩は無常氣が有て信じもせぬぞ、延命地藏と額の懸てあつたを思ひ出し、何卒延命なさしめ玉へ、御禮には御膳上ませうと、勿體なくも佛神に向て子供誑しのやうな立願も、過去の業因拙たなふして、知識の開導にもあづからねば、因果應報の大道理を知らず、自業自得の病も神佛に頼

めば癒ゆべきやうに思ひ、生下に定る壽命をも、願へば延る物のやうに思ひ、はては狂ひ死、もがき死して、又三惡の火坑に落入り、炎に焼かれ飢渴に苦み、毛を被ひ角を戴きて、無量億劫楚毒を呑む人多し、是は上の四種の外、極々最下の死馬同前の人なり、斯く得否の違ひある故、丁寧は無常を知れと勧め玉ふ也、故に父子相迎に云く、あはれ佛の御はからひにて、一期心に無常を忘れず、口に念佛をやまぬ身にてあらば、いかばかり世のありさまもどかしう、すみたる心のうちならん、これなん又なくあらまほしき心なり、願くばかまへて佛も我をそゝのかし玉へ、この玉へり、實に心に無常を忘れねば自ら念佛も進み、其念佛は本願正定の妙業なれば、十即十生百即百生、皆悉く決定することなれば、常に佛にかこち奉るべし、昔し鎮西に土佐の寺主某、相知れる僧に語て、某は念佛も申さず、一切の善根もせじと年來は思ひしが、近頃より念佛をも申し善根をも營まばやと存候、其故は日比はすべて死すべしとも覺えず、死ぬるに

こそ後生の營をすることなれど、思ひて過し候ひしが、死に候はんとなやしき事候也、其故は、我父にて候ひし者も死し、母にて候ひし者も死し、叔父伯母、又兄左衛門尉も死に候ひぬ、死る一家にて候かあやしき候とぞ語りけると、此僧の語れるやうに、皆も死ぬる人の一家なれば、今にも知れぬ無常なれば、次にかゝる急務は驚き思はずばあるべからず、と勧め玉へり、實に出る息入を待す、入る息出るを待すとあれば、無常ほど急はなし、故に急務と云ふ也、一切世間の事は不急のことなれば驚き思ふ程の事はなき也、故に大經に云く、世の人の心愚にして只目前の五欲をのみ諱ひ營て、悔しかるべき後世を忘るゝを訶して、然世人薄俗其諱不急之事と説き玉へり云々、父子相迎に今生の營の命あらばと緩なるべきをば、足を空にして急にし、後生の出立の今も死なばやと急なるべきは、手をたんだきて緩す、是れ賢とやせん愚かなりとやせん、と諭し玉へり、新後集に、圓空上人の歌に「身を思ふ人こそげにはなかりけり、う

かるべき世の後を知らねば」と詠じ玉ふ此意也、斯く丁寧なる御示をも聞ぬ昔は兎まれ角まれ、聞て合點得せぬ人は人面獸心とて、人の形の畜生なれば、亦三惡趣に還る人なり、往生十因に云、傳へ聞く或聖は念佛を業と爲し専ら寸陰を惜しむ、若人來て自他の用事を云へば、聖人陳て曰く、今火急の事既に且暮にせまれりと、塞身念佛し終に往生を得ると書玉ひ、又心戒上人の、常に蹲踞し玉へるを何故にか斯く蹲踞し玉ふやと尋ぬるに、三界の中には何處にも安らかに居るべき所なしと答玉へる等は、深く無常を知り玉へば、實に羨しき心ばねなり、斯迄にすることこそ出来まいけれども、逆も遁るべき無常ならねば、今にもあれ死なば死ね、念佛だに怠らねば決定往生することぞと、必至と心に思ひしめて日課を相續し居れば、宗の故實の念佛の意にも叶ひ、急務に驚く人の中なれば、必々此心を忘れまじきなり。

ともむしろをややすくせず、食すとも哺をあまくせざれとあるをや。是は上來の無常を知れと勧めし事、私に云ふことには非ず、古徳も斯の如く勧め玉へりと、其證據に備へて上を結び玉へり、此文に無常の利鬼とあるは無常は即ち羅刹なりと云ふことにはあらず、羅刹は人の命を取る者なれば、無常の人の命を奪ふに似たれば、無常を羅刹に譬へて云へり、下の奪精の猛鬼と云ふに照し合する文章の對句なり、其無常の利鬼は豪賢とて用捨せぬ也、豪とは氏の貴き人高位高官と云ふ、賢とは智徳ある人のことなり、既に貴人智徳ある人をだに撰ばねば、況や賤き人愚なる人を許すべきや、勅修傳二十六丁云、宇津宮彌三郎頼綱、家子郎從、濟々として武藏野を過けるに、熊谷の入道行遇て云様、いみじく大勢にて在するもの哉、但いかに多とも、無常の利鬼は防ぎ難くや侍らん、彌陀如來の本願にて念佛する者をば、惡道に落さず迎へ取玉へば、一人當千の兵者にもなを勝るは是念佛也、かまへて念佛し玉

へと申けるが、肝に染みて覺ねると、其後彌三郎も元祖の御弟子となり、蓮生法師と云ふて一向専修の行者となられ、目出度往生を遂げられた、熊谷入道は「此世をば薪とよにも」と詠む程の大道心者故、唯一言に頼綱を濟度せられたが、此方は無道心故一言二言ではない、座を重ねて勧めても心を起す人は希なり、爾し宇都宮も宿善いみじき人なれば言下に發心せられたもの、熊谷入道の勧めの力ばかりではない、其證據は元祖の御勧めを聞くにも、幸西や善心が徒、師匠の教へに垂いて一念義の邪法を弘めた、是に翻じて考ふれば、説人は無道心者にもせよ、説く法さへ正法なれば、聞て志を發す人がなければならぬ、況や依法不依人は涅槃の遺勅なれば、皆は此方の無道心にはかまはず、説く所の正法を信じて志を發すがよい、斯く道理を分て云ふて聞せても、聞受得ざる人は還入惡趣の機なれば、假令大道心の熊谷入道に勧められても、念佛の行者には得なるまい、能く分別して見るがよい、偕て奪精の猛鬼とは、是は實

の羅刹にして、人の髓をすひ頭の水を吸ひ、及び人の命を奪ふ也、貴賤の選びはせぬなり、深く此理を知てとは、深くと云ふ字が眼なり、淺々とつひ大略に知ることは誰れも知る也、どんな愚な人にてても、其方は何つ迄も死なぬかと云はんに、無常の世界に生を受け、生き通しにはなるまいと云ふ、そう云は云ふても深く知らぬ故、後世の營みにはかゝらぬ、又深く知ると云ふ中にも上下の差別あれども、今と知れぬ無常なれば、死んだ時には往生と、日課相續する人なれば、深く知ると云ふ中間入をした人なれば、氣いじりいらぬこと也、止觀の文は、上根に被らしむる教なり、用心門はいつでもよいが上にもよかれと勸むる也、故に下に眠ることも寤を安くせず、食すとも哺を甘くせざれと云へり、若是等の文を死て、此方は床につけば心安く、甘き物を食へば悦ぶ心あれば、深く無常をしらぬに依て、是れでは往生も如何かと云ふ様な、とつけもない心を起さぬ事、元と無常を知らんと勸むるは、聖道門でも淨土門でも、修行を怠

らす進まんが爲なり、たとへ晝夜十二時無常なりとと思ひつめしとて、夫で生死を離れられるものではない、止觀の意は、無常迅速を忘れねば、四種三昧を勸むる助になる也、若無常を忘るれば修行が物憂くなる故也、淨土門では念死念佛と云ふも、死を念じて夫で往生するとは云はぬ、死を忘れねば念佛を怠らす、其念佛申せば本願に乗じて往生すると云ふ事也、寢て心持のよいは凡夫の定り其沙汰にいらぬ、寧ろ眠に付時は、元祖の「あみだ佛と十聲唱へてまどろまん、ながき眠となりもこそすれ」と詠じ玉へるを習ひて、十念唱へて寢る、是れ止觀の眠るともむしろを安くせずと云ふに當る、食時にも元祖大師の、食時にもむせて死することあれば、南無阿彌陀佛とかみて南無阿彌陀佛と吞入べき也、ともの玉ひ、又一食の内に三度念佛を思ひ出れば、よき相續にてある也、ともの玉ひ、在家の用心には、齒田入道智明房の舍弟に示して、鹿鳥食ひながらも念佛せよ、と云へる、又鎮西上人の、三種行儀の中の平生行儀を教

ゆるとて、在家の人はにら食ふとも、此無間修の念佛がやぶらるべきかと思ひて申せとあれば、食時の中にも多少の差別はあれども、共に念佛申ことなれば、止觀の哺を甘くせざれとあるにも分に叶へり、よくと心得べし、又念佛は申せども、無常がひしくと思はれぬと云ふて、氣をいじるは大に愚なること也、是は演若達多が、鏡の裏を見て我首を失へりと云ふて、噪ぎ回たと同然で、無常の心を忘れぬは往生する爲ではないか、夫ならば念佛怠らねば無常を忘れずにおるに違ひもない故に、上來厭離穢土の教を聞く上は、此世の事に執着せず、舟のともづなを解くべき也、次は向ふに付くべき岸を定むる、欣求淨土の義を教へ玉ふ。

●次に欣求淨土と云は、自利利他の二つの大益をしるべし。

是欣求淨土の總標也、厭欣は彼此二岸なれば具足せねばならぬ、然るに妻子珍寶等の諸の欲綱多くして厭ひ難し、又厭ふ心の起るにも種々あり、或は

朝夕の煙もたぬぐに、身を覆ふ一重の衣さへ心に任せず、或はいとしき妻子に離れ、或は重病を受けて床枕の内に苦み、或は王法の禁令を犯し牢獄に繋がるゝ等の縁には厭ふ心發れども、欣求の心なき人あり、是れ無宿善の機にて知識の教導に遇はず、佛法の大道理を知らねば、唯當則の苦みに堪へかね、死なば苦患を離るゝならんと知りて、佛道修行せずして空く死せば、從苦入苦從冥入冥と云て、此世の苦みより百千萬倍不可計倍の大極苦に、無量億劫苦むと云ことを知らぬ也、此心を新拾遺集に、二品親王尊圓の「五月闇木の下道はくらきより、冥きに迷ふ道ぞ苦しき」と詠じ玉へり、故に厭離穢土と此世のとも綱を解かば、欣求淨土と向につくべき岸を定むべし、其欣求すべき淨土の依正二報の體相は、委しく觀經に説き玉ひ、知解ある上機は經文の教に依て觀念し玉へども、愚癡障味の定心なき、凡夫の爲に其利益薄ければとて、中將法如の懇請を縁として、忝くも阿彌陀如來は老尼と化し、觀世音菩薩は織女と變じて、

大和國當麻寺の庵室に降臨し玉ひ、夜中僅かに三時が間に、一丈五尺の大曼荼羅を織りあらはし玉ひ、下の縁りは九品往生人の來迎の體、中臺は四十八願莊嚴淨土の體相、盲目でさへなければ、どのやうな愚夫愚婦でも、穢れた凡夫の肉眼を以て報身報土の體相を拜み、極樂淨土はかく迄目出度御國に在すかと、欣求の心の起り易きやうに、終窮無極の大悲を彰し與へ玉ふことなれば、是を自當として、追付命終り次第、かゝる淨土へ往生し無量の樂を得んと、欣求淨土の志を立て向の岸を定むるが肝要也、是が欣求淨土と云四字の心、自利利他の二の益を知るべしとは、極樂へ往生し自身の大益を得るは、人の爲にも大利益あり、此を自利々他の大益と云也、是迄が總標文の意、次に別釋。

●自利といふはおもふべし、しらすいくめぐりの生死の苦を受け愁にしづみし。

總標に二の大益ある中に、先其自利の益を擧るなり、思ふべしとは熟々思ふて後にかへる詞にて、

往生すれば自分に種々の樂を受くべきとをいふ、是は其樂を受くることを悦ぶ、心を強く發させん爲に、先づ生死の苦海に沈みて無量の大苦を受しことを思ひ、苦樂の天地の違ひを知れとなり、凡夫の習ひ、物を對待せねば合點が行かぬ也、丁度仲人の娶を勸むるに、先の娘の器量の善さ、生立尋常さは、此町で評判の何屋の娘には十倍勝れて居ますと勸むる時、そこで舅姑が、なる程何屋の娘より勝れたらば夫れは何よりなことぢやよ、此方が善い事と思ふても、縁談は一生の大事、家の納り身代の盛衰にもかゝれば、押付わざで御請もならねば、息子の心がどうあるうかと友達に頼んで聞てもろう、そこで息子は仲人の十八言は御定り、見ぬ商はならぬからと云に依て、仲人は得たり賢し、眞實器量のよいこと故、氏神の祭禮何か人立ち多き折からに、近所の娘と連立させて參詣するを婿に見せる、數多の娘の中でも至て勝れて居る故に、あれなら祝言しやうと云ふ、是れ對待すれば善惡の分別直ちに出来る、對待は斯く分別し易

いもの故、そこで極樂往生の利益の廣大なることを云はん爲めに、先づ生死の苦を示し玉ふ、譬へて見やうなら、極樂と三惡道との對待は、至て器量の善い娘と猿との様なもの、人間天上は三惡道に對すれば苦樂も軽く、五欲の樂みあれば世間並の娘のやうな者、猿に對して見ればよけれども、至て器量のよい人に比ぶれば甚だ劣る、是は人間天上の有爲の樂を、極樂の無爲の眞樂に對すれば甚だ劣る、實を云へば五欲の樂は、愚縛の凡夫の迷ひの目にこそ樂と見ゆれども、證りの眼より見る時は、三界皆苦なれば悉く苦なり、是れが前に苦を顯し、後に極樂の大益を明し玉ふ意なり、其先づ苦を示し玉ふ文に、知らず等とは是も後に回る詞で、幾巡りの生死にか、苦を受け愁に沈みしか知らずと云意なり、二乗と外道の通力では過去八萬劫の間の事は知れども其位の事ではない、無始曠劫の流轉なれば、幾巡りの生死にか苦を受け愁に沈みしか知らずと云ふ意也、其三界二十五有を流轉する有様は、車の輪の回るか如く、其車輪

の上は天上の如く、下は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、の五種は中間の脇の如く、哀哉魔王譜代の奴となり、三界の外をかり廻され、愁苦に沈むる様を、永觀律師の言に、須觀^レ流來生死^二想^一像無始以來輪廻六道受^レ諸苦^一、或咽^レ焦熱炎^一、或閉^レ紅蓮大紅蓮之氷^一、或沈^レ餓鬼飢饉之愁^一、或值^レ畜生殘害之悲^一、人間之八苦、天上之五衰、總輪迴之間受^レ如是苦^一幾何、この玉へり、斯く對待して、三界皆苦の有様を擧て次に、

●しかるに念佛の願力の不思議によりて淨土に生れなば、身にも心にも歎き悲みし業をはなれ、目にも耳にも悦び樂むことのみあるべきなりと。此文の意は、往生して自利大益の快樂を示す也、然るにとは、下を發する語なり、念佛の願力の不思議等とは、其念佛とは觀念等の事には非ず、唯口稱の本願念佛なり、其口稱の念佛は三佛の本意に契ふと云ふて、彌陀の本願、釋尊の所說、十方諸佛の證誠の妙業也、故に一向專修念佛の行者は、三佛の大悲に契へば、彌陀は能く我が本願の稱名

を唱へて往生せんと欣ふことの悦ばしさよ、五劫が間の思惟も、兆載永劫の苦修練行も皆な汝等が爲ぞかし、機根に上下の差別あれば、數に多少の違ひあるも下は十聲一聲の者迄往生させんと云ふ本願なれば、數少しとて疑ふな、罪深きのも合點の上、異學異見と異悟りの人に迷されず、難行難修の脇道へ行くな、「時過て益なき法を捨よがし、五劫思惟は誰か爲ぞをも」、我等が爲めの本願と脇目をふらず、一筋に受た日課を相續さへして居れば、娑婆の命の終る時、聖衆と共に來迎し極樂淨土に連れ歸り、觀音勢至と膝をくみ、普賢文殊と肩背を並ぶる大菩薩となし、無量の快樂を得させんと、善哉汝は隨順佛願の眞の法王の御子なるぞと讃め給ひ、釋尊は能く我教を聞受て念佛を行する事よ、我此の五濁の娑婆へ出世したる本懷は、彌陀如來の本願口稱の名號を説き、一毫未斷の塵凡夫を、一超直入と頓に生死の苦を超え、極樂淨土へ往生し不退の菩薩となさん爲めばかり、別しては正依の三經、總じては一切經の中、慇懃に此

一法を交へ説けり、難中之難無過此難の大法を聞き得て、無上大善の妙行を修する、善哉汝は隨順佛教眞の我弟子なりと讃し、十方の諸佛は能も念佛一行を修し往生を願ふ事よ、口稱名號の一法は僅かに六字の御名なれば、讀誦大乘の勤め苦しきにも似ず、其唱ふるにも時も處も簡はず、身口の淨不淨をも云はねば、修法の壇上四種三昧の道場の難行にも似ず、又定散の沙汰もせず、又妄念の起不起も云はねば、座禪觀法の勤にかはり至易至簡にして、勤め易く修し易し、其上十聲一聲唱ふる者迄四重五逆の罪業を滅し、報身報土に往生すること、實に法に付、機に付、難信之法なれば、今釋尊の説き玉ふ彌陀の本願念佛は、凡入報土の大法なれば、一切衆生信行せよ、我等諸佛一佛も殘らず悉く證誠するぞと、舌を三千大千世界へ覆ひ、若し此事僞らば、今出す所の舌くされたれて口に還り入らざらんと誓ひしは、本願口稱の名號を信じさせん爲なるぞ、能く疑なく信じ取り、一行三昧に勤めるぞ、善哉汝は隨順佛意の諸佛の

眞の御弟子なるぞと讃じ玉ふ、是を三佛の本意に叶ふと云ふなり、是が念佛の二字の意、願力の不思議等とは、願力とは阿彌陀如來未だ佛に成り玉はざりし昔、法藏比丘と申せし時、平等の慈悲に催うされて、十方衆生を導かん願を發し、世自在王佛の御前にして、四十八の誓ひを立て玉へり、其趣未曾有の大願なれば、大悲の肝膽をくだき玉ふこと一期の案にあらず、年序空に積て五劫が間思惟し玉ふ、其一劫と云ふは、智慧ある人か、持戒者か、上根な人、定心ある人を助けんと云ふ本願なれば、またく問にも御思惟もつけども、三毒にからまれし底下薄地の塵凡夫、三學無分の最下の機の、三世諸佛にも見捨られ、十方の淨土にも門戸を閉られ、地獄の滓となる衆生を、御身一つの悲みとして、此等の衆生を濟はん爲の御思惟なれば、五劫の年序を経玉ふ也、所詮最下の衆生に向て、三學を磨き、六度萬行を修せよと云ては、濟度成就の時なければ、我一切衆生に代り無量劫を経て難行苦行し、其功德を我名號に加持し納め

て、我名を稱へる衆生に與へ、其機は四重五逆にもせよ、口に南無阿彌陀佛と稱へだにせば、下は十聲一聲と數の多少の簡びさへせず、皆悉く迎へんと斯く御思惟を決定して、總じては四十八願、別しては第十八の願文に、設我得佛不取正覺と誓願を建て、夫れより修行の門に入り初め、外凡の位より終り妙覺の極位迄、五十二位の階級を上りて又立還り、立還りては又上り、唯御自身成佛の爲なれば、一遍の御修行で正覺を唱へ、淨土に安坐し在んに、終窮無極の大悲より、立ち還り立還り難作難作の御修行に、骨を推き身を刻み、兆載永劫と算數譬喩の道たゆる年月を経て、今こそ積劫累徳して、如何なる極惡最下の機も唯南無阿彌陀佛と申だにすれば、十即十生百即百生、千に一つのあやまちもなく、往生するに定つたと云ふ時、爾らば我も正覺を唱んとて阿彌陀如來となり玉ひし也、既に願文に十方衆生と云ふて、機に善惡の簡びなく、乃至十念と云ふて、行は多少ともにをさまり、若不生者不取正覺とて、たとひ機は善人

にもせよ、惡人にもせよ、行は上一形より下臨終の十聲一聲、稱る者の千萬人の中に唯の一人でも若し極樂に往生させずば、我も永く佛とならじと誓ながら、十劫以前に正覺を唱へ、阿彌陀如來となり玉へば、たとへ其機は兎まれ角まれ、本願念佛を稱る者の往生することは、阿彌陀如來の正覺が印形手形より慥かなる證據、實に頼もしき事にあらずや、力とは阿彌陀如來の果上自在の神力なり、故に願力とは、阿彌陀如來の本願成就の御ちからと云ふことなり、不思議によりて淨土に生れなば等とは、思はんとすれば心も不^レ及^レ不思議の義、語らんとすれば言絶ゆるは不^レ議の義也、言思路絶の境を不思議不可思議と云ふ也、阿彌陀如來の願力には、如何なる所謂のありて「五逆十惡の機の臨終の十聲一聲迄稱る者迄、悉く往生なさしめ玉ふは、如何なる所以のあればやと、心に思ひ回らして見ても心に及ばず、言に語らんとすれども言はれぬを不思議と云ふなり、此不思議の法を強て思議すれば、強不思議の罪人と云ふて、終には心

狂亂する也、譬へばどう云ふ所以で春は花咲き、秋は實るぞ、どうした所以で、夏は暑く冬は寒きぞ、梨子は甘く、梅はすき、炎は上に登り、水はひくきに下る、等は中々愚凡の者が如何程考へても、百千年肝膽をくだいても分別は出來ぬ、學者でも色々理窟はつけて見れども、其根底は分る者でない、是れ皆法爾自然の道理にて、凡慮の及ぶものにあらず、此娑婆世界の、目に見、耳に聞こときへ分らぬ智慧を以て、佛果圓滿の本願の神力、分別なるべき筈はなき也、故に思慮分別を差し置て、金口誠諦の御言を仰で信するを、仰信の機とて宗の本旨と云ふ也、其願力の不思議によりて、淨土に生れなばとは、愚縛の凡夫の往生を遂ることとは、微塵計も自身の力がありて往生を得るではない、唯佛の本願の御力で往生を得るなり、此方には唯申せ救はんとある御誓を頼奉り、唯名號を稱たが佛の本願に相應して、極樂淨土に生れなばと云ふ意なり、身にも心にも歎き悲む業を離れとは、身には苦を離れ、心には愁と悲みを離る、也、

地獄餓鬼畜生の苦、人間の八苦、天上の五衰等の業をはなし、猶其上苦みの名をだに聞かぬなり、目にも耳にも悦び樂む等とは目には、常に萬德圓滿の本尊を拜し、觀音勢至無量の聖衆、及び空中地上の莊嚴を見、耳には常に阿彌陀如來の御說法を聞き、觀音勢至諸菩薩の法語、及寶池にたてる波の音、寶樹にふる、風の聲、虚空にしらぶる音樂も、鳧雁鴛鴦のさへづるも、皆甚深妙法なれば、見ても階位を超昇し、聞にも菩提を増進し、無爲常住の眞樂を受ることなれば、文に自利と云ふは、思ふべし斯の如く樂のみ有べきことを也、是が往生すれば、自利を他の二の益ある中の自利大益の意也。

●利他といふは思ふべし、爰にしては志深くたもひ浅からぬ人をも、恣にあはれみ孚む事なし。是れ二の益ある中の、利他の益を示す總標の文なり、思ふべしとは、上の如く熟々思ふて後にかへる詞なり、是れは往生を得れば、利他の大益あることを悦ぶ心を、強く起させんために、生死にあ

りては他をめぐみ、孚むことの心に叶はぬことをあかして、苦樂の雲泥なることを對待して示すなり、愛にしては志深く思ひ淺からぬ人をもほし、まゝに慈しみ孚むことなしとは、愛にしてと云ふは、總じては三界、別しては人界を指す、其の人界に付ていは、或は親、或は子、夫婦、兄弟、親族、朋友、家來の者等の、貧苦に苦しみ朝夕の煙もたね、肌身を覆ふ衣服さへ心に叶はぬ、其の上に債主の爲めに責められ、或は火難水難に遇ひ、或は見るも苦しき病に罹り、或は王法の禁令にあひて牢獄につなされ、手がせ足がせ水火の責に遇ふを見ては、身も心もあらねども、貧福ともに分齊に隨て満足せず、求不得苦の界なれば、救はんと思ふ心は廣けれども、はぐむ袖のせばければ、貧苦をぬいて福裕になす力らもなく、自業自得の病なれば、何程悲しう思ふても、病苦が代て受けられもせず、療治の方便を思ふても、名醫を集めては大變の物入、人參、犀角、熊膽の値ひの方便も出來兼ねれば、是れが爲に胸を焦し、

自身に威勢なければ牢屋を出ることもならねば、其方に向ひて涙を流すのみにて心に任せぬありさまを、志深く思ひ淺からぬ人をも恣にめぐみ孚む事なしと云へり。

●只徒らに愚なるあらましのみにて、いとゞ生死にめぐる業因を蓄ふ。

是は救度思へども其所作の出來ぬ故、何程言ても思ふても業の叶はぬことなれば、徒らごとにて無益也、あらましとは、我大名に成たれば其方に千石の祿をやらん、我富貴の身とならば、其方には家を作りて出店をさせ、其方には田畑を與へて大百姓とせんと云ふた計りで、其所作の出來ぬを、あらましのみにてと云ふ、いとゞ生死等とは、貧賤に苦むを救ひたし、病に苦むを快氣させたい心から晝夜心をいため、はては心に恐ろしきことをたくみ、口には種々の妄語を云ひ、身には殺生偷盜のわざをなす、是れ皆惡道に入るべき業、經に、人間一日一夜の中に八億四千念あり、念々の所作皆是三途の業因と、説き玉ひたれば、かりそめに

思ふことさへ皆流轉の業因なれば、まして三業麁業は勿論のことなり、故にいとゞ生死に回る業因を蓄ふと云へり。

●況や我に恩深き人、我故に多く惡道に沈みて苦患を受く、いかゞ是を悲しまざらん。

前は現在の親族等の苦に罹るを得救はざるの歎きを云ふ、此文は我に恩深き父母師長主人などの惡趣に沈みて、苦を受くるを救ふことのならぬ歎きを云ふ、其恩深き人々の惡趣に沈んで苦を受る、其本を計れば我を愛する心より、迷ひに迷を重ね、罪に罪を重ね、其報に依て三途に入て苦を受るなり、彼法藏の母は地獄の釜の中にて、孩兒を生育せる癡愛の故に今苦を受るとこたへ、讚岐房の母の餓鬼となりて、我子を養ふとて多くの罪を造り此報を受たりと云へり、實に兼輔の一人の親の心はやみにあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな」と詠る如く、子を思ふ親の心は、此世のみならず後世の暗にも迷ふなり、昔し叡山に正算僧都とて、其身至て貧しく西塔の大林と云ふ所に住け

る頃、歳の暮雪深くふりて訪ふ人もなく、ひたすら煙りの絶たる時あり、京に母があつたなれど久しく音信もせず、殊更斯う云ふ有様を聞かれなば、常に案じて苦勞をかける、わざと音信もせざりしに、雪中の心細さを推し量てか、又事の様子を聞かれたきにや懇ろなる消息あり、都だに跡たねたる、殊に雪深く嶺の住居さぞ心細からんぞと、細々云ひやり、又聊かの物を送られたれば、正算は思ひよらざる程に、いとありがたく哀れに思はるゝ中にも、此使の男のいと寒げに、深き雪を分け來りしことを哀れに思はれければ、先火など焼けて持來る物を分ち與へられければ、已でに食んとしけるが、箸うち立て、涙をはらくと落してはざるを、いとあやしく思ひて故を問はれければ、答て云ふやう、此送り玉へる物は、なほざりにて出來たるものにあらず、方々尋ねられしに何にもなければ、母御前の自ら御ぐしの下を切て人にたびて、其代りにて調へ玉へる物なれば、只今是をたべんと仕るに、彼御志の深き哀さを思ひ出て、

下郎ながらも悲みに胸ふさがりて喉に入待らぬなりと、さめくくと泣くを聞て、正算僧都も母の慈悲の廣大なるを良久く涙にくれられたとある、人間の斯く子を思ひ迷ふのみならず、畜生まで此一事はかはらぬ、鶏の子をあたくむるに、毛へだたりて思ふやうならねば、胸の毛をくひぬき膚に付て是を暖め、雉の子をあたくむる時、野火に合ひぬれば一度は驚て立ぬれども、猶捨がたさのあまりにや、煙の中に還り入、終に焼死する事多くあること、又鯨を取るにも、先親にかまはず子を取るを詮とす、子をだに取れば親はたとひ一應捕へずとも、幾度も立歸れば終に漁人に捕はるなり云々、畜類さへも斯くの如し、まして人間の恩愛をや、彼枝折山の故事可思合故に心地觀經偈云、世人爲子造諸罪、墮在三途、長受苦、男女非聖無神通不見輪廻、難可報、と説き玉へり、かやうに我故にこそ、父母は皆悉く三惡の苦報を受け、長時に苦むことは思ひもやらず、妻にのみ執著して親の死ぬるは悲みもせず、他人が悔

を云ふ時は、年に不足もなく順道の事なればあきらめて居りますと云ふ、畜生同前の者が多い、生存の内には席を扇ぎ床を温むるの孝行はせず、還て年寄の差出口を聞かずとも、だまつて御座れと目で見たまふす、死後には三日にして杖つくと云ふ禮儀もなく、忌中の慎みも世間並のことゆゑ、せうことなしに慎む位のことなれば、佛事作善も眞實ならず、豆腐一丁買ふにも胸をいため、線香もかつくにくすばりさへすればよいとて、安いが上にも安いのを詮議して求める、夫故慳吝なかと云ふに、子の誕生には干物では氣がすまぬから、近所になくば遠方の魚店まで走つて詮議せよと云ふ、斯く云ふ位な心なれども、亡者の生所は思ても見ず、年忌々日も忘れるようが多い、是等は形計りが人間で、心は畜生にも劣れば論にはならぬ、仍て今、生々世々の父母等の苦を受くことを思惟して、救ひ度思へども同じ愚縛の凡夫なれば、苦を抜き樂を與ふることの叶はぬを、其恩を報はんが爲にも本願を頼み、念佛して往生し救はん

思ひて名號を稱ふべし、(專修行者回向得、一念義不向失云々)恩を被て恩を知らざる人面獸心ならざれば、悲心が無てはならぬ故、況や我に恩深き人、我故に多くは惡道に沈みて苦患を受く、如何か是を悲まざらんと云へり、多と云ふは兩様に見ゆるなり、一義には、生々世々の親等の數多く惡道に沈み居ると云ふ意にも見ゆ、又は我を生育する親の内にも、適には善所に生を得るもあれども、多は惡道に沈むと云ふ意にも見ゆ、どちらにしても數多く惡道に沈み居るの義は同じ。

●淨土に生れなば心のまゝに慈み濟ふべし。
是より利他の益なり、佛の本願に乗じて往生すれば六神通を得る故に、心の儘に濟はるなり、豈に快にあらずや、已下は別釋。

●謂宿命智とて、宿を悟ることを得て其人を知り。

是より六神通を得るとを列ぬる中に、是は宿命智通なり、人娑婆にある中は、生々世々の父母等の生所を知らず、如何なる恩を受たやら其分けも知

らねども、往生を遂る時は衆生の世々に恩深かりし有様も、目前に見る如くに其人を知る也。

●天眼通とて、隔にもさへられず、遠く見る眼ありて其在所を見。

是は六通の中の天眼通なり、人娑婆にある時は、紙一枚へだつれば光を見ることさへ叶はぬ、父母妻子等は、生所は生を隔てしことなれば猶以て見ること叶はず、爾るに淨土に往生する時は、父母等の長夜に迷ふありさまも、まのあたり之を見る。

●天耳通とて、いかほどはるかなる聲をも、聞く耳をそなへて其聲を聞。

是は六神通の中の天耳通なり、人娑婆にある時は、少し隔つれば其聲を聞くことを得ず、まして生死を隔つる父母妻子等の聲を聞くことを得んや、爾るに往生すれば父母等の三途に苦みさけぶ聲をも聞くなり。

●他心智とて、いはぬ人の心をもしる悟りありて、其心に契ひ。

是は六通の中の他心通なり、人娑婆にある時は、

斯う云ふことゝ悟らねば、人の心を知る事は叶はず、まして生を隔てし父母妻子等の心を知る事は猶かなはず、爾るに往生を得れば父母等の八寒の水に閉ぢられ、八熱の炎に咽び苦しむ心をも知る也。

●神境通とて、無邊の世界へも一念の間に飛びゆく徳を具して其所に行き、彼を哀み是をすくうべき也と。

是は六通の中の神境通なり、人娑婆にある時は、一日歩行した所が十里か十五里、夫も至て達者な人でなければ得行ぬ、まして此國を離れて無量の世界に飛行することはならぬ、飛行はわく、日本支那天竺の有ることは知ても居やうが、其外に無量無邊の國あると云ふことさへ知らぬ位、爾るに往生を得れば、一念とまたゝく内に無量無邊の國に至り、父母妻子等を慈み救ひ、共に一佛淨土の華上に登り、同く安養界の月の下にあそぶべき也と、思べしと前にかへる、斯く熟々思ひ回せば欣求の心が起るなり。

●これ等の利益はいかに願はざるべき。

是は結勸なり、娑婆にある時は、志深き人の苦を救ふ事も思ふに任せず、まして三途の苦報を抜て樂を受させる力は猶なく、空しく手を拱て居ねばならぬに、佛の本願の神力にて往生を得れば自利さへあるに、利他の益迄を得て、恩深かゝりし父母師匠主君、いとをしかりし妻子家來眷屬に至るまで、苦を抜き樂を與ふる力を備へ、共に極樂に生ずれば、一立古今然の淨土なれば、國の壞する恐れもなく、壽命無量と能化も所化も命の盡る悲みなければ、娑婆の離別の苦みは無くなるのみならず名をも聞かず、父母も、主君も、妻子も、家來も、共に三十二相の花の姿となり、永劫無爲の樂を受ると云ふ、此二の大利益あれば、如何か願はざるべき、願はずして居られまいと結勸し玉ふ也。

●此たびはいかにも、往生を遂げんと思ふべき也。

此意は、此度往生せずば來世になりとも、其次の生になりとも念佛唱ふる身となりて往生せんなど

と、緩々とした愚癡な心を起すな、家焼人殺の麁業の罪こそあるまいけれ、煩惱具足の凡夫なれば、思ひと思ふことは後の世の仇、なしとなすことは此世の營みなれば、本願を頼み念佛せんより外は、皆悉く苦海に沈み火坑に入り、永劫苦報を得て浮む期なく、劫盡て人界へ生れても佛法流布の時に値難し、まして本願念佛に、遇ふことは、難値難遇とあれば遇ふことはならぬ、若し値ねば、五十年三十年人間となつたばかりで命終れば又惡趣に還る、斯く値ひ難き聞き難き本願に遇ひ奉りしことなれば、「此度を限りにせんと思ふかな、身も受け難く法も受難し」と云歌の如く、此度を生死流轉の終として、身を本願に打任せ、いかにも、とは、其勸る詞の慇懃丁寧なる也、斯く丁寧にすすめ玉ふ事は、禮阿向阿の上人のみにはあらず、阿彌陀如來は「待かねてなげくと告げよ世の人に、いつをいつとて急がざるらん」との玉ひ、釋迦如來は一代諸經に此事を勸め玉ひ、善導元祖の兩大師は此事を勸めん爲にこそ娑婆に出現し玉ひしと

なれば、口に語り玉ふもに、筆に記し玉ふにも、此一事の外はなく、一宗には曇鸞、道綽、懷感、少康、鎮西、記主、白旗、了譽、師資相承の勸め此一事なり、他門には、惠遠、南岳、天台、慈恩、嘉祥、明遍、顯眞、公胤、慈鎮等皆な此事を勸め玉へり、別して吾日本に佛教を始めて弘め玉ひし、聖德太子の御詠に、「急げ人彌陀の御船の通ふ代に、乗りかくなば誰か渡さん」との玉へり、是も幸に今本願稱名の流布する世にあへり、寶の山に入りながら手を空くして歸るな、此度の善縁を取りはづしなば渡す佛はあるまじ、諸佛は斷惡の衆生でなければ救ひ玉はぬぞ、惡人は惡人ながら唱ふれば往生と云ふ本願に遇た幸ひ、必順次の往生を願へとなり、已下は問答。

●問厭欣に淺深あるべきや。

是は上に段々、厭穢欣淨のことを示し玉ふによりて、其厭欣に淺き深きのかはりのありやと問ふ也、

●答機類多ければ其心一つにあらざるべし。是は總じて人の根機にさまぐががあれば、其厭欣

の心にも強弱ありて、一やうにはあるまじと答へ玉ふなり。

●謂一には上々の機、穢土を厭ひ淨土を欣ぶ心深く、往生をいそぐかもひたねず、報命に任する事をこゝろもなくして身を忽にすつ。

是より已下別々に答へ玉ふ、其厭欣の淺深に四機を擧ぐる中に、今は第一に、至て厭欣の心強き上上の機を示し玉ふ也、穢土を厭ひ淨土を欣ぶ心深くとは、彼熊谷入道の如く、「此世をば薪と、もにこりはて、もねたつばかり彌陀ぞ戀しき」と詠る如く、此娑婆に居るを火の中に居る如く、淨土を欣ぶ心の飛び付やうに思ふなり、往生を急ぐ思ひたねず、報命に任する等とは、一日片時も早く往生したく思ふ、命の限りに至る迄待たず捨身をするなり、其捨身にもさまじくありて、或は自害し、或は高樹やがけより落ちて死し、或は水に入り火に投じ、或は斷食頸くゝり等なり、彼の津戸入道尊願の腹を切り、天王寺に三七日籠りて念佛せし尼の海に入りて死し、奥州の即往の斷食往

生等の如し。

●大師の在世に身を高嶺に投、命を深泉に捨るもの百餘人におよべりといふが如し。

是は上に、厭欣深き人の捨身往生の事を示して其現證を引玉ふなり、大師とは善導大師也、其御在世の中念佛勸進し玉ふに、彌陀の垂迹の大師なれば、上博學の智識より下は一丈不通の者迄も行届き、念佛するもの幾萬人と云數はしれぬ、其中に至て厭欣心の深きものあつて、或は高き山岸より身を投て死し、或は深泉の淵に沈み、或は體を布に包み其上に蠟を流し、頭より火を付てもね死る等の人が、百人あまり有たと新修往生傳や、高僧傳にあるを今の證據に引き玉ふ也、斯う云ふことを聞ても、今時の人は多くは祈禱の札で紙帳を拵へ、中で供物の菓子をかじつて命を延べたがることなれば、たとひ念佛申ても捨身の氣遣はなけれど、若し千に一人も成程捨身は左様な事、所詮心に任せぬ娑婆に長居するは無益なこと、藥鐵道心を起し、つまだてかける人があるまいとも云

はれねば、云ふて聞すが、上代の人は機根がすぐれて居る故に、死を恐るゝ心もなく、淨土を欣ぶ心が深かければ、たとひ捨身しても往生しそこなはね其、今時は世下り至て下根なことなれば、往生を仕損じて却て惡趣の苦を受る、下根下劣の身を以て上根上機のはたらきをせば、うの眞似をする鳥の入水故、元祖大師、二祖上人、決して捨身を思ひ立つたと重疊に誡め置き玉へり、昔京都に、蓮花城と云ふて人に知られた聖が有て、卜蓮法師と云ふ人と心易く過けるが、年頃ありて此の聖の云ふやうは、今は年にそへてよわくなり行けば、死期の近づくこと疑なし、終り正念にて隠れんと極めたる望にて侍れば、心のすむ時入水をして命終せんと云ふ、卜蓮法師是を聞き驚て、夫れは有べき事にもなし、今一日なりとも念佛の功を積んとこそ願はるべけれ、左様な行は愚癡なる人のするわざなりと云て諫められたれども更にゆるぎなく、思ひ堅めし體に見なければ、是程思ひ定められし事なれば、留めるに及はず、そう云因縁人に

て有るらんとて、其程の用意なんど力をわけて沙汰せられて、終に桂川の深き處に至て高聲に念佛申て、時へて水の底へ沈みし也、聞及ぶ人は市の如く集りて、且は貴み悲しむ聲もやまなんだ、卜蓮は年頃親まれし事なれば、一入哀れに思ひて涙を拂て歸られたが、そうして日頃經て卜蓮法師が怪しき病が起て、あたりの人も怪やしく思ひて兎角しあつかふ程に、靈顯れて過にし蓮花城なりと名乗る、されども此こと實とも覺わられず、年頃相知りて終りまで更に恨まるべき事なし、況や發心の有様なほざりならず、貴くて終り玉ひしに非ふと云へば、物の怪の云やうには其事なり、入水の事をも能く制し玉ひしものを、我心の程を知らで云ひ甲斐なき死をして、さばかり人の爲にもあらねば、其際にて思ひかへすべしとも覺ざりしが、如何なる天魔の仕業にや、正しく水に入らんとせし時、忽ちくやくしくなり侍りし、さればとてさばかりの人の中にて、如何にして我心と思ひかへさ

ん、哀れ只今制し玉へかと思ふて、目を見合たりしかど、知らぬ顔にて今はとくくともよふさるれば、水に沈みし其恨めしさに、何の往生の事も覺えず、すゝろなる道に入て侍る、最後に口惜と思ひし一念によりて、かくもうで来るなりと云しと(發心集、六丁)是は勝他名聞にしたではなければ、自身の機根を計らず、上根上智の眞似せし故に、往生の大益を取りはづして惡趣に沈みて苦を受る、是等を聞てたとひ僅かに道心が起て、捨身の心が起るとも、前車の覆るを見て後車の誠とするがよい、是のみならず、小原の頸くゝり上人などの類(砂石四丁)何程もある、實に用捨すべきことなり、是等は皆道心ありて往生を急ぐ心より、捨身せられたれども斯云ことなれば、まして勝他名聞より起て捨身する西の尾の上人の類は云に及ばず、三惡に入て苦を受る、今時は至て末世故、道心起して死するはなければ、其外で死は多し、或は子が不孝者故悲さの餘りに死し、或は夫の異な妻を重ねるを恨めしく思ふて、嫉妬の念

から死し、或は至て見苦しき病を受て、人に顔を合すことを歎きて死する、或は色慾の迷ひ強く、逆も此世にては思ひの儘にそはねば、死んで未來で心の儘に連れ添はんと、進物の鯛や鴨を見る様に、男女一所に並で死ぬる類、一年の内には何程もある、是は業力が強き故因果の道理をしらず、此世の僅かの苦しみに絶え兼ねて、未來で此苦に百千萬倍強い、三惡道の大苦痛に苦むと云事を知らぬ故、實に憐むべき極り也、若し此座にも、不孝の子を以て苦しむ人が有るならば、韋提希夫人の太子阿闍世の大不孝を縁として、娑婆を厭ひ極樂を欣ひ玉ひしを手本として、苦しいにつけては追付極樂に往生せば、こう云ふ苦を免がれ樂みを受けんこと悦しきや、助け玉へ南無阿彌陀佛と唱ふべし、そうすると此世で斯ふ云不孝な子をもたず、孝行をする子を持たば、娑婆執著して極樂往生を欣ふ身とは得なるまいに、還て大きな仕合譬へば灸をして病を受ぬやうなもので、斯ふ云縁に遇ふのは悦ばしい事じやと思ふ大智慧が起る、

そうすれば、子の不孝なものも苦にならぬ念佛が進むなり、斯ふ云ふたら孝行な子を持た人は、此方が子は孝行な故、心に苦みがないに依て、大方あれは前生の敵か天魔が子となつて來たであらうと思ふまいものでもないが、夫れも心得違ひ、成程なんぼ孝行にしても、念佛の障りになるは生々世世の敵か天魔の業に違ひはなければ、世間の孝を盡す上に、念佛の勤めよいやうにしてくるれば大善知識なれば、悦び進んで勤むべき也、扱又夫が異妻を重ねるも嫉妬の心を起さず、我なくば思ふ人を此家に迎ひ心能く連れ添ひ玉んに、されども子供ありて離れ住む身ともならねば、知らぬ體にて過し、還て夫の苦勞するを哀み、「風吹はかき津白波たつ田山、夜半には君が獨り行くらん」と詠せし人を手本として、恨み妬て此世にては生ながら蛇となり、未來は三惡道に入り大苦を受ぬやうにするがよい、若又夫が強て我を厭ふ心あるならば、彼祇女の、「もね出るもかるゝも同じ野邊の草、いづれか秋にあはではつべき」と詠じて身

を遁れて尼となり、往生院に入て念佛せられし故事に習ひて尼となるか、又障りありてさうもならぬは、在家の儘で念佛を勤め、惡縁に遇たを縁として往生を願ふが肝要、己れやれ嫌はれた面當に、きつとした所へ再縁して見しようなど、あらぬ心を起して、業に業を重ねぬがよい、若又夫婦中よく暮すとも此世に執著せず、とても夢幻の世なれば、共に念佛して往生せんと、互に勧め合て念佛を進むがよい、扱又業障重くして見苦しき病を受けば、是を厭ふ便として往生を欣ふがよい、かりにも我慢名聞を起して、未來の苦報に薪をそへぬ事也、若念佛申にならぬ已前は健康息災にて、念佛申になつて後にそう云ふ病を受たならば、是迄に造りくた罪で未來は必ず墮獄するに極つてゐる所に、念佛申せば順次往生する故、熟した罪報を受る時節がない故、未來に地獄の大苦を受る代りに、此世で病を受くること也、若不定業で救はれる事ならば、彌陀、釋迦、諸佛、諸菩薩、諸天善神迄、念佛申す人をば影護し玉ふとあ

れば、惡病の有ふ筈はなし、是は還て轉重輕受の御慈悲ならんと、悦び勇み本願の念佛を唱れば、斯穢らはしき體を忽に紫磨黄金の肌、三十二相の大菩薩となさしめ玉ふ事を思ひ回らし、一入念佛を勸むがよい、若し謬て念佛申す人の業病をわづらふは、佛の慈悲もあてにならぬなど云ふ念を起すと、此思ひ違ひの邪見の業によりて、大地獄に入ると、經文に説きたれば慎べきの極りなり、古徳は、我今癩病を受くるとも、一念も悲む心なくして歡喜すべし、人も忌嫌へば自ら暇ある身となれば、念佛を進む便りある故なりとの玉へり、是等の道理を聞分けて二世不得の身とならぬやうに用心すべし、扱又年若の内は、別して淫心が盛な者故、思ふに任せぬ事あれば、まゝ心中と號して互に相殺して死する事あり、甚だ愚癡の至り、儒では此の身をそこなひ害すれば、父母の遺體をそこなふとて不孝とす、其上兩親の歎き親族の外聞、一として大非ならざるはなし、其上未來で連添ふと思ふても、自身自身の罪に輕重あれば、同

じ地獄に行く事さへ叶はねば、まして連添ふ筈はない、序でにそう云ふ死をした者の獄苦の相を云て聞さん、正法念經に衆合地獄の相を説き玉ふ中に、又復獄卒取地獄人置刀葉林見彼樹頭有相好端正嚴飾婦女如是見已即上彼樹樹葉如刀割其身肉次割其筋如是劈割一切處已得上樹、已見婦女復在於地以欲媚眼上看罪人作如是言念、汝因緣我到此處汝今何故不近來汝何不抱我、罪人見已欲心熾盛次第復下、刀葉向上利如剃刀、如前遍割一切身分、既到地已彼婦女復在樹頭、罪人見已而復上樹、如是無量百千億歲自心所誑、彼地獄中如是轉行、如是被燒邪欲爲因已上、此意を金葉集に和泉式部、「あさましや劍の枝のたわむまで、こはなにの身のなれるなるらん」と、詠れた可恐可愼、かりの浮世の色に迷ふて未來の苦を受るは、愚癡なることにあらずや、元祖大師の値ひ難き佛法に遇ふ事をと云ふ題の意にて、「かりそめの色のゆかりの戀にだに、あふには身をも惜みやはずる」と

詠じ玉ひたる心に習ひて、唯一筋に本願に遇ひたるを悦び往生を欣ふべきなり、戀路の思ふに任せぬより、心を起して佛道に入るためし、古今其數擧て數へ難し、事長ければ今は略す、能々思ひわくべき事也、本文は、厭欣心深く上々の機の捨身往生等せし人を擧玉へば、是等を見て自身の機根を忘れて、捨身を思ひ立つなど云ふ事を云ふた迄なり、斯云へばとて捨身往生した人を、やくたいもない事など思ふは罪を受る事なり愼むべし。●二には上機、厭欣の心深しといへども、生けるをも悲しまず、又死するをも歎かず、たゞ畢命爲期の教へを守る。

●彼吉水上人の禪勝聖にの給ひしが如し。吉水上人とは元祖大師の御事なり、東山吉水に住み玉ひし故に、御名を云はずして住所を呼ぶは敬の言なり、智者大師を天台大師と云ひ、善導大師を光明大師と云ふが如し、但し吉水和尚と云ふて慈鎮和尚の事を呼ぶ事あり、又西山にては吉水大師と云はず、キツスイ大師と云ふ、其詞には。●生らば念佛の功を積り死なば淨土へ参りなん、とてもかくても此身にはおもひ煩ふ事ぞなきと。此御詞御傳に兩所にあり、禪勝上人に告玉ふは今と少異あり、正しく今の御詞は御法語の中にあり、爾れども心は異なることなし故に失なし、生らば念佛の功積りとは、此娑婆の中にて一日夜勤むれば、淨土で百年勤めたると同じこと也、其故は淨土は苦みなく、唯樂のみにして甚だ勤め易く、娑婆は苦界故勤めやうと思ひ立ても、何か障り計りが出來て甚だ勤めにくし、其勤めにくい中で忍で勤る故、佛もいと哀れに思召、其功德が百倍すると經に説き玉へば、生ある中に一日も一

時も一遍もよけいに申そうと勵む故、生らば念佛の功積りとの玉へり、死なば淨土へ参りなん等とは、念佛申は死んだ時往生しやう爲なれば、病死はたろか横死に遇てもうろたへた心は出さず、娑婆は悪縁多き故に退縁のをそれあれども、淨土へ往生すると、阿彌陀如來及び觀音勢至等の御説法を聞き、水鳥樹林の音も甚深の妙法なれば、見るに付聞くに付佛道を昇進し、不退と云ふてあともどりの恐れなければと往生を喜べば、生けるにもせよ、死るにもせよ、兎ても角でも思ひ煩ふことなきとなり、偕父死なば淨土と定むる淨土は、報土と云ふて至て位の高い淨土なれば、容易の事には思はれぬ、なせと云ふに、聖道門の自力で云へば隨其心淨の無漏智を發し遍滿眞如を悟り、初地已上の菩薩でなければ往生することはならぬ、先天台で六即の位を判するに、彼禪宗の祖師達磨大師の悟りの位を洪覺範と云ふ人が判じて、相似即に十心ある中の第三心に當ると云ふ、天台の祖師智者大師の位は、自身も荆溪も一同に五品

觀行即の位との玉へば、相似より劣る也、爾れば達磨天台も打任せて死なば淨土とは云はれぬ也、兩宗の祖師さへそう云ふ事なれば其餘は論にのらぬ、達磨大師天台大師の智道兼備の高徳さへ、自力で往生叶はぬ淨土へ、一毫未斷の愚縛の凡夫、一文不通の無智の者の、上一生より下臨終の十聲一聲唱へた者迄、安々と往生するは何から發きた事、皆な阿彌陀如來無窮の大悲、本願他方の神力に乗する故の事、斯ふ云ふ道理を聞ながら往生したい心もなく、念佛唱へんと思ふ心も發らぬは、寶の山に入て手を空しくして還るよりは劣れり、能々思案して見るがよい、欣はず勤めずには居られぬ筈、是から下の二機が皆此方の當り前ぢやが、チト是迄に手の届く人は少なからうが、好めば自ら發心するの道理なれば、心にかけて念佛すすむがよい、たとひ又此機に至りても、我が如くに厭欣心も立てこそなど、自身を物だて、佛の悲願を輕しむる者は、往生はならぬ事なれば、強て厭欣心ありなしの沙汰より、唯一向に佛願を仰で

念佛一行を進むがよい。
●三には中機、隨分に厭欣の心ありといへども、忽に死ぬべしなるときく時は、肝つぶれて命を惜む心不圖忸こるべし、是れ無始より習へる思ひ常の凡夫の心なり。
是は四人ある中の第三の機なり、是れが通途の中機なれば多くあるなり、隨分に厭欣の心あり等とは、平生より知識の開導に預り、娑婆の厭ふべき理り、淨土の欣ふべき道理をも聞わけ、日課誓約して往生を欣ふ故、厭欣の心も隨分とほどぐにはあれども、或は病氣になりて醫師の脈など見て、所詮もう叶はずと云ふを聞た時は、驚て命惜む心が我知らずと發ることあるべし、是はさのみ此世に執著の心より發るではなけれども、生々世世我を大切にする、我執著の熏習によりて發るなり、此命を惜み習へる事は、人間天上は云ふに及ばず、畜生の中にも大身はさらなり、至て微少な命惜む心ありそむない子子虫でさへ、人の足音を聞けば皆水底に入る、別の事ではない命を惜む心

あるからなり、夫は愚か、命の終るを道理として喜びさうな地獄の罪人が、苦報を受け盡して餘界へ生れんとする時、涙を流して悲むと經文にあれば、成程習ひ性となると云ふ、熏習ほど強き者はなし、若し不心得な人が有て、イヤそう計りも云はれぬ、色欲故に命を惜まず死を急ぎ、捨て難き命をなんとも思はず、引回しにあふ罪人の、馬の上にて歌うたひ、士だになほつて聲色をつかう類ある故と云んか、夫れは酒に酔ふた人のやうな者、無明の酒に酔て心が眞の闇になつて死ぬるは論にはならぬ、死んで歎くは、前に云ふ如く生々世々の熏習ゆゑ、通途念佛する人の、ふと其念を發するは凡夫の習ひなり。
●然れども次の念にたもひかへして、惜しむべからざる理りにおちゐて、後さらにたどるかす、一すちに思ひさだむるなり。
前念に死を歎く心の不圖起れども、直に後念に思ひかへし、ハテ我ながら淺間しき心を發した事や、平生念佛勤めしは極樂に往生せん爲なれば、

命終らんこそ本意なれ、譬へば悪き古家を捨てて好き新宅にうつるやうな物なれば、悦ばねばならぬ道理、最早臨終に程もあるまじければ、追付御來迎の粧を拜し、觀音の蓮臺に乗り目出度往生せんものと落着して、是れより後更に驚かず、一筋に思ひ定めて往生をまつなり。

●四には下機、道理によつては厭欣の心を發すといへども、水に畫くが如くして、やゝもすれば理りをうしなひて、あはれつひに行道だにも實になかりせば、さらぬ別れをなごか歎げかんやと思はれ侍りて、穢き心のみぞ常なる。

是は四人の中に第四の下機で、念佛申す者の中は最下の人のありさまなり、厭欣心内よりは發らねども、或は經釋を見、或は知識の勸めを聞て、道理にをれて受がう心を發せども至て下機なれば、やゝもすれば生々世々の我執に引かれて、見し經釋の道理を忘れて、聞きし無常の理をも失ひ、穢土の執心離れ難くして、哀れ冥土の途のなくばよからん、死と云ふことが無くば、いつ迄も妻子眷

屬と一所にありて、斯く去り難き別れを歎く事も有るまじきに、など云ふやうなる賤しき心のみ多く起り、道理にをれて無常を思ふはたましく、常はきたなき心計りなり。

●然れども、さすがに又惜むとも止りはつまじければ、思ひ押して往生を願ひ、本願の不思議を頼み念佛の功德を積む。

然れどもとは、上の常に穢き心を起して、そうはあれどもと云ふ意なり、さすがに等とは、大水出で、其跡に水はなけれども、其名残りに砂の残りたるが如し、譬へば武士の落ぶれて禮儀の正しきなどをさすがにと云ふ、其如く無常の道理をば失ひ穢き心が起りしも、思ひかへし、惜むとも惜まらざるべき道かとは、眞實心の底より起るにはあらねども、道理を以て穢き心を押付て佛の本願を頼み、受た日課を勤むるなり。

●此人正しく病重もく死にいたらん時、念佛の力の御助けにて、娑婆の執心漸くわすれ、淨土の願念屢々起るべし。

上の如く、道理を以て執心を押し付く、受た日課を怠らす勤めた故、病を受け臨終に至らん時、日頃つとめた念佛の薰力が穢土の執心を押しふせ、佛の慈悲の御力を加へ玉ふによりて、執心起らず淨土に往生せんと思ふ心しはく起る也、念佛の力とあるは、念佛申た此方の力と云ふ事にはあらず、南無阿彌陀佛と申せば佛の本願に叶ふ、其本願の念佛は萬徳所歸の無上の大善功德なれば、其佛の功德所成の念佛の力と也、(他力の事なり) ●或はまたうるはしく佛を見て後、妄念ながく止みて正念たちまちに得るもあるべし。

上は來迎の佛を拜せぬ已前に、正念を得る人をあかし、是は目のあたり來迎の佛を拜で後、正念を得る人に就ての玉ふ也、是れ來迎の上の正念で、佛來迎し玉へば天魔跡をけづり、三種の愛心等も起らず、唯往生せん事のみを欣ひよるこぶなり、若斯く云ふを聞て、成る程此人は來迎の上の正念疑ふ事なし、爾れども上の人は正念の上の來迎に非ずやと云はん、なれどそうでない、上は佛來迎

より已前に、慈悲力を以て正念を得せしめ玉へば、自身の力らで正念になれるにてはなし知るべし、但し正念の上の來迎を不正義と云は、正念にて念佛せざれば來迎もなく、往生をも得せじと云ふをきらふ也、上機の平生より厭欣心強く念佛する人も、臨終には皆不正念になり、其上にて來迎を拜し、亦前の如く正念になりて往生すると云ふ事には非ず、一途に來迎の上の正念と云ふを聞て、混雜する事なけれ。

●慈悲加祐令心不亂の佛の御契りは、人に隨ひていづれにもあるべし疑ふべからず。

是は上に來迎を拜せぬさきに佛の慈悲力にて正念になり其後に來迎に與ると、來迎を拜して正念になり往生するとの二人をあげて、其正念の遲疾はあれども、二人共に佛の他力にて平生のきたなき執心なく、正念になると云ふ事を示し玉ふ也、慈悲加祐令心不亂とは、稱讚淨土經の文なり、經云、臨命終時、無量壽佛乃至來住、其前、慈悲以加祐令心不亂、是文は不正念のもの臨終に佛來迎

し玉ひ、慈悲力を加へて正念にならしめ玉ふ、來迎の上の正念の證據なり、文は正しく來迎し玉ひて慈悲力を加へ玉ふ説相なれども、前の來迎より先に正念になるも、佛の慈悲力の加祐也と云ふ證にも備へ玉ふと見わたり、人に隨ひて何れにもあるべしとの玉ふ此心なり、父子相迎下本九、彌陀慈父の大悲かぎりなく驚きさわぎ玉ひて、菩薩聖衆もしづ心なく、來迎の儀ときをいそがしませば、先づ其切ちなる御志し先だちて行者の身を助くる故に、病苦うすらぎ正念あきらかになりて倒わすれ心みだるゝ事なければ、等とあり、説必次第になづみて、一文多含を忘るゝ事なかれ。

夾註に、今しばらく四の機をいだす、こまかにはかきつくしがたし。
實には機に千差あれば、厭欣の淺深も萬別なれば、今略して四人の淺深を分別すると云事也。

●問厭欣と三心と同じきや。
問の意は、厭欣あれば必三心あるか、但し別かと問なり。

○答三心には必ず厭欣あるべし、厭欣はやがて三

心にはあらず。
答の意、三心には必厭欣あるべしとは、別は必ず總を具す、眞實に往生を欣ふ人は厭欣自らあり、三心あれば總安心別に起らざれども自ら厭欣あるなり、厭欣はやがて三心にあらずとは、穢土が物うきとて欣求にあらず、極樂を欣ふた計りで、行がなくては往生ならず。

●三心といふは行について本願を信じておこるべきなり、厭欣はしかあられども又あるべし。

是は三心と厭欣とに總別のわけある事を云に、三心は行に取付て始めて具するなり、厭欣は本願を信じ、行を起さぬ前方にもあるなり、苦にあふてはあゝうるさき娑婆やといひ、曼荼羅を拜しては斯く云所へいつたらよからうと云等の如し。

●それ人界に生るゝことかたし。
已下は厭欣並べ學て、穢土にながらへ度思ふは迷なり、東を西と思ふ如し、必此生に往生を決心せん事を結勸し玉ふ也、文に夫とは發語の詞也、人界に生るゝ事難しとは、六道の中にて出離生死に趣き易きは只人界を最上とす、惡趣は苦痛ひまな

くして修行すべき縁をかき、其業障甚だ重ければ修行せんと思ふ心も起らず、現に死靈の託せしに、念佛せよと勧めるに申度ても申されぬと答ふる也、又天上は欲樂にふけりて厭離の心なければ、修行に趣く心發らず、彼師子覺すら五欲にねばれて、修行を忘り玉ふにてなぞらへしるべし、唯人界のみ苦樂並ありて、苦にあひて厭離を生じ修行の心を發し、五欲の樂もやがて懷すれば生死を厭ふ縁となり、其上思ひ立し事をなし遂げんと思ふ心、餘界に勝る故に佛法の器なれば、此人界に生れ出る事難き也、譬へば一年の内人界に居る事は一日計り、其餘は惡趣等にある也、故に經に人界に生を受るは爪上の土の如し、惡趣に沈むは十方大地の土の如しと説き玉ひ、或は人界に生ずる事の難きを譬へ玉ひては、盲龜の浮木にあひ、うどん華のまれに開き、或は天上より糸をたれて、大海の底にある針の穴につらぬくよりも難しと説き玉へば、此度人界に生を受たる事を喜ぶべし、若し人界に出しとき佛法に入らねば、又惡趣

にかへれば人界に生れし甲斐なき也。

●たとひ人界に生るといへども、南洲に生るゝ事かたし。

たとひ等とは、餘界に生を受るは多く、人中に生るゝは至て少なれば得難きなり、其中にたとひ生れがたき人間界に生るゝとも、此南閻浮提に生るゝ事又難ければ二重に難きなり、南洲とは須彌山の東にある國を弗婆提と云ふ、西にあるは瞿耶尼と云ふ、北にあるを鬱單越と云ひ、南にあるを閻浮提と云ひ、南洲と云ふも同じ事なり、天竺唐土日本等は南洲の中也、其四洲の中にて北くるじうは一向佛法なく、東の弗婆提と、西の瞿耶尼とは菩薩の慈悲にて、たま〜に暫くあることも頓に退轉して相續せず、唯佛の出世し玉ふは南洲計りなり、餘洲には佛の出世もなく、教法流布も甚だ稀れなり、先づ是で受け難き果報を二重迄受たる事を喜ぶべし。

●たとひ南洲に生るゝといへども、佛法に値ふ事かたし。

是は上に二重の受難を受けても、佛法にあふ事は盲龜の浮木にあふよりも難き也、此南閩浮提にも、住劫二十劫中は佛出世し玉はず、今は第九滅劫にて四佛出世し玉ふ、釋尊は其第四の佛也、其釋尊の説き玉ふ教法も、正法五百年、像法千年、末法萬年が間計り也、其後は教法滅盡する也、(正像末の三時に異説あれども、宗談は上の如し)、故に佛法流布は甚短く、流布せぬ時は甚だ長き事也、爾るに我等佛の出世には三千年後れ奉りたれども、教法流布の世に生れたれば、釋尊の在世にあひ奉るに同じ、元祖大師の御詞にも、正に今ま多生曠劫を経て生れ難き人界に生れ、無量劫を送りても値ひ難き佛教にあへり、釋尊の在世に遇はざる事は悲しみなりといへども、教法流布の世にあふ事を得たるは是喜也、たとへば目しひたる龜の浮木の穴にあへるが如し、この玉へる心也、是で三重の受がたき果報を受たる事を悦ぶべし、今時教法流布の世なりといへども、聞かんと思心なき人あり、或は世路にひまなくまぎれて一生を過

す人あり、又邊國等は佛法も行届かぬ事なれば其縁欠たり、東國の邊鄙には出家を見て住せよといへども、あまり邊鄙故久しく止まるものなし、故にたまたま來る僧あれば強て妻を配す、是は其僧の妻子に執著して久しく住せん事を願ふ故なりと云へり、斯云處は何程も有べし、幸に其やうな所にも生れず、盛に佛法の行はれる所に生れ、世路にいとまなきもくり合せて法を聞く人となる事は、細かに云へば重々の果報なれば悦ぶがよい、(邪教を信じて三途に入る、業障思合すべし)。

●たとひ佛法に値といへども、彌陀の本願にあふ事極めてかたし。

是は凡そ佛法に値ふ事は必ず宿善によると云ふは、小乘(俱舍業品)大乘(大論六十六丁)其許の定判なれば、實に宿植善根の人にあざれば聞難き也、其の聞き難き佛法をば聞とも、又彌陀如來の本願念佛往生の法に遇ふ事は極めて難きと也、經に云、難中之難無過此難と説きたまへり、此文の意によれば、難中之難の言に、台密禪華の四法を

攝し、無過此難の言は即ち本願念佛の法に當るなり、然れば念佛の一行は法王、餘經はすべて法臣也、餘經の中にも法華を經王と云ひ、金光明經を經王と云等の説あれども、夫れは餘經の對待にて、念佛と對待して云ふにあらず、知る故は、法華の寶塔品に六難を擧といへども、難中之難無過此難と説玉はず、或は又た眞言宗の依經とする大日經には、眞言所行道復倍甚難遇と説たまひて、法華眞言等も只一重の難也、爾るに大經には難中之難無過此難と重々に説き玉へり、是れ得益の甚深なる故也、故に淨教は法王、餘經は法臣と云ふ也、斯く云ふ所立は淨土宗のみに談するかと云ふにそうでない、禪宗飛錫禪師は、念佛の法門の書を作りて寶王論と題し、惠遠大師は念佛を王三昧との玉へる等、其數爰に擧げ盡し難し、如是重々に値難き事なれども、今の本文によれば、是で四重の値難に値たり、能々思ひわきて喜ぶ心を起すがよい。

●たとひ本願に遇ふといへども、うるはしくこれ

を聞くこと、難が中に轉た更にかたし。

是は本願念佛を聞く中にも、或は聖道の人の勸むる等は、練磨本宗の執あれば、三學の域内に滯り念佛餘行同等のやうに説く、或は觀念のすぐれ但念佛は劣るやうに云なし、或は四流六派と分る中にも、多くは異義を存じて、善導元祖の教に合せず、又至て甚だしきは一念義の邪徒の如云々、是等の邪師邪教の世に多ければ甚だ恐るべし、爾るに是等の邪教にも落入らず、釋迦彌陀二尊の願教、光明吉水兩祖の教の正統を聞くことを得て、順次往生掌をさす如きの教を聞くこと、難が中に轉た更に難しとの玉へり、是で五重の果報を得たる事を喜ぶべし。

●今たましく是等の縁を具せり、知るべし生死を出で淨土にいらん事まさにこのときなり。

今たましくとは、まれにと云ふに同じ、是等の縁を具せりとは、生れ難き人に生れ、殊に四洲の中にも南閩浮提に生れ、値ひ難き佛法にあひ、其佛法の中にも頓中頓の妙法とある彌陀超世の本願に

あひ、其上光明吉水の御傳への正流の説を聞事を得る等の、五重六重の善縁をろひて、かげ目なき果報を得たりと云ふ心なり、知るべし生死を出でて淨土に入らんこと正に此時なりとは、自身受難き重々の善縁受け得たる事を思ひ知りて、生死流轉の世界を離れ、但受諸樂の淨土に往生すべき事は、實に此度ならでは叶はぬ事と、ひしひしと思ひ定めよと也、已に受難き善縁を重々に具しても、此世に執著して往生も敢はず、本願名號を唱へねば、諺に云ふ佛造て眼を入れぬと云ふと同じ事で何の益もなく、寶の山に入て手を空しくして、又珍しからぬ三惡の苦を受ん事は悲の極りなり、惡趣に沈みて責められる時になりて、娑婆にありしとき重々の善縁を具し、其上知識吳々も、十遍なりとも百遍なりとも日課をつとめ、彌陀如来の本願に打立られて、極樂淨土に往生せよと勧められたを、無常の速なる事を思はず、いつでもつとまるやうに思ひ、一生は盡れども希望は盡すと、渡世の事や五欲の樂みに迷はされて、なす事

なくして命をはり、斯云ふ大苦に沈む事のくやしやと、後悔の涙にくれ居ても、獄卒は用捨はせず、罪人に向て汝本作惡業爲欲痴所誑、彼時何不悔今悔何所及と云て責むと、正法念經に説かれたれば、空しく過して後悔せぬやうに心がくるがよい、善導大師も般舟讚に、一入泥梨受長苦始憶人中善知識と云ひ玉へば、「後の世といへば遠きに似たれども、しらすや今日も其日なるらん」ゆるゆると先き頼をする心を誠めて、身分相應に日課を受て順次に極樂往生と、ひしひしと本願を頼む心を起すがよい、故に生死を出て淨土に入ん事正に此時なりと知べし、との玉ふ。

● 靜に案じ思ふに、天台華嚴の妙なる教へ、眞言佛心の深き傳へ、此法に遇といへども機をはかり身を知るには、遠き結縁をば實に悦ぶべしといへども、近き得益のうすからん事は、あだかも遇はぬ嘆きに似たらんか、これ彼の法の愚なるにはあらず、たゞ此身の拙き故なり。

是は聖道淨土對待して、生死出離の遲疾をあらは

し、念佛の法門ならでは今時出離の道の絶にたる事を示し、念佛の一法を勸進し玉ふ、彼願阿法師「西へ行道より外は今の世に、浮世を出る門やなからん」と詠する心なり、靜に案じ思ふにとは、閑窓にありてつくづくと出離の道を案じ見るにと云心なり、天台華嚴等とは、已下に先づ天台、華嚴、眞言、禪宗、の四個の大乗を擧て難證なる事を示し玉ふ、先づ天台の所立を云は、煩惱即菩提生死即涅槃と觀じ、華嚴には初發心地便成正覺と談じ、眞言には父母所生身即證大覺位と、禪宗には直指人心見性成佛と示す、是等は皆初心のときより只心性の珠を磨き、本有の理を顯さんとする教へ也、是れは皆釋尊の説教金口の誠言にて、妙なる教へ深き傳へとの玉ふ也、今時の日蓮の黨、一念義の所立の如なる邪義邪教とは、天地黑白の違ひにて、實に甚深微妙の大法なり、如説の修行にたゆれば此土入聖疑なき也、實に法は甚深微妙なれども、根劣にし觀智を具せざれば、生死出離して成佛する事は叶はぬ也、故に永觀惠心等の先

徳も、利智精進の人はこれを難とせず、予が如き頑魯の者其機にたへず、故に本願を頼み稱名を行じて、他力に乗じて往生せん事を欣ふとの玉へり、既に永觀惠心の智解深遠の方々さへ、自力の修行を闕て偏に佛願に歸し玉ふ、爾るに今時の道俗を、永觀惠心等の先達に比べ見ば、先徳の智は大海の如く、今時の智は馬蹄のたまり水の如し、爾して他力の教をたとして自力の修行力にて出離を期せんとするは、足なへの富士上り、盲目の黑白を争ふようなもの、其上聖道門の人は自宗の教の甚深なるのみを贊して、而して修行に怠り觀智をこらさぬ人が多い、佛法の大事は機と教と相應して、如説修行せねば生死が離れられるものではないに、自の根機の沙汰はせず、唯教の微妙なる事のみを云て居るは、丁度喩へて云なら、中風病人が正宗の刀を持って居るやうなもの、なんぼう刀が名作でも、持べき人が持たねば役に立ぬ、是れは皆空腹高心の無道心にて、生死出離と云處に眼がつかぬからの事ぢや、今時の自力門の修行位で

生死が離れられようなら、或は定に入り或は蛇身を受けて、彌勒の成等正覺を待て居らる古人達は愚痴の至り、若し其の古人達が道心ある故隔生即忘を恐れて入定せらるゝが至極の道理と云へば、今の聖道門の人のわづか朝暮の勤行位で、強て觀智をこらさず、蛇身をも受けず入定も思ひ立ず、いたづらに明し暮さるゝは出離を嘆く心なく、眼光落地の當下いかんと云ふ眼がないに違ひない、今の文の意、華天密禪の妙なる教に遇とも、自身の根機が下劣な故、機教相應せねば、遠き結縁にはなるべきなれば、悦べき事なれども、近く順次に往生と云やうなる速疾の利益にあづからねば、此邊について云へば、一向佛法に逢はぬ嘆きにも等しからふと云事を、靜に案じ思ふに乃至あだかもあはぬ嘆きに似たらんかとの玉へり、斯云へばとて、餘の聖道門の教を劣りたりと云にはあらず、法は甚深の法なれども、機が下根で其教の通りに修行の叶はぬ故の事ぞ、若し其教法を益なき事のやうに思へば、誹謗正法の大罪となる事故、其わ

けをことわりて、是彼の法のわるかなるにはあらず只此身の拙き故なりと示し玉へり。
 ●しかるを斯のごとき、拙なく罪あるをもすてじと慈しみ給ふは、獨り阿彌陀佛の本願なり、この本願に遇ふことは唯此度のみなり、ふかく超世の佛恩をわもひしらすばあるべからず。
 上の如く、聖道の教にはあひ奉りても、機に叶はねば利益すくなきと云を、はしを改めて、已下に淨土の機教相應の大利益ある事を云んとして、爾るを問の言を用ひ玉ふ、阿彌陀佛の本願の一法は善惡智愚の撰びなく、十惡五逆の罪人の臨終の驚下に至て、十聲一聲稱る迄、悉く淨土に引接し玉ふ事にて、諸佛の慈悲に超過する故、終窮無極の大慈大悲ぞと云事を、斯く拙き罪あるをも捨じと慈み玉ふは獨阿彌陀佛の本願なり、との玉ふ、此本願にあひ奉る事は、無始より已來只此度のみじや、若し已前に此法にあひ奉れば、此頃は報身報土の蓮臺上に登り、普賢文殊と肩をならぶる大菩薩となつて居れども、今迄終にあひ奉らぬ故、

今此八苦充滿の人界にうろついて居る、爾るにはからずも、此度難値難遇の本願にあひ奉りし事なれば、歡喜踊躍して彌陀如來の五劫の御思惟、兆載永劫の皮肉分張の難行苦行あそばしたも、皆我我を慈れみ玉ふ大悲にて、實に諸佛に超過せる御慈悲の程を思ひしり、決定順次往生と手強く思ひ定むるが肝要、故に本文に本願にあふ事は只此度ののみなり、深く超世の佛恩を思ひ知らずばあるべからず、との玉へり。

編者云、本書并に説明の順次は念佛三心第二なれども頁數の都合に依り原稿の儘を存して、念佛三心は下卷となす、讀者之を諒とせられよ。

●自力他力、第三。
 自力他力とは、自力は聖道門、他力とは淨土門也、其意は龍樹菩薩の十住毘婆娑論より出で、言に顯れしは曇鸞大師の論註なり、其趣きは穢土にありながら不退に至る道を自力と云ひ、淨土に生れて無生を悟るを他力と云ふ也、自力をば陸路の歩行苦きにたとへ、他力をば水路の乗船の樂きにたとへたまへり、廣くは選擇集の一章段及び代々の祖

師の判釋許多なり。

●夫自力といふは自らの戒定惠の三學の力にて、この娑婆世界にして佛にならんとする、これを自力となづけ。
 ●夫れとは發端の詞、自力聖道の修行は戒定惠の三學をみがき、煩惱を斷じ隨其心淨即佛土淨、娑婆即寂光淨十此の中に成佛せんとはげむ事也、爾れども、聖道の諸宗に於て此世で成佛した人は聞ぬ、佛在世より已來龍女が即身に成佛したより外はない、夫れも過去に修行の功がつみつんで有りし故、其外には絶てない、弘法大師の禁中にて大日如來となられたも、覺鑊上人の不動と變せられたも、わづかの中にも本形に還りて、始終大日不動では居られぬ、それも内證の衆故ちよつと竹田のからくりをせられた迄、成佛とは云はれぬ、上代さへなければ況や末代に於をや、成佛は愚か分證にさへ至る人はない、故に安樂集に大集月藏經を引て曰、我末法時中億々衆生起修行道未有一人得者、と云ふ文を引玉へり、故に不退を得ぬ内は隔生即忘の怖れが有る故、諸宗の祖師大德の念

佛を修し玉はぬはなし、祖師先達さへ淨土を欣ひ玉ふ、末學の者は往生の教をわとして、爺嫗だましの法門ぢやなど、謗法罪を造て無間獄に墮するとはいかなる心ぞや。

●他方といふは戒定惠の三學具し難きが故に、佛の本願を頼みて淨土に往生する、これを他方といふなり。

淨土他方の法門と云ふは、戒定惠の三學は上に云ふ如く、如法に修行し得る事は上代すら希れなれば、況や末世の凡夫鈍根無智、無有出離之縁の機開悟し難が故に、法藏比丘此機を哀れみて大願を起し玉ふ、其本願を頼み願力に引立られ、淨土に往生するを他方と云ふ也、爾るに極樂は報身報土大乘善根の界なれば、往生するやいな直に齊しく菩薩となる、本願力の故に自然に三學を具足する也、譬へば江南の橋を江北に栽れば根となると云ふ如く、娑婆江南の凡夫の橋を、江北の極樂にうつせば忽ち菩薩の根となる、導師の、未_レ籍_二思量一念功_一不覺轉入_三眞如門_一と釋し玉へる是なり、是を他方と云ふ。

●また自力をば聖道門と云ひ、他方をば淨土門と云ふ。

聖道門は初に菩提心を發し、三學を修して自らの力にて入聖得果する自力を聖道門と云ひ、淨土門は菩提心を發し萬行を修することの叶はぬ者の爲に、本願を建て玉ふ故、其本願にすがりて捨穢入淨する、全く佛の他力の故なれば淨土門と云ふ、聖道淨土の名目は西河禪師にはじまる。

●又自力をば難行道となづけ、他方をば易行道となづくる也。

難行道とは、自力修行の容易ならざる事は、峻しき山路の越がたきが如くなるを登る如く、漸々に修行をこらすに譬ふ、故に龍樹菩薩の論判にも、陸路の歩行は苦しきが如しとの玉へり、易行道とは佛の願力にすがり、唯助け玉へ南無阿彌陀佛と唱ふる計りにて、學文せよとも念佛の功德を思量せよともなければ、つひ唱へた計りにて往生を得る、山越をすれば自身の力が入用なれども、船に乗れば何の苦勞もなく至りつく、船と船頭の他力による如なれば、龍樹菩薩は水路の乗船は樂さが

如しと論判し玉へり、古歌に「船しあれば千引の石もつかぶてふ、誓の海になみたつなゆめ」と云はる如し、元祖大師の云、自力他力、聖道淨土、難行易行、言ば、異にして意同との玉へる今の意也云々。
●問或人念佛かまへて多く申さんと思ふは自力の心なり、往生すべからずといふ、此義いかん。
念佛多く申を自力と云ふ事は、元祖大師の御時代より起り、二祖上人の御時は餘程廣まりたる事と見て、御著述の書に往々是を制し玉へり、一念義を立たる人は成覺房幸西とて本は叡山の學徒なりしが、中頃心を發して元祖大師の御弟子となりしが、いつかは道心もさめ念佛も物うくなり、罪惡の心きざして師の教にそむき、習ひし天台の本迹の義に依附して、本門の彌陀は無始本覺の如來なるが故に、我等所具の佛性と全く差異なし、此いわれを聞く一念に事たりぬ、多念數遍甚だ無益也と云ふて、一念義と云ふ事を自立しけるを、上人此義導師の教にそむけり、甚だしかるべからざるよし制し仰られけるを、承引せざりしかば、弟

子にあらずとて擯出し玉ひし也、夫より越後の國に下り此義を弘めける時、基親卿より元祖大師へ御尋の時、是れはこれ附佛法の外道なり、天魔の説なりとの御返事、(翼贊、名義集)其後に成覺房は越前の國に移り、終に還俗して織田大明神の神職の聲となりしと、成覺の弟子に善心房と云へる僧、越後の國にて一念義を立けるを、光明房と云へる人心得ざる事に思ひ、上人に御尋申されし御返事には、心に道心なく身に利養を求む、是に依て恣に妄語を構へて諸人をたぶらかし、渡世の計として未來の苦報をかへりみず、姦しく一念の僞法を弘めて無行の科を謝し、剩へ無念の新義を立て、猶一稱の少行を失す、微善なりといへども善根に於て跡をけづり、重罪なりといへども罪障に於ていよく、勢を増す、刹那五欲の樂を受んが爲めに、永劫の三途の業を恐れず等。
●答念佛多く申を自力と嫌ひたる事は全くなき事なり。
先念佛を多く申すを自力と云ふは、名目をよぶか

らか文盲から起る、自力とは、自身に萬行を修した
 ほせて入聖得果する事をこそは云ふなり、故に龍
 樹大士の論判、鸞、綽、導の三師、空、辨、然の
 祖師等の釋皆な爾なり、既に名目の立やうさへ心
 得ぬ盲坊の云ふ事也、又戒を持つも自力也、何程
 の悪人も助かる事なれば、惡を恐るゝは本願を疑
 ふ自力根性、一念歸命の信で助かる事を疑ふに依
 て數遍をつとむる也、此人は化土の往生などゝ、
 一向佛法中に無き得手勝手的事計り、内證事を云
 ふて無智の人をたぶらかす也、故に元祖大師は此
 人を附佛法の外道、天魔、波旬、獅子身中の虫、
 往生極樂の仇敵なり可_レ恐々々との玉へる也、信を
 ば一念にとりて行をば多念にはげめとこそあれ、
 一念歸命計りで往生濟んだとは釋釋に絶てなき事
 也、本願の文の乃至を、導師の釋には上盡一形と
 釋して一生申す事との玉へり、又三萬六萬十萬者、
 皆是上品上生人の釋等、又元祖大師は日課七萬遍、
 鎮西記主共に六萬遍、故に文に數遍を自力と嫌ふ
 事は全くなき事也とあり、全くとは、少しもなく

ちりほどもなきと云ふ事也。

●禮贊には、今身に彼の國に生せんと思はん人は、
 心をはげまし己をせめて晝夜にわするゝ事勿れ、
 上一形にあるは少苦に似たれども、前念に命終し
 て後念にかの國に生すといへり。
 今身に念佛申て本願に乘じ、順次に極樂往生せん
 と思ふ人は心をはげまして勤むる也、是行者の用
 心也、心は怠たるものなれば夫れに従はざれ、故
 に華嚴に、心の師となり心を師とせざれとあり、
 古歌に「引かれなば惡き道にも入りぬべし、心の
 駒のたづなゆるすな」ゆゑに今も心にまけず、寒
 い暑い、ひだるい草臥た、どうか心持がわるい、
 あすの事と云ふ怠りの心が出やうとも、出息入息
 を待ぬ世を、のどかに思ひたぼゆる淺ましやど、
 四修を以てはげまし勤むべきなり、己をせめて
 とは、少しなりとも多く申さんと勵むなり、故に
 釋には自策自勵求常住とあり、賢を見て齊しから
 んと思べき事、導師の寒中にも汗を流し、身勞れ
 ざれば道場を出玉はぬ事など思ひ合せ、分々に勵

むなり、晝夜に忘るゝ事勿れとは、長時修無間修
 の意也、用心は、よきが上にもよかれとすゝむと
 云はゞとて、懈怠の者の往生を疑ふはあしゝ、其
 勵みて一生勤むるは少苦に似たるとて、五欲にふ
 けり惡業を結ぶは、凡夫の好むはあたりまへ、夫
 をやめて念佛すれば少し苦に似ると也、なれども
 實の苦にあらざれば似るとあり、其上斯く勤むる
 を傍の人が見れば苦に似たれども、つとめなれた
 れば苦にはあらず、却て世事にさへられて勤めら
 れぬ日は、心ならぬ事故苦になる也、彼の「はじ
 めには物憂かりしが今は又、念佛せざればわびし
 かりけり」と云ふ斯の如く、受た日課の早く出來
 て申し越の出來るときは、大きに心よく樂しみに
 なる也、修して見れば知れるなり、そうして一生
 勤むれば、前念に命終り後念には彼國に生すとあ
 り、禮贊の次下の文に、長時永劫受_レ無爲法樂、乃
 至成佛不_レ經_レ生死、豈非_レ快哉應_レ知とあり、今前
 念に命終す等とあるは、低頭禮佛在此國、擧頭已
 入彌陀界の意也、已下は抄主の述懐。

●たとひ倦くおほゆとも、心を策まして是を行せ
 よと社勸められたれ、此釋をば何とかいはんと思
 るや。

意は前に云ふ如く、引立々々せぬときはめいるも
 のなれば、たとひ倦く覺ゆるも策勵して勤めよ、
 其勵すとは、たとひ出離を期するとも聖道難行の
 修行に向けては、木戸さして牛追と云ふか、鳥を
 河に入れ魚取せよとすると同じ事で、所詮根機に
 たへねば仕方はない、三惡道へ行かいで叶はぬ
 に、千生一遇の淨土微妙の他力本願に回り値ひ、
 順次往生する法門を聞きながら悦ぶ意もなく、其
 のにぶき心を勵ます志もなく、只事を本願によせ
 て、懈怠にすぐるを信者と云ふの理あらんや、凡
 そ十念一念も悉く往生するは、深重大悲の本願の
 設け也、多念は行者の用心なれば混すまじき也、
 故に倦くとも策みてつとめよと也、爾るを附佛法
 の外道の邪計に、多く申すは自力、一念の信で往
 生相濟だなど、云ふ類が多いが、此禮讚の釋を何
 んと意得る事ぞ、何と云ふぞと責め玉へる也、若

し此釋文の通りに解せば自策自勵なれば違害があらうし、いや夫れは善導大師の釋しそこないぢやとは云はれまい、なせなれば、既に善導獨明佛正意など云ふもたかし、渡世誑惑自損々他、天魔なり、外道なり、往生極樂の仇敵なり可恐々々。

●問一念十念ばかりにては往生すべからずとおもひて、多く申さんと勵むをば、きらふべしや。

是も宗の意に違す、安心を不_レ知上根なる人などに、まれにこう云ふ人もある也。

●答これ是一念十念の功を疑ふ心を嫌ふ也。

一念十念往生は佛の本願なれば何の疑かあらん、其旨は元祖の釋に諸書に出たり、一念に一度の往生をあて玉へるとぞ、夫れを一念十念の功を疑は僻見なり、譬へば千年の間積みたる茅を豆計りの火を以て滅する事なしと云んや、無始より積み重ねたる惡業の茅に、一念十念の豆計りの火を投すれば、一聲稱念罪皆除と消れてしまうて、往生疑ひなきなり。

●吉水の傳には、若一念十念不足なしと思ふて行

を倦くする人は、いふべし信が行を妨げたるなりと。

引文は、上人の御法語御傳二十一卷にあり、是れは正しく一念義の所立にもあらず、云はゞ一念義の異計と云ふべし、本願は一念十念も助け玉へば、數遍無益なりとて怠るは信が行を妨る也、一念十念は、平生申て其後は一向申さず、どのやうな罪造りでも往生ぞと云ふ事にてはなく、是れは一生の間法門を聞かず知らずして、臨終の時初て知識に勧められて、申たる人の往生すると云ふこと也、故に本願の文には乃至とある、平生よりの信者は一形の相續なり、故に導師の自解佛願の妙釋に、上盡二形下至三十聲一聲等定得往生とある也、誤ること勿れ。

●若行をひまなくしてこそ往生すべけれ、一念十念の力ばかりにては往生すべからずと思ふは、いふべし行が行を妨ぐる也。

一念十念の往生を疑ひ、無間につとむる人のみ往生すべきやうに思ふは甚だ誤れり、一つを積めば

こそ數遍になれ、其一念を疑へばいつ迄も不定の念佛になれば誤りなり、是れ行が信を妨ぐる也。

●此故に信をば一念にとりて行をば無間にはげむべきなりとあり、此教へ明かなり、かたわちすることなかれ。

信を一念にとり行を多念に勵むが、淨土宗の正義なり、罪人の十念一念の念佛にて往生を遂ること、觀經の下三品の説なり、何に依て金口の經説を疑ふことを得んや、一念十念の往生なれば、夫から申すに及ばぬと云ふは僻見なり、一念十念も行者の金剛の志に依れば上品にも生るれども、心は無形にて其限り知り難ければ、行について意得るときは一念十念は下品、三萬已上は上品と心得て多念に勵む也、彼の熊谷の下八品の往生を欣はず、必定上品と願はれしと思ふべし、下機は夫程にはなるまいけれども、娑婆で一日一夜の修行は、淨土の百年の修行にあたる説きたり、さすれば十日十夜は千年の修行にあたる也、又一念大利無上功德、萬德所歸の名號を稱へずして、惡業

に計り心をよする理のあるべきぞ、己々が分々に、一聲なりとも多く申さんと心得べき也。

●止惡用心、第四。

止とは禁止制止とつゞきて、とゞめやむる也、惡は惡業也、惡業は聖淨二門共に流轉の業なること同一なり、用心とは、火を握れば手を燒くが如く、惡を造れば往生の障りと用心するが如く、盲人の杖をはなさぬは溝瀆に落入らぬ様にとの用心なり、准らへ知るべし、凡そ一代の教へは止惡と持善との二を不出、此二つあるを善人と云ふ、さて淨土を欣ふは善人なり、いや本願は惡人往生を許せばこそ格外超世の本願と云ふにあらずや、爾るに止惡を云ふはいかにと云ふに、

十惡五逆は往生するにあらず、一念十念の持善名號にて往生する也、日頃の惡業を慚愧す、或は顯にし、或は言には不出心に悔ひ悲みて、口に念佛する是則止惡なり、念佛するは是持善なり、止惡持善かけざるなり、又惡を悔ひざる人は教へても念佛不_レ申なり、爾れば十惡五逆も止惡の機なり、

又平生の人も最初に往生せんと思ふとき、悪作て往生せんとは不_レ思、前の咎を悔て今より念佛せんと思ふ也、總て悪人が念佛申すと云ふことはなし水中に火なきが如し、念佛申しは善人也、爾れども凡夫なれば悪念起り悪業をも造る、其時に淺ましや助け玉へと取て返すを隨犯隨懺と云ふ、されば腹立中にも名號を唱るは淺ましと思ふ心起る故なり、取て返して念佛相續すれば惡は朝日にきゆる霜の如し、故に惡をば止めんと思ふ意樂を立つべし、一念義等の如く惡無過の見に落入ること勿れ。

●夫れ聖道も淨土も止惡の意は同じかるべし。夫は發語、聖道の成佛も淨土の往生も共に善人になるべき爲なり、但し聖道は我と勵む行なれば不誠自ら惡を止むべし、我宗は殊更惡を可_レ誠なり、譬へば金銀を遣ふ人は我と金銀を得る心あるべし、又己れ貧にして金銀なく人のあはれみにて世を渡る人は、何ぞ猥りに遣ふべき、其人に見限られざるやうにすべきが如し、他力を頼む人は殊に

惡を止んと思ふべき也、意樂とはこゝろもちなり、地盤なり、諸惡莫作は諸佛の通誠也、聖淨同一にして又別あり、其止惡の意樂は既に惡と云ふからはよきものにはあらず、極樂へも惡で行くではなし念佛の善が行なり、故に止惡の意樂は同じ、爾し止めんと思へどもやまらねばとて、是では念佛申ても不往生とは思ふべからず、止まらぬは彌々頼みて南無阿彌陀佛。

●然るを聖道門のこゝろは、必ず此を斷じて生死を出づべきなり。上は二門同く止惡の旨を明し、已下二門の不同を明す、淨土門にては隨犯隨懺をも往生の機と定めぬれども、聖道門では必是を斷ずるとて必の字を置、必は必定とてゆるぎなきことば、此惡を決定必定止めねば聖道の出離は叶はぬ、故に聖道は三惡道の網を切り、無窮の生死の種ねを斷盡し果るに至極とす、生死を出るとは、凡佛法は生死を出て涅槃に入るの外なき也。

●されば煩惱を盜人に喩へて、これを戒律の兵を

以てこらへ、禪定の繩をして縛り、智慧の劍をして殺すといへり。煩惱は業の根なり、此根より枝葉の惡業を生み出す也、盜人に喩ることは、盜の財寶を奪ふ如く、煩惱は諸善功德の寶財を奪ふ也、其盜をこらゆるには、戒律の兵を用ゐざればとらゆることならず、戒律とは、大小乗の五八十具三聚十重等の制教也、禪定の繩を以て縛るとは、戒律の兵が煩惱をこらへても、又してもにげんぐとあがき回る故に、禪定の繩にて縛る也、心を靜むるを繩に喩ふる也、智慧の劍をこは、般若の智劍で、煩惱の盜を殺してしまへば、生死に滞るべきいわれなくなる也、故に三學圓かにせざれば聖道の修行は成せぬ也。

●若し惡をやめずば戒を破る也、戒破れれば定發るべからず、定なくば慧生すべからず、慧なくば煩惱を斷すべからず、煩惱を斷せずば生死を出る理りなきなり。

ば、煩惱惡業猛風の如く勢ひ強ければ、功德の寶財残りなく奪はる、定は戒に依て起るものなれば、本の戒律破るれば禪定の繩もなく、定より生ずる慧なれば殺すべき劍なし、三學なければ煩惱の盜人を何を以て斷せん、煩惱を斷せざれば出離生死の理は絶果てなきことぞ也、聖道門を修する人は、三學に堪るか堪へぬか我身を顧みて、兼て悔しからぬやうにはからふべし。

●淨土門のこゝろは、止むべき思ひはあれども、緣に値ひ境に向ひて、力未よばず犯すといへども、意樂を破らざれば正見の人にて往生を遂ぐべきなり、隨犯隨懺の教思ひ知るべし。

已下は淨土宗の止惡用心の、聖道門に異なるを顯し、本願大悲の深意を教へ玉へり、本と惡は輪回の因なれば、淨土門にても止むべしと思ふ意樂は同じことなれども、歷緣對境すれば下根未斷の凡夫なれば、惡縁に押しふせられて惡造ることあり、其縁に値ふ等とは、金銀財寶を見れば欲しく思ひ、美食を貪り、女色をしたふ、我に順へば貪を起し、

我に違へば瞋を起す、等の仕ぞこなひするを犯すと云ふ也、犯と云ふは姪戒のことのみと思ふは誤り、何でもすまいと誓ふた悪事を誤て作すを犯すと云ふ也、そう云ふ仕損ひをして、こは情けなき迷ひ様かな、已後は屹度慎まんと思へば、惡無過の見に落入らねば、正見の人とは云はれて、申して往生を得る人也、故に隨犯隨懺の教と云ふ也、聖道門は惡をば斷せねば出離は許さぬ、正見の分では叶はぬを、大悲超世の本願力故に、往生の人と定めらるゝ有難きことに非ずや、能々思ひ分つべしと也。

●されば吉水の傳へには、罪をば歎くとも本願をば疑ふべからずといへり、たもふべし。
罪造るをば歎くともとは、極樂を欣ぶ身のあさましやと歎くなり、さればとて罪造ることの止らぬ身なれば、往生すべからずと思ふを自造罪退とて誠むる也、誤て罪造りたれば彌々本願にすがりつき助け玉へと頼むべし、罪造るものを助けじこの玉は、諸佛通途の慈悲にて超世本願の義は有べ

からず、故に彌々頼むべし、罪造りても大事ないと思へば、惡無過の見なれば往生叶はず、故に隨犯隨懺の教との玉へり。

●かゝる拙き身なればこそ、三世の諸佛の利益にも漏れ、十方の淨土にも嫌ひ捨てらるゝと身をしれば、救ひ玉はぬ佛の御咎もたはず、悲むべし歎すべし。

佛法の大道理は、善因善果惡因惡果、有漏無漏の因に従て得るの果なれば、少分の私もなき也、爾るに我等は三學無分の凡夫なれば、番々出世の諸佛の利益にも漏れ、六道四生を流轉して無窮の楚毒を吞むべきことは、蠶繭の自縛身から出た鋪なれば、諸佛の救ひ玉はぬも道理にして佛の咎がにはまします、もにすむ蟲の我から悲むべし歎くべし。

●然るを今我が阿彌陀佛かゝるを悲み、是を恵みて超世の願を發し玉へり。

然るをとは、上を結び下を起すの詞、今は端をあらたむるの義也、故に諸佛にも捨果られし無願の

惡人、出離無縁と定まるに、そふあるを今我阿彌陀佛の救ひましますやふを云なれば、はしをあらたむる詞也、我とは親み奉るの詞、我朝など云ふ意に同じ、かゝるを悲み是を恵み等とは、其諸佛に見捨られし我人を、我も又同じさまに見捨てて、永劫出離を得る期はあるまじと、我身一つのことと思召れて、念佛往生超世別願を起し玉へること也、故に五會讚に、彼佛因中立弘誓、聞名念我總來迎、不簡貧窮將富貴、不簡下智與高才、不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深、但使回心多念佛、能令瓦礫變成金、といへるは、持戒も破戒の善し惡しは更にも云はず、但南無阿彌陀佛と唱ふれば、石瓦を變じて金となす如く、往生成佛なさしめんと也、是れを超世の別願と申し奉るなり。

●禪林の語に、我等若し智慧も深く戒行をも能く守る身ならましかば、必しもあみだのみ思ひ極樂のみやは願ふべき、いづれの佛をもたのみ何れの淨土をも求むべし、我身のたろかに罪深かけ

ればこそ、阿彌陀ほとけならでは濟べき佛もななく、極樂ならでは足を入るべき淨土もなければと、わりなく彌陀如來をのみ頼み、一とかたに極樂とは願ひ求むれといへり。

引文は永觀律師の十因に見たり、是は罪を歎ぐので本願を疑ふべからずと云ふ證據に引玉へり、さればとて、永觀は無戒無智也とは思ふべからず、是は末代の衆生になりかはりて仰せらゝ語なり、文の意は、智慧も深く戒をも堅固に持つ身ならば、阿彌陀佛をのみ頼み極樂往生のみ願ふには限らず、餘佛を頼み餘の淨土を願ひても、往生すべきなれども、此方の如きは愚にして智慧はなく、罪深くして持戒ならねば、箇様の下機を助けんと云ふ佛は、三世諸佛の中にして阿彌陀佛一佛より外にはまします、往生すべき淨土は西方淨土より外にはなければ、わりなくわき目ふらず、ひた頼みに阿彌陀如來をのみ頼み、一とかたに一偏に極樂を願ひ求むると也、是の文は諸佛は罪あるをば捨玉ひ、彌陀は罪あるをも念佛だに申さば助けん

とある邊に約して釋し玉へり、尅して云は、たとひ智慧あり持戒なりとも、餘佛を闍き彌陀如來に歸し奉り、極樂往生を願ふべきなり、いかんとなれば、上は等覺の文殊普賢を初め奉り、十四佛國及十方薩埵、馬鳴、龍樹、天親菩薩、流支、曇鸞、南岳、天台、等偏に極樂を願ひ玉へるより見れば、早作佛國の譽れいちじるしきこと知るべし、爾れば智ある人さへ願ひ玉へる淨土、愚人豈に願はざらんや、持戒すら欣ふ況んや破戒の餘佛に捨られし身をや。

●されば罪の止み難く妄念の發りやすからんにつけても、佛の誓を頼みて本願を悦ぶべき也、何事にか疑をば發すべき。
罪の止め難く、妄念の起り安きにより、此分にては念佛すとも往生叶はじと思ひ定むるを自造罪退の機と云ふ也、宗の意は、息れどもくやめられざるは何爲、只須願彌陀本願、只須唱他力名號、自身現世罪惡の凡夫なり、唯平に助け玉へと本願にすがり付く思ひになるべし、本爲凡夫の本

願、往生すべきに疑しきこと微塵もなきなり。
●問是程に罪をゆるさば、本願にほこり惡無礙の義に同じかるべきや。

惡を止め妄念を止めよと勧めず、只本願を頼みて往生を得るとゆるさば、惡を造りても大事ないと云ふ、惡無礙の邪見に同じかるべし。

●答本願には罪人を救はんとあれば、罪を恐るゝは本願をしらぬなりなど云ひて、恣につみを造りて、さきにも後にも恐るゝ心なき是を嫌ふなり、今はしかにはあらず、諸惡莫作諸善奉行といふは諸佛の通誡なれば、此旨を意樂に持ちて、止めにつべからむ程は罪をも構へて止め、守りにつべからん程は戒をも守らんと思ふなり。

今云ふ處と、惡無礙とは、天地隔別也、其惡無礙とは、一念義の所立の罪造らじと思ふが本願を疑ふなれば、心に任せて造るべしとて、表はれて惡を造り隨處とて悔ゆる心はなきなり、其心なき故上品纏とて、極惡業の因を造り堅むるなり、譬へば物の命を取るに、初に其殺す方便を思ひ立ち、

正しく殺すときは、能くした物と悦び、殺し終て後もあゝ本望を遂げた心よきと悦び、三時に少も悔ゆることなく、却て悦び功德になることと思ふ如く、罪造るさきにも諸惡莫作等の正見なければ哀します、後にもあゝ情なやと悔る心なく、是れこそ本願を信じ切つたる御同行の安心よと云ふは、惡無礙の邪見とて墮獄する人なり、前に云ふ處の、罪の止め難きに付ても佛願を頼めと云ふは、凡夫の習ひなれば、諸惡莫作の意樂はあれども、仕損ふては罪造るなり、其時は極重惡人無他方便、大悲本願の願力にて、かゝるものをも助け玉へと頼めと云ふこと也、罪を造れと云ふには非ず云々。
已下の本文并に來迎引接第五は缺て稿なければ附言して結び畢。

淨土要略抄講說卷下

●念佛三心、第二。

上の厭離穢土欣求淨土の總安心に次で、念佛三心と、本願念佛信受の行者の別安心を示し玉ふ、諸三心は萬行を提る能持の心と云ふて、念佛本より諸餘の萬行を修するにも、此三心を具せざれば往生は不成なり、故に觀經に、定善の終り、散善の始に、三心を説ひて、定散二善に通せしめ玉ふ、西山流などにては三心は念佛に局り、諸行には通せぬ故に諸行不生と立つれども、正流の意は、三心諸行に通ずる故、堪能の機の前には萬行往生を許すなり、なれども諸行は非本願の行なれば千に五三と云ふて、念佛の本願の行にて百即百生の大利益あるには似すと云ふなり、爾るに今念佛三心と簡別の言を置て、萬行の中に念佛との玉ふは、源本願の文に至心信樂欲生我國とあるは、稱名の行を成就せしめん爲の本願なれば、稱名は選擇攝

取の行、諸行は選擇の行なれば、本意に約して念佛三心との玉ふ也、凡佛法の基本は心を立つるにあり、故に聖道門には上求下化の菩提心を發すを本とす、若菩提心なきときは所修の萬行徒に有漏人天の果となり、無爲佛果の資糧とならず、故に尤も發心を肝要と習ふ也、且天台に依れば藏通別圓に、生滅と、無生と、無量と、無作との四種の菩提心のやうを判じたまふ等云々、如是初發心より菩提心發すを要とすれども、眞の菩提心を發すことは無漏智を得ることなれば、凡夫の發す分際には相似の菩提心とて、眞の菩提心に似よりたる心を發す也、淨土門の意は阿彌陀如來の因位五劫の御思惟のときに、愚縛の凡夫の菩提心を發すべきことは甚難きことなれば、選り捨て本願とし玉はず、往生の心は至心信樂等の三心と定め玉ふ、是に付ても横に具し豎に具する等のわけありて、下々の凡夫も發し安き心なれば、萬機普益の大法門と云ふなり。

●夫三心といふは、西方の指南往生の妙術也、稱

名の行人まづこれを要としるべし。

是當段の惣標也、夫とは發語の言、三心と云ふは觀經の所説にて、一者至誠心、二者深心、三者回向發願心也、此三心を安心と云ふ也、安とは安置の義にて、念佛者の心のするやう也、凡諸法は因縁の二つを具せずと云ふとなし、譬へば五穀は種子の因に水土の縁を具すれば芽を生ずる如く、行者の内因に佛の外縁が加はれば往生淨土の芽を生ずる也、行者の内因とは此安心の三心と、起行の念佛の行との二つが行者の内因也、外縁とは本願也、其外縁の本願に神變不思議の力あれども、若し行者の内因がなければ往生することはならぬ、丁度外縁の水土はあれども、無因にしては草木も生ぜざる如し、但し其内因も本より凡夫の心行なれば、生死を出て報土に往生すべき因にはあらねども、佛の本願の増上縁によりて小因大果となる也、譬へば龍の一滴の水を以て四天下に雨を降すが如し、龍力の不思議なるも、一滴の水の因なければ雨を降すこと能はぬが如し、本願の神力も、

行者の内因がなければ、因果應報の理に叶はぬゆゑ救ひ玉ふと能はず、故に三心と云ふは西方の指南往生の妙術也との玉へり、指南とは周公旦の作の車の名なり、磁石のどうでも北へ向く様に、自然と南に向て行く様に作りし車也、此は肝要と云ふ心もあり、又事跡に親むやうに理をとれば、三心を起せば西方に行くこと、指南車の南に向ふに似たりと云ふにもなる、妙術とは奇妙祕術と云ふことにて不思議のてだて也、斯く云ふ三心は大事の法門故、稱名の行人は此三心の法を肝要として知れとなり、後の起行に對して云、久修の行者は心行相資とて、行によりて心を起し、心を起して行を資することあれども、初入の行人及び法門の次第は心行と次第する故なり、是が總標の文意、扱斯く三心の法門を談するを無智の者が聞て、念佛の行は諸宗の教へに異にして、勸めも易く往生も易きこと、聞しに違ふて、三心とやらんをも心得分けねばならぬとならば、所詮此身は叶はぬことなれば、往生すべきこともならぬかと悲む人が

あるうもしれぬ、其爲にことはる、たとひ三心の名をだに聞かぬ人なりとも、只助け玉へと思ひて南無阿彌陀佛と唱へだにすれば、千人に一人も往生せぬ人はないと云ふが、善導大師元祖大師の御教へなれば、露も心にかけることはない、今斯く三心の沙汰あるは、虚假、疑心、不回向と云ふ三の病を治する爲めに三心が肝要なることなり、本より病なき行者の爲めには入用のことはない、斯云ふ道理がある故に、御傳に抑上人或る所には三心のやうを委しく教へ、ある所には三心の沙汰詮なきよし仰せられたり、是れ人によるべきこと也、名號を唱ふれば必ず往生する計りまめやかに頼みて唱れば、其人の心に自ら三心も備りぬるを、中々に三心とてことごとくしく申しなす程に、かへりて信心をみだることも侍る也、かゝらん人の爲めには三心の沙汰無益のことなるべし、若し日頃は疑の心もあり三心具せぬ人も、聖教を學すれば道理にをれて三心の起ることもあれば、左様ならん人の爲には、三心のやうを知らんも大切なるべし、

一向にこれを非せば又其のとがあるべし、此のすぢを心得なば、上人兩様の御勸進さらに相違をなすべからざるもの也已上、此文分明に疑等の病のある人の爲に三心をば沙汰し、只助け玉へと思ひて念佛する無病の人の爲には、三心の沙汰はいらぬなり、なせなれば其人の心にきつと三心具足して居ればなり、されば此文のみにあらず、御遺誓には但し三心四修と申ことの候も、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内に籠り候なりとの玉ひ、又たゞ平に信じてだに念佛すれば、すゞろに三心はある也、さればこそ世にあさましき一文不通の輩の中に、一筋に念佛する者は、臨終正念にして、目出度き往生をするは、現に證據あらたなることなれば、露塵も疑ふべからず、中によくしらぬ三心沙汰して、あしざまに心得たる人々は、臨終のわるくのみありあひたるは、夫にて誰誰も心得べき也已上、又昔深澤法印信尊と云ふ人、此三心を知らん爲に、八幡宮に詣で、祈り申しけるとき、御示現に「極樂へ行かんと思ふ心にて、

南無阿彌陀佛と云ふぞ三心」と告させ玉ひける、(東宗要)沙彌隨蓮は配所へ趣き玉ひしとき、御供申て歸依あさからざりき、上人是をあはれみて、念佛往生の道を開示し玉ふに、深く信受して二た心なく念佛しけり、上人往生の後建保二年の頃、いかに念佛すとも、學問して三心を知らざらんには往生すべからずと申者ありければ、隨蓮申て云、故上人は念佛は様なきを様とす、只平に佛語を信じて念佛すれば往生するなりとて、全く三心のことをも仰せられざりきと、彼人重て曰、一切に心得まじき者の爲に方便して仰られける也、上人の御素意のれもむきはとて、經釋の文などゆゝしげに申聞せければ、まことにさもあるらんと、聊か疑心を發すことありけるに、ある夜の夢に、法勝寺の西門より入て見るに蓮華咲き亂たり、西の廊の方へあゆみよりて見れば、僧衆あまた列坐して淨土の法門を談す、隨蓮きざはしに上りて見れば、上人は北座に南向きに坐し玉へり、隨蓮見奉りてかしこまるに、上人見玉ひてこれへ參れと示し玉

ひければ、まじかく参りぬ、隨蓮いまだ詞を出さるに上人の玉はく、汝がこの程心になげき思ふことゆめくわすらふべからずと、隨蓮此ことすべて人にも申さず、何としてしろし召たるにかと思ひながら、上件の様を委しく申に、上人仰せられて曰、たとへば辭事を云ふものあり、あの池の蓮花を蓮花にはあらず、梅ぞ櫻ぞと云はゞ信すべしやと、隨蓮申て云、現に蓮華にて候はんを、いかに人申候とも争でか信じ候べきやと、上人の玉はく、念佛の義も又如此、源空が汝に念佛して往生することは決定して疑ひなしと教へしを、信じたるは蓮華を蓮華と思はんが如し、深く信じてとかくの沙汰に及ばず唯念佛を申べき也、あらぬ邪見の梅櫻の義をばゆめく信すべからずと、仰せらるゝと見て夢さめぬ、隨蓮疑念残りなく散じけり、念佛の功つもり臨終正念にして往生の素懷を遂げにけるとなん已上、是其現證也、皆なも元祖の御傳を信じ、他人のいかに云ひ妨ぐるとも一念も疑の心を起さぬがよい、今の文は三種の病を起して、

往生を得遂げぬ人の爲に其退治を示し玉ふ也、是れ其脇道へ行ぬやうに繩を張り、罅を結ぶやうな物なれば、此病ある人の爲には幾重にも沙汰せねばならぬ、故に經には具三心者必生彼國と説き、釋には若少一心即不得生といへり、元祖大師は、淨土宗の大事は三心の法門にありとの玉へる等、甚だ忽がせになるまじきことなり。次に、

●一に至誠心、至といふは眞なり、誠と云ふは實なりと釋して、至をも誠をもまこととよむべしとみわたり、されば眞實心の三つの文字をば實と讀むべき也、内心外相調れる心なり。

是より已下は三心の別釋にて、是は正しく三心の中の第一至誠心の釋なり、至誠心とは是を性相の判にて定むれば、善に十一ある中の捨の心所也、斯云ふとは、鈔主の意でもなく往生の急用にあらねば委しく云ふには及ばぬこと、至と云ふは眞なり等とは、善導の御釋也、故に釋してと云へり、其至とは眞也、誠とは實也との玉へるは、眞も實もまことと訓する故に、至をも誠をもまこととよむべしと見たりとの玉へり、さればまことまことと重て云ふには及ばねば、眞實心の三つの文字をば實と讀むべき也とぞ、其實の心は虚假不實の病を退治するが持前ゆゑ、内心外相調れる心なりとの玉へり、此内心外相調れる心と云ふも、御疏に不得外現賢善精進之相内懷虚假と云ふ釋の意なり、此の文の意は、外相に賢善精進と道心深き形をあらはし、念佛申にも聲も哀れげに、或はひれぶし、或は身をゆすり立、或はとび付やうなる體をなし、晝夜十二時頭の火を拂ふがやうに申す風情をなし、或は人にも語り、或は云はねど夫れと知るやうに見せかけ、或はひまある身となりて、心靜かに念佛申さんと云ふ心はなければ、名利の爲を思ひ入て、わざと市中をかけたはなれて靜なる住居を構へ、本尊道場の莊嚴も殊勝にしつらへ、籬の内には花の木立などの心細く、物哀れなる體にしつらへ、窓の近くうつし植し吳竹の庭など、色かへて縁なるらんと詠する心も、思ひいられたる體にもてなし、斯云ふことがらを人に見へ

開れんことのみを思ひて、内心には本願を頼む心もなく、往生を欣ぶ志も無き故、是を虚假不實の人と云ふて往生遂得ぬ心なれば、斯云ふ如く、外を飾りて内を虚ふするなど云ふことを、不得外現等との玉へり、偕此文を解すに付て當流の意は上に云ふ如く、善導大師の思召の通りに解せども、一念義の邪流では、此文を己が得方に引なして、不得の二字は捨て、外に賢善精進を現はすは、内に虚假を懷けば也と訓で、外相の如法に見ゆるは皆虚假不實なれば、外を飾ることなしと云ふて、肉食妻帯を表とし在家に劣た行跡をふるまふ、是が邪人正法を説けば正法も邪法となると云ふが此こと、大師の釋をまげて訓點を付て己が田へ引けども、眼ある人は唾を吐て是をいやしむれども、無智の人は斯法門に立入るべきわざ叶はねば、盜たけぐしいと云ふ諺の如く、却て善導大師の正意を得たやうに云なして在家の人を誑かす、是が所謂無刀の大賊罪劫盜よりも重しと云ふて、すきを見合て盜をなし、又押入てかすめとる盜賊より

罪が重いとは、刀をも持たず、すきまを窺はず、白晝に戸を押し開き人を集め、經釋に微塵もなき邪教を弘め檀越を網して信施を貪り、飽くまで飲み、肉を食し妻子を育み、手かけ目かけ迄を養ふは、盜賊にまさるにあらずや、まう一重云ふなら、盜賊の難に遇た人は此世一世の財寶を失ふたのみで、後世の妨にもならぬ、却て宿世の債を償ふやらしれねば、罪をつくなふこともあれば、世に云ふ禍の幸と云ふこともあれども、斯云ふ邪教を聞き受て信する様になると、非因計因の戒禁取見なれば、生々世々三途の苦を受る故、此世の盜賊にあふたより百千萬億無量塵數の大損をすることなれば、必々斯云ふ勸めをする所をば遠離と遠ざかるが肝要のこと、釋の意は上に云ふ如く、外相計り殊勝に見せかけて、内心に虚假を懷くなどこそあれ、故に元祖大師もかく云へばとて、人のそしりをかへり見ぬがよきぞと申す儀にては候はず、この玉へり、又此至誠心に付て四句分別し玉ふ御詞あり、是にて心得べし、一には外相は貴げにて

内心は貴からぬ人あり、二には外相も内心もともに貴からぬ人あり、三には外相は貴げもなくて内心は貴き人あり、四には内外ともに貴き人あり、此四人の中にさきの二人は、今嫌ふ所の至誠心欠けたる人なり、是を虚假の人と名くべし、後の二人は至誠心具したる人也、是を眞實の行者と名くべし、されば詮する所は内心にまことの心を起して、外相をばよくも悪しくも、とても角てもあるべきかと覺候也、たほかた此世を厭はんことも、極樂を欣はんことも、人目計を思はで、まことの心を起すべきにて候なり、是を至誠心と申す也、已上、人の形を正すに鏡を用ゆる如く、心の僻みは經釋を鏡として正すこと也、此御詞を鏡とすれば、正法邪法のわかれば直に知れる、此四人の中初の外相は貴げにて内心は貴からぬ人ありと云ふと、外現^三賢善精進^二内懷^三虚假^二と釋し玉ふと同じこと也、其不得外現等との玉ふ、外を飾りて内に虚假をいだかぬことは知れたが、夫れなら至誠心を具する人とは、どうすることぞと云ふに、善導大師

此文の次に、内外明闇を簡ばず皆眞實なるべし、ゆゑに至誠心と名くとの玉へる是なり、内外明闇をわらばずとは、身にふるまひ口に云ひ、心に思ふ三業に、眞の心を具して外をかざる心なきこと也、是元祖の四人を擧げ玉ふ、第四に内外ともに貴き人ありとの玉ふにあたり、又第三に外相は貴げもなくて、内心は貴き人ありとの玉ふも、此中に籠るものなり、詮する所は只内心にまことの心を起して、外相をばよくも悪しくも、兎ても角てもあるべきかと覺候也との玉ひ、第三第四の二人は、至誠心を具したる人なりとの玉ふにて知るべし、諸此外相貴げなき人に、委しく云へば數々あれども、今略して二種を擧れば、自身には外相にも恭敬修を守りて、慎み敬ふことを盡と思へども、性得威儀の彊強な人、又顔形ち不殊勝に生れ付た人は、他人の目からは貴く見ぬ人あるなり、又或は強て虚假に落入んことを恐るゝ心より、止觀に云へる咎を顯し狂をあらはす人ありとて、わざと人目に不殊勝に見せて、歸依せらるゝことをふせ

ぐ人あり、現證を出さば玄賓僧都の渡守となり、増賀上人の施主といさかいをなし、又戒師に召れし時、禁中にてさまぐ見苦しき振舞をなし、高野の邊りに住める上人の僞りて妻を迎へ、美作守顯能の家に來りし僧の、安居の料にせん爲めに、連添女が懐胎したれば、是をはとくむ料を給はれと僞りて乞ひ、或は乞食となりて狂ひあるき、或は鈴を振て癡の眞似をせる類ひの、徳をかくして虚假を恐れ、人に思ひたしめらるゝやうに振舞玉ふ人、擧てかぞへ難し、是等の二人、其に外相は貴からずして内心の貴き人なり、偕四人の内内外共に貴からぬ人との玉へるが、正しく一念義の邪義に當る也、是は外相は在家に劣りて身の威儀を守ること知らず、剩へ肉食をし妻を持ち、是外相の貴とからぬ也、又内心には只信施を貪り檀越を誑惑し、剩へ無道心故修行に物うく忘る上に、此非を飾らんとして、經釋を離れて邪義を建立し、罪作らじと思ふは深く本願を頼まぬ故、彌陀を頼む人は罪をはゝからぬがよいとて、善を押

へて惡を勸む、數遍を稱ふるは自力の念佛、他力を頼む人は十劫已前に正覺は調ふた、只御禮を悦ぶがよいと云ふて、念佛を押して無因を勸むる、是内心の貴とからぬ也、故に元祖大師が、是は至誠心缺けたる人なり、是を虚假の人と名くと、往生することならぬ三惡道のすもり也と、しつかりと極印うつてある也、此一念義の邪義、元祖大師の御在世の中より少々發た故、光明房への御返書に、附佛法の外道、天魔波旬の類ひ也との玉ひ、二祖鎮西上人の御在世には、餘程邪教が廣まつた故、念佛名義集等にさびしく御誡めあり、知らんと思はゝ巻を披け、是が至誠心の釋の正義を顯して、邪師邪教に落入らぬやうに拂ひのけて聞かせるのぢや、上に云ふたは私の考へで云ふたことではない、皆經釋の文を和解した計り也、依て説者の此方が不徳な逆、詞は皆光明大師、元祖大師、鎮西、記主、と相承の趣きなれば、必至々々と信せねば叶はぬこと、已下は鈔主が、兩祖の釋に依て虚假をはらひ玉ふ詞。

●若し穢土のいとはしからぬを厭ふよしに云ひ、淨土の願はしからぬを願ふ氣色をするを、虚假と
きらふなり。

是は虚假を誠め玉ふ文也、上に總安心の厭欣の義を教示し玉ふ故、知り易き故に厭欣に付て述べ玉ふ、至誠心を釋するには、唱うる念佛の行に就て、不偽不飾助け玉へと思ふべしと云ふことなれば、總安心に付て釋し玉ふは、餘所の釋例異なる様に見ゆれども、今も又其意を含めり、總安心には別安心を具せぬことあれども、別安心には必ず總安心を具すれば失なき也、總安心に付くと云へば心のみと云ふことにてはなし、三業に虚假なきことを勸め玉へば、行に付て不偽不飾と云ふ義あること必然也、其故は穢土の厭はしからぬを厭ふよしを云ふと云ふが口業の虚假を誦る文也、淨土の願はしからぬを願ふ氣色をするを云ふが、身口二業の虚假を誦る文也、氣色をするを云ふに身意二業の義を含めり、合掌低頭を殊更自立やうに振舞ふ是身の虚假なり、其殊勝に見ゆるは心深

く淨土を願故也と、人に知られんと思ふが意業の虚假なれば、三業の虚假を誠玉ふこと明なり、故に此三業に偽りを構ふるを、虚假ときらふことの玉へるなり。

●さればまことの心にて、穢土をも厭ひ淨土をも願ふを至誠心とはいふなり。是は至誠心の體を出して結び玉ふ也、さればとは、さふあればと云ふことなり、虚假偽りの人見せ名聞にせず、まことの心にて穢土をも厭ひ淨土をも願へと也、淨土を願ふと云ふは、別のことではない、申せ助けんとある御本願を頼みて、稱名を自身の機根相應に相續することなり、その申す念佛を不偽不飾、助け玉へと思ふて勤める是を至誠心とは云ふなりとの玉へるなり、偕此の虚假の起る本は何から起るかと云ふに、名聞と利養の二つより起る也、此二つある中に、在家の人は利養の爲に偽ることは甚少い、多は名聞のみから起る也、出家は名聞利養の二つを具する也、先づ在家の名聞の起るやうを云は、我心から往生がたくて

申にはあらねど、大方世間のならひとなりて念佛申すことなれば、我獨り勤めずば人のそしりもあらんと思ひて申す人あり、又年寄の後世を願はぬは、妻子眷屬の心も耻かしく思ひて申す人もありて、多くは名聞から起る也、又少分は在家にも利養の爲めに申人もあるべし、或は身代よき後世願ふ人あれば、此人の心に入て金銀を引出さん爲めに念佛申す人等ある也、なれども至て在家の利養から起る人は少い、偕出家の二つながら等分に具するとは、人に尊く思はれんとて、人目を飾て、道心ある風情して申人あり、後世のことをば露塵計も思はずして、商賣家職も物うければ、此世を心易く渡らん爲に墨染の衣に形を包み、念珠を手にくるも人に歸依せられて、世をすぎんはかりごととする人あり、是等は皆虚假不實の名聞利養の念佛なれば、湛澄上人は、かゝるは累劫不生と決判し玉ふた、是等は因等起の引起しか、虚假から起る念佛なれば論にはのらぬが、最う一重分別すれば、初發心は隨分に志ありて出家し、程々に如

法に勤むる故、自ら人も隨喜し尊び歸依するに付て、我れしらす自然に虚假に落入る人が多し、能々用心せねばならぬこと也、今道俗の念佛者、喩へを以て云ふなら、出家の念佛するは市中に櫻の咲き亂れたるが如く、在家の念佛するは深山の櫻の咲きたる如し、先づ念佛者を市中の櫻に喩ふることは、出家は此世の假りに化なる無常迅速の道理を知るが故に、一筋に稱名を勵まさんが爲に、離れ難き父母妻子の恩愛をも離れ、捨難き所知所をも捨、萬事よし惡し共に此世の事は無益と取り合す、難値して此本願にあへり、此度慥に生死を離れ、淨土に往生することの嬉しさよと、萬事を拂ひ捨て申すが故に人の目に立つなり、此故に市中に咲き亂れたる櫻の如しと云ふ也、能々垣をせざれば諸人が此花を見付來り、或は買て折り取り、或は譽めて折り取り、色々様々のことを云ふて皆折り取られて、果ては枯木となる也、故に出家の市中の櫻は、道心の垣を結んで守らねばならぬ、其垣がないと諸人が此出家の櫻に歸依して集り來

り、手毎に折り取る也、其折り取るにも種々ありて、布施を有難がるは買て折り取る如く、殊勝に御勤めをあそばすと譽て歸依するは、見事に咲ける櫻やと譽て折り取る如く、布施の利養や、譽れの名聞は、本と凡夫の順境なれば、いつの程にか我知らず名聞利養に心が移り、初發心の美しく咲き亂れし往生極樂の爲の念佛の櫻を、名聞に折り利養に折られ、假り初めにも誇られじ、譽られん爲に行する虚假の枯木の櫻となつて、往生淨土の葉を出すことはならぬ也、故に道心の垣を結び立て、信疑謗譽に心を動さず、無量億劫にも値ひ難くして、適々得たる本願稱名の櫻に、往生極樂の一本立をさせて影日なたなく、めつた申に申して、本願口稱の櫻をうるはしく榮せさせねばならぬ也、但し斯う云へばとて、道心往生と云ふことではない、往生は本願稱名にありて佛の御所作なり、唯道心を以て名聞利養に落入らず、唯申の稱名相續する迄なり、前に云し恩愛を捨て出家したとて、是で往生すると云ふことではない、捨家棄欲は本

願にあらざれば也、往生は唯本願の稱名に局る、爾らば往生のやうに立ぬことなれば、なせに出家するぞと云ふに、是は世務を離れひまある身となれば、本願の念佛が勤め安ければ、念佛の爲の助業となる故なり、往生の得否は出家在家の差別はない、只本願にすがりて、念佛申と申さぬとの差別なり、扱此名利に落入らぬやうにせよと云ふたとて、夫が何も六ヶ敷事ではない、詮する所は乞食して念佛する迄と思ひ極むるなり、さすれば利養に落入る恐れはない、又いかに譽めらるゝとも誇らるゝとも、我も人も愚惡の凡夫、今日生れたる人を始め、永くて六十年七十年の内には皆死するなり、「打人も打たるゝ人も土器の、くだけて後はもとの土くれ」今も知れぬ身の上に、譽られたれば逆何にかせんと思ひ知れば、名聞は發らぬ也、無能上人の詞に、實に我も人も無上菩提を成し、十號の覺位に昇り萬德圓滿の身となり、九界人天の師と仰がるべき大願を思立ながら、却て娑婆の卑職に耽けり、有爲の才能をたしなむは乞丐の司

をあらそひ、結蟻の糞を弄すが如し、乞ふ願は念佛の行者、早く萬事を抛て往生を願ふべし已上、去ながら、惡業煩惱は生々世々の薰習故、起るは凡夫の常なれば恐るべし可憐、いと起るに付ても頼め本願、南無阿彌陀佛と申す外にはわびごとはない、鎮西上人、歷縁對境の名利をゆるされたるは、いと難有こと也との玉ひ、向譽上人は凡夫の心故虚假慢心も起るべし、起らば直に南無阿彌陀佛と申べしとの玉ひ、「よしといひあし」と思ふも夢なれば、みなかりこめて南無阿彌陀佛」此れ等の御法語は、元と善導大師の隨犯隨懺の御釋より出で、淨土易往の故實なれば、道心を堅めし上にも起らば、直にそれぞかし助けたまへよ南無阿彌陀佛と申すが肝要、是が出家の念佛するを市中の櫻に喩へし意也、扱次に在家の人の念佛するは、深山に咲る櫻の如しとは、在家の人が、いか程申たとして人が物をもくれねば利養に落入らず、又格別に譽る人も少なければ名聞に落ちず、甚だ能きやうに見ゆれども、在家の人は佛法の大道理を了知

せず、因果の理りに聞き故執心強く、祈れば命も延び、家も榮む、子孫も繁昌する様に思ふ故、祈念祈禱、二世安樂の雜木が、櫻の木の上ののび上り、唯極樂往生の爲の安心の櫻木を枯し、又財欲の蔓が稱名の行をさへて、起行の櫻の木をしぼり、終には退轉と枯してしまふ也、早く用心の斧をとき、祈禱二世安樂の雜木を切り拂ひ、財欲色欲の蔓を引き伐り、只往生極樂の爲の、稱名本願の櫻に一本立をさせて、めつた申に榮させて、順次往生を期すが肝要、此外にも、連歌 俳諧、茶の湯、碁、將棊、双六、淨瑠璃、三味線等の無益の慰み蔓が、品々あれども、是等は士農工商の家業を助くると云ふにもあらざれば、既に口稱一行にて、さしも氣高き報身報土の往生を期する身が、老少不定の掟「のちの世といへば遠きに似たれども、しらすや今日も其日なるらん」と云ふ道理を忘れて、何の詮もなき露の身の上に、手者と云れん、上手と云はれんなど、云ふやうなる、賤しき名聞にまどはされて、稱名のひまをさへ、申

せば申さるゝ口稱を勵まぬは情なき心ばになり、諸子の思短き教にさへ、列子には去名者無愛と云ひ、文中子に、愛名尚利小人哉、未見仁者而好名利と云ひ、許由が耳を洗ひ、莊子が尾を泥に曳んと云へる類ひ、擧るに違あらず、故に無能上人の御法語に、誠に一向專修の人ならば、助業尚可捨況や學文をや、學文尚可捨況や技藝をや、出世の技尚を捨つべし況んや世間の才能をや、才能尚可捨況や惡事をや、出離の要行の外無益のことに於ては、身不行、口不言、心不念、筆不書、希くば有信の行者、早く萬事を抛て合掌叉手して、心にも念じ口にも云へ、助け玉へよ南無阿彌陀佛との玉へり、斯つとめた處が、僅か一世と露の命の葉末に結ぶ間のことなれば、自力修行の菩薩の三祇百劫の間、難行苦行を忍で修行し玉ふにくらぶれば、百千萬の一分にもあたらぬ故、不思議の本願にめぐりあふたを喜んで、すゝみ進んで勤めねばならぬ、「引かれなばあしき道にも入ぬべし、心の駒に手づなゆるすな」心の師とはなる

とも心を師とせざれとの、佛勅の輕からざることを思ひ出て、虛假名利の無明の睡りをさまして、今よりにても我と我心に策て、己々の分々相應に本願口稱の名號勵まし玉へ、斯云ふたてて生得下根な衆生に、藥鐵道心を起せと云ふではない、詮する所は畢命爲期とて、分々の日課を命のきは迄相續し課せるが肝要、既に本願に十方衆生と弘く誓ひ玉へば、唯往生の爲に申さへすれば、十聲一聲の者迄も往生を遂ることは他力本願の故に往生すれども、一向心に策たす、用心門を心得ねば、上昇難下沈易とて、少かな日課も懈怠して、後々一向申さぬやうになり下れば、元祖の御示にも、信は一念にも往生すると信じて、行は多念に勵めとの玉へり、出家は出家ながら、在家は在家ながらの本願なれば、捨家棄欲せよとも、持戒苦行を勤めよともたまはず、妄念異念の中よりも、申せ助けんとある本願なれば、口打あいてつひ只南無阿彌陀佛と唱へた計りで、一念に三祇を越えて速に生死を離れ、三祇百劫の久修練行の菩薩と一と

つらに並び、膝をくみ肩をならべて、一寸も後へ下らぬ様になることは、何から起つたことなるか、終窮無極の大悲の本願から起ることなれば、義を見てせざるは勇なし、少しは心に策て、己が分分に勵む心を起すがよい、併がら返すぐも勵み往生、いさみ往生、道心往生と思ふと、自身を物だつる心なる故、本願に背いて生死に滞ることなれば、能々心得わけねばならぬ、はげむと云ふも、勇むと云ふも、道心と云ふも、本願の念佛を一聲もよけいに申さうと云ふ心也、其申念佛は、助け玉へ阿彌陀佛と云ふことなれば、一聲も多念も他力を頼みかこつことなれば、露も自身を物だてることではない、されば貧しく愚なる人々の本願貴みて平ら申に申て、現證あらたに往生を遂げたることは、和漢兩朝の往生傳に數限りも知られぬ程ある上に、數件の祖師の法語を引てすゝめたは、良薬の如く、忠言の如くなれば、口にも苦く、耳にも逆ふとも、道理をつよくたてゝ名聞の淵に沈まず、偽りかさらぬ心にて只申に申か肝要、古歌に

「人間は有るを無しとも答ふべし、心のはいかゝこたへん」と詠る如く、同行などの人がなせに念佛怠るぞと問は、申せば申さるゝ念佛をも、世帯や子孫の世話になりとも事よせて申されぬと、有るを無しとも答へられやうが、我が心や、神通自在の佛が問玉は、我心の申せば申さるゝと知て居ることなれば、あるをばなしとは答へられぬ、佛菩薩は他心通を具し玉へば、偽り飾りは申上られぬ故に、いかゝ答んなんと云ふ、詮する所はありのまゝに極樂を欣ふ心もなく、地獄へ落て苦痛を受けること何とも存じませぬと、あからさまに白状せねばならぬ、情けない形勢、腹のふといに任せて、色々の名聞ごとにかゝりて念佛怠るは、今も死ぬと云ふことを忘れるゆゑなり、早くも無智無能の境界に下り果て、只申すに南無阿彌陀佛と申して決定往生を期したまへ、斯く委しく云ふても聞入れぬ人は、顔形計り人間で心は畜生に違ひない、人の魂をそなへた人なれば、唯だ南無阿彌陀佛と唱ふれば極樂に生れ、申さねば

罪に引かれて三惡道に落ると云ふ、樂を受くると苦みにかゝると、天地黑白の違ひなれば、聞き入られて本願を頼み、念佛申さうと云ふ氣にならねば叶はぬことなれども、世間の名聞ごとの止らねばとて、捨玉ふ本願には非ず、得止めねば得止め程、彌々極重惡人に極まれば、尙々本願の外には使るべき法はなければ、極重惡人無他方便、唯稱彌陀得生極樂と彌々本願にすがり、一聲づゝも南無阿彌陀佛々々々々々と申さねば叶はぬ、是が在家の念佛申すを深山の櫻に喩たる事故、出家と云ひ在家と云ひ、共に虛假の名聞利養に落入らず、まことの心の至誠心をそなへと勧め玉ふ也、已下は問答決擇。

●問凡夫の習ひ、偽りは多く實は少し、いかゞ念佛のたびに此心を起すべきや。
此問の意は、上に三心の中の至誠心を釋するに、虛假偽りを構へず、まことの心を發せと云ふを聞いて、自身の心をきぐり見れば、偽りは多くまことは少し、爾るに念佛する度ごとに、まことの心を

發すことならば、思ひ絶えたる往生ならん、夫ならば我のみならず他人も又た爾れば、さう唱ふ每にはまことの心は具せられまいが、念々に具せねば至誠心は欠ぐることあるやとの問なり。

●答誰か云、念毎に此心を發すべしとは、唯是れ意樂をいふなり、一度此心を發しぬれば、其後の行は、思ひいるゝにもあれ、思ひいれざるにもあれ、皆眞の往生の業となるべき也。

此答の心は、譬へば六萬遍申さば六萬度至誠心を發せと云ふことにはあらず、上でさう云ふことはいはぬと云ふことを、誰が云ふ念毎に此心を發すべしとはと云へり、まことの心を發せと云ふは、念佛門に入るとき、人見せ、世渡り、物もらひの名聞利養のなかだちにせん爲にあらず、唯往生極樂の爲に唱んと思ひ立て申せと云ふことを、只是意樂を云ふ也との玉へり、此意樂が極樂往生を欣ぶ行者の思ひ入れの地盤也、斯因等起の引き起しの思入れがまことの心なれば、夫より後に念佛相續するうちには、本が愚縛の凡夫なれば、刹那等に御寺へくとは思はず、櫻が散れば雪ならば淺度か袖を拂はんなど思ひ、雪を見ては花ならば咲かぬ梢も有べきになど思ひ、夏の青葉の緑りを詠め、秋の紅葉の錦を見ながら歩む、是等は餘程體がよいが、空が曇ればわるいとき洗濯物にのりをつけた、下向の時分には干あがつて居る勘定であつたに、あゝのりがきくまい、ふり出したらば内の者が取入るればよいが、買ふたぼた餅を棚に上て置たが、蓋をすることを忘れた、鼠にしてやらねばよいが、子供がいさかいせねばよいが、留守にも皆がはたらけばよいがなごゝ、ありとあらゆる異念を起せども、思ひながら歩む故、いつの程か参りつく、此等の譬でやうわかる、此意は、もちつと、ごきれいに元祖大師の仰せられた御喩を、皆の合點の行き安き様に平たく云ふた迄、斯の如くで刹那の虛假は往生をばさへぬ也、さればさへねば迎よきと云ふことにてはなし、起さぬにしくはなければども、凡夫の常の心なればとてゆるされたるは大慈大悲の故なり、縦令刹那にふと起

起の念々には助け玉へと申すこともあれば、何にも思はずつい唯申すこともあり、看經して居るとき同行でも尋ね來れば、よいとき來たことよと思ふ心の起ることもあり、種々色々の妄念異念は起れども、夫れは凡夫の習ひなれば、刹那の虛假は往生はさへぬ、此刹那に起る虛假は客の如く、因等起の引起りに、極樂往生の爲と思て念佛申立てたは主人のやうな物なれば、客の刹那の虛假は至誠心の亭主の所に久しくは居ぬ、やがて出て歸る也、中間に申た虛假の念佛も、前後の誠の心に引れて、皆往生の業となると云ふが代々相承の趣也、前後の心に引かるゝとは、初の思立が極樂へ往生せんと思て申す故まことなり、看經の終りに、願以此功德等と、必淨土に迎へ玉へと回向するまことの心とを、前後の二心と云ふ也、初め因等起がまこととて、夫から念佛申内に、異念は起れど往生すと云ふわけを喩へて云ふなら、今日皆が當寺へ參詣仕やうと思ひ立が、因等起のまことのやうなもの、夫から出るから爰へ來る迄、一足々々

るども、こは情なき心哉、夫ぞかし助け玉へと思ひ返すがよき也、利那はかまはぬと起り次第にして置と、後々はすつばりとした虚假者になりて、往生遂げ得ぬ様にもなる、是を譬て云ふなら、随分家業に精を出す子が、友達に誘はれてたまく、あそびに行たとして、若い者なれば偶々はそう云ふことはあつた迎、親の慈悲故堪忍して勘當はせねども、其子が段々どころ居つゞけをするやうになると、親は涙を流して悲み乍ら勘當する如く、其行先は親さへ見捨ることなれば、乞食非人となり下る、利那の間は佛の慈悲でゆるし玉へども、段々こうして虚假計りになると、悲みながらも本願からも勘當うけ、乞食非人のこもかぶりの三惡道のすもりとなる様なもの、此至誠心具不具には重々の分別があれども、初め誠の心ありて、中頃に退して虚假不實に落入り始實終虚不往生なり、又初めには虚假不實に申た人も、段々知識の勸を聞くか、經釋の趣を窺に、其得失が分明なる故、是等に付て心を改め、誠の心を具するをば始虚終

實の往生人と定むれば、斯云ひ分けを聞かぬ内は、虚假名聞に勤めた人も、今より直に心を改めて不偽不飾念佛申となり、決定往生の善男善女となり玉へ、羅刹の迎の火の車に乗りて、地獄に落て無量の楚毒を吞むがよいか、觀音のさげ玉蓮臺に乗りて、極樂に往生し無量無邊の樂を受るか、能々分別して後悔せぬやうにするがよい。

(夾註に、爰に三つのたとへあるべし、とは、虚假が一重、輕實が一重、重實が一重、下にあり) ●問もと實の心を具したる人、時として名利の心にて經をも讀み念佛を申さん、此業は虚假の善にて徒ものにてあるべきか。

是の問の意は、上に利那等起の虚假は往生の障りとならぬと聞て、彌委しく聞て心得分ん爲に問也、問の意、正しく因等起眞實なる人の、或は招請せられて誦經念佛する、或は助業に經を讀み、又正定業の念佛を唱ふるにもあれ、聞く人も多ければ經を讀むにも達者、ほつゝ讀みして不達な人とそしられんかと思ひ、或は念佛する音聲も高くす

みてつとむる類は、内で勤めば誰も布施のしてもなければ、招くこそ幸ひ、行て勤めたら布施もするであらふなりと、種々の歷縁對境の虚假があるなり、斯云ふ類は元は至誠心具する人なれば、さしあたつて虚假につとむるなれば、斯云ふ誦經念佛は、徒らものと無益のすたりものと云ふものであらうかとの問意也、是は傍らには在家にも通ずれども、正しくは出家の上に被る也、此經を讀むと云ふに付て、是も往生の爲と思つとめる人あり、經をよめば念佛申せば往生に違ひのない道理が説てあれば、正定業の念佛に勇みがついて勤め易いと思ふて、助業に勤る人もあり、又經は藥の能書のやうなもの、念佛は正しく藥なれば、病を癒すには藥を吞む如く、往生の爲に念佛が肝心、能書讀で藥の効能と心得て吞も、能書はよまねども、醫者に任せて吞めば癒る也と思ひ、くれた藥をつい只吞むも、吞んで病の癒ることは同じことなれば、能書を讀む際に一口も吞むと思ひて吞む様に、經を讀むひまには今一聲も吞む念佛申

さんと思ひて多念に勵む人もあり、此三人の有様は、選擇集に廢立、助正、傍正の三義の分別があり、夫れを解すに、記主禪師の決疑抄があり、其決疑抄を解すに了譽上人の直牒と云ふがあつて、委しく云ふなら一月餘りかゝらねばならぬ故に、今爰で盡さることではないが、所詮を取て云は、若依善導以初爲正とて、念佛一行計り勤て居るが、極上の宗の本意に叶ふ人、其次が念佛をすゝまん爲に經をもよみ、禮拜もする等の人、其次が本願念佛正定業と知りながら、執法各異と有緣の行があるもの故、或は經を讀み、或は禮拜、觀察供養の餘の行も、各々往生の業となるのであれば、經を誦して往生を遂んと思ひて勤る也、淨土宗の意は、稱名が本願の正定業なれば、唯一筋に念佛せよと勤むるが本意なれども、機に色々あれば、助業に勤むることをさへはせず、其次をば念佛申せと勤めても得つとめず、餘の行なれば、つとまると云ふ人がなきにしもあらざれば、其人には何なりとも勤めて往生を願へと云ふなり、諸行も如

説に修行すれば攝機の願に乗じて往生する也、なれども非本願の故、百人の中に一人か二人、千人の中に五人か三人か、其得否は天地の違ひ也、此諸行でもつとめよとすゝむるは、せうことなしの隨他の説なれば、念佛申せと勸むる隨自意の勸めには似もよらぬこと也、此上に出家の誦經禮讚等をつとむるは、助業の爲にも非ざれども、修行方儀門と云ふて、世俗の禮儀に小笠原がいるやうに、是は出家の法式は小笠原と云ふ様なもの、是を見まねて在家の中にも之乎者也の不心得者が有て、常に經をよみたがり、禮讚を讀み覺て、順禮歌の焼直しを見た様に勤る人まゝあり、是れは安心の腰がすわらぬ故也、念佛は勤めず、誦經禮讚で往生しやうと思ふ人は論の限りでなければ、出家が方儀門をつとむるまねをして勤めたがるは、筋を分別する智慧がないから、出家は世事を離れて始終佛法中に住居すれば方儀門をつとめても、其外に念佛勤むるときが多くあれども、在家は家業のひまに少か線香一本か、そこの看經に、誦

經禮讚勤めたら念佛申すひまはなくなり、つい十遍か百遍で回向するや遅しと、又世事にかゝるであらうが、さうして見れば在家に方儀門は入らねば、誦經禮讚を助業と云ふであらうが、誦經禮讚にひまを取られて、正定業の念佛が滅障業にこそなれ助業とは云はれぬ、世帯世話のいそがしき中をぬすみつとめる僅かの看經なれば、念佛を進で申さん爲には身體にいくつも口が付てほしいと云ふやうな心にこそなるべき筈、只一つある口に、誦經禮讚をして念佛のいとまをつひやすと云ふ道理はないはず、よう分別して見るがよい、元祖の三卷の彌陀經、鎮西記主の彌陀經禮讚も助業の行ではない、修行方儀門也。

●答もと實の心ある人は、時として虚假の心を起すといへども、後に實の心を發して取りかへして回向すれば、其業かならず往生の業となるなり。答の意は、もと因等起の引起しの地盤が實ある人なれば、歷縁對境の刹那等起の虚假の心ありて、つとむる誦經念佛も皆徒らごとには非ず、もと實

の心を具へて居る故、後に實の心にもどりて、ああ我れながら情なき心を起し、有所得と利養の布施に目をかけ、人多ければとて念佛をいゝどり、經をも殊勝げに讀みなせしは悲しき心なり、佛の大悲ゆるし玉へ、此功德空しからず自も往生し、弔ふ所の靈魂をも昇進せしめ玉へと回向すれば、始の實と、終りの實の心に引かれて、中間の虚假はうせて其業は必ず清淨なる往生の業となる也との玉ふ意也。

●唯いかにもして、意業を眞實にもつべきなり。是も其意業と因等起の地盤を、只往生極樂の爲と思ひ定めよと勸め玉ふ、若し其因等起が世渡り人見せの名聞から發ると、安心僻越すれば萬行徒に施と云ひて、晝夜十二時頭然を拂が如く申ても、累劫にも往生することは叶はぬ、丁度喩へて云ふなら、今日人々は當寺へ參ると云ふて、實には芝居を見に行きたり、碁將棊の會に行やうなもの、譬ひ毎日其所へいたとて、どうして當寺へ來る筈はない、此なぞらへにて人々往生願ふと云ふたと

て心の中に思ひ入れず、只念佛者と云はれて、歸依せられて人にをがまれん、殊勝に勤めると思はば、施物も持てくるであらう、夫をあてにして、一生を樂々と過さうと云ふ思立の地盤なれば、晝夜勤たどて何で往生することがなるものぞ、地盤が虚假なれば往生がならぬ故、いかにしてなりとも意業を眞實にせよとなり。

●凡夫の習ひ縁に値ては、とある心もかゝる心もたこるなり、されども意業だにもよければ、其業みな往生の業となるなり。是れ上の答の意業の地盤が實なれば、刹那等起の虚假はよきにはあらぬども、凡夫の常の習なれば縁にあへば、こつけない思ひが起れども、元が實の思立故、悉く往生の業となると重ねて懇に答へ玉ふ、此疑が通途の念佛者には數多ありて、此やうな心は起すまいと思ふたに又虚假に落つ、すれば此勤めた念佛は虚假の念佛なれば、往業成すまいと無益のことに思捨、情なや／＼と心あつかひ氣いじり計りして、何の詮なき苦みをし、或は

勤むる度毎にそう云ふ心の起ることがあれば、所詮實の心で申せとあるに、斯く勤る度に長いか短いか、いつも虚假が起れば、往生の望は絶へ果てて、申ても往生せず、何れにしても往生せぬことは同じことなれば、申すは無益、其ひまに別の樂をするがよいと愚疑を、其上に所詮往生がならねば地獄は定りなれば、内こそ露も厭ふべき同く地獄へ行ことなら、前の飛石此世で心一ぱい五欲を樂むがよいとて、遊里通ひを始め、ばくちをうち、人の物をはたき落して取りこみ、己が物といへば、くさつてすたる物があつても、乞食にもくれぬと云ふやうになる人もあれば、是等は皆念佛の法門を存知せぬゆゑ、地盤が既に實の往生の爲と思へばこそ、中間に起る虚假を嘆く心あり、此虚假の起るときは、心の用ひ様を知らぬ故、氣いしりにかゝり、果ては退墮となりて、往生得せぬ三途のすもりとなりけるなり、ゆゑに斯く懇に操り返し、老婆心切に、慈悲から委しく示し玉ふなり、其虚假が起るのは凡夫の習ひなれば、ゆるし

てあれば、往業とならぬと思ひすつるな、もと往生の爲と意樂を立た人は、中間の虚假は前後の誠意に引れて皆往生の基となれば、どふしてなりとも、意樂の地盤を往生の爲と思ひ定めよと也、是は其勤る行と共に刹那の虚假を示し玉ふが、此外に最一重念佛の安心に不案内故、己がたらぬ智慧を以て云ふには、至誠心とは此方の分齊では思絶たること、なせと云ふに、ちよつと人が尋ねても、あゝ邪魔など心に思ひながら、よふ御出なされましたと云ふ是偽り、物をくれると御深切過ぎて、却て迷惑致しますと云へども、心には最ちつとも氣ばりそうなものやと思ふ是れ偽り、小づらの悪ひと思つても、親に向へば生長し生い立て、そしてきれいな生れ付でと滅多に譽る是偽り、金銀かせよと云へば、回りよいにも悪ひと云ふ、借りに行けばあてもなければ、いつく迄には引當ござる故、必ず元利そろへて返しませふ、是に限らず起居動靜、多く偽りばかりを口にも云ひ心にも思へば、どふして誠の心を發することがなるふかと云

ふ者もあるゆゑに、本願抄に(中本六丁)、凡夫の習ひなれば此世さまのことこそあらめ、往生のかた計は念してさな侍りぞかしの玉へり、此の意は、此世のすぎはひに偽り飾るは凡夫の習ひなれば、此世の名利は得捨すとも、夫れは兎もあれ角もあれ、申す念佛をだに、人見せ名聞有所得の利養の爲にせず、申す念佛は只一筋に極樂往生の爲と思て申せば、皆往生するとなれば、往生の爲の念佛が虚假名聞になりそうなりとも、念じてさな侍りぞかし、こらへてそうならぬ様にせよと也、若んし思名利の爲になりたらば、あなあさまし、夫ぞかし助け玉へと思ひかへす故に、上に云ふ此世のことの偽り飾りと、念佛の偽り飾りとは物からが違ふ、何にも此世のことが往生の爲にかゝり合ふことではないなれども、よいと云ふことではない故、是もなるだけやむれば此の世の中の善人と云ふ者、是をも止めての上に念佛せんと思があやまり、詭曲誑他の偽りがさは、生れ付の心所なれば、やめ切つてと思はゞ一生申立期はない、凡夫を目

あての本願なれば、行に付て起る虚假すら刹那等起はゆるされたれば此の世のこの名聞は御沙汰はない、善人は善人ながら、悪人は悪人ながら、十方衆生の萬機普益故、元祖大師、淨土宗の肝心には三心の法門にあるなり、と仰せられた、斯く委細に心得ると、往生のたやすきことは掌を指が如し、そう云ふ大事の法門を得分ける人はと云ふに、夫は上に云ふ如く、助け玉へ南無阿彌陀佛と思が横の三心なれば、知らずして具して居れば、單直仰信、宗の目當の本機なれば、委しく云ふても聞分得ぬ人なれば、名利の念があるで往生は得せぬと云ふ分別もせねば、無病の人に薬はいらぬ、聞分る智慧ある人は、聞きぬいて居ぬと脇道へそれる之乎者也の分別が起る、夫をそれさせぬ三心の法門なれば、淨土宗の肝心に違ひはない、扱又云ひ残したことがある、上に經を讀むと云ふに付て、皆は多く念佛有信の輩なれば、念佛は選擇攝取の本願の萬徳所歸の無上大善、元祖も已に念佛には獨り立させてすけさぬがよき也、この玉へり、

十即十生百即百生の勝易の二義を具へて居る念佛を勤めず、誦經禮讚の行を勤める人はあるまい、其内機に差別があれば、あるまいとも云はれねば、誦經等も如説に修行すれば往生の業とあれば、さへはせぬ勝手次第なれども、念佛の得益と同じことと思ふは心得違ひ、くらべものにはならぬ、念佛申すものゝ爲に建立なされた淨土なれば、念佛を申すが佛の本願に叶ふことは知れたこと、扱今ま經をよむと云ふは、出家なれば方儀門でよんでも、助業の爲に勤めても、本の思ひ立ちが、此讀んだ經の功德を物立る氣はない、在家は方儀門にかゝり合はない、若し助業に勤むれば功德を物立る心はなけれども、讀めばよんだ經に具した分々の功德がある故、助業の爲によんでも同向するときは、正定業の念佛は本より、助業の經の功德をも皆往生の爲に同向する、此ことは第三同向心の下にて云ふべきことなれども、本文に誦經のこともあり、同向すれば往生の業となる也とあるに付て、因に云ふて聞す、委しくは下にて知るべし。

●問或人至誠心と云ふは勇猛強盛の心を云ふ、淺き實は至誠心にはあらずといふ此義は如何。此問に或人と云ふは、高野の明遍僧都の義立也、僧都は道心堅固の上機にて、天王寺にて元祖大師に御目にかゝり、妄念の起不起の事を聞き、其後高野の蓮華谷に籠居して、父の年回さへ名代を遣はして山より出ず、晝夜念佛一行を勵み勤め玉ひし人なれば、自身勇猛強盛の機故、斯云ふ義を立られたり、元祖大師に御隨從もなく委く法門の相承がない故、自己の所立なれば失かある也、今時の人にまゝ一座二座説法を聞て、もふ聞には及ばぬ、唯申せば往生、申さねば不往生、其外に詮はないと十把一くゝりの早合點する類が多いか、一寸と聞て尤もらしく聞ゆれどもそうでない、なる程單直仰信の機は一生ゆるまず申し課せる人も有れども、重て聞ぬと自己の分別が出て脇道へそれる、總して聞たことを重ねて聞を、天竺の人は大國なり、南洲の中國にて人の心も穩當に綿密なれば、發す所の至誠心にも深淺あり、其安心に引るゝ起行なれば行も又多少あり、喩へば染物の色の深淺あるが如し、其至誠心の強きは紺染鳥羽色の如く、淺きは淺黄水色の如し、いか程薄色なりとて虚假偽りの白地には異也、三心は涯分窮心とて己々が程々也、淺深共に皆往生する也、爾れども深きは上品に生れ淺きは中下に下るべし、但し上品に進んと思はゞ行の數遍を勵むべし、安心には形なければ其位定め難し、起行で位を定むれば易し、既に導師の三萬六萬十萬皆是上品上生人、又上品華臺見慈主、到者皆因念佛多と釋し玉へり、扱上の所立の不正なることは明かなれども、尙此上に元祖大師の釋に、しつかり此義を遮し玉ふこと有り、往生大要抄に云、三心に付て強き弱きあるべしとこそ心得られたれ、よはき三心具足したらん人は位こそさがらんすれ、尙往生は疑ふべからざる也、夫に強盛の心を起さぬは、至誠心缺て永く往生すべからずと心得て、猥りに身をも下し、剩へ人をも輕しむる人々の不便に覺る也已上、此釋

れば、珍らしきことを聞くよりも悦べども、唐土や日本の方は小國なり邊鄙なれば、人の心が短き故、重て聞くをさらい珍説を好めども、此念佛の安心は生死を離れ順次往生の用心なれば、唐土日本持前を捨て、天竺流義になつて聞かれるだけはつとめて聞かねばならぬ、爾ればとて、百千座聞たとて夫で往生と云ふことではない、聞けば聞ほど安心の腰がすはり、正定業の念佛を怠る恐れがない、既に明遍僧都の智道兼備の御方ですへ、師説を委しく承はらねば自己の所立には失ある、爾るを説法はいつも唯申、一度聞たら知れたことゝ早合點する人は、往生の志が懇になく、無道心の尻やけ猿に違はない。

○答僻事なり、(答の意總非と云ふて、夫云所立ひがごと佛願佛説祖釋に違ふひがごとなりと遮するなり)機類多ければ發すところの實に、深き淺きあるべし。

是より下は別して其僻事のわけを云ふなり、機類多ければとは、人の根機に上中下の三根の差別あ

を鏡として照し見れば、上の所立の顔面の三つ口鼻缺の失は直に見ゆるなり、昔より此至誠心を釋するにさまざまの異義が有て、或は佛の眞實なりと云ひ、或は實相の觀解也と云ふ、妄念交れば至誠心に非すと云ふ、又は此心内外不調をきらへば、外相はつゝしまぬがよきと云ふ、或は韋提希の眞心にひとしくして、善導の至誠心にくらべる等の、種々の所立があれども、元祖の傳への鏡さへくもらねば、數々の自己の所立には夫れく失がありて、或は白癩黒癩かさかきの大失もあり、さうのふても目くらか、足なへか、出齒か、出びたひか、獅子鼻か、口がゆがむか、あざがあるか、ほくろがあるか、失のない者はない故に、正義正統の教を開込んで居ぬと、斯云ふ説を聞たとき脇道へそれて、往生正義の本道へ行ず、惡趣の溝川へはまる也。

●たゞいつはらずかさならぬを至誠心とは云ふべきなり。

是が至誠心の體を明す、正意正統の明鏡なれば、

能々聞入て安心の鏡をおろすがよい、偽らず飾らぬは、利養名聞の爲にせず、極樂往生の爲と志して申を至誠心と云ふ也、故に御遺誓には「但し三心四修と申ことの候も、唯南無阿彌陀佛と申て疑なく往生するぞと思ふ内に籠り候也」、この玉ひ、本願抄には「只心に往生がしたければ口に南無阿彌陀佛と申さるゝこそ、眞實に誠なる念佛にては侍れ」、とあり、或は三心と云ふ其中にても至誠心と云へば、打聞ときは具し安かるべきやうにも聞ねども、其詮を云へば、只往生の爲に南無阿彌陀佛と申計り、實に是程具し易き心はなきなり、道理として具し易うなければならぬはず、もてが凡夫を目當ての御本願なれば、具しにくき心を起せと何にしに仰られるものぞ、夫を色々にむつかしう云ひなすは、近く云へば本願のあだかたき恐るべきこと也。

●上々の機の中には、さる心を發すものもまれにあるべけれども、中下の人には思ひよるべからず。是は上機の強盛の心を起して往生することはさへ

ぬ、現に明遍僧都が強盛の心を起して、強盛に勤て往生し玉ふた如く、上機の中には希れに有まい者でもなければ、そう云ふ勧めは本願の心を盡さぬ、なせなれば中下の機を漏すが故に。

●されば往生するものはきはめて少かるべき也、豈末世相應の法といはんや。

既に上の所立の如くなれば、往生することは上機計で中下を漏す、爾るに上機は千に一二餘は皆中下の機なれば、往生するものは少なければ、易行易修とも、萬機普益とも、超世の本願とも、名付られねば、末世相應の法とは云はれぬと也、實には法滅百歳の衆生迄被る本願の安心を、強盛とは見立損ひ。

●譬へば三人の賓客あらんに。

是より譬へを以て示す、上には是に三つの譬へあるべしとありし譬へ也、三人の客は一度に來るにあらず、一人づゝ來ると見るべし。

●一人をば心の中にはや歸れかすとれもへども口には色代してしばしまれといふ、是をば偽り

といふべし。

譬への心知り易し、心に歸れと思て口にとまれと云へば偽に違ひはない、法に合せば心には往生を願はずして口に往生を欣ふよしをいへば、虚假不實なれば往生せぬ也。

●一人をば深からぬども心の中にもとゞまれかし、何となき昔し物語りをもせんと思ひて、とゞまれと云ふ、これは淺けれども、心に思ふ事を口にいへば猶誠にてあるなり。

是も文あらはに知り易ければ委談するに及ばず、心にもとまれと思ひて口にとまれと云へば、心口各異に非れば淺くても誠なれば、猶誠にて有也と云へり、法に合せば心に往生せばやと思て、口に南無阿彌陀佛助け玉へと云はんは、心口相應なれば至誠心具の往生人なり。

●一人をばなをさりならぬ大事云はんと思ふに、此次でならでは後に又いはん事もあらじをなど思へば、さらばかへらんといふも身もいたき計りに覺わてとゞまれと云ふ、これはゆゝしき深き實に

てあるべし。
 ●是又知り安し、なほざりならぬとは、かりそめのことでない大切の也、其大事なことを云はん爲に止むるは深き實也、法に合せば、助け玉へと思も飛付くやうに思ひ、往生したい心やるせなき程なり、彼の蓮生法師の、「此世をば薪と共に……」、詠るたぐわなり。

●此三人はじめの一は偽り。

心に往生したく思はで、往生を欣ふやうに口にも云ひ身にもふるまい、念佛申す聲も哀れに、顔打しかめ涙ぐむていをなし、人に念佛の信者後世願ひと思はれんと云ふ名聞、歸依せられて施を受ん爲の利養故、虚假不實の不往生、西の尾の上人の縁(托、事實卷七)。

●後の二に浅き深きはかはりあれども、同じく實の心といふべきなり。

浅き深きかはりあれども人見せ世渡りの爲にせず、往生の爲と志せば共に至誠心具の往生人、皆往生の埒の内に入る人也、譬ば人の湯水を乞ふに、

いきせきつて走つたれば、餘り渴して喉もやける程なれば早く吞せてくれよと云ふ、是れは深く具したる蓮生法師や、尊願入道、讚岐源太夫のやうな類、菓子を食べて茶を呑み、又はきれいに湧き出る清水を見て冷しさうなれば、一杯呑ふかど云ふ類は浅く具したる至誠心なれども、聊かでも欲い心がなければ吞はせぬ、どうで一度は死すであらう、死ねば地獄へ行き苦みを受るがいや、極樂へ行きたい助け玉へ南無阿彌陀佛、淺ても往生に違ひはない。

●今往生の心のまことこれにて知るべし、(上で法譬合釋した通り)心に往生を願はずして、ことばに出て欣ふよしを云はんこそ、虚假ときらふべけれ。

●心に願ひて口にも云ひ、身にもふるまはんは、淺とも實にてあるべければ往生すべきなり。

是鈔主の合釋、上で委細云ふた通り知るべし、總じて至誠心の下で、三つの譬を挙げ玉ふことは、輕實の往生することを示し玉ふが所詮なり、三心

共に此心なり、虚假の不往生も、重實の往生もまぎらしきことなく分り易ければ、此輕實の淺き實は、問にあげた強盛心義立に往生をゆるさぬを始として、其餘上に擧た數家の所立が皆云ひすぎて願意に叶はぬ故、斯くねんごろに教示し、合點がゆかぬは心なし耳なしの木石か、つんばか畜生と云ふものじや。

●總べて至誠心の下の釋には、自力といふて嫌ひたる事もなし。

是は遮釋と云ふて、異義をはらふなり、一念義の邪流に至誠心を起すは自力なり、他方の信とはあなた次第にして構はぬと云ふ、又至心信樂は佛の三心など云ふ所立もあり、故に邪義を拂ひ玉ふなり。

●また勇猛なるべしとすゝめたることもなし。

是は上の問の強盛心の所立、及び其外にも諸家で韋提希の如く、徹頭真心を起さねば至誠心具とは云はぬの、善導大師の如く長跪合掌、寒冷にも汗を流し、念佛の聲の盡て申されぬ迄にならねば、

本尊の前を退ぬと云やうでなければ至誠心具と云はぬと云ふ類を遮し玉ふ、そう云ふと上根のみ被りて、中下は本願所被の機にならぬ故るに甚失あり、必々肯ふなど也。

○唯嫌ふことばには偽りを出し、勸むる言葉には實あれといへり、大師のすゝめのまゝに心得て、外の語を加ふる事なかれ。

是至誠心の結釋也、嫌ふことばには偽りを出しとは、外現賢善等の文なり、勸むる言葉には實あれと云へりとは、内外明暗をわらばず、必眞實の心を用ひよとの玉へる文也、大師の勸めのまゝに心得るとは、善導大師の御勸め通りに心得て、異學異見の所立を肯ふとなり、所詮かく丁寧にくり返し御示しあそばすことは、只往生の爲に南無阿彌陀佛と唱へさへすれば、皆決定往生と云ふことを思ひ堅めさせん爲めばかり、兎角仕易き往生をむつかしいことやうに思ひ、後しざりをする人が多いによつて、鈔主の老婆心のある處を示して往生し易い道理を、蛇の目を灰汁で洗ふたや

うにしらべて見せる程、此心を忘れずして決定往生するがよい、夫に付て各々尋ることがある、往生はしたきか、したくもなきか、定て往生したいと云はるであろう、其往生仕度は、うそ偽りに仕度や、實にしたきや、定て往生したい心がなければ内に居て己れくが家業をし、又芝居見物にも往ふけれども、往生したければこそ家業を差置き、慰さみ事にも行かず、參詣して御説法を聞きますと云はるゝであろう、若しさうなれば其往生仕度にうそのないのが正眞の至誠心と云もの、其至誠心を具へた者は決定往生とあれば、各々は決定して往生すべき人に極まるなり、夫れを知らずして身の毛もいよ立、涙もこぼれる程になくば往生いかと疑ふは、玉かけながら貧里に迷ふ也、本願のいはれを知らぬから、其身の毛もよだち涙のこぼれるは至誠心の用でこそあれ、至誠心の體は不僞不飾往生の爲と思ふ事なり、悲喜隨喜の至誠心の用の有無に、往生の得否を云ふことは兩祖大師の傳へに有事ではない、夫は自己流の正統を傳へぬ

人の云ふ事なれば、一向に取合ぬこと、涙はこぼれやうと、こぼれまいと、身の毛が立と立まいと、夫はどうでもかまふ事はない、唯往生の爲と思ふが決定往生、夫れに往生得せまいと思ふは、演若達多が、鏡の裏を見て己れが首の見ぬ故、我首を失へりと云ふてさわざ回たと同じことで、皆が往生仕度と思ふが至誠心の玉を持って居ると云ふもの、其心をそなへた人は決定往生と決心するもある、然るをいかと疑ふは、持居る玉を知らぬ鏡のうらを見たのと違ふことはない、斯勘定して見ると、皆の往生決定したことは拳をさす如し、今迄往生をどうか斯うかと疑ふた人は、是で心さつぱりとなつて、うらくと念佛が唱へられる、若是迄往生をも欣はず疑も發らなんだ人も、安心は往生仕度と思ふ計り、起行はわずか六字の名號、其上身口を清めよとにも非ず、行住坐臥とあれば、佛前に向はねばならぬと云ふことでもなし、ほんに明た口で餅と云うか、歸り馬に駄賃と云うか、どうで死なねばならぬ娑婆なれば、此儘で死ねば

地獄は定り、からだは捨て、魂は消ねば、地獄で苦を受けるも此魂なれば、聞ぬ昔は仕方もないが、聞た上で打捨て置れぬ、佛法の修行は、家をも、身をも、妻子も、財寶も、打捨て、難行苦行はせねばならぬこと、計り思ふたが、其身其儘で死んだときは極樂へと思ふて、つい口で南無阿彌陀佛と云ふ位のこと、報身報土と位の高い淨土へ往生して、無邊の樂が受られるとならば、是がまあどう勤めずに居れる物かと云ふ心が起らねば叶はぬ、斯云ふて聞せても、前から疑ふて居た人もやつぱりうろつく、聞た人も餘所ごこの様に聞きながし、蛙の面へ水、馬の耳に風と、そしらぬ顔をして、牛の角を蜂のさした様に、なんとも思はぬ人は、善導大師も淨土の法を聞けども聞かざる如く、見ても見ざる如きは、此人は三惡道より來て罪報未盡、又三惡道に還りて無量の苦を受ける人なりと仰られたれば、此方にいか程思ふても仕方はないなれば、勝手次第に地獄へ落ちて、八寒八熱の苦を受け玉ふなれば、夫れは我身しらすと云ふ

ものなれば、必々思ひかへして念佛し玉へ、又其上に是迄信せぬのみならず、地獄極樂は此世にある、此を離れて外にあると云ふは佛者の大綱、こしらへごこのうそ偽じやの、或は念佛無間と云ふて、祖師様が念佛申せば無間地獄へ落ると仰られたと云ふて、看經の時に迄念佛無間禪天などよみ上る類、現に夫れを自身上總の國で其人を見聞した、是が孝經で母頂を打つ如く、法華經四十餘年未顯眞實の文をあまり解してのが故、法華經で釋尊や多寶如來の御首を打つ、或は念佛を數遍申すは自力念佛なれば、報身報土へ往生することはならぬ、化身化土と劣た淨土へたまくと往生するもあるが夫も甚だ稀な、他力の御安心と云ふは、我等が成佛は十劫已前に調た故、今一念歸命の當下に顯現して、其後は御禮報謝を欣ふ計り、又罪造らじと思ふは自力、他力の信者は心に任せて罪を造る、是が本願他力を深く信じ奉ると云ふもの、忘れても罪造らじと思ひ、念佛數遍勵むなど云ふ自力の心を起さぬとぞなど云ふ類は、世間に滿

ち満ちて居る、先初の地獄極樂はないと云ふ此を
 闍提の人とも云ひ、斷佛性の人とも云ふ、次の念
 佛無間と念佛申は自力と云ふ二つは此を誹謗正法
 の人、謗法と闍提とは無間地獄に墮つ罪人と、經
 文に釋尊がごくいん打てたかれたれば、決定して
 墮獄に違はない、地獄はなし極樂はなしと一生の
 間云ひ通しても、最後臨終には眞倒さまに無間地
 獄に、或は焰々たる火車來現自業自得、果ていや
 と云ふても仕方はない、斯云ふても業障で邪智が
 強い故、なしと云し地獄へ墮することならば、共
 になしと云ふた極樂へも往生しさうなもの、片落
 なことぢやと云ふが、因果の道理はそう甘う自身
 勝手には行ぬ、昔も牛をむごく責めつかふを見て、
 そうむごくすると來世には牛に生れて來るぞと云
 ひたれば、成程と肯ふて内にかへるやおそしと、
 佛壇の本尊をうちたたく、こは勿體なし狂氣せし
 かと云へば、いや今日牛を叩いたならば、そうす
 ると未來は牛になると云ふた人がある故に、未來
 牛に生れず佛にならうと思ふ故、打たなくなりと

答たと云ふと同じこと、善事は願が入れ其惡は願
 に及ばぬ、誰も地獄へ行たいと願を立つる人はな
 けれ其ころりくと落ちむ、其になしと云ふた地
 獄は遠いことはない、追付臨終ぎはに見付て飛び
 込む悲しきことなり、念佛をそしつた人は、三世
 諸佛が残らず念佛すれば往生に違ひない、釋尊の
 説を信せよ我等證誠すると舌を三千世界へ覆ひ
 て、若し生せずば今出す所の舌くさり壞れて、口
 ちに還り入らじとの玉ふに、念佛すれば無間に入
 るの、念佛申は自力じやのと云へば、三世諸佛の
 舌を残らずくさり壞るになれば、只一佛の身よ
 り血を出さへ無間地獄の業なれば、まして一切
 の佛を一佛も残らず御舌をやぶる、無間獄より外
 行先はないに定つた、其無量劫を経て浮ぶ期は
 ない、こいつも同じく邪智があれば、たとひ念佛
 を謗つたは罪にもせよ、たふとふと云ふ御禮報謝
 を喜んだ善根で、寂光淨土に生れ報身報土へ生る
 るときしめかふが、そりや愚痴で經説を知らぬか
 ら、經に既に自教愛染に依て他の教法を謗る此人、

持戒精進なるとも地獄に入ること矢の如しとあれ
 ば、佛説に又向ひはなるまい、なればしやうことは
 ない本願の大善名號を謗り稱へさせぬ罪で、地獄
 の中でも無類飛び切り此の上なしの誂地、無間地
 獄へ御出なされねばならぬ、さあ斯う勘定が定ま
 ると悲む心が起らねば叶はぬ、所にまだしぶとく
 我執の強ひやつがあつて、いやそうは云はれぬ自
 宗建立の手前には抑揚の説をばなすは定り、其方
 の宗旨でも淨土宗は諸宗超過と云ふ、念佛と餘善
 を全非比較と云ふではないか、抑揚は秤の低、一
 方が上れば一方は下る故に、此方に何にも失はな
 いと云ふか、夫は理に似よつた大僻案、佛法を學
 ばぬ人は斯云はれると尤も肯ふもの故、ことな
 がけれ共一生念佛申遂る爲なれば、云ふて聞さん、
 宗を立てるとき抑揚を云ふは随分有ること、華嚴で
 は性起を募りて餘經を逐機の末教と云ひ、天台で
 は開顯未顯に約して、爾前の經を方便説と劣し、
 眞言では、密部を最上として餘經を顯經とて劣し、
 禪宗には教外別傳と立て餘教を内と劣し、淨土宗

では、願非願によりて他力を募りて聖道自力を劣
 し、是を抑揚の説とて教相を立つ基ひなり、皆各
 々に謂れあることなり、日蓮や一念義は此の仲間
 へ入ることははしたてゝもならぬ、日蓮の黨法華
 經の意を邪に解し諸宗無得道と云ひ、一念義は三
 部經に背て往生相濟だと云ひ、念佛申は自力と云
 類、邪解を立れば此二流は宗外と云ふて八宗九宗
 の中ではない、斯云ふを宗外の徒が聞と謗法の様
 に思へ共、向ふが邪教じやに依て謗法にはならず、
 却て佛法の惠命をつくことで、破邪顯正は佛の勅
 命なればつとめて云はねばならぬ、譬て云ふなら、
 公儀より奉行へ諸人に己れ己れが職分を勤て親に
 孝行をせよ、主人に忠義を立てよ、切支丹を禁じ
 盜賊博奕をするなと教へよ、夫を背かば責苦をな
 し、遠鳥死罪に閉門牢舎等を申付て、其人をこら
 し餘の人の見せしめにせよと仰せ付らるゝ、同じ
 人間のこなれば悪人にもせよ拷問死刑に行ふこ
 とは面白いことでなければ心に好まれね共、君臣
 となり祿を受け父母妻子迄養育することなれば、

畏りて否なことも行ふ如く、此方も數ならねども出家剃髮して佛弟子となり、檀林に掛錫し、わろわろ螢雪の勤めの星霜をつもり年序を經れば相承も相濟、自行を勵み度生をなし、摧邪興正して宗風を扇げと佛祖傳々の仰付を被れば、いやでも應でも邪義を破し正義を顯さねばならぬ、丁度奉行衆が公義の仰付を受らるゝと同じこと、博奕や不忠不孝を捨置けば、夫れを見まねて善人迄が悪人となる如く、邪義を破さねば念佛申も邪見に落入る、悪人なれば牢舎か死罪、邪見に落入れば地獄か畜生、斯ふ云ふ大事のこと故、云とむないことも云はねばならぬ、邪義から念佛を誘は、盗人が善人をさしてあれは盗人ぢやと云ふても、善人なれば引廻しにあふて土檀へ据る氣遣はない、善人の邪義を破するは、あゝ云ふ盜賊の果は悲しい目を見るであらうと云ふ内に、阿防羅刹の取入の火の車の馬の背中にくゞり付、土檀へひいて行く様なもの、さあ是で分厘の差ひもなく天秤の針口がしやんと合た、どうも動きはこれぬ、此方の胸

算用の破ならばそうかしらぬと云ふ疑もあろうか、佛教祖尺の天秤で打合せたことなれば疑の付處がない、彌々謗法闡提は無間地獄に極まれば、三月頃の鹿の頭を見る様に、我慢の角を落さねば叶はぬ、扱落すに極た處が、是迄謗た罪があれば念佛申た處が、決定往生心許ないと悲む心があるふが、謗法闡提回心皆往とあれば、悔る心があれば謗つた罪御ゆるしなされ、南無阿彌陀佛と唱れば是迄の謗法闡提の名をけづり捨て、善男子善女人の嘉名を被り、此人娑婆の緣盡て命終の後極樂に生れ、あなうらを結ぶべき蓮華は、是れ迄の罪ゆるし玉ひて極樂往生なさしめ玉へ、南無阿彌陀佛と唱ふる聲の下たに、八功德池に生て意樂改轉すれば、一のうらは惡に強いは善にも強く、進み進んで勤めるに隨て、蓮華は次第にうるはしく榮ゆ、正しく命終のときは觀音菩薩が此華をさゞげて此人を迎へ玉ひ、勢至菩薩にいだき乗せられ、彌陀如來に譽められ參らせ、無數の聖衆に取まかれ異香紫雲音樂で極樂に往生し、無量無邊の樂を

受け一生の中正覺を成すると、我慢を募り謗をなし無間地獄に落て、永劫浮む期なくせめとはどちらがよいか、のびのびにしては不定の命、どうぞ今日御日課をと云はずしては居られまい、扱上に云ふ如く只往生が仕度で南無阿彌陀佛と唱るが至誠心なれば往生は決定、前から疑のない人は此を聞て彌疑の起るあやぶみなく、疑をなしてぞふかこふかと案じた人も、是迄うかゞ徒らに光陰を過した人も、是迄そしつた謗法闡提の人も、我等が爲の本願とうらゝと思ひ付、往生したい心で南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と申さへすれば、至誠心を具する決定往生の人なれば、心はれゝと唯唯名號唱ふるが肝要。

●二には深心。
是れは三心の中の第二の深心の總標なり、是れを性相で定れば信の心所なり、信は忍許澄淨の義にて、なる程と肯て疑ざるが忍許の義、肯て疑はねば心はれゝなるが澄淨の義也。
●ふかく信する心なりと釋せり。

是れは深心の總釋なり、即ち導師の御釋を引て示し玉ふ、ふかく信する心を深心とは云ふなり。
●何をふかく信するぞとならば。
是より別釋なり、其深く能信は知れたが、所信の信せらるゝは何ぞ、何を深く信するぞと、向ふの目當てがしりたくば。
●これに二あり、一には機を信じ、二には法を信するなり。

是は其信する物がらを出し玉ふなり、是も導師の釋をやはらげて示し玉ふなり、是を機法二種の信と云ふなり、二つあれども詮は南無阿彌陀佛と唱ふれば、佛の本願なれば決定して往生するぞと思ひ取て身を本願に打任せるを云ふなり、爾れば機を信するはさ迄急用でないかと云ふが、此信機の釋は古今未發甚深微妙の妙釋にて、若此釋なきときは彌陀如來の本願の深底も顯れず、後の法信の釋もゆるぎがありて決信が出来兼ねるなり、善導大師を彌陀の垂迹と云ふも、是等の妙釋ある故天下の人が争を入ぬなり、委くは次に知るべし。

●まづ機を信ずるとは、自らの身を深く信じてすべて生死を出べき縁なしとしるなり。
 是が信機信法二種の中の第一の機を信ずる御釋なり、凡そ世間出世に就て信心と云ふが最要のこと故、此信心に無量の沙汰あるなり、其無量の信心を取集て大分と大わりによれば、世間の信心が一重、佛法の中で二つを分て、總じて聖道自力の信心が一重、淨土他力の信心が一重で、三つに分れる也、最一重分別すれば、世間と聖道を一つにして一重の信心とし、淨土の信心を一重として二つに分つなり、なせに世間と聖道と一つにして世間と淨土と一つにはせぬぞと云は、世間と出世とは差別はあれど、世間も自力の信心を思ひ堅めて聖道の信心も自力を思ひ堅むれば、かさねて一重とする也、淨土の信心は是と大にことかはり、一所にはならぬ故に二重と分つなり、先其信心を堅むるに付て、世間の信心を云は、昔し後漢の光武の時に王莽と云ふ者が亂を起して軍兵雲霞の如し、王莽將軍と光武皇帝自ら向ふて討に勝たず、

軍敗して引還る、王莽是れを追ふこと甚だ急なり、岸沱河と云ふ大河に行かる、斥候の者立ち還て曰く、水至て深し舟に非ずば渡るべからずと、爾時王霸聲を嘶して曰く、天甚寒し氷堅し早く渡りて北ぐべしと軍士皆河に趣く、水面氷堅く閉て一騎も流れず岸に達す、追兵は河端に來り水の深きを以て引還る、光武の曰く王霸が權謀を以て殆きをわたる是天の瑞也と、後漢王霸傳に見たり、或は李將軍が父の敵の虎と思ひて射たる矢は、流石に堅き石を通せしこと、漢書李廣傳に見たり、或は靈の人を殺す類、皆自の信力によるなり、次に出世間に聖淨二種の信心あるに先聖道の信心を云は、華嚴經には佛法の大海には信を以爲能入、信は道源功德の母なりとて、信心がなければ佛法には入られず、信心は諸の功德をうみ出す母なりとあれば、其肝要なること信心にまさるものなし、法華譬喻品第三には、以信得入者、舍利弗の智慧第一なるすら尚以信心得入す、況や餘の聲聞をやと説玉ひ、慈覺大師は有信力故魔不能動と云、

是等の上にも解信仰信の分別はあれども尙自身の信智を出す、故に信心を二つに分けては、世間と出世間の聖道とを一つの信心とする也、問世間の信心は淺近なり聖道の信心は深遠なり、若淺深を一混せば謗法の一分ならんか、誰か云ふ世出の二信全同なりと、今一分とするは唯二信同く自身を思ひ堅る邊を云ふ也、誤りても信心の益を一混することを得んや、同く自力の信心なることを證せば、止觀に起圓信の信の字を釋するとして引一因縁、其意を云は、昔し佛恒河の邊に在て御説法の時、一人の老翁足をもぬらさずして恒河を渡り佛の御前へ來る、其時佛彼翁に對して此恒河を如何にして渡るぞと問玉へば、翁答て申様は、人に何程此恒河は深きぞと問へば足踵より上へに不浸と申程に、其言を信じて恒河を渡るに誠に足の踵も不浸と答ふるなり、其時佛の言さく此翁は正眞に信人言故に此河を淺く渡るなり、如く此佛法を信せば生死の大海を易く可渡也と説き玉ひしとあり、是れ其世法を信する如く、佛法を信せよ

と勸め玉へば今世出ともに合するなり、扱聖道で自力の信を立つるに付て、其所信の向ふ目當とはどう云ふことを信するが肝要ぞと云ふに、佛説に或は萬法唯識と説、或は一切諸法は眞如所流と説き、或は心佛及衆生是三無差別と説、或は治生產業皆與實相と説、或は一切衆生悉有佛性と説玉ふを信じて、最初發意の一念より、佛祖の頂を超ゆと云て、佛何人ぞ本凡夫なり、我何者ぞ今佛性あり佛性は同一にして佛に有ても増せず凡夫にありても減せず只迷悟の異なるのみ、修行せは豈成佛せざらんやと信じて心性の珠を磨く、是が聖道の要中の要なり、故に信心の二字をば任する心と訓するなり、故に四教義には信順從爲義、聞説不疑名信と云ひ、又法華經の信解品第四に云ふに、信解の二字の訓點に三義ありて、第一の義に云く、まことにとくるとよみ、第二の義には、まかせてひらくとよみ、第三の義には、まかせてさると讀也、三義あれども詮は只釋尊が三車火宅の喻を以て諸法實相の妙理を説玉ふを聞て、なる程諸法實

相であろうと佛説に任せて疑ひなきを信と云ふなり、第一の義は諸法實相と聞て無明の氷がとけて、實相眞如智水が澄淨とすみきる故まことにとくるとよみ、第二の義は眞如の悟が開れば依正の萬法が本より本有にして、柳は緑り花は紅む只其儘の色香ぞと悟る故に、まかせてひらくとよみ、第三の義は我思情をかり捨て、只佛の教に任せて悟る故に任せて悟ると讀む也、尙信の字をまかせるとよむことは導師の釋に信業走とあり、史記に主之任、臣如身之信、手と云ひ、群談採餘には、信天縁(五位さぎのこと)類、鵝類、色蒼而嘴長、終日凝立水際、不動、魚過其下、取之、不易其地、故に信天縁と云ふ、是等皆信をまかせるとよむ潤色已に信の字は人扁に言云字を双ふるも人の言を疑はざる義より作る、故に上に云ふ如く、世間の上でも人の言を信じて恒河の深き底なきをも踵を過す淺々と渡り、滄沱河の漲り流るゝをも一騎も流れず岸に上る、又聖道の上では信は順從を義とす、説を聞て疑はざるを信と名くと云て、佛説を信じて

如説修行し、生死の海を渡りて涅槃の岸にのぼる、故に信心とはまかする心なりと云ふ、斯く云と早計と卵を見て時夜を欲し弾を見て灸を思ふと早吞込をする人有て、成程信心は結構なもの大河を易易と渡るも信心、木から飛で仙人となるも、土大根で盜を追拂ひ、鱸の頭より光明を放ち、白紙を佛像に拜みなしたも皆一の信心からじや、故に信心さへあれば生死の苦海も何の物かは、涅槃の彼岸にかけ上るは追付のこととやと、きをひかゝる人があらふも知れねば云て聞す、上に云た世出世の二の信心の中にも先世間の法を云はゞ、一機一縁の法なれば衆人が不殘斯じやと云ことではない、なせなれば諸人が皆恒河の翁や、光武軍勢等の如く、大河を足もぬらさず渡らるれば、渡舟も渡守も入用になければ、舟をわりて薪とし船頭は食す飲すに居すば成まい、鱸の頭から悉く光明がさゝば佛師は衣ることも食こともなるまい、白紙が悉佛像とならば佛畫師は家の住居得せまい、なれども世間の人は皆河端に望めは船頭を頼て船に

乗り、本尊がほしければいつでも佛師屋へこそ往け、魚の店へ走たと云ことは聞ぬ、掛地の佛が望みなれば佛畫師を頼て紙屋へは往かぬ故に、昔から無量の人はあれども深き川を徒ち渡りしたも、魚の頭の光明を放たも、白紙を佛像と現じたも、指折程もなければ九牛の一毛とも大海の一滴とも比較のなることでない、夫をば知らぬ愚かさから、泥田で棒の自心を省みず信が堅固の眞似をしたがる、若し夫れが浦山しくつまでかけて見る氣なら、勝手次第じやが、身の上知らずの物おぼはず、鵜の眞似をする鳥なれば、哀れに思ふに依て智慧をかしてやる、若し昔し河を渡た眞似をして大河に向ふて徒ち渡りせんと思ひ、尻をつまげるときは細引繩でも用意して腰にくゝり付けて、人が居合すならば其人を頼で繩のはしを持つてもらふ、人が居なかつたら丈夫そうな木の根へくゝりつけて置こと、水の勢の緩急あればどふで沈むか流れるか二つの内に違はなければ、人が居れば阿房に付る薬がない定めて苦痛を見るであろうと引

上げてくれる、若し木の根にくゝり付ておけば、水を吞で苦い中にも命惜しければ自身にたぐり上る、あがつた所が溝に落た狗ころの様になるひふるひ外聞をさらず、なれども死ぬるにはましなれば必繩を忘れまい、扱又木からとんで仙人に成たと云を聞て、己れも上つてと思ならば、先貸蒲團でも澤山にかり集め木の下へ重敷で、口には氣付を一ばいふくんで、又其上に用心に外科醫者を頼で、そして飛にかゝるがよい、どうで高い木から飛ぶことなれば、何程ふとんをしいて置ても、目をまはすか腰が抜けるかに違ひない、目を回せば口に含んだ藥氣がまはつて氣をふきかへし、腰骨のたがひは醫者が直してくる必忘れぬがよい、爾し是では命がけなれば次へ回して、先づ仕損じても大事のない李將軍が眞似をして、石を虎ぞと思ひなして立つか立ぬか射て見るがよい、爾し射藝を習はねば射當てることもならず、夫れ矢が人に當て療治代の金を出さぬ様にするがよい、よし射當た所が芝居狂言作り物のちり紙のはりぬきな

らしらぬこと、石と名が付きや和かでも立はせぬ疑はしくば試に仕て見て合點するがよい、是等は皆不思議と云た世間の妄情の上なれば出來た所が詮はない、次に聖道の信心を云は、是は出世眞實にして生死出離の一大事なれば前とは違ひ、佛法の上では一念の信力念力計りで成佛はならぬ、必ず其修行がなければならぬ、唯其教の言を信することのみ眞妄差別はあれど同じことなり、世間は妄法なれば偽りに云ふを信じても其ことが成すれども、佛道では九十六種の外道の邪言をも信せず、儒道百家の妄教をも信せず、唯佛説のみを信するなり、其佛説は金言眞言と云ふて、匿ひげの過ちもなき誠實の言なれば必至と信する也、夫れ佛敎に諸法實相三無差別悉有佛性等と説けるは、本有の理體を明すの文にして向ふの目あて也、本有の妙理は空寂なれども凡情の前には差別歷々たり、然るを邪解の慢幢を立んとして凡聖を一混して、諸法實相なれば姪欲即道なりと云ひて猥りに姪を行じ、三世無差別と云ふて佛菩薩をも敬はず

悉有佛性なれば我即佛なりと計して、自ら損し他を損する類古往今來まゝ少からず、是獅子身中の蟲として佛法中に居て佛法を壞するなり、悲みの極り何をか是に加へんや、今其佛敎に順する正見を云は、本有の妙理は凡聖一如と聞て一點も疑はず圓覺を證せんと欲す、其證せんとするに修行ある經律論の三藏五千餘卷あれども、其詮する處は三學を出す、其三學の次第を云は、戒を持て定を發し、定に依りて惠を發す、三學周備して二轉の妙果を成する也、斯の如く信するが聖道八宗九宗の信心也、若本有の一理を信じて修行を發せば佛説に取捨をなす無顧の大惡人なり、天魔なり外道なり唾をなすべし、さあ斯云ふと前の木から飛だの、つひ氷がはつたのと思ふて、どう云ふことで向ふへ渡つたの、すべつたのころんだのと云ふ、世間の信心沙汰とは違ふて、名目からが分り兼る、諸宗の中にも智道兼備の人はあやまらねども、我執我慢の無學無道心の假名僧は、佛法一大事の機

教の應不應をしらぬ故、下機下根の在家に向て本有の理を説き三學を勸むる類がまゝある、此のことは、下の異學異見に驚動せられなと云ふて委しく云ふであらうが、今因に云は、成程一向佛法に縁なき人には因縁を結ぶ爲なれば制するではなけれども、念佛者安心不案内なれば、まゝ念佛を止て其勸に従ふ氣になる、そこで本有の一理を明らめんと思ふても、本下機の凡夫故三里の灸よりこたへにくゝ、三學の修行は田樂を食ふ鹽梅にも行かず、是ではならぬとひたひに筋をたて脇の下から汗を出しても、其明を見ぬことが生れ乍らの盲ら同前悲むべきことぢや、そこで皆が歎いて扱は世間の信心は妄法なればありもせぬが、たとへ有ても益にたゝぬ、又聖道の信心は甚深なれども難行なれば下機は叶はぬ、所詮出離の道は絶て手を拱きして三惡趣に落ちるを待て居ねばならぬか、夫れは悲いことぢや、どうぞ下根な此方も出離生死の遂げらるゝ法はあるまいかと、捨てゝは置れぬ問て來ねばならぬ、そこで前で信心を大分

けにすれば三重になる、夫れをかさぬれば二重になると云ふた、後の淨土他方の大信心が入用になる、至て急用なことなれば先づ云ふて聞かすはずなれど、對待せねば他方の大信心を珍敬すること、薄い故に、わざとたばふて初に世間の信心を明し、次に聖道の信心を明して、世間は益なく聖道は難行なることを勘定すると、こは悲しや又も三途に落ちねばならぬかと悲しむ心が起つた上で、淨土他方の信門に入れば退轉の後もどりすることがない故、是より下に淨土他方の信心を示すに、佛説を信することは佛法の大道なれば聖淨二門異なることなし、されども其の信相は異にして天地懸隔せり、云何異と云は、所信の經説異なれば能信の所立異ありて、聖道は自力を信じ淨土は他力を信じ已に自他の別あり、何ぞ一混せん、其他力を信するとは、阿彌陀佛の本願に名號を唱へば我國に迎はんとあるを信する也、是に付て佛敎の大事は機教相應せねば其益なき故、其能稱の念佛するは何なる機ぞと云ふに付て、今其所被の機を示

すなり、此機を擧るに二の故あることは委しく本文にあれば其所にて談せん、其信機の文は上の先づ機を信ずると云ふは、自の身を深く信じてすべて生死を出づべき縁なしと知る也、總じて信機信法共に自力の信に異なれども、別して此信機の釋は古師の所立に露ちりもなき妙釋也、文に自身の機を顧るに愚縛低下の凡夫なれば、身には殺生偷盜邪淫の三つを具し、口には妄語綺語惡口兩舌の四を具へ、意には貪欲瞋恚愚痴の三あり、已に身三口四の七非、意三の三毒熾なれば十惡具足の惡人なり、爾るに生死を出離し二轉の妙果を得るには、佛家の定規戒定惠の三學を以てす、爾るに三學共に欠て十惡の機なれば、出離の縁なしと知るなり、是其信機なり、聖淨二門の機同じく初心は凡夫なれば十惡あり、爾れども聖道門は自己の佛性は佛に在て不貴衆生に在ても不賤、煩惱の風靜まれば七非の波浪は舉體眞如の水にかへる、丈夫何ぞ讓らんやと三學を勵む、譬へば尾羽打からせし浪人の、我は本氏ある人の子なれば連身持を

たしなみ、追付家名を顯はさんと思が如し、又七里の渡りを自身泳ぎ渡らんとするが如し、皆是自の信力念力を頼むなり、淨土の信は是に異にして已に十惡の凡夫なればと自身を見下しはて、出離の縁なしと定む、譬へば浪々貧しき人が我もと氏あるものなれども、忽念々起名爲無明と自家を迷出しより、已來二十五有の日本國を迷ひあるけども、身に藝能の三學なければ日にそへて落ぶれ果て、自力の渡世は思ひもよらねば、幸ひ慈悲ある富貴の人が頼めはぐ、まんと云へば、此人頼にくはなしと思ひて偏に身を任するが如し、又七里の渡に望みて、我如きものたよぎて渡らんとせば決定溺るゝは知れたこと、船頭を頼み舟に乗て安々と桑名へ上るが如し、是が他方の信心のすがたなり、同じ宮から桑名へ渡ると、凡夫から往生成佛の間の生死を渡るとは同じことなれども、其渡やうに異ありて、聖道の人自身の手や足の三學をはたらかして泳ぎ渡り、淨土門の人は自身に三學の泳ぎが出来ねば、本願の船に乗りて安々と渡ると

違ひあり、其得益の多少を論せば、聖道門の三學で泳ぎ渡るは、戒の手も、定のからだも、智慧の足も、至て周備と揃て、達者な上根上機でなければ渡り付くことは叶はぬ、中下の二機は三學の手足からだで、どこかひずみがあれば自身決定向へ渡り付と云ふ覺もなければ、性習不同執法各異なれば、性得本願の舟きらひ故及ばぬ乍らも自力の泳ぎをすく人もあり、又業障深重で耳も遠く本願の舟の有ることも知らず聞かず、渡りは得まいと思ふても宮に住居も出来ねば、若も千に一つ渡り付くことも有んかと泳ぎかゝる人もあり、是等の二人の中下の機は、本三學の手足や體が弱ければ桑名の彼岸に至り付くこと叶はぬ、三界二十五有の生死の有海に沈む也、爾るに上代すら上機は稀に中下は多し、況んや末代五濁増の時、上機は千に一人か二人夫も又ひいき分の勘定、奪て云へば千中無一也、故に道綽禪師は安樂集に大集月藏經の文を引て、我末法時中億々衆生起行修道未有一人得者已上、故に上機と云へば連末世の衆生上代の

上機に等しからんや、故に泳ぎかゝる程の人は皆沈むなり、斯く云ふを聖道門の人が聞て誹法ぢやの誹謗ぢやのと云ふが、此方には與らず、道綽禪師を誹るがよい若し誹たらだまつてはござるまい我は經文に依る、此方にはよらず、釋尊を誹れとの玉ふであるうなれば釋尊に取てかゝり、なせ斯と云とき、釋迦如來が閉口して是は我心得違ひが有た、向後は經文をも削り道綽及何某にも此ことを云など申付様とあらば、釋尊の次に道綽禪師々々々々の次に小子もかゝりて御一所に過まらうが、よもや釋尊が自覺々他覺行窮滿と三覺圓滿の成佛し乍ら、龜忽な御說法はあるまい、已に經に世尊月はあつからしむべく日は冷やかならしむべくとも、佛の所説は實に苦なりとあれば佛に微塵の妄語はないなれば、釋尊が末世の凡僧に誹られ閉口しては御座るまい、決して迦陵の妙音を發して御呵責なさるゝであらうなれば、天台大師も摩訶止觀第十九丁引妙勝定經云、佛滅百歲十萬九

(938)

萬得度すとあれば依て勅定すれば當二千七百有年
 になれば十萬に一人もない又傳教大師末法灯明記
 等も是と同じ本釋尊の所説なれば八宗皆效之爾
 るを此方を呵するは皆宗々の祖師方をそしるにな
 る也、道綽禪師も某も謗法でなければあやまる氣
 遣はない、道理を云ば斯なれどもまあ與釋とあた
 へて少分も有なら有るにもせよ、淨土の萬機普益
 の他力の信には同日同年の論ではない、聖道の信
 心は自力の信心念力を以て現に十惡の凡夫を佛に
 異ることなしと思ひ堅むれば、水を氷と思ひなす
 が如し、淨土の信心は先づ機を信するに、現に十
 惡の凡夫なれば出離の縁なしと信す水を氷と見る
 が如し、露も六ヶ敷ことなし、爾るを未練の學者
 は淨土で無有出離之縁と謙下するは深く佛願を信
 せしめんが爲、實を云ては無始より已來生々の受
 生の中低頭合掌飯食沙門造塔受戒等の善根も有べ
 ければ、無縁とは云れねども謙下とわごる氣を押
 ゆる爲なりと云へども、さう云ふことではない、
 決定必定出離無縁なり、總じて偏計所執を盡さぬ

凡夫の善根をば有漏の善と名て、三界受報の因と
 なりて、有漏の果報を得る迄にて、界外無漏の果
 を得ることは叶はぬ、故に瓜の蔓に茄子決定せし
 無縁也、爾らば出離の縁はないであらうが出離す
 べき因はあるや、一切衆生悉有佛性なれば因はあ
 るであらうと云に悲いとには其因もなき也、なせ
 なれば靜に胸に手を置き心では心を探り手では體
 中を探て見られよ、露も佛性らしき物はあるまい、
 たとひ夜を日に繼で百千萬劫探ても有はせぬな
 り、ないこそ道理、天台大師の釋に、三千在理同
 名無明、三千果上現生常樂とある、此釋の意は湛
 々と平にたへし水も、暴風と荒き風に吹かれて
 擧體動きて波と立つが如し、眞性の水は一如と湛
 へし物なれども、忽然念起名爲無明のそよ／＼風
 が三細六塵と次第にあらく吹き強れば、もと湛然
 たる眞如の水は擧體煩惱のあら涙と立のぼる、此
 時を見よ靜なる水は一滴もなく、靜ならねば水の
 名は消れて一向に涙とこそいへ、故に佛性の名は
 きつて心性の擧體煩惱となり果てたれば、出離の

因もなきことを是れを三千在理同名無明と釋し玉
 ふ、爾れども段々と觀念をこらし蠱惡の煩惱より
 して微細の無明迄斷じ盡せば、無明の擧體佛果の
 體用と顯はるゝを三千果上現生淨業と云ふ、若夫
 ならば觀念をして佛果を證せようかと云はれふ
 が、なるかならぬか先づ試みに線香一本なりとも
 修して見るがよい、八年前の古借錢をば思ひ出さ
 うが心の調ひさうなあんばいは、露計りもない、其
 故に善導大師が此ことを御釋しなされて識揚神飛
 觀難成就と仰られた、爾れば無有出離之縁に違ひ
 ない。

●如是信するは何の爲ぞとならば二の故あり、一
 には若し我身ぞ生死を出べき功ありとわもは、本
 願のうれしさも強なるまじきにや、此故に本願に
 乗りぬんがために、先我身の拙き事をしるなり、
 則ち是又自力の心をすて、他方に歸する姿なり。
 如是信するは何の爲ぞとならばとは、上に自身現
 是罪惡生死の凡夫、永く出離の縁なしと思へどあ
 るが、さう思ふは何の爲になることぞと微問する

也、若我身と云より下は、上の如く出離の縁なき
 我身と思はずして聖道門の行者の如く、初心より
 極佛の思ひをなし唯心性の珠を磨きて即身即佛と
 觀じ、自を高々に押なして謙下の想はせぬなり、
 譬へば材木は長大なるを重んじ、丈馬は背の高き
 をよしとし、富士山も大佛殿も、姫路の天守も、
 有馬の火の見も、仙臺駒も、九州犬も、駕籠かき
 も、角力取も、少しでも高いが勝れるように、聖
 道門では凡夫のあなうらにとゞこふらず、佛祖の
 頂きを越るを詮とす、我々出離の方ありと思ふよ
 り彌陀の悲願の謂を聞てもあなうれしやと思ふ心
 はなき也、淨土の教は大に異にして我は極惡最下
 の機にして全く三學の器にあらず、出離の縁は絶
 じ果て、三惡道のすもりとなるより外はなき身ぞ
 と、只管自力の欠けたる事をすれば、自力高擧の
 失を離れ他力の悲願にうら／＼と思ひ付、是れ信
 機の釋の一つの故なり、淨土門では少しでも機を
 高ふりて自力のすけさすことを忌み嫌へば、段々
 に機をひき下る也、譬へば脊の低い脊くらべには

(939)

(940)

ひくいが勝が如し、南京蘇鐵も、難波の松もひく
 いが賞翫、薩摩のちんも、四國の猿も、けし人
 形も、鶏のちやほも、うごも、蕨も、筍も、高ふ
 なる程役に立ぬ、故に機を引下るほど本願のうれ
 しさも強ふなり、助け玉へ南無阿彌佛と申す心
 がすゝむなり、丁度世に住む人の身の豊かなること
 きには人の恩もさのみ悦ぶ心なけれども、段々に
 身代も左まへに、するとなすこと後へまはると云
 ふ様になり、朝夕に煙りもたわだねになれば、心
 細く物かなしき折には聊の情をかけられても、し
 みぐと悲けなく思ふ様に、無有出離の縁の我身
 後世は決定三惡道こはいかゞせんと思むとき、い
 かなる罪人をも申せ助けんと云ふ本願の大悲を聞
 ば、あら有難やとすがり付く思ひになれば機を信
 ずるの義を設け玉へり、此信は淨土一門の至寶に
 して、他宗の人師には絶わて此釋なきなり、故に
 本文に若我身に生死を出べき等との玉へり。
 ●二にはたとひ本願の文に十方衆生十念して生ず
 べしといへども、衆生の言葉廣し、しらす何なる

機にかあるらん。

是は機を信するに二つの故ある中の第二の故を明
 す、文の意は阿彌陀如來の第十八王本願の中に、
 設我得佛十方衆生等とあれば、十方の衆生我國に
 生れんと思ふて稱名だにせば生せしめんと誓ひた
 れども、其十方衆生と云詞ひろければ何やうなる
 機の往生するやらん、善人のみにて惡人はもるゝ
 ことにてはなきかと疑を起すなり。

●況んや異學異見の人ありて、左程にゆゝしき淨
 土へは、凡夫なりともせめて戒をもよく持ち智慧
 も深くしてこそ生るべけれ、いかゞそこたちの様
 に罪深く愚なる人は、たやすく生すべきなど、妨
 げ云ふ事あらんには、實に本願の文ばかりにては
 其疑ひ晴れがたかるべきを。

此文の意は、上の如く自身の疑ある上に異學異見
 の聖道門の人や、或は今時の如き背宗邪義の人有
 て種々に云ひ妨る也、先極樂は報身報土のことな
 れば地上の菩薩でなければ往生ならぬが定り、爾
 し凡夫を往生させよと云ふ願力あるなら生れまい

ものでもなければ、凡夫とは云ても一通の罪惡
 の凡夫が生れ様はない、せめて戒行をも持ち智慧
 をも磨た人ならばこそ、其元などの様な無戒破戒
 の罪深き人愚痴蒙昧にして般若の智慧くもり切た
 愚な人が、どうして口に南無阿彌陀佛と申た位の
 ことで往生がなるものぞなど、取付引付餘所の經
 釋など引集めて云ひ妨ることがあらば、成程本願
 の十方衆生の文ばかりでは其疑ひは晴れ難たかる
 べきを。

●善導大師は彌陀の化身として、我むかしの本願
 の念たがへしとて。

淨土始祖、大唐終南山悟真寺の光明善導大師淨業
 大和尚は、隋の代に長安に化生し玉ふたれば父母
 はまします。是則極樂の教主彌陀如來の垂迹な
 り、其彌陀如來何故導師と化現し玉ふぞとならば、
 諸の人師達が諸經所讚多在彌陀の故に、各々に淨
 土門の教を述作し説法し玉へども、多くは練磨本
 宗の失ありて彌陀の本願の深意本爲凡夫の源底が
 顯れ兼るに依り、本願の主彌陀如來善導大師と化

現し玉ひ、淨土門を建立し古今を楷定して本御自
 身の御本願を再述遊ばすことなれば、本願の深意
 を一點の曇りなく述作し演説あそばされしなり、
 故に文にも本願の十方衆生と云ふ機分明かに知れ
 ぬ故、末に至りても其機をあやまらぬ様に其機分
 を明し玉ふ。

●其本願の機はよろづの佛にも捨てはてられ、何
 れの國にも入られざるたろかに罪をもき、無有出
 離の縁の機なりと釋せらるゝにこそ、本願ひしと
 我等が分になり定りぬれ。

此文の意は、其本願に十方衆生とある機分を明し
 玉ふなり、其衆生とは諸佛は三學全ふして修する
 者に慈悲を加へ玉ひて、三學無分の罪惡の衆生は
 捨てられたり、是れ諸佛の慈悲たるかなるにはあ
 らねども、因果應報は佛法の定り、瓜をまけば瓜
 がはねをまけば麥がはゆる善因善果惡因惡果、
 身から出た錆なれば何れの淨土にも門戸を閉て入
 玉はざる也、斯く諸佛にも捨て果てられたる罪惡
 最下の無有出離之縁の事を、十方衆生との玉る也

(941)

と御釋しなされたればこそ、十方衆生と有れば偏に我等に被るぞと決定せられぬれ、實に八萬四千の法門の中に本願の一法より外、斯く深重なる大悲あらんや。

●若此釋なからまじかば本願の信心も發り難かるべきをや。

若善導大師が御出現なされざれば此十方衆生は極惡最下の機も本願にもれぬのみか、還て本爲凡夫と善人より惡人を先とし玉ふ本願と思ひこることは成まじきに、明らかに其道理を釋し顯し玉ひたればこそ、疑なくうら思ひなく我等が爲めの本願ぞと、ひし／＼と信する心も發るまじきに、實に無窮の祖恩やと喜ばねばならぬ、元祖大師も常々に善導なかりせばとて涙を流し玉ひしなり。

●惣じて今の大師の御心によらば、往生の機に洩るゝ人は有べからず。

總じてとは別々に分たず、引きくるめて云こと、善導大師の御意によれば、是こそ往生得遂げぬ機とわりのける人は一人もない、皆悉く往生を得る機

分なり、故に元祖大師或人の下へつかはさるゝ御消息(和語拾遺下^{三十一})念佛往生は如何にもして障りを出し、難せんとすれども、往生すまじき道理はわはかた候はぬ也、善根少しと云はんとすれば十惡五逆も往生を遂ぐ、人を嫌はんとすれば常没流轉の凡夫を正しき器はものとせり、時くだりと云はんとすれば、末法萬年の末、法滅已後さかりなるべし、此法はいかにきはんとすれども洩ることなし(小消息又今と同じ)と仰せられたり、爾れば人に付法につき洩るべき人は一人もなきなり。

●其中に深く願はん人は上品に生れ、次ならば中品に生れ、無下にあさく求むるは下品に生る。

此深く願ふと云は心行共に深きを云ふ歟、此九品の差別あることは機にさま／＼有故なり、或は善惡二機のかはりめあり、或は行は六萬七萬には修せぬども、三心の強弱にて分るあり、或は行の多少によりて分る等、其心行共にすぐれなば上品に生ること論なし、若し三心の強弱にて品位を差別

することは、心は其相なくして沙汰し難きものなれば、九品を差別するには終南吉水兩大師共に行の方によせて分別し玉へり、彼三萬六萬十萬者皆な是れ上品上生人、又上品華臺見慈主、到者皆因念佛多等の釋の如し、剋して論すれば數遍を勤むる者は本と往生に志し深きより起れば、又た其三心も深かるべし、其深く願ふ人は上品上生に、上中下の三品を分てば其強く願ふと云ふ中にも、又差別あれば次ぎの深きは中品、三品の差別上品の如し、淺く求むるは下品、三品上の如し、無下に淺く求むるとは是より下なき劣機が下品下生に生る、機に隨て分るゝ故次の文に。

●しなじなは機に隨て不同ありといへ共、頼みを本願にかけ信を念佛にとらむ類ひの、生せずといふことゆめ／＼有べからず。

如是機に隨て九品の差降はあれども、助け玉へと濃くも薄くも本願を頼氣になり、名號が本願の行なればと多くも少なくも念佛唱へさへすれば、若不生者不取正覺の誓願があれば皆悉往生せずと云

ふことなし、此こと決定ゆるぎなきことなれば露塵も疑ふなとなり。

●實に一向に疑をなしそしりを發して、手を引てのかむ人は其限りにあらず。

此の文は上の如く、云何なる最下の機迄も本願を信じ念佛する人さへあれば捨らるゝ機はなけれ共、或は本願を疑ひ誹りを發して、にげて行く人は本願にて助けらるべき謂れなしと、其もるゝ機を撰びて聞せ玉ふ也、譬ば覆器に水を受ざる如く、不信の人には慈悲の法水を受ることばならぬ也、故にたとひ四重五逆の罪人なりとも、所詮我等はかゝる大なる罪を作れば本願にもるゝであるうと我から遠ざかる心を起さず、かゝる大罪を作りたれば決定未來は無間地獄に墮つべきを、追悔念佛せば極樂に迎へ菩薩になし玉はるとは、あら有難やと尙々本願に取すがりさへすれば、往生の機なれば後しざりせぬことなり、又念佛の法門を誹る人もまゝある中、其最上が日蓮の邪黨なり恐るべきことなり、其罪報を得ることは法事讚に詳なり

見有修行起瞋毒方便破壞競生怨、如此生盲
闍提輩、毀滅頓教永沈淪、超過大地微塵劫、未
可得離三途身とあれば、かゝる恐しき大罪は
なし可哀可悲。

●かゝらんより外は、往生の機ならずといふ人あ
るべからず、般舟讚に云く、人々有分不須疑と。
上に往生の機に漏るゝ者はなしと、義を證せん
して善導大師の般舟讚の釋を引て結び玉へり、記
主此文を釋して人々等とは、定散善惡皆可往生故
謂有分、爾れば善惡の差別なく淺くも深くも本願
を頼み、多くも少なくも念佛だにすることなれば、
自造罪退と後しざりせず、誤て罪造はそれぞかし
助け玉へとしがみ付心也。

●次に法を信すといふは本願を信するなり。
是より已下法を信することを釋し玉へる意を述し
玉ふなり、其法とは本願不思議の妙法、第十八願
をさす也、信するとは身を本願に打任せ一分も往
生をあやぶまぬなり。

●これはさきの信だにもわこりぬれば安き也。

此本願を信することは、前の機を信することさへ
起れば甚安きこと也、譬へば家を建つるに地築、
石つきを堅めて立つれば建て易きが如し、前の機
の信の石築をせず、土をかきあげて建れば一應家
を立てば立てても、少しの地震でも少しの風にも吹
ゆがめらるゝ如く信機がなければ諸餘の學者の破
人の地震に會ふか、御禮報謝二世安樂の惡風が吹
くと、つひ本願の念佛往生の安心の家がすじこふ
て來て、段々吹立てゆるぐ度すじこふゆるゑ、つい
臨終のまつごには三惡道へ崩れこんで仕舞なり、
既に前に信機の地築を堅めた故、信法の家は建て
易きと也。

●かゝるあさましき凡夫、自力にては人間天上の
夢の中の果報すらかなふべからざる機なれども、
佛の本願に乗じぬれば、往生せん事更らに一念の
疑ひも有べからず。
此文は機法二種を合して釋するに、先機信を擧て
示し玉ふ、斯の如く煩惱具足のあさましき、我等
が自力にては又人間へ生れ來り、或は天上へ生る

ること叶はず、實にはかなき人天の夢の中の如
き果報なれども、夫さへ人間へ生るゝには五戒を
綿密に持たねばならず、天上へ生るゝには十善を
かげ目なく修せねば叶はぬことなるに、五戒十善
の名目さへ辨まへ知らぬことなれば、まして戒を
も持つことはならぬ、ならねば三惡四趣に落ねば
ならぬが定りであれば、人天へ生ることさへ思
ひたねたる機なりと云が、本文のかゝるあさまし
き乃至機なれどもと云迄の心なり、佛の本願と云
からは法を信する方なり、前の如く人天へさへ生
るゝとのならぬ拙なき機なれ共、頼め助けんと云
ふ本願を信じ、口稱一行に決歸すれば、本願に乗
じぬれば往生に塵斗疑ひもなきなり、何故に疑ひ
なきとならば、五逆謗法の者也と雖回心念佛せば
往生させん、若不生者不取正覺の誓願がある故也、
若し其上にも念佛は申たれども罪人故往生ならぬ
と云になれば、阿彌陀佛も法王の位をすべりてす
ごゝと前の凡夫に立歸り玉はねばならぬ、釋迦
如來も恒沙の諸佛も妄語し玉ふとならば、悉く舌

き佛の片輪ものとならせられねばならぬ、たと
へ天は地となり地は天になり日の涼しさは衣を重
ね、月のあつさに裸にはなるとも、一度正覺をと
なへ玉ひし阿彌陀如來が二度凡夫にかへり玉ふべ
きや、たとひ晝は闇くて行灯提燈も燈し、夜は明
くて機をり田打ち、水で焼とし、火で手水をつか
ふとも釋尊諸佛に妄語あらんや、是れは又一應の
淺ひ思ひ様、若し一重手丈夫なこと云て聞かそら
なら、どのよふな罪人でも往生がならぬと云中は、
彌陀如來と云ふ佛になり玉ふこともならず、ちり
ひじも妄語あらば釋尊も諸佛も成等正覺し玉ふこ
とは思ひたねたと、若し妄語云て佛にならんもの
ならば、各や我等が阿彌陀如來釋迦如來恒沙の諸
佛に劣ふや、なせなれば佛は一同に生々世々妄語
し玉はず、人々此方は生々世々妄語三昧、過去通
力がない故押て知る分際ぢや、現に知り易きは此
の世のこと、幼少の時から妄語は生れ付機用まだ
夫から段々修行の功を積み、夫でも親の欲目から
は思ふ様にないと思ふ故に、種々に妄語の指南を

する、善いとならなればもふれども下地はすきなり、父母の教へ十の物なら百にもして請取、まだもたらぬは他人の妄語を見とり聞とり鍛錬する故、起て居る内妄語斗り、たどへ寝た間も人をだました夢を見ると云様な人達が、今迄正覺唱へずに居やう筈はなけれ共、妄語は皆三途の業なれば機用に云ふ程菩薩に遠ざかるなれば、諸佛に芥子を千に割た一つも何しに妄語のあるべきか、其妄語なき阿彌陀如來の本願、釋迦如來の所説、諸佛の證誠は、いかなる罪惡のものも助け玉へと思ひ、南無阿彌陀佛と唱だにすれば往生と云ふ一事の爲なれば申さぬ者仕方はなけれども濃くも薄くも往生したいと思て、多くも少くも念佛申すが何しに一念も疑ふとあるべきぞ、故に佛の本願に乗じぬれば、往生せん事更に疑も有べからずとの玉へり。

● 巨石も船にわきぬれば萬里の海を渡るたとへ、法になぞらへて了りぬべし。

是は罪惡の人も本願に乗すれば往生のたとへを擧て示し玉へり、此譬は未觀律師の往生十因にあり、

文に云、巨石置舟過大海萬里とあり、法になぞらへて了れとは巨石とは大なる石と云ふこと、是は此身の煩惱罪障の重きを大石の如しと喩ふるなり、船とは阿彌陀如來の念佛本願にたとへ、萬里の海とは生死をへるをたとふるなり、我身罪障の大石を娑婆の此岸より極樂の彼岸に渡たさんとするに其便を失ふ、爾るを本願の船に乗すれば二十五有の生死の海を心易く渡り、極樂の彼岸に至ると也、本願に乗すれば惡人も往生疑ひなし、其罪障の輕るき人は小石の如くなれども、生死の海を渡ることは船の力を借らざれば向ふの岸に至ることならず、罪障の重き大石よりは我罪輕き小石なれば、船の他力を借るに及ばずと、本願の船を離れなば六道生死の海底に沈むなり、罪惡は勿論たとへ罪輕く見る人も本願を頼まざれば出離生死の處りなし、古歌に「舟しあれば千引の石もうかぶてふ、誓の海に波たつな夢」。

● 無窮の生死を苦しくすぐせる事、たゞ此法に値ざるが故なり。

無始より六道の間を經回る中、生毎に苦を受けずと云事なし、生々の中には佛道に信をも發し修行をも起したらんなれども、圓孔方木とて機教相應せず、修行のしるしを得ず命終すれば隔生即妄して信をも退しつらん、爾れば未入と云ひ已入と云ひ兩ながら益を失へり、若過去世に淨土の法に遇は、願に往生して、當今は天人師の佳名を得るで有うなれども、世々生々因縁なく此法に遇ざる故に今に至るまで生死を出でず無窮の苦を受る也。

● 道鏡師の釋には、生死を出る事のかたきにはあらず、此法に値ことのかたきなりといへり。

道鏡師は名は善道、光明大師にはあらず、念佛鏡の作者なり、釋の意は生死を出ることは窮て上なき一大事にて、釋尊の出世は唯此一事の爲め斗りなり、小乘に四諦十二因縁を修行するも生死を出る爲なり、大乘の戒定慧を修する亦此一事の爲なり、夫れも一生や二生で成就することなく、其上下根は十に八九は退墮して浮む期なければ、生死を出離するより難ことはなき也、夫れ道鏡師の

生死出離を難きことにはあらずと、いと易きこととの玉ふはどふぞと云ふに、實に生死出離は難中の難なれども、彌陀如來の本願に乗すれば善惡智愚のわらびなく、皆悉順次に生死を出て極樂に往生す、上は一形より下は臨終の十聲一聲迄に被れば是程易きことはなきとぞ、其又易き出離なるを無始より已來得ることのならんだは、どうしたことぞと云ふ時に、此本願に遇ふことが難い故なりとぞ、其聞ことは三賢の菩薩さへ因縁が熟せねば聞玉ふことはならず、況や凡夫に於てをや、今時は澆末とて人の根機は至て下劣になり、眞智は曇り果て、愚痴蒙昧の人のみなれば、聖道門の修行は時機不應にて有名無實となり、彌陀の本願は利物偏増と時機に應ずる教なれば、段々に光をまして弘まれども因縁なきものは聞ても信せず、己れと六趣にさまよふ故に、清淨覺經に云、若有人聞説淨土法門、聞如不見、聞見如不見、當知此等始從三惡道來罪障未盡、以此無信向一耳、佛言此人未可得解脫也とあれば悲しきこと

と也、其經にさし玉ふ不信の人は今時十人に八九人は其人なり、一向に因果を撥無した悪人は勿論、或は現世の祈りのみをして後世をば願はず、念佛は誰れも申せば素人らしい、我は座禪、我は觀念、我は持戒、我は持呪、我は讀誦等と脇道へそれ雑行の失に墮し、或は申は自力と誇り、或は念佛無間と誇た罪で、己れが命終れば決定して無間地獄に落ると云ふ様な目に觸れてそうじや、其上片田舎などにては一向佛法の行届ぬ所もあれば、旁々値ひ難きことは現量なり。

●禪林寺はこのたび生死を出べからざる人は此法に値べからず、知べし今此法に値て信をたこす人は、かならず順次に生死をはなるべきなりとの給へり。

禪林寺とは永觀律師なり、釋の意は出離することならぬ人は此往生淨土の法に遇ふことはならぬ、値ふても信せず又誹謗するは皆値ぬと云ふものなり、しるべしとは後よりかへることは生死を離るることを知るべしとなり、其値ひ難き法に値ひ往

生を願ふ人は必順次に生死を離るゝ、必とは定り切てゆるぎなきことなり、順次とは順後に對する言で、世々を経ることはない、此次の生に決定して往生するぞと也、故に聞て信じ信じて修行する人は、六道輪回の縁の切るゝ人なれば悦ばねばならぬ、清淨覺經に、若人聞説淨土法門、即悲喜交々流身毛爲豎者、當知此人過去已曾修習此法、今重得聞即生歡喜、正念修行必得生也とあれば、此の法を信する人は過去に諸佛に値ひ奉り、念佛の法にも結縁したる因縁がある故に信することあれば、後もどりして念佛を怠たと云様なことを恐れて、分に隨ひ増進して目出度往生するが肝要、又本願の一法は過去の因縁のあるなれば強て論せず、宿善の有無も論せず、唯此一世の相續で十即十生百即百生なれば唯申が所詮也、往昔家隆卿は老後に及んで彌陀の本願に歸し、臨終に七首の歌を詠せられし中に「かくばかり契りまします阿彌陀佛を、しらでかなしき年を経にけり」故に生々世々に此法に遇はざりし故、無窮の生死を経たる

ことをば悲み、今世に此法に値ひ奉りしことを深く喜び、本願名號を増進すべし、故に書主の述懐を次に述べて、「六の道いくめぐりしてあひぬらん、十ころゑ一ころ捨てぬ誓に」。

●げに六の道いくめぐりしてか、此不思議の本願に値ふことを得たるやと、悦でも又悦ぶべきなり。西要鈔に云、無始より已來六賊の爲めに掠められ、一善をだにも蓄へざりつる身の、いかでかゝる超世の本願に逢て大善の名號の聞得つらん、是併ながら大慈大悲の善巧難酬難謝の佛恩なり、たとひ骨をくだきても輒く報じ盡さんや、須らく身の堪へん程唱て報ひ奉るべし已上。

●問此信心具へたる人をば、いかゞして可し知や。已下問答決擇なり、問の意は心には形なければ何を以て信心に信心を具したるや具せざるやと知るべきぞ、其知るべきやうあらば示し玉へと請ふなり。

●答本願の文には信樂といひ、願成就のことばには信心歡喜踊躍と説けり、されば此心を具したら

む人は、此法に値て必生死をはなるべしとたもひつゞけて、喜心の發るべきなり。

答に知るべき様を示すに、願文と成就の文を引て示す、初め本願の文には信樂と云ふとは第十八願の至信心樂欲生我國と云ひ、横の三心の中に信樂の二字は豎の三心の深心に當ればなり、此信樂の二字を性相で分別するに、信は忍許と云ふて成程そうであらうと肯ひ許し入るゝなり、疑の心を治するが信の字の性と云ふて持ちまへなり、樂は樂欲とも云ひ、愛樂とも云ひ、信樂とも云ひ、信愛とも云ふて、名は異なれ共義は同じ事也、樂はねがひすきになる事、夫で異時の因果に配すれば信の肯ふは因、樂のすきねがふは果なり、願成就とは十八の願は誓願にて誓ひを立玉ふ分なり、其願のとほりに成就したまふを云ふ、これを明せし文を願成就の文と云ふなり、其の文に信心歡喜踊躍とあり、其信心とは佛の本願を疑はず、所被の機は善惡に通ずることをも疑はねば、法を信じ機を信すれば必定して往生に疑ひなければ、喜ぶ心の發

らねばならぬの筈こと也。

●信樂といふは、本願の心を愛樂し念佛の行を樂欲するなり。

是は上の信樂の二字を和解し玉ふなり、本願の心を愛樂するとは我等が爲に建玉ふたる本願ぞと思へば、阿彌陀佛は餘佛よりも親しく敬ふ心起り、親しみよりてねがふなり、念佛の行を樂欲するとは、其本願は往生したいと思ふて名號を唱へよとのことなれば、自然と念佛好きになるなり、世間交る身なれば知音ちかづきかけ廻り、夜に入りて還れば草臥れて居ることなれば、今日終日驅け歩行きて御看經もせなんだことよ、あゝ助け玉へと持佛に向て多くも少なくも看經するは念佛が好きになつたに違ひはない、又終日客をもてなして夜に入れば取持あいさつにほつと草臥れ、一時も早く寝たいは定り、夫忍んで御看經してからと云ふも好きになつた故、又忙中に閑をぬすむとかけ廻る道でも唱へ、膳椀ならべ乍らも一聲づゝも申すは愈好きになつた證據兎角くせつき玉へ。

●信心歡喜といふも、かゝる拙き身の此本願に値ふて往生を遂ぐべき事を思ひ知りて、かならずよるこぶべきなり。

是は上成就の文の和解也、本願ならではかゝる罪惡深重の者が順次に無漏無生の寶國へ往生することを得んや、あら頼もしの本願や、助け玉へ南無阿彌陀佛と唱へて喜ぶを云ふ也。

●是を信心具したる人の相といふなり。

上の問に信の具不具を知るべきやうを尋ねられたが、斯く云ふ心になつたを信心具足と云ふて、此意を得て具不具を知れと也。

●但し機の上一にあらざれば、信に又淺深あまた有べきなり。

是伏難通とて、人の疑を發すべきことを先へ通じて置也、其疑の起るべきとは、信樂とは深く信じて法に付機に付一念も疑はずとあらば、我如きは我身に惡事を誤てなせしときは、相續はせねども往生いかゞと一念の疑はまゝあり、又愛樂するとあれども、別時にさそはれたは物見けんぶつにさそ

はれた程にうき立て悦ぶ心も發り兼るし、少しの暇あれば先佛前に出んと思ふ心も常には起らず、歡喜踊躍とあれどもあら有難の本願やとをどり上つて悦ぶ心は起らねば、我等が往生は危きことぞかしと疑ふ類なり、其疑を發すな本願を疑ひ我機を疑ふ類は至て制せねばならねども、已に本願に善惡智愚を擇らび玉はぬをも疑はずなれば、我十方衆生の外ならねば唱だにすれば往生ぞと信すれば、是則信心具足の人なり、其信者の中でも一樣にはない、機に上中下の三根の差別があれば信する上に淺深の差別はあるなり、爾るを往生するは信心が肝要、當流の安心は信心を以て本とせられ候也と、信心の御溝を浚へ詞も悲しげに涙をもこほせ、つひ只申て生と云ふは誤り、信心が大事々々云ひ立る故、其くさりが脇へ迄移て、信心と聞けば涙のこぼれ身の毛の立事ぞと思ふことに間違へる類がまゝある、已に六百年已前元祖大師の御在世より、もうそろ／＼弘まりたことゝ見ゆる、元祖大師の御詞に、わほかた此信心の様を人の心

得分かぬと覺ゆるなり、心のそみ／＼と身の毛もよだち、涙も落るをのみ信のたこると申はひがごとにてある也、それは歡喜隨喜悲喜とぞ申べき、信と云ふは疑に對する心にて疑を除くを信とは申べき也、見ることに付ても聞くことにつけても其事一定さぞと思ひとりつることは、人いかに申せども不定にたもひなす事は無きぞかし、是をこそ物を信するとは申せ、其信の上に歡喜隨喜なども起らんは優れたるにてこそあるべけれ、(往生大要抄)さればこそ信とは疑に對する詞ぞと大師の教を信すべし、爾らば常に歡喜踊躍するは上品の信にて、中品の信はをどりあがつて喜程には無けれども佛前へ出るにも尻かるく、間がなすきがな佛前へ出て勤め度と思ひ、我等が往生は佛の本願なればと法に付機に付一向に疑なき也、下品の信はさのみ佛前へ出度思もなく、漸く十遍か百遍の日課を相讀せんれども往生のことは疑はず、其餘は世間の人に替ることなき也、斯上中下の變りはあれども、一念十念に五逆謗法をも往生させしめ

玉ふ本願なれば皆悉往生するなり、斯く云ふと法を聞きなれぬ人は、夫なれば今時佛に向て打なげく詞もかなしげに聞け、涙をこぼし信心を起せと云は、上品の信者であろうと早吞込をする人もあろうが、夫は聞き様がたらぬ、其信心を以て本とせられ候と云ふは、自身の力を本として本願に乗ずる故に往生すると云ふことをも信せず、又申せ助んとおる本願を申すは自力、申さぬが他力と云ふは佛説に背けば、非因計因の戒禁取見の外道の計なればどう往生がなるものぞ、安心僻越すれば萬行徒らに施すとさへあるに、安心も僻越し萬行のことは一行も修行せぬ、無修無行の者が極樂へ生るゝ道理のあらう筈がない、其上に又色々のたはこと云ふて無智在俗をたぶらかせば、成程有難い御宗旨十惡五逆さへ往生すれば、まして其餘の罪は造り次第、其の罪造らじと思ふは自力を勵げむ故、御宗旨に違ふ、念佛申は自力往生は十劫以前にとゝのふた、あら有難やはゝあゝと云て居て、臨終には七顛八倒火の車へ打ちこまれて、又

こりづまに地獄も々々無類飛切大極上々の無間地獄の大極苦を受ることなれば、よくゝ此天魔波旬の勸めに墮入らぬ様に、身を知る人なら用心をせねばならぬ云々。
今歡喜踊躍悲喜隨喜等と云ふは、決して三途に沈まねばならぬ身が、大慈悲の本願によりて上は一形より下は十聲一聲迄、迎へたまふことの喜ばしやと思ひ身のたゆるほどは念佛を増進して勤むる内に、其本願の忝なき順次往生して菩薩となり、有縁の者の獄苦迄を抜きて終に極樂に引入れ、共に一佛淨土にて永劫無爲の樂みを得んと云ふことなど思ひ出て、思はず知らず身の毛もいよ立ち涙もこぼし念佛の進むと云ふ事也、例せば頼義入道念佛せるとき身殺罪の重きを悲しみ、彌陀の本願の深重大悲を喜びて落る涙が板間より流れ傳ふて庭へまで流れたるとある也、又熊谷蓮生（御傳廿七丁）の「此世をば薪と共に等」と詠じ、上人の常に涙ぐみて居玉ひしなどの様なるを云也、爾し是等を見て自心のよわゝしきを悲み、終に往生もい

かゝなど疑ふは大に宜しからの事なり、たとひ志ざし強く涙を流し踊躍するとも、我は深心の行者なれば往生すべし、我如くならでは往生も不定なりなど思はんは、我が志しを物だてゝ頼むべき佛の本願をば頼まず、是れさかさまなる了簡にて橋慢の失あれば、晝夜頭燃を拂らふ如く念佛するとも往生すべからず、たとひ志はよわくとも佛の本願を信じて往生を疑はず、己れが分に應じて日課相續だにすれば往生決定なり、惣て淨土に往生することは凡夫の自力にては一向に思ひたぬることなり、如何程強ければとて夫は用に立たず、所詮は佛の願力にて生るゝなり、故に「本願抄に、とても佛の御力にて生るべくは己が力らは弱はく逆も夫によるべからず、我が志の強からんよりは佛の願力の強からんこそたのもしかるべきに、我志の弱ければとて、佛も如何と危ぶむは願力をいやしむるになるぞかし、只だかまへてたのが力の弱からんに付けても、いとゞ佛の御力を頼むべき也、又いかによはゝしからん志までも捨てらるまじ

き事は疑ひやは侍る、其故は既に機を定るとき至りて重き五逆までを修め、行を願する時は至りて少なき一念迄を立てたり、心をとらん時いかゞ又至りて弱き心ざし迄をもをさめられざらん、況や罪深き機ならば、心も隨ひてたろかに、行淺きものならば、志しも自ら薄すかるべきいはれにてこそあれ、爾かあるに機と行との拙なきを救はん爲めの本願に、心は深かゝらんと誓はれたらんは、あたらし本願のよきかたはなるべし、さしも五劫迄案じ玉ひけん善巧の、さる手づゝなることやはゝべるべき、かやうのことわりをもて思ふに、いかに淺き志しなりとも偽りなく助け玉へとだにも思ふならば、往生に不足はあるべからず已上、爾れば強も弱も只一向に佛願に打ち任せて稱名すべきなり。
●問信心具足の人は一念の疑をもれこすべからざるかや。
問の意は、或は三心既に具す無行不成、或は具三心者必生彼國、或は若少一心即不得生等とあれば、

具すれば往生、かくれば不生、爾らば信心具足の人は一念も疑ひなきことによりなり。

●答是又人に依て免も角もあるべし、凡ては道理を思ふときはすこしの疑もなければ、未だならはぬことなれば、さてもいかゞなどいふ、ひが心のふと指する事は有るべきなり。

答の意は、人々は其違ひあり、或は往生は本願なればと一向に疑ひなき是は至て殊勝に宗の本機なり、或は其の本願の道理を思ひ分るときは、少しの疑もなければも誤て罪をも造りしときは、かゝるものは往生もいかゞあらんなどふと一念はあやぶむ意も起れども、それぞかし助け玉へと打わびて念佛して決定の心に立ちかへるもあり、或はさなくともふと往生にもれねばよいがなご、ふと一念思ふことはあるべしとなり、故に西要抄にも未だして見ぬ往生のいかゞおほつかながらふでもあらんとありて、往生すべき道理をば疑はねども往生して見ぬことなれば覺束なき思ひはありがちのことなり、大事と思ふ事には心にかゝりて肝も

つふるゝことあるなり、是は疑ひには非ず信のうるほひとも云ふべき也、疑と云ふはたとへ本願ありとも、我等が往生すべきいわれはなしと信せぬこそ疑ひとは云ふものなり、佛の誓ひをばひしと頼みながら、我は決して往生すべきやとあてゝ見るに、猶はれゝと覺ねずどこやら曇りがある様には疑と迄は云ぬ也、たとへば至て公儀の御法度をも能く守り、家をも能く治むる能き人あるに、他人が無理を云かけ公事になり内裁にもならず、奉行所へ訴へ出ると云ふになるとき、幸ひ利分の有る人は奉行へ親しく出入して其正直なを奉行も賞美して、心易く詞をもかけらるゝ故へ、此度の公事の一件を自身に行て云ひ入るれば、人も見て先へ手を回したと云はれては此の方は勿論、御奉行様へも疵が付くと云ふて、表にして負ける程なら内證で云ひ次第に済すがよいなれども、現に此方に違ひないとなれば、内々書付を御裁許の筋に開て見やうと、極内々て書付を問ひたれば、奉行の返事に其方利分に違ひなければ、表より願出す

べし、若し公事を汝が負けたらば我は奉行職を断る、其上内々で同役へも申入たれば彌々利分に違ひないことなれば、表から願出さすべしとなれば、早々願ひ出べしと内證があれば、正直な人も大きに安心して斯う云ふことなら願出さへすれば此方の勝利に違ひはないと安心はしても、現に身體の浮沈其上、事によれば一命にもかゝる事故、御裁許うけて歸つたやうには思はれず、どうぞ違ひなく利分になればよいかと、心もとなく思ふ思ひは絶ぬ様なもの、念佛の行者も其如く、本願の十方衆生とあるは其方利分に違ひはない、表てから願へと云ふ證文の如く、若し不生者不取正覺と云ふ御誓は、若し其方が負けたらば己れが奉行職も断り云ふて、非役にならんと云はれたと同じこと、其念佛者本願に願すれば往生を疑ふな、我等一佛も残らず證據に立つぞとの六方恒沙の證誠は、同役も決定して汝が利分ぞと云ふなれば、心遣ひするなど云れた様なもの、斯く云ふ慥かな事なれば往生の事に一分も覺束ない心の起るべき筈はなけ

れども、往生せぬ内はさつぱりとは思はれぬ、決して勝べき公事なれども裁許の済まぬ内は心もとなく思ふと同じことなれば、さして此心があればとてさはりになることではなきなり、次に其證を引て

●吉水も蓮臺にのぼらむ程はなごこそ仰せられければ、あやしむべからざる事也。

本文の意は、元祖の御詞を一念疑を發す人に例するやうに聞ゆれども、よくよく辨すべし、元祖は疑の御詞にてはなきなり、欣求ねんごるなるなり、私に考るに、權は實を引爲なれば發得の前後にはかゝはらず、疑はぬが深心と斗では、扱もいかゞなど思ふ人は深心不具と思ふ失あれば、夫れは疑心ではないと云ふを示す爲に此詞あるならん、八十翁立て舞云々、頼政の辭世は其道の人に問べし異義あるなり、勝解作意眞實作意、八事の和上は發得し玉はぬ已前の御詞ならんとなり、西要抄には其外の人には佛の告をも得ずとあれば發得なるにも似たり、夢告と發得には淺深もあれども一概には

定め難し可考、吉水とは元祖大師也、此詞は御傳廿一卷、語燈錄五卷、閑亭後世物語等に有り、或時上人哀れ此度したはせばやなど仰せられけるを、乘願房承りて上人だにも箇様に不定げなる仰せの候はんは、其餘の人は如何して候べきと申ければ、上人は打笑ひて正しく蓮臺に乗らん迄はいかでか此思ひはたは候可きとぞの玉ひける已上、あはれとは古書に懇るなる様を云ふとも云ふ、又あつばれと云ふ意にもなるなり、今の御詞のあはれとあるも、内にみちたる御道心の自然と外にあらはれて、其往生を願ひ玉へることのねんごろなる義なり、乘願房の問は常に仰せらるゝには、往生は一定と思へば一定不定と思へばやがて不定になるなりとも玉ひ、又源空は已に得たる心地にて念佛は申すなりとの玉ひつるより見れば、今の御詞は今少し不定げなる様に思はるれば、御問申し上られたりと見たり、御答に蓮臺に乗らん迄は此思ひはたは候べきと仰せられたるにて知る可し、決して疑ひにては無きなり、若疑ひなれば三心不具にな

れば往生はならぬ也、爾るに臨終迄はたへぬとなれば、往生の障りになる心でなく、欣求の懇なるなれば念佛もいと進むなり、此御詞にても往生は十劫已前に調ふた、何の罪造ても大事ななると云ふ類が、元祖大師の御弟子の數に入れられうか恐るべし々々、爾れば平生疑ひなきものゝ一念は疑ひに似たる心の起るも、後念に信に立還るなれば妨げなし、其上に元祖大師の如く欣求の切なるは上品に進む方便也。

●問此機をば信者疑者の中には何れと云べきぞ。前の一念疑ひを起し、後念に又決定心の立人は信疑の中には何れであらうと問ふ也。

●答猶信者と謂ふ可き也。其れは疑者とはいはぬ信者と云ふなり。

●問是より疑を發さぬ人は有まじきか。此一念疑ふ人より、外には長く疑ひを發す人は有まじきかとなり。

●答さる人もあるべし、機類たほきが故に。一向初より疑ふ人は論の限りではない、一往は三心具したる人の上にて論する也、三心不退は異流

の所立、三心少分退が正流の所立になれば、往生さへぬ疑ひもあり、障るもあり、機類萬品なれば也。

●問いかなる疑ひがゆるされ、何かなる疑ひが邊地に生れ、いかなる疑ひが生死にとゞまるや。往生をさへ、さへぬ邊地に生るゝ等を示し玉へと請なり。

●答此世さまにむけるも、志しふかくたもふ事はせめても心のあまりに、いかさまにがなとわはゆる事なれば、まして多生曠劫なき往生を、不思議の本願によりて遂ぐべしと思ふにも、餘りに不思議の事なれば、さればよこれは實かなと覺ゆるは信の上の疑とて許さるべき也、これ一のすがた也。初めに疑の一分あれども往生をさへぬ人を示し玉ふ也、此世さまのことも心に大事と思ふことは案じられる也、たとへば人ありて今十日の中、金子百兩なければ身代限り、人手に渡し妻子と共に袖乞非人となるより外なしと云ふになりて、實に一代浮沈のさかいなれば、晝夜此事のみ案じ居る内、甚眞實なる人の而かも身代も至て宜く何不足なく

暮す人の、身代の大事と云ふ様なるときには相談に来らるべし、必ず心をかくるなど心切に云はれしことを思ひ出して、行て頼んで見んと思ひ、直に其人の所へ行き、差しあたる挨拶もすめば、偕今日御尋ね申ましたは餘の義では御座りませぬ、粗御承知の通り、私商賣も不問りに相成此十日の内金子百兩無之候はでは、身代も不殘人の手に渡し、妻子共々袖乞非人となるより外致し方も無之、心痛の段御察被下べし、右に付豫て御心切に思召し、手づかへの節は相談に參れとの御詞にあまへ、右百兩の御恩借御願申べき爲に參上致候、何分私一人を御救ひと思召、百兩御取替被下候様偏に御頼申上ますと折入て云ひ入れば、先の人の云ふには豫て其元の御心底をも存じ互に御心易く致す故、おしつけながら金子御入用之節は御相談に御出あれと申たは、斯く云ふことの有たときの爲にこそ申置たることなれば、其期になりていじむじ申程ならば豫て申入るゝ様な私では御座らぬ、随分百兩御用に立ちませう、幸に此内仕切を

受取た事なれば、金子の五百や八百兩は浮て居ることなれば、百兩で不足ならば又御相談なされよ、身分相應の御世話ならば幾度でも辭退は致さぬ、未まだ十日の内とあれば今日御持ちなされずともよからう、一兩日の内に手代に持せて遣しませうと、地獄で佛に逢ふた様なあいさつなれば、頼もしいやら忝けないやら、心もうき／＼としていやはや今日に限りたことでは御座りませぬ、十日より内で御座りますれば宜しうござる、御聞受下されし故先祖より傳はりし家屋舖にも離れず、妻子を路頭にも立せぬ、皆あなた様の御心切故、先づ御聞き受けの段を妻にも申聞せ喜ばせたく存じますれば、先今日は御暇下されませと心うき／＼として内に歸り、夫婦は金主の情を語り合て喜ぶ、扱五六日も立てども持せて呉れぬ故うろ／＼と案じ出す、決定貸して呉れるには違ひないは、至て眞實で一生ちよつとも偽り云ふた人ではなし、其上身代は富饒なり又其上に仕切の金が七八百兩も浮て居ることなれば、間違ふとはないが、なれど

善はいそげ受取ねば安心せぬ故、最一度往て受取て來ふと思ふて向へ行く、亭主に逢て扱此間は大に御心切の御詞に預り忝く存じます、今日御近所迄用事が御座りまして出ました故、鳥渡御立寄申右の御禮を申上ませうと存じ伺候仕りました、又御繁用の中に御手代衆を態々被下まするも御氣の毒、御都合宜く御座らば私持ち歸りましやうと存じまして御尋ね申まして御座りますと云へば、先にも成程此内から持せて進ませうと思ふたれども折節商賣ていに付て方々へ手代共差出しました故遅くなりました、右の用事を片附御方角へ今明日の内には何れ手代共を遣はす用事も御座れば、其節持せて進ませうと云ふ故、是非今日私が持ち歸らふとも云はれねば、左様ならばと暇乞して歸る、彌々貸して呉れるに違ひなく、手代に持せるに違ひはないと安心して居るに、其日も沙汰なく翌日も沙汰なければ、又案じるもう持せてくれそうな物ぢやが、どうして際取るか知らぬ、又此方から行くもせき立るやうで悪るし、どうか角う

かど、もう來るか來るかど待てども其日も來ぬ、扱案じられる翌日の晝迄待てども來ぬ故、明朝は向へ渡す約束なれば、今日中には是非受取て置ねばならぬ、晝から行て見様と晝食もそこ／＼に仕度しながらも、どふか角ふかと案じて居る所へ、先の手代がすつと來て何右衛門と申ます、此間は度々御出下され忝ふ存じます、御約束の金子頼に持せて上ます筈なれども、又急な商口が御座りまして、日限も延び／＼になり御氣の毒に存じます、今日百兩持せましたれば、御受取被下ませと申上よと申付ましたと、懐より百兩出して渡すとさつぱり心が落付て案じる心は微塵もない、今此機も阿彌陀如來の本願なり釋尊の金言也、六方諸佛の證誠なれば、十念一念迄も往生と云ふことを少しも疑ひはせぬなれども、無始より六趣に輪轉して苦をのみ受たものが、佛の本願に乗じて往生するぞと云ふが、されば是れは實のことかと悦ぶあまりに、ふと一念づ／＼うらかももうは信の上になることなれば往生はさへぬ、先是れ一つのすがた也と

示し玉ふ。

●又或時は我等程のわろかに罪深き者はよも生れじと疑ひ、或時は不思議の本願にて有なればなにか生れざらむと信ず、疑と信とのかはる／＼發りながら、さすがに行をもすてず、又願のこゝろもたぬぬ人は、邊地に生れて花の中に久しかるべき也、是一の姿なり、(猶やうありかきつくすべからず)。是の文は疑、前の人と異にして、初は本願を信ずるとも中比己が罪あるに依て、斯の如きも佛の本願にても救ひ玉ふ事有るべからずと疑ひを發す、佛智を疑ふ罪あればたとひ信行を退しはてされども九品の中に生ること能はず、邊地に生を受け五百歳が中、不見三寶不聞三經法也、「註に猶やうあり書盡べからず」とあるは、邊地に生ずる義は多端なれば書き盡くされぬとなり、今の文は信行退しきらぬとあれども、中悔とあれば心行共にすつるなり、又念佛往生をば疑へども、因果應報を信じて、餘善を修して往生を願ふ、其餘善をも廢する等の義能々可考、此の下にては辨すべからず

繁雜になりて聽衆聞得べからず、西要抄の下餘善を修する義を擧げ玉へり、如此略し玉ふことは疑を起せば邊地に生ずる故、疑なく順次に極樂へ往生すべきことを勤むるが本意なれば、一義を擧げて餘を略し玉ふならん、多端の義を辨せんも鈔主の意に通せざる失あれば談せぬ也。

●一向に疑て願ふ心も、又行ひもはかくしくもなき人は生死にとゞまる也。

今一向に疑とあるは、決して本願をも迎ふる方あるべからず疑ひ切るには非ず、本願と聞けば何とやら頼もしき心もあれ共、一點のゆるぎなしと迄はしらざれば、助け玉へと願ふ心もはかくしくならず、又十聲一聲悉往生すと聞とも、そう云ふことも有るかしらぬ、つひ申て生るゝことなら心易いことではあるとは思へども、我も唱へて往生すべしと思ひてつとめねば、縁にあへば人並と思ふて申すこともあり、縁がなければ申すこともなきと云ふ様なるは、九品にも邊地にも生るゝことを得ずして生死の海にとゞまる也。

●但第二十の願に依て宿習の機と成て、三生などに往生を遂べきなり。

「三生果遂、過現々未の配當、係念發願のみにして行を具せざること等あれども、當抄は初念佛決信の人なれども、後に退する者に對するなれば、邊地の下果遂の下念佛一行の上にて論じ、唯願唯行等の上にて論じたまはずと見たり、」上の如く心行ともにあるか無きかと云ふ様なることなれば、生を隔つれば忘れ果てゝ生死を回る年月は計られぬ長きことなれ共、第二十の願の三生果遂の願を立玉ふて、其僅かの結縁を便りとして無窮の生死をちゝめて、次の生に心行具足の行者となして、其次の生には極樂の菩薩となし玉ふ也、此世は結縁來世は信者第三生目には往生するなり、實に大悲の深重なること言に述べられんや、上より隨問隨答と問に隨ふて答に邊地果遂等を示し玉ふを聞て志をゆるふして所詮念佛申た因縁があれば、長う生死に止る氣遣ひなければと後もどりをせまい、成らぬ迄も心行を急にしやうと思ひて進みて

勤むるが肝要、是で三心の中深心迄がすんで次は第三回向發願心なり文に。

●三には回向發願心、むかし今我人の功德といふ程の物をば、皆悉く捧て往生せんと回向するなり。此は第三回向發願心なり、善導の御釋を和解取證し玉へる文の意は、過去及び今生に身になし口に言ひ意に思ひし功德、又人の善根を修するを隨喜せし功德、佛の因位より果上迄の功德、菩薩の修し玉ふ功德を初めとして、他人の作る功德残りなく、阿彌陀佛に捧げて往生なさせ玉へと回向するなり、自他の諸善を極樂に回向せねば有爲の果を得る失がある故、皆極樂に回向するなり、斯く云へばとて念佛計りでは不足故、餘善をも交へ修して回向することかと間違へまい、若念佛を不足に思へば深心缺たる行者と云はれて往生はならぬ、又念佛に不足はなれども其上に戒行を持て申せば、彌決定して錦上に花をしき、鬼に鐵棒なれば戒行を持てなど云ふ類があるが、是は念佛にすけさすと云ふものにて元祖の誠め玉ふ所也、

夫なればなせに頭を剃り袈裟をかけ戒をば受るぞ、後と先きそるはぬ云ひ分ちやと邪智を起す人があらうが、戒法は佛法の地盤なれば己れが分々に持たねばならぬ、必ず我弟子は此を持て持たねば弟子でない云ふが釋尊の制誡なれば、士の武藝を習ひ、百姓の田つくり、町人の商する様なもの、是が佛弟子の家業と云ふもの、持つたとて往生の決定する爲と思ふて持てゝはない、往生は念佛一行、餘善を修し交ゆれば雜修不至心となりて往生不定となれば、殊更に作り集めて夫を回向すると云ふことではない、委しく次に問答あり、扱過去の善は有るやら無やら凡夫の知るべき譯けはないに、夫を回向するはつまらぬことぢやと云はば、無始より已來生々世々に善事をなさぬことはなき也、草花一本辻堂に立てたも、低頭も、合掌も、石沙を以て塔を作つた子供遊びさへ善根とあり、世間の五常親孝行等、世間出世の善根萬差なれば一向善事を爲さぬと云ふことはなし、故に其過去になした善事、夫とは知らぬと有きり皆回向

するなり、現在は知り易し、今は過去現在の善は
 あらわなれば悉く回向せよとの玉へり、餘處には
 未來の未だ作らぬ善根さへも回向せよとあり、其
 回向を仕て置けば後に回向を用ひねども自然と善
 提の爲となる也と、今此文の中で往生せんと回向
 すると云ふが肝要なり、已に往生の爲に回向する
 が回向發願心の持前なるに、世間に不淨說法する
 徒がありて、念佛申せば息災延命富貴繁昌子孫長
 久是より上の祈禱はなし、此名號を清き水にて吞
 めば懷妊の人は産が安し、疱瘡は迹も付かず、い
 ざりも目くらしも杖も車も入らぬ様になり、何程長
 病でも一日の内に十里二十里歩行くやうになる、
 随分と信心を發して此名號をいたゞけなど云ふを
 聞也、やれ有難や此御念佛を申せば壽命が延て息
 災で、富貴繁昌達者になるとは是程有難いことは
 なし、はいふく名號も御頂だかせ下されませ、成
 らふことならたんとが宜しう御座ります、ひたし
 にして茶漬のさいにして腹一杯食て、千萬年も死
 なぬ様に致し度御座ると云ふやうながある、斯云

ふ類は決して往生はならぬ、已に佛の本願は一切
 の衆生の爲に念佛を以て往生させんとて立て玉ひ
 たる願なるに、夫れに違ふて念佛で現世の祈願を
 すれば、如來の願ひと衆生の願ひとはうらはらに
 なつて一致せねば往生しやう筈がない、故に善導
 大師は若少一心即不得生と御釋し被成て、三心の
 中が一つ缺けても往生はならぬと仰せられた、祈
 念祈禱の念佛は第三回向心に背けば三心はかけ
 る、缺けたれば往生ならぬと御定なされたれば決
 して往生はならぬ、又元祖鎮西代々の祖師一様に
 御誠め被成たれば、往生し度と思ふものは此世の
 祈りにはつかはれぬ、斯聞と深信の行者は我あや
 まちを改ためて直に回心して往生の爲に念佛申
 す、扱此一行にはなるが、是迄に申て現世のこと
 をも祈つたを捨て、仕舞ことかと思はれうがそう
 でない、已に元祖大師の御詞に是迄あらぬ世の祈
 りに回向した念佛も、皆取り返へして往生の方に
 回向せよ、さすれば皆往生の業となると仰せられ
 たれば打ち捨ることではない、扱又下根な人は念

佛で現世を祈ることならぬと聞と、若往生の爲め
 の念佛計申して、此世の祈りをせずば災が寄り集
 り、身代も角が回はり、短命にもなり、病身にも
 ならふかと案じるが、往生の爲と斗り志して念佛
 申せば、阿彌陀如來は我が本願の正機と喜び玉ひ
 て、日々此人の元に千度づゝ來りたまふとあり、
 觀音勢至二十五菩薩諸天善神は千重萬重と取り圍
 ひて此人を守護し玉ふとあれば、何處にすぎが有
 て天魔邪神の寄り附くことがあらう、是より頼も
 しきことは無き也、なれども是れは行者の方から
 求めることではない、唯往生の爲と思ふて申す故
 に喜びに堪へずしてあちらから御座被成るゝ是
 れを不求自得と云ふ、若し守てもらはんと思ふて
 申せば本願に違ふ故、如來は愚か菩薩善神も見向
 きも被成れぬ是を求時不得と云ふ、詮の處は御守
 りあらふと有まいと夫れに構まはず、此本願にあ
 ひ奉らずば地獄のすもりとなるべきに、申せ助け
 んとあれば往生より外には望みはなしと思ひ切て
 申しだにすれば、念佛の邪魔になる災ひがあれば、

佛菩薩諸天善神に御ぬかりは無いなれば、只往生
 の爲と思ふて分々に日課相續するが肝要。
 ●問人の功德をば何として回向するぞや。
 問の意は我作りたる功德ならば回向すべし、他人
 の作りたる善を此方が回向することいふかしきこ
 とぞ。
 ●答隨喜すれば我功德となる、是を廻向するなり。
 答の意は、他の善を隨喜すれば善を修する功德と
 異なることなし、他作自受自作他受を許さぬは權
 門の所談にして實は大乘の心にあらず、三代上人
 隨喜他善を釋するとして、引因果經一文に云、若
 有貧窮人無財可布施見他修施時而生隨喜
 心隨喜福報與施等無異已上、隨喜施既然而餘善
 亦爾るべしとの玉ふ、譬へば香を買賣するにかた
 へに居る三人ながら同薫を得るなり、賣る人と買
 ふ人と脇に來り合て居る人と也、能化と受化と隨
 喜の者と三つの善均等、(譬、智論二十八^三止觀七
 卷の文を散記一^四丁に引玉へり)斯云道理が有るゆ
 ゑに、他の善を回向する也。

●問深心中及び無餘無間の二修には、正行の外
の善をばきらふと見たり、何としてこゝにはゆ
るされたるぞや。

問の意は、深心の釋の中には一心專念乃至願彼佛
願故と云て、正助の中にも正中の正なる念佛一
行を進め、餘善をば疎雜の行と撰らび捨て玉ひ、
無餘修の下にては餘行を修すれば無餘に非らず一
行に修せよ、無間の下には以餘業を來し隔つれ
ば無間に非ず、餘業を止めて無間に修せよとそ
有るに、今諸善を悉く回向せよとあるは相違した
ことでは無きかとなり。

●答吉水のつたへには、餘行をするをこそきらへ
念佛を妨げばなり、功德をば捨てばこそ往生の因
となるが故にとあり。

答の意は淨土宗にて念佛一行を修せず、夫れ讀誦
よ持呪よ坐禪よ觀念よとあれども、勤として是も
修すると云ふになれば、肝心の本願口稱の障とな
れば是を嫌ふなり、深心も立す無餘無間も欠くれ
ば決定往生の人で無ければ強て止むるなり、諸行

無益と云ふには非らず口稱の妨げになる故也、小
善根の諸行を修して本願無上大善根の念佛を忘る
べき道理無ければなり、今一切の善根を回向する
と云ふは、企て設けてするにはあらず自然隨縁の
こと也、隨縁とはいへ其念佛の妨げとなれば修せ
ぬなり、其念佛者の縁に隨て修する善とは御あま
りを下されと聞は不便な事なりと有合の物をくれ
る、何ぞ我は念佛者なれば檀はら密の雜行はせぬ
とは云はぬ、ごつくに通れと云ふ位の人には念佛も
申さぬなり、不便なことと思ひ娑婆の苦界なるこ
とを知れば念佛は進むなり、又念佛講に參る道で
幼なき子の井戸へちかゝつて居るを見ても、我
は專修の行者なれば慈悲をするは雜行なり迎助け
ざらんや、走りて助くる慈悲があれば、あゝ我等
が心行はあの幼なき者と同じことなれば、阿彌陀
如來を始め奉り聖衆方のあら危なや退墮の井戸へ
落ちねばよいが不便のことやと、晝夜御心をいた
め玉ふも、此子を助ける心より思ひ准らふれば有
難たきことにこそと一としは念佛が進む、斯云ふ

類は數へ盡されぬ、或本堂の再建佛菩薩の莊嚴、
金を貸してつぶれる家を立させ、飢饉の施行、病
者に藥を與へ下女下男をも不便を掛けて使ふ等、
其上分々に戒をも持つ殺生せぬとて念佛の障りに
ならず、酒呑ぬとて姦事をせぬとて欲を慎めば夫
程ひまになる故勤め好なる也、されども下根にて
慎しむことがならずば、彌々極重惡人無他方便助
け玉へ南無阿彌陀佛と申すべき也、從來の道理な
れば少善をなさぬ人はなければ、引さらへて皆極
樂へと回向する也、返すくも餘の善根は露塵な
くても念佛だに申せば十即十生百即百生ぞと地盤
を思ひすゑて、其上にて隨縁の善は隨分になすべ
し、成し終れば捨はせぬ往生の爲めに回向するな
り、微細なことなれば能々聞分けて心地をすゑね
ばならぬ、聖道門の意になると何でも善事さへ
あれば其功德を取集めて往生することのやうに思
ひ、邪義になれば隨縁の善をもなせば雜行雜修と
けがらはしき物の様に思ひ思み、どちらも偏なれ
ば淨土宗の意ではないことなれば、能化も所化も

意を用ゆべきことなり。

●又これより衆生と共に極樂に生れんとおもふを
ば往想の回向といふ。

是善導大師釋し玉へる回向の文の意也、文は看經
の終りに唱へる願以此功德乃至往生安樂國の文な
り、文の意は自身に勤めし稱名を自の往生は勿論、
師匠父母檀越及一切の衆生と共に極樂に往生せん
と願ふ也、是を往想回向と云ふ、次で此時の非法
をあらゝと擇んで正道を知らせん、今時切回向
と號して一と切ゝに勤めて亡者に勘定して回向
する、此法の起りは京都にては北山の求廣關東で
は板子の論山(文字不知)是を修し始めたりと云へ
り、(貞極上人の回向要決に見たり)推るに此兩
上人は一分に慈悲有て丁寧に向せられしと見
たり、當時此風を傳へて勤むる人を見るに其過失
不少、多くは親疎を分たん爲めに用ゆ、親とは布
施多き亡者の名なり、疎とは布施少き亡者の名な
り、已に布施の多少に依りて親疎をなせば無施の
一切衆生に向向する心あらんや、口には平等施一

切と唱ふれども心はうはの空なれば平等のうるほ
 いを興ふる道理あらんや、喩へば商人の代物の多
 少に依りて興ふる品を分つが如し何ぞ佛意に叶は
 んや、是源不學と有所得の二つより出る也、其不
 學と云ふより起る故は、善根は火を分る如くにし
 て何程にわくれ共初の火の光りをへらすことなき
 也、故に念佛一會長くも短くも一とつゞきに勤て
 願以此功德等と同向すれば一切衆生益を得る也、
 一切衆生益を得ればとて自の往生は益を減するこ
 もなく、是火を分るたとへにて知るべし、又此方
 に平等に同向すればとて其の益を得るには差別あ
 り、父母は我れに恩分深ければ兄弟よりも多く益
 を得、妻子は我に因縁深かければ他人より親しく
 受る、他人の中にも有縁は益多く無縁は益少し、
 彼の法華に、佛平等説如一味雨、隨衆生性習受
 不同とあり、文意は如來は正直に一乘の法を説
 き玉ふこと平等なれば、雨の一樣に降る如くなれ
 ども、機に大小の持前あれば或は聞て聲聞羅漢の
 果を得、或は大乗不退の大菩薩の位に登り、大小

の樹木の雨露の恵を受るに自ら多少あるが如し、
 此心を歌に「たしなべて一味の雨はそゞげども、
 受くる草木はたのがさまぐ」と同向の義是れに
 異なることなければ、一つらに申しつゞけて、終
 りに願以此功德等と唱ふれば、施主の亡者は布施
 したる善縁があれば皆其の益を得、父母及び有縁
 分に隨つて益を得る也、斯云ふ妙處を知らず學ば
 ざれば、布施の厚薄に依て彼には百遍是れには十
 遍と水を分つ様に心得念佛の切り賣をすることは
 あはれなること也、其上招請にもあひて唱ふる念
 佛は日傭取か雇はれて働らくと同じとに思ひ、申
 た念佛は皆其亡者の爲になりて、自身の往生の爲
 にはならぬ様に思ひちがへて居るやうなまゝあ
 る情けなきことに非ずや、其本亂れて末治まる筈
 はなければ、事長けれども教ふべし念佛の行者、
 どの様なことでも一聲でも唱へだにすれば自身往
 生の爲也、故に招請にあひて申念佛皆悉く自身
 往生の爲也、先初に唱ふる發願文が自身往生の爲
 に申證據なり、願弟子等云ふ我事なり、(等は等に

取り他は及ぼすなり、臨命終時と云ふ又我臨終の
 ときにと云ふこと也、已に十年百年も先に死んだ
 人の爲めならば、臨終正念とは六日のあやめ八日
 の星祭り、賊去て門戸をさし、喧嘩の跡の棒ちぎ
 りき根から勘定は合はぬ也、爾れば招請の念佛一
 會悉く自の往生の爲めなり、自身往生と志さず
 ば三心具せず、三心不具の念佛何の利益あらんや
 故に自の往生を祈る也、其内には亡者をも其々に
 助け玉へと思ふも遮せず、已でに元祖大師後白河
 法皇の御追福布施を受け玉はで、念佛は我往生の
 爲なり、布施は以の外のことなりと仰らるゝにて
 知るべし、其自身往生の爲に申した念佛を、先の亡
 者へ不殘回向して淨土超生品位増進を祈願する
 也、故に一會に一萬遍申た功德残らず自の往生の
 爲めと也、又其一萬遍の功德残らず亡者の爲とな
 る也、是が火を分るたとへに合ふなり、いや夫は
 あやしきこと一萬遍の功德兩方へ通するならば、
 丁度錢百文を八百屋に渡して牛房を百文が分と莧
 莧を百文が分と呉れよと云ふても、渡した錢が百

文なれば五拾文宛二品は呉れやうが、二百文が品
 は呉れぬなれば、何ぞ申た數が一萬遍なれば五千
 遍宛は兩方へ通じ様が、二萬三萬の功德にはなり
 そうないと思はれ様が、夫れは妄情の邪分別なれ
 ば佛法不思議の例にはならぬ、邪情を以て佛語を
 押へんとするは闡提の人とて三途のすもりなれ
 ば、仰て佛語を信じ従はねばならぬ、喩へば龍力
 の不思議でさへ少の水を得れば世界中にうるほふ
 雨を降らす、僅かな水でどう世界中へと疑はんと
 すれ共、現にふらせばいやとは云はれぬ、夫なら
 其わけはと考へても、言思路絶の所なればわけの
 わかるうやうはない、夫で不思議と云ふ、龍の力
 さへそうじや況して五不思議の最上佛力の不思議
 どう考へが付ものか、故に仰で信じ信て行すれば
 往生して悟りを開らく、其時くわらりつと知れる
 也、故にあれに何んばこれに何程と云ふは佛法で
 はない、其佛法でないことをする事は文盲でなふ
 て何で有るう速かに改むべし、次に有所得と云ふ
 は切回向にせずして一とつらに同向すれば布施は

次第に減少す、故に差別をして見せると布施に合せて念佛餘けい上ねば回向が粗末な、少しなりとも氣をはれと持ちかけける、其味をくい覺て佛法は平等な者と知りながら、非法をするなり、知ると云へ其行ひ合せねば其益なき也、其行の合せぬは何から起る往生仕度と云ふ意が無い故のことなり、順次往生と志しさへ立てば、此世は夢の世なればよかれ悪かれまたく内、其僅かな世に住む内を快よく過さんとして非法をして金銀を集やう筈はない、長き未來こそ一大事なれと思へば有所得の念は起らぬ也、其念さへ無ければ法は法の通に勤めらるゝなり、夫を知りながら此風をなす人有所得に非ずして何ぞや可耻々々、是皆出家にあるに非ず、じやが在家にも又有る、僅かの法事の營みして、張札を願ひ、菩提の爲めと寄進物をもどふぞ人の知るやうに爲したがる、年回になると胸に釘打たるゝ心地しながら、一家親類町内世間の思はくも有ればほんの義理づめ、或人布施の多少を思ひしこと云々、斯云ふ心地で法事をしたとて亡

者の益には一向ならぬ而て自身は大罪を得る、必々亡者の益を得る様にと志して眞實心にて營むべし、己が身は元より妻子眷屬樂々を過すは、遠くは先祖近くは父母の恵み、其上父母は我に痴愛を起して若干の罪を造り、我故に三惡道の苦を受くることあるを、其事をも思ひも出さず、恩も情も忘れ果たるを萬物の靈たる人と云はんや、人の人たるは恩をきて恩を知り、其恩を報はんとするをこそ人と云ふなり、鳥類畜類でさへ恩分をば知るぞかし云々、況や人として其心を起さずして可ならんや、心の及ばん程は自身も勤め、供佛施僧の營みをして其恩分を償なふべし、若し爾らば一向専修の人は願以此功德等の回向の文を唱ふるのみにして、別に戒名又た俗名を忌日にも唱へて回向すまじきことかと云ふに、詮する所は上に云ふごとく平等に回向すれば因縁の淺深にて各々益を得ることなれば、一々に戒名呼ばされ其欠くることはなけれども、惣て平等に回向し其後に或は父母妻子等或は施主の亡者等を別回向に用ゆること咎な

し、是平等の上の差別也云々、唯嫌ふ處は、あれには百遍これには千遍十遍と一と切りくゝに勤めて水を分る思ひに住するか大なる失也、唯一會一と續きに勤めて本尊に向ひ、自身往生父母施主の先亡現存及一切衆生を助け玉へと、總回向別回向意樂に従て回向する也、是等の意を往想回向と云ふ也。●淨土よりたちかへりて、恣に人をすくはむと思ふをば、還想の回向とは云ふなり。是は導師の御釋を和解し玉ふ也、生彼國已還起大悲回入生死教他衆生亦名回向也、との玉ひ、又還來穢國度人天との玉へる皆今の意なり、已に往想回向に父母等及信心の檀越、我と共に極樂國土に往生せしめ玉へと願するを、定めて往生すべしと云へ其人各別にして善惡差別ありて、或は財色二欲に執を起して娑婆を厭はずんば、たとへ回向すとも如何ぞ順次に往生すべき、其上生々世々の六親眷屬六道四生に沈淪すべし、故に我れ日課稱名畢命を期として順次に往生し、親しく阿彌陀如來に仕へ奉り微妙不思議の法を開き、得

忍深位の大菩薩の位に至り、自在神力を以て上來の衆生を極樂國土へ往生させんことを願ふ故に、今所修の稱名及び隨縁の作善、皆此事の爲に回向すと心に思ひ口に演る是れを還想回向と云ふ也、已に往想還想二種ある中、我宗には還想回向は機根すぐれし人に非ざれば具し難し、故に先表に勸るは往想回向也、我往生仕度と思ふ心は智愚の擇びなければ萬機にわたる故に、師資相承して往想回向を表と勸む也、爾るを聖道門の人は見取兵法故得と案内を知らぬ故、大乘は他先自後の菩提心が肝心也、爾れども初心の菩薩は軟弱故、歷縁對境すれば退墮の恐れ有る故、往生して悟りを開き歸り來りて一切衆生を度せん爲めなり、何故ぞ七寶鉢器の百味を貪り、自然衣服のてれるを求め、寶樹の蔭に花を眺め、功德池の波に月に嘯くことを願はんや、大丈夫何ぞ勇猛の志を立てざるやなど、教て、還想計りを執して往想を蔑にす、故に平等普益の願海に簡擇の浪を立る、本願妙旨に通せず五劫思惟の功を減す、諺に云ふ餅は餅屋酒は

(970)

酒屋、往生淨土の一法は導空兩祖の傳を知ねば三佛の大悲は顯はれぬ、上機は論無し、其下機は唯往生をのみ期して還想なき人も、申す念佛が本願に相應する故皆往生を得るなり、三萬六萬十萬者皆是上品上生人の釋に、智愚の擇びなければ愚者の數遍何ぞ上品に生れざらん、上品は即悟無生婆に居る内こそ愚者なれ、命終の蕪下彈指の間に忽ち地上の大菩薩となる、宗の所謂變金大乘、崑崙に抛てば、頑石忽ち玉となる、如何なる菩薩が慈悲をかき因縁の衆生を濟度せざらん、知んぬ十方に分身して心の儘に濟度する也、是れ江南の橋を江北に植ゆれば根となる、其安心を募るとき姪房酒肆の爲にもあれとは師の釋文、佛の願意看破せる活撥々地の漢ならずや、三世佛母の垂迹に非ずば誰れか此言を發せん、人をして欣慕せしむるの教門は暫らく淺近なるに似たれども、自然悟道の密意は極めて是深奥也と、實に洒々瀝々の眼にあらずや、勢至の應同に非ずば誰か願意を盡さん、故に遍計所執の當體にもり付たる本願、何ぞ機を

わらぶ還想のみを勸て普益の往生を缺んや、故に還想往想共に用ひて機をもらさず、中にも往想を表と勸ること宗の故實、諸宗機情の域内に止まらず、漆桶を脱破せる域外別風の活手段豈至れるに非ずや、還想回向の意は、人あり親屬の貧苦を悲み乍ら我に貢つぐべき財無ければ、其貧苦を救はんとのみ思て自身の富貴は心に掛けず、江戸へ下りて勇猛に働き、金錢を多くもふけて故郷へ歸り思ふ儘に貢つぐが如し、往想回向の意は、我身の貧賤を免れんと思ひ立ち、江戸へ下りて働き金錢澤山儲けて故郷に歸り、富貴に暮せば素より斯心はなけれども、我れ富て居る故親類を思ふ儘に貢ぎ、此二人の斯心は二種の回向の差別の如くなれども、金銀を儲けて往生極樂の爲と志す所が一致なれば、共に富貴の菩薩となり、同く親類を貢く自在神力に變り無き也、故に二種の回向は機に隨て好むに任せて滅多に申すが肝要。

●問三心の中には何れが殊に要なるや。
問の意は、其三心の中に於て殊更に肝要なるは何

れなりやと問なり。

●答三ながらはなるべからざる心なり。

三心は同時相應と云ふて皆揃はねばならぬなり、善導大師は若少一心即不得生との玉ひ、元祖大師は(選擇)欲生極樂之人、全可具三心也との玉へり。

●但強にいは、吉水は深心なりと仰せられけり、この一の心だにもあらば、先も後も必ず具せらるべきなり。

三心は鼎の三足の如く、屹度三つ乍ら揃はねばならぬなれども、強て云は、元祖大師の深心と仰られた、總依三經別依一經、總依一經別依一句、則二者深心の四字なり、故上人一心專念の文、就行立信の釋、散記一、前後二心不爲破人所動亂者依信心功十八通上九大師は依經二者深心四字釋、出淨土宗、上人は得釋故之一字、選擇念佛一行、三國相傳宗義源依二者深心一句、豈但大師上人而已耶、玄忠西阿亦同立三信三不、不釋前後之二心意、要中要也、なれども至誠回向の二

心は少々缺けても大事ないと云ふ事ではない、此深心が屹度立は其中に前後の二心はこもると云ふ事なれば、此一の心だにもあらば等との玉へり、さればと云ふて深心を起すときは前後の二心は具はれども、至誠心を發し回向心を起すときは餘の二心は具はらぬと云ふ事ではない、三心の内一心が發れば餘の二つはやがて具するなり、故に後醍醐院の御製に、

言葉には三つとゞけども一筋に
誠をいたすころなりけり

是至誠心の一に餘の二心を具ふるなり、又石清水八幡宮の深澤の法印に告げ玉ひし神詠に「極樂にゆかんとれもふころにて、南無阿彌陀佛といふぞ三心」と是回向心の一に餘の二心を具ふる也、夫れならばなせに又元祖大師は至誠心回向心とは玉はすして深心が要ぢやとは仰せられたぞと云ふに、華嚴經には佛法の大海には信を以て能入とすとあり、眞言には信は道源功德の母ともありて、信あるは佛法の門に入り、信なきは入る事能はず、

(971)

(972)

故に肝要なりとの玉へる也、又生死の家には疑を以て所止とすとも玉へる、皆此ことわりより起る也。

●問何れの釋か往生掌を指て明たるや。

問の意は三心の法門をも聞畢れば、往生の疑はしきこともなく、今は往生を待つ計りなるが、其法門も廣ければ常に心に思ひわけ難ければ、只一文にて往生すべき事を手に取るやうに明し玉へる文を示し玉へと也、其疑なき事を云に諸處に掌を指と云、又掌中の菴羅果を見るが如しなどあり、所詮は明に知れて疑氣なきを云ふ也。

●答其機分を明す事は、深心の無有出離之縁等といへる文是なり、其心はさきにのぶるがごとし。

深心の中の信機の釋に、自身現是罪惡生死凡夫乃至無有出離之縁とある文は罪業煩惱を顯はす、念佛の多少をも云はず、上一生より下十聲一聲迄極樂往生の爲に申だにすれば決定往生させんとあれば我等も又其本願にもるゝいわれなければ掌を指すと云へし、信機の釋は上で述べた通りぞと也。

●又安樂集に人間天上にだも生ずべからざる人、猶往生をばとぐべしと定むる文なり。

其往生を手に取る様に思ふゝ文の第二に安樂集を引き玉へり、安樂集は淨土の祖師道綽禪師の御著述の書名也、禪師は唐土の并州と云ふ國の晋陽と云ふ所に生れ玉ひし人也、初は涅槃經の講說を專とし玉ひしか、後には曇鸞大師の德を慕ひ淨土の門に入り一向に念佛のみを修し、亦他の爲めに觀經等を講じ稱名を勧め玉ひしより、晋陽大原汶水の三縣の道俗男女七歳以上の人は皆念佛を修したが、上根の者は小豆を以て念佛の數をしるすに八十石九十石を積み、中根は五十石、下根は二十石等を唱へたとある、今安樂集をも其せつに撰集し玉ふた、夫より御年八十歳、貞觀十九年四月二十四日に道俗に別を告げ、同二十七日に玄忠寺と云にて御往生なされたが、御臨終には房に數千の白光かざし、茶毘の時も又五色の光明が現じ、其外異香紫雲の瑞等多し、現に道俗皆是を拜し奉りしとある、集の文に人間天上にだも生ずべからざる人

(973)

とは、人界の生を受けるは五戒をきつと持た人、六欲天は十善、色無色界は四禪八定と云ふが定りなれば、其れを修することの出來ぬ人は四惡趣の受生が定り、其四禪八定はさて置、五戒十善の一戒さへ持ち得ぬ人なれば人間天上等との玉ふ、猶往生をば遂べしと定むるとは、本願の他力によりて愚惡の凡夫が報土へ往生する、其往生は助け玉へ南無阿彌陀佛と多くも少なくも唱へだにせば極樂に迎へん、左なくば我も佛にならじと云ふ誓願力によるなり、是も其往生の機を定むる信機に同じ。

●但これらの文にも、正しく生すべきころのやうは未だきこぬを、二河のたとへこそ手を取て教へたる様なれ。

前の信機の釋も、安樂集の釋も明には有れども、亦も手を取て教ゆるやうに思はるゝは導師の觀經の疏散善義の回向心の下の釋文なり、西要抄上の本二十をよむべし。

淨土要略抄講說卷下

百三十七

の二の河に譬へ、願往生の心のすくなき事を顯しては、僅なる四五寸の白道に譬へたり、其貪瞋の常に發り、願心の希なる事を顯はさんとしては、波恒に道をうるほしほのふ常に道をやくといへり、是程少なく此程まれなる願心なりとも、猶水火の二河を顧みず、二尊の教にしたがひて本願を仰がば必生るべしとゆるせるこそ、手のおきどころも足のふみまもなき程に、嬉しくも悲しくもおほゆれ。手のわきと足のふみまとは、喜びにあまると云ふことなり、嬉しくもあるは宿善開發してかゝる勝易の念佛に回り値ひ、順次に報土に往生することを得、悲しくも有るとは餘りに悦びにあまればかなしき様なることあり、又かゝる本願に生々世々に値奉らず、久しく流轉の苦を受しことを悲む、家隆卿八十歳にて「かく計り契りまします阿彌陀佛を、知らであたまの年を經にけり」

●信じ難しといふ人も理と思へばにくからずあるをや、是を信せん人こそよのつねならず、ふしぎの人にてあるべけれ。

通途佛法の大途にて、斷惡證理は諸宗の公談なれば、淨土格外の本願他力往生一毫未斷の凡夫が、順次報身報土へ往生と云ふことは信じ難きこと故まゝ疑を懐く人も有が、夫もにくい事はない、唯あはれなこと不便な事ぞと也、阿彌陀經に難信之法、爾るに其信じ難き法を信じて、一向疑はぬ身となりし人は通途の人ではない、微妙不思議の大因縁の熟した人ぞと也、本願を信じて念佛する人は、經には是人中芬陀利華と譽め、釋には五種の嘉譽を立て玉へる、身は現に惡業の凡夫なれども、本願を信する故にこそ善男善女と號けらるゝ也。永觀律師「古にいかなる契りありてかは、彌陀につこふる身となりけん」喜ぶべし尊むべし。

淨土要略抄講說終

發願文講說

發願文

願弟子等、臨命終時、心不顛倒、心不錯亂、心不失念、身心無諸苦痛、身心快樂、如入禪定、聖衆現前、乘佛本願、上品往生阿彌陀佛國、到彼國已、得六神通、入十方界、救攝苦衆生、虛空法界盡、我願亦如是、發願已、至心歸命阿彌陀佛。

此願文は善導大師の御制述にして往生禮讚に出たり、此書は本朝五十二代文德天皇の御宇智證大師入唐將來し玉ひ、其後三百五十年を経て我宗祖大師淨土門を開闢ありて勤行の度毎に、斯の願文を誦し玉ひて則淨業を修する者の規則となし給へり、夫れ佛道修行は願を根本とし起行是につぐ、たとへば願は御者の如く行は牛車の如し、されば導祖は願孤行孤無所至、願行相續必得往生と釋し、

元祖大師は唯極樂の願はしからず、念佛の申されざらんのみぞ往生の障りにてあるべけれどはの玉へり、いかにも我心をはげまして臨終正念に住して、此度順次の往生を遂げんと思ふべきこと專一のことなり。

此文大に分て二、一自初至佛國是往相願、二到彼已下即還相願也、(是れ記の科に依り玉ふ也、記は略科故に爾り、若し委く科を立てば大に分て三、「一願弟子等總標對所歸能歸發願」二臨命已下亦如是正發願叙中二、一往相二還相」三發願已以下發願結」)

往相還相の大意辨

初め往相の中に八段あり、一には臨命終時、二には心不顛倒、(已下の七段正く所願を出す、中に於て前六段は用心の願也、第七は正く安心の願なること可知)三には心不錯亂、四には心不失念、五には身心無苦、六には身心快樂、七には聖衆現前八には乘佛本願上品往生、(是れ究竟の願なり前來の六願皆之れが爲ならくのみ)。

願とは能願、弟子とは即其人を標し、等の字に有縁同行を等取す、凡願に三等、一には現世の福德壽命を願ふ是れ下願、二には後世に人間の高貴生天等を願ふ是れ中願、三には人天生死の幻事を厭ひ、出離生死往生淨土を願ふ是れ上願なり、前の二願を中下と云ふも一應の分別、尅して云へば癡福は三生の怨云々。

實朝時正清正等、(空華筆下^{三十}五^丁)尾張の國司熱田の大宮司追拂のこと。老僧官女に戀慕回向して三子大臣后となりしこと。仁木義長神領を掠しに大神宮御託宣のこと(太平記)。子夏一瘦一肥の事(托、事實卷六)大兩村の中途に死す。惠心僧都へ大神宮の神勅のこと祇園の託宣(長き世の云々)。

弟子とは佛弟子と云ふこと、制教門によれば比丘、比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼、優婆塞、優婆夷の七衆を云、今は化教門にて戒法によらず念佛者をさして佛弟子と云ふ、隨順佛教隨順佛意隨順佛願是を眞の佛弟子と名くと云々、(散善義云、又

深信者仰願一切行者等、一心唯信佛語、不願身命決定依行、佛遣捨者即捨、佛遣行者即行、佛遣去處即去、是名隨順佛教、隨順佛意、是名隨順佛願、是名眞佛弟子、前に云ふ下中の二願佛弟子に非ること云々。

作惡の人惡道に墮せんと願はざれども自然に墮落す、念佛の行者も淨土に往生せんと願はずとも往生すべし云々、古語に云、從善如登從惡如崩云々、(愚夫因果の説を僻解す)順流逆流の難易のこと云々、往生を願ふ人は上り舟を引心になるべし、種々の障難あるは定り也忍んで修すべし云々、看々。

諸佛菩薩等は、願心堅固にして退き玉はざりし故果上に至り玉へり、我人も生々世々の中には、善願も發しつらんれども退して生死に滯るなるべし。

世に一流の邪義ありて發願を妨ぐ云々。普賢大士の願偈に云、願我臨欲命終時、盡除一切諸障礙、面見彼佛阿彌陀、即得往生安樂刹、(文殊の偈

亦同じ)、南岳天台大師願偈あり、(天台大師願偈云、願臨命終心不亂、正念往生安樂國、而奉彌陀值聖衆、修行十地證常樂)大師此邪勸を誡め玉へる今の願文を引て、兼て臨終正念を祈るべし、日頃いみじく念佛の功を積たりとも臨終に惡緣にもあひ惡心も起り侍らば順次の往生にはづれ、一生二生なりとも生死の流れに苦まん事は最口惜き事ぞかし、されば善導大師のすゝめ給へるは願弟子等臨命終時乃至上品往生阿彌陀佛國とこそ侍れ、臨終の正念をば祈りもし願ふべき事也、臨終の正念を祈るは彌陀の本願を頼まぬものぞなんぞ申す人は、善導こはいか程勝りたる人ぞと思ふべし、あなあさましむをろしく等云々。

發願文得益現證、(淡路守俊基、托、往生卷一)淨室清讀、托、往生卷一)又此文を誦し得ざるをもて不足の念に住せざれ、畢竟は一向專修するが肝要なること云々。臨命終時、是八段の第一、(句毎に願の字を冠せて見るべし)、諸道の昇沈たゞ臨終の一念にあり、是

故に善導のみならず普賢云々、天台云々、下の七句說必次第法在同時云々、故に先づ此句を最初に擧げ玉へり、出入の息を命と云ひ出る息のかへらざるを命終と云ふ、釋尊御在世に四比丘に人の命は幾の間にかあると問玉ふ、七日、明日、朝夕、呼吸の間云々。

とりくにとける無常のことわりも出入の息といふにとまる

人の命終に種々あること、大師の御詞(童論に出づ意を取て辨すべし)、

人毎にしりがほにしてしらぬ哉

張祖留がこと(托、事實三)、似雲感傘(托、事實、卷一)

心不顛倒、記に云ふ顛倒は僻見也とあり、此四倒のこと諸釋廣けれども今の所詮は命終のとき、惡業重病等に逼惱せられて犯惑倒亂するを云ふなり、夫れ凡夫は常に四倒に住す故に臨終には別して此心強くなるべし、故に佛力加祐を願ふなり、

其四倒とは淨樂常我、父子相迎上曰、
 一には、きはめて不淨なる身をきよしと思ふ是甚
 おろかなり、しらんと思はゞおのが身のうちをさ
 ぐり見よ、ながくみじかき骨ふしぐをつぎあつ
 めたるに、ふとくほそきすぢそのつぎめくをく
 さりあやつりて、それにあかきしむらまつひ、
 うへに白きかはをはれり、かうべにはなつきをい
 れていたゞき、はらには腸をつゝみてかへたり、
 いづくかひとつとしてきよきところある、たとひ
 海水をかたぶけてあらふともいかでか清潔なる事
 を得ん。(一に淨徳とは内外淨くして玉の如くなる
 はだへ、紫金の色をわびて光り月日より猶明らか
 なり、是則穢らはしき父母の精血を用ひず、いさ
 ぎよき蓮華より自ら化生するが故なり云々)。
 二には、苦を樂とわもふこれ又きはめてつたな
 し、三界無安猶如火宅といへば、いづこも心とり
 のべてゆるやかなるべき所にはあらねども、こと
 に人間は目の前なれば見るにわもひのとめがたき
 事わほし、乃至身に生老病死ありいづれか苦みに

あらざる、心に貪瞋癡疑ありことくくわづらひ
 をなせり、(二に樂徳とは唯樂みのみにして苦みは
 其名をだにもきかず、三惡のみちあと絶たれば
 後の世の怖ろしかるべきもなく、五妙の境「色聲
 香味觸」心に任せれば此身の樂み又盡くべから
 ず云々)。
 三には、無常を常とわもふこれ又いたりてあやま
 れり、わもかた三界はみな生者必滅のことわりを
 なげく中にも、閻浮はことに老少不定のならひを
 そへたり、すでにこのなげきを重ねたる所にうま
 れて、あやうかるべき身をうけながらいかでかつ
 めにのがれはつることわりあらむ。(三に常徳とは
 長く無常を離れたる故に、數かぎりなく長き念佛
 と等くして老も病もせぬ身なれば、よはびいつ
 もさかりなり云々)。
 四には、無我を我と執するこれ又まよひのきはま
 れるなり、しばしたゞ身にこゝろのより居たるを
 かりにわれといひならはしたるにてこそあれ、さ
 らにさてありはつべき物にはあらず已上。(四に我

徳とは本覺の佛性の顯はれたる是を眞我と云ひ、
 或は眞如と云ひ、法性とも云ふ、外道凡夫の五陰
 の身に強て主宰を立る妄我を離れたるなり云々)。
 如是生々四倒になれ切たる凡夫なれば佛力加祐を
 祈るの外あるべからず、故に導師は此文を制述
 し、元祖大師は此文を誦し願を宗の規則となし給
 へるなり、されば此兩祖の御教に隨ひて往生を遂
 れば、凡情の四倒を離れて涅槃の四徳をきはむる
 なり、依て常より念佛しかゝる顛倒の念を發さ
 ず、身も心も快樂にして極樂に往生せしめ玉へと
 願へと也云々。
 世間でさへ死ぬと云ふことを覺悟せいで、聖人
 とも賢人とも智者とも善者とも豪傑ともなられ
 ぬ、孔子丘が祈ること久し、又逝者如斯……曾子
 手を啓け……子路櫻を結ぶ……孟子夭壽不貳……
 劉伯倫はすき荷はせしこと、況や佛道修行死を忘
 れて成就せんや、無常と氣が附けば往生を願ひ念
 佛は獨りで進む、堅い説法など云ふはほんの
 人見せ名聞計りの人云々、よつて臨終に祈念祈禱と

さわぎ出し、顛倒錯亂失念云々、道綽禪師習先より
 あらずんば云々。
 臨終に言はれざりし人(發心集)。廉譽貞曉(托、
 往生卷一)
 ●心不錯亂、記に云、錯亂は妄念也、人毎に臨終は一
 期の大事なりと口にはいへども、心にしかと思ひ
 しめねば眼前の五欲に耽りて念佛をつとめず、忽
 ち無常の苦み來りせまるに及んで、始めて死の免
 れ難く必惡趣に墮せんことを恐れ、兎やせん角や
 と種々無益のことを思ふを錯亂と云ふなり、一年
 の四極さへ多事念々として、不覺もあり誤りもあ
 り、況や一期の大限推して知るべし、生々世々に
 惜みなれたるもの故、生を貪り死を恐れ祈念祈禱
 とうるたへ、或は目に妻兒を見心に家財を惜み、
 或は境界の不順なるを恨、或は妻兒眷屬の前後に
 集りて嗟嘆懊惱するを聞て、胸塞り目くるめきさ
 わぎみだるゝを錯亂と云ふなり。
 格夫貪財帶蛇となること(新著聞托、事實卷三)
 五戒の信男妻の鼻虫となること。

心不^レ失念、失念は瞶昧にして境を不^レ知云、又た無記なるも失念なり云々、凡そ人の命終のやう千差萬別にして一概には論じがたけれども、瞶昧にして境を不^レ知など多くは平生に用心なきより發るが多し。

十二月大明神の札のこと、(托、事實卷五)

又無記心往生の義は感師に盡義の釋あり、大師も是をひきて釋成し玉へり。

身心無^レ諸苦痛、臨終の苦は、病^レ苦^レ業^レ苦^レ死^レ苦^レ天^レ魔^レの障^レり、一方ならず、數々なる故諸の苦痛と云へり。病苦は宿業の所感による、故に古の高僧も是を免れ玉はず戒賢論師等のこと。

爾るを佛教を聞かぬ人は宿業に報ふと云ふことを知らぬ故、平生念佛申すにかゝる病苦を受け利益なし云々、此念斗にても必惡道に墮すと經説明らかなり云々。

又念佛者轉重輕受のこと。

又災を取て幸となす活手段のこと。

唐の雲棲智旭、我朝の永觀等病に因て修行を進み玉ひしこと。

又梅原退藏居士が別業のこと。

業苦とは惡業を造りし報ひに責らるゝ也、慈悲水懺云、臨^レ命終時^レ造惡之處一切諸相現^レ在前、各言汝昔在^レ於我邊^レ作^レ如是罪^レ今何得^レ諱。其證は(張善和、張鐘旭「托、往生卷三」)但馬京口町の籠ごろし。

人ころしたはもとより、獸殺したも、鳥刺したも、釣にかけられた魚も、綱でとられたも、盜は勿論、博奕で取られたも、高歩で無理な身代限り取たも、惜て銀主に損をかけたも、密婦も間夫も、中言云ふたも、無理に人を言たも、息引取る前になると俱時頓現とて、ひた借りした人の所へ大晦日になると掛乞の來る如く、先我報ひをむくへとせめ立るを業苦と云也。

人々善業はなく惡業は晝夜を限らずなすに非や、爾るに人命無常今にも及べば、直に此業苦があらはるゝ經說祖釋現證如上云々、斯く聞ても惡人の命

終に其やうすもなし云々、此業苦の顯はれて他人の目に見ゆるはまだ善緣のある也、なせなれば見た人がいたはしやと回向もしてやる、顯はれぬは此益なし云々、顯はれねばとて此苦を受まじきや、前五識は去て第六意識斗になつた所で受ること故、他の目には見ねども一人として免れる人はない、意識で苦しむは夢中の苦の如し云々、此人は彌業力深くて苦むやうすが他の目に見ねぬ故、他人はもとより親子兄弟妻子の間でさへ中陰の追善さへをこゝで、満中陰にもならぬ内に笑ひ聲の聞ゆる所があるもの、人の目に見ねぬ故回向にさへあづからぬ至て罪業深重なる故也。

他は且く置、人々今にも此場へ臨むが夫れはかへりみず、うろたへて斗り居るは餘りなる身しらすに非ずやと云て、惡念惡業を止めて善人にはなり得ず、ならぬと捨て置けば其苦を受る、進退途を失に非や、此進退途を失ふ人の爲に、如來の本願祖師の弘通他力念佛でなければ助りやうはなき也。其現證は、

自性得本信士、(托、往生卷一)

死苦は最後の刹那にあり是を斷末魔と云ふ、末魔は梵語翻じて支節と云ふ、身中に百所のつぎめあり水火風の三大是に觸るれば死す、此苦痛堪がたく百千の鋒劍にて切割るゝが如し云々。

天魔の障とは、天魔常に行人の出離せんことを恐るゝ故、諸の眷屬の惡鬼神をして妨をなす、外魔は外に在て惱ます云々、内魔に三、病苦、業苦、死苦也、(狐のばかすこと、京都とりあげ婆々のこと)。

孝養集に云、若人佛を念せずして終るときは魔縁魔界の争ふこと、譬ば方人なくして固より出るとき諸の敵の打奪ふが如し、所以に一心に佛を念じ奉るべし、往生は心の強きにより信は聲を出すに發る、佛に一念も心をかけ一と度も御名を唱ふれば化佛菩薩聲を尋ねて來り迎ひ玉ふと云々。

身心快樂、從來の諸苦なく身も心も爽朗とさはやかなるを云ふ。如入禪定、禪は梵語、定は漢語、梵漢兼舉玉へり